

千葉市

子和清水遺跡  
房地遺跡  
一枚田遺跡

1987

千葉市教育委員会

財団法人 千葉市文化財調査協会

千葉市

子和清水遺跡  
房地遺跡  
一枚田遺跡

## 序

房総半島の西に位置する千葉市は、豊かな自然に恵まれ加曾利貝塚をはじめとして多くの遺跡が残されています。

近年、千葉市においても首都圏に隣接するという地理的条件により、急激な人口増加による宅地開発が急速に進む一方で、政令指定都市の指定を目指しての道路網の整備や公共施設の充実が急がれています。これらの開発と埋蔵文化財との調和の必要性が高まっております。

今回ここに報告する子和清水遺跡・房地遺跡・一枚田遺跡は千葉市でも北部の横橋町・宮野木町に位置し、国指定の横橋貝塚や大型馬蹄形貝塚である園生貝塚をはじめとして多くの遺跡が存在する地区ですが、都市化の波に次第に失われつつあります。

調査により子和清水遺跡からは関東地方でも数少ない縄文時代晚期後半の遺物が数多く出土し、房地遺跡では縄文時代中期の住居址が、一枚田遺跡では古墳時代の住居址が検出され、当時の集落の一端を解明する上で貴重な資料と思われます。本報告書が学術資料としてはもとより、文化財保護育成の一助となれば幸いです。

本書の刊行にあたり、種々御指導をいただいた千葉県教育委員会・千葉市教育委員会・千葉市および地元関係諸機関各位の御協力に御礼申しあげます。また、現場での調査及び整理に携わっていただいた調査補助員の皆様に心から謝意を表します。

昭和 62 年 3 月

財團法人 千葉市文化財調査協会

理事長 吉田治郎

## 例　　言

1. 本書は子和清水遺跡・房地遺跡・一枚田遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書所収 3 遺跡の (1) 所在地 (2) 調査面積 (3) 調査期間 (4) 調査担当者は下記のとおりである。

### 子和清水遺跡

- (1) 千葉市三角町 744 他
- (2) 16,000m<sup>2</sup>
- (3) 昭和60年 7月17日～昭和61年 3月 5日
- (4) 田中英世・築瀬裕一

### 房地遺跡

- (1) 千葉市宮野木町1928
- (2) 5,000m<sup>2</sup>
- (3) 昭和60年 7月17日～昭和60年12月12日
- (4) 潟口淳一

### 一枚田遺跡

- (1) 千葉市横浜町 792 他
- (2) 1,100m<sup>2</sup>
- (3) 昭和60年 7月22日～昭和60年 9月 2日
- (4) 佐藤順一

3. 発掘調査から報告書作成に至る業務は千葉市の委託を受け、千葉県教育委員会及び千葉市教育委員会の指導のもとに、財団法人千葉市文化財調査協会が行った。
4. 本書の作成および執筆は子和清水遺跡を田中・築瀬および菊池健一が、房地遺跡を澁口が、一枚田遺跡を佐藤が行った。
5. 会田信行氏（千葉県立成田園芸高校教諭）には 3 遺跡の石器の石材鑑定および子和清水遺跡における古地磁気測定をお願いし、「第4 地点におけるローム層の古地磁気測定」なる玉稿を賜わった。記して感謝申しあげる次第である。
6. 発掘調査から報告書刊行に至るまで、千葉県教育庁文化課・千葉市教育委員会文化課・社会体育課・学校施設課・千葉市など諸機関各位に御協力いただいた。深く謝意を表する次第である。

## 目 次

序

例 言

### 序 章

I 調査にいたる経過.....	1
II 遺跡の位置と歴史的環境.....	1

### A. 子和清水遺跡

I 調査の概要.....	5
II 遺構と遺物.....	6
1. 旧石器時代.....	6
2. 綱文時代.....	42
(1) 積穴住居址・積穴状遺構.....	43
(2) ピット群.....	57
(3) 炉址状遺構.....	57
(4) 土    墳.....	63
(5) 遺構外出土遺物.....	80
a. 土    器.....	80
b. 土    製    品.....	88
c. 石    器.....	100
3. 弓生時代.....	110
4. 古墳時代.....	110
5. 歴史時代.....	117
III 第4地点におけるローム層の古地磁気測定.....	120
IV まとめ.....	125

### B. 房地遺跡

I 調査の概要.....	133
1. 調査の方法.....	133
2. 基本層序.....	133
3. 遺跡の概要.....	134

Ⅲ 遺構と遺物	136
1. 遺構と出土遺物	136
2. 遺構外出土遺物	146
(1) 先土器時代	146
(2) 繩文時代	146
a. 土    器	146
b. 石    器	161
c. 石劍・玉	165
(3) 弥生時代	166
a. 土    器	166
b. 玉類・石製品	166
Ⅲ 小結	168

### C. 一枚田遺跡

I 調査の経過と方法	169
Ⅲ 遺構と遺物	172
1. 第1号住居址	172
2. 第1号土壇	173
3. 溝	174
4. 繩文土器	175
5. 土製品	190
6. 石    器	192
Ⅲ まとめ	193

## 挿図目次

### 子和清水遺跡

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡	2
第2図 調査区設定図・基本層序図	5
第3図 旧石器時代調査区・石器群の分布図	7
第4図 第1地点遺物分布図	8
第5図 第1地点出土遺物(1)	9
第6図 第1地点出土遺物(2)	10

第7図 第2地点遺物分布図	13
第8図 第2地点出土遺物	13
第9図 第3地点遺物分布図	11
第10図 第3地点出土遺物	12
第11図 第4地点遺物分布図(1)	13
第12図 第4地点遺物分布図(2)	15
第13図 第4地点出土遺物(1)	16
第14図 第4地点出土遺物(2)	17
第15図 第4地点出土遺物(3)	18
第16図 第4地点出土遺物(4)	19
第17図 第5地点遺物分布図	20
第18図 第5地点個体別資料の分布	21
第19図 第5地点出土遺物(1)	22
第20図 第5地点出土遺物(2)	23
第21図 水洗選別による微細遺物検出結果	23
第22図 第6地点遺物分布図	24
第23図 第6地点出土遺物(1)	25
第24図 第6地点出土遺物(2)	26
第25図 第7地点遺物分布図	27
第26図 第7地点出土遺物	27
第27図 第8地点遺物分布図	28
第28図 第8地点出土遺物	29
第29図 第9地点遺物分布図	30
第30図 第9地点出土遺物	30
第31図 第10地点遺物分布図	31
第32図 第10地点遺物分布図・個体別資料の分布	33
第33図 第10地点出土遺物(1)	35
第34図 第10地点出土遺物(2)	36
第35図 第10地点出土遺物(3)	37
第36図 表面採集遺物	38
第37図 遺構配置図	42
第38図 第1号住居址実測図	43
第39図 第1号住居址遺物出土状況	44

第40図 第1号住居址出土遺物	44
第41図 第2号住居址実測図	45
第42図 第3号住居址実測図	46
第43図 第4号住居址実測図	47
第44図 第4号住居址遺物出土状況	48
第45図 第4号住居址出土遺物	48
第46図 第5号住居址実測図	49
第47図 第5号住居址出土遺物	50
第48図 第6号住居址実測図・出土遺物	52
第49図 第7号住居址実測図	53
第50図 第8号住居址実測図	54
第51図 第8号住居址出土遺物	55
第52図 第9号住居址実測図	56
第53図 第10号住居址実測図	58
第54図 第10号住居址出土遺物(1)	59
第55図 第10号住居址出土遺物(2)	60
第56図 第10号住居址出土遺物(3)	61
第57図 第1号ピット群実測図	62
第58図 炉址状遺構実測図	63
第59図 土壌実測図(1)	64
第60図 土壌実測図(2)	65
第61図 土壌実測図(3)	66
第62図 土壌実測図(4)	67
第63図 土壌実測図(5)	68
第64図 土壌実測図(6)	69
第65図 土壌実測図(7)	70
第66図 土壌実測図(8)	71
第67図 土壌実測図(9)	72
第68図 土壌実測図(10)	73
第69図 土壌実測図(11)	74
第70図 土壌実測図(12)	75
第71図 土壌実測図(13)	76
第72図 土壌実測図(14)	77

第73図	土壤内出土遺物(1).....	78
第74図	土壤内出土遺物(2).....	79
第75図	第Ⅰ群・第Ⅱ群土器.....	81
第76図	第Ⅲ群土器(1).....	82
第77図	第Ⅲ群土器(2).....	83
第78図	第Ⅳ群土器(1).....	84
第79図	第Ⅳ群土器(2).....	85
第80図	第Ⅴ群・第Ⅵ群・第Ⅶ群・第Ⅷ群土器.....	86
第81図	第X群土器分布図.....	89
第82図	I-24～I-26グリッド遺物分布図(第X群土器).....	90
第83図	第X群土器(1)(I-24～I-26グリッド出土)(1).....	91
第84図	第X群土器(2)(I-24～I-26グリッド出土)(2).....	92
第85図	第X群土器(3)(I-24～I-26グリッド出土)(3).....	93
第86図	第X群土器(4).....	94
第87図	第X群土器(5).....	95
第88図	第X群土器(6).....	96
第89図	第X群土器(7).....	97
第90図	第X群土器(8).....	98
第91図	土器底部・土製品.....	99
第92図	石器実測図(1).....	101
第93図	石器実測図(2).....	102
第94図	石器実測図(3).....	103
第95図	石器実測図(4).....	104
第96図	石器実測図(5).....	105
第97図	石器実測図(6).....	106
第98図	石器実測図(7).....	107
第99図	石器実測図(8).....	108
第100図	弥生土器.....	110
第101図	第11号住居址実測図.....	111
第102図	第11号住居址出土遺物.....	112
第103図	第12号住居址実測図.....	115
第104図	第12号住居址出土遺物.....	116
第105図	第13号住居址実測図.....	118

第106図	自然残留磁化方位と磁化強度	121
第107図	古地磁気測定結果と石器の分布状況	122
第108図	交流消磁実験結果	123

## 房 地 遺 跡

第1図	遺跡の位置と周辺遺跡	2
第2図	基本層序図	133
第3図	周辺地形図・グリッド設定図	134
第4図	遺構分布図（I区）	135
第5図	第1号住居址・第3号土壤実測図	136
第6図	第1号住居址出土遺物	137
第7図	第2号住居址・第6号土壤実測図	139
第8図	第2号住居址出土遺物	140
第9図	土壤実測図（1）	143
第10図	土壤実測図（2）	144
第11図	土壤実測図（3）	145
第12図	先土器時代の石器	146
第13図	第1群土器（1）	148
第14図	第1群土器（2）	149
第15図	第1群土器（3）	150
第16図	第1・2群土器	151
第17図	第1・2群土器	152
第18図	第3群土器	154
第19図	第4群土器（1）	155
第20図	第4群土器（2）	156
第21図	第4群土器（3）	157
第22図	第4群土器（4）・第5群土器（1）	158
第23図	第5群土器（2）	159
第24図	第5群土器（3）	160
第25図	縄文時代の石器（1）	161
第26図	縄文時代の石器（2）	162
第27図	縄文時代の石器（3）	163
第28図	石劍・玉類	165

第29図 弥生土器	166
第30図 玉類・石製品	167

### 一枚田遺跡

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡	2
第2図 調査地点図	170
第3図 第Ⅰ地点 遺構配置図・土層模式図	170
第4図 第1号住居址実測図	171
第5図 第1号住居址出土遺物実測図	172
第6図 第1号土壤実測図	174
第7図 縄文土器実測図	175
第8図 第Ⅰ群土器	181
第9図 第Ⅱ群土器(1)	182
第10図 第Ⅱ群土器(2)	183
第11図 第Ⅲ群土器(1)	134
第12図 第Ⅲ群土器(2)・第Ⅳ群土器(1)	185
第13図 第Ⅳ群土器(2)	186
第14図 第Ⅳ群土器(3)	187
第15図 第Ⅳ群土器(4)	188
第16図 第Ⅴ群土器	188
第17図 土製品実測図	191
第18図 底部網代拓影	191
第19図 石器・軽石実測図	192
第20図 遺構外出土土師器・須恵器実測図	193

## 表 目 次

### 子和清水遺跡

第1表 第4地点個体別石器集計表.....	40
第2表 第5地点個体別石器組成表.....	40
第3表 第6地点個体別石器組成表.....	40
第4表 第6地点個体別石器組成表.....	41
第5表 第8地点個体別石器集計表.....	41
第6表 第9地点個体別石器集計表.....	41
第7表 第X群土器地点別土器出土表.....	88
第8表 繩文時代石器集計表.....	100
第9表 第11号住居址出土遺物觀察表.....	113
第10表 第12号住居址出土遺物觀察表.....	114
第11表 第13号住居址出土遺物觀察表.....	119
第12表 土製品一覽表.....	119
第13表 住居址一覽表.....	119
第14表 土質一覽表.....	120

### 房 地 遺 跡

第1表 繩文時代石器觀察表.....	164
第2表 石劍・玉類觀察表.....	165
第3表 玉類・石製品觀察表.....	166

### 一 杏 田 遺 跡

第1表 第1号住居址出土遺物觀察表.....	173
第2表 繩文土器出土地點(1).....	189
第3表 繩文土器出土地點(2).....	190
第4表 遺構外出土土師器・須恵器觀察表.....	193

## 図版目次

図版 1. 航空写真（子和清水遺跡・一枚田遺跡）

### 子和清水遺跡

- |                         |                              |
|-------------------------|------------------------------|
| 図版 2. 第4地点遺物出土状況        | 図版14. 第10号住居址出土遺物            |
| 第4地点古地磁気測定試料採取状況        | 図版15. 土壌内出土遺物                |
| 図版 3. 第6地点遺物出土状況        | 遺構外出土遺物                      |
| 第7地点遺物出土状況              | 図版16. 第I群土器                  |
| 図版 4. 第10地点遺物出土状況       | 第II群土器                       |
| 第10地点炭化物集中部             | 第III群土器                      |
| 図版 5. 旧石器時代の遺物（第1・第2地点） | 図版17. 第IV群土器                 |
| 旧石器時代の遺物（第5・第6地点）       | 第V群・第VI群土器                   |
| 図版 6. 旧石器時代の遺物（第4地点）    | 第VII群・第VIII群土器               |
| 旧石器時代の遺物（第3・第7地点）       | 図版18. 第X群土器(1) (I-24~26グリッド) |
| 図版 7. 旧石器時代の遺物（第8・第9地点） | 第X群土器(2)                     |
| 旧石器時代の遺物（第10地点）         | 図版19. 第IX群・第X群土器(3)          |
| 図版 8. 第1号住居址            | 土製品・小型土器                     |
| 第2号竪穴状遺構                | 弥生土器                         |
| 図版 9. 第1号住居址出土遺物        | 図版20. 縄文時代の石器（石錐・石錐）         |
| 第2号竪穴状遺構出土遺物            | 縄文時代の石器（石斧・疊器・独鉛石）           |
| 第3号竪穴状遺構出土遺物            | 図版21. 縄文時代の石器（磨石・敲石・凹石）      |
| 第4号住居址出土遺物              | 縄文時代の石器（玉類・滑石）               |
| 第6号竪穴状遺構出土遺物            | 図版22. 第11号住居址                |
| 図版10. 第4号住居址            | 第11号住居址遺物出土状況                |
| 第7号住居址                  | 図版23. 第11号住居址出土遺物(1)         |
| 図版11. 第5号住居址            | 図版24. 第11号住居址出土遺物(2)         |
| 第5号住居址出土遺物              | 図版25. 第12号住居址                |
| 図版12. 第8号住居址            | 図版26. 第12号住居址出土遺物            |
| 第8号住居址出土遺物              | 図版27. 第13号住居址                |
| 図版13. 第10号住居址           | 第13号住居址出土遺物                  |
| 第16号・第17号土壌             |                              |
| 第22号・第32号・第37号土壌        |                              |

## 房地遺跡

- 図版28. 遺跡連続（南側台地上より）  
　　遺跡の層序  
　　先土器時代の遺物
- 図版29. 第1号住居址・第3号土壙  
　　第1号住居址出土遺物
- 図版30. 第2号住居址・第6号土壙  
　　第2号住居址出土遺物
- 図版31. 第1号土壙  
　　第7号土壙  
　　第8号土壙  
　　J-8-a グリッド遺物出土状況  
　　J-8-b グリッド遺物出土状況  
　　G-8-b グリッド遺物出土状況
- 図版32. 第1群土器(1)
- 図版33. 第1群土器(2)
- 図版34. 第2群土器  
　　土製块状耳飾
- 図版35. 第3群土器  
　　第4群土器(1)
- 図版36. 第4群土器(2)
- 図版37. 第4群(3)・第5群土器(1)  
　　第5群土器(2)  
　　石劍・玉類
- 図版38. 第5群土器(3)  
　　縄文時代の石器
- 図版39. 縄文時代の石器
- 図版40. 旁生時代の土器  
　　玉類・石製品・砥石  
　　古墳時代の土器

## 一枚田遺跡

- 図版41. 第1号住居址（南西から）  
　　第1号住居址（南東から）
- 図版42. 第1号住居址出土土器  
　　造構外出土土師器・須恵器  
　　B-2-b グリッド一括出土土器
- 図版43. 第I群土器  
　　第II群土器
- 図版44. 第II群土器
- 図版45. 第IV群土器(1)
- 図版46. 第IV群土器(2)  
　　第V群土器
- 図版47. 土製品  
　　底部網代  
　　石器・輕石

# 子和清水遺跡

## I 調査に至る経緯

千葉市では政令指定都市の指定に向けて公共施設の充実が急がれ、千葉市三角町に清掃工場（子和清水遺跡）を、宮野木町に宮野木地区スポーツセンター（房地遺跡）を、横橋町に横橋小学校のプール建設（一枚田遺跡）を予定し、埋蔵文化財の取扱いについて千葉県教育庁・千葉市教育委員会・千葉市の3者による慎重な協議の結果、発掘調査による記録保存の処置がとられることになった。確認調査は千葉市教育委員会により子和清水遺跡が昭和59年6月19日～昭和59年7月30日まで $27,400\text{m}^2$ を対象として行われ、 $16,000\text{m}^2$ が本調査対象区となった。房地遺跡は昭和60年1月16日～昭和60年3月30日まで本郷向遺跡として $10,000\text{m}^2$ を対象に行われ、 $5,000\text{m}^2$ が本調査対象区となった。一枚田遺跡は数ヶ所の試掘坑より遺物集中区および住居址が確認され、 $1,000\text{m}^2$ が本調査対象区となった。

本調査は3遺跡共に新たに設立された財團法人千葉市文化財調査協会により、昭和60年の7月中旬から千葉県教育庁文化課・千葉市教育委員会文化課の指導のもとに行った。

## II 遺跡の位置と歴史的環境

今回報告する子和清水遺跡・房地遺跡・一枚田遺跡は千葉市の北側の三角町・宮野木町・横橋町に各々所在する。

千葉市は房総半島の西側に位置し、その大半は比較的平坦な下総台地によって占められている。台地は西部の東京湾に注ぐ花見川・都川・村田川と東部の印旛沼に注ぐ鹿島川の浸食作用によって発達した樹枝状の開析谷により複雑な地形を呈する。

子和清水遺跡・一枚田遺跡は花見川に開析する横橋支谷の最奥部に、房地遺跡は園生支谷と合流して東京湾に開析する宮野木支谷の最奥部に立地し、周辺には数多くの遺跡が存在する。近年の開発に伴う発掘調査が頻繁に行われている地域である。

旧石器時代は花見川流域の表輪遺跡(15)からナイフ形石器を伴う石器群が検出されている。縄文時代では早期後半の茅山式期の地点貝塚を伴う鳥喰台遺跡(17)・鳥込東貝塚(18)・鳥込貝塚(19)・鳥込西貝塚(20)・エゴダ遺跡(21)等が宮野木支谷の北岸に形成される。前期ではこれらの遺跡の対岸に谷津台貝塚(22)が形成され、関山式期を主体として20軒以上の住居址が地点貝塚を伴って検出されている。中期では谷津台貝塚と同一台地上の小中台遺跡(24)で加曾利E式期の住居址が地点貝塚を伴って発見されている他、横橋支谷の外山遺跡(19)・宮野木支谷の新山遺跡(11)・齒貫遺跡(12)等の単純遺跡とみられる遺跡も分布調査により確認されている。



第1図 遺跡の位置と周辺遺跡

後期では大型馬蹄形貝塚を形成する横橋貝塚(10)や圓生貝塚(28)の他に地点貝塚を伴う井戸遺跡(28)・東ノ上貝塚(25)が立地する。このうち横橋貝塚・圓生貝塚は晩期前半まで継続する事が確認されている。尚今回調査された一枚田遺跡は井戸遺跡の外縁部にあたる部分と思われ、調査区を離れた第Ⅱ地点より加曾利B式期の地点貝塚が確認されている。

弥生時代には西妻遺跡(7)から後期の住居址が検出されている他、房地遺跡に近隣する本郷向遺跡(13)からも中期後半の住居址が1軒検出されている。

古墳時代以降では谷津台貝塚で5基の古墳が五領期の住居址と共に検出されている他、同遺跡の南側には塚原古墳群(23)が存在している。なお房地遺跡の東側にも円墳が1基確認されている。集落遺跡としては花見川流域での五領期の西妻遺跡、五領期～和泉期の裴輪遺跡、和泉期～鬼高期の新堀遺跡(6)、宮野木支谷での五領期の本郷向遺跡、和泉期～鬼高期の小中台遺跡、鬼高期の宮野木原遺跡(16)、真間期～国分期の定原遺跡(14)・下田遺跡(27)が存在しており、定原遺跡・下田遺跡からは地点貝塚が検出されている。

以上のように本地域の遺跡は绳文時代早期後半の茅山式期の地点貝塚を伴う遺跡群と後期の大型馬蹄形貝塚に代表される遺跡群に特徴付けられるが、これに対しての中期の大規模な集落遺跡の欠如が周辺地域と照らしあわせてあげられる。

(田中 英世)

No.	遺跡名	性	場	先	興	古	圓	時	期	調査	遺	跡	文獻
1	子細清水	集落址	○	○	○	○	○	○	○	裴輪(7)・加曾利B(20)・鬼高(1)・五領(3)・圓分(1)			
2	原	地	集落址	○	○					原島(1)・鬼高(1)			
3	一	枚	田	集落址	○	○				原島～加曾利B・鬼高	○	鬼高(1)	
4	大	山	包含地	○	○					原島・浮島			(1)
5	大	山	古	墳			○						(1)
6	新	篠	集落址			○	○	○	○	和泉(8)・鬼高(1)・圓分(4)			(2)
7	新	篠	集落址			○	○	○	○	久々原(1)・五領(1)			(3)
8	井	戸	集落址		○					加曾利E			(1)
9	外	山	包含地			○				加曾利E			(1)
10	曾	篠	貝塚			○				原島～安行墓(3)	○		(4)
11	新	山	包含地							加曾利E			(1)
12	篠	戸	包含地							加曾利E			(1)
13	本	郷	集落址		○	○		宮ノ山～五領	○	宮ノ山(1)・五領(4)			(6)
14	定	原	集落址				○	○		真間～圓分(3)・圓立(1)			(6)
15	鬼	篠	集落址	○		○		五領～鬼高	○	五領(3)・鬼高(1)			(7)
16	宮	野	木原	集落址			○			鬼高(4)			(8)
17	鳥	吹	合	集落址			○	野島～茅山上塚	○	伊六(180)			(9)
18	鳥	込	庭	貝塚			○	野島～茅山	○				(10)
19	鳥	込	庭	貝塚			○	野島～茅山	○				(11)
20	鳥	込	西	貝塚			○	野島～茅山	○				(12)
21	エ	ゴ	デ	集落址			○	夏島～興浦	○	茅山(7)・伊六(180)			(13)
22	谷	達	合	貝塚		○	○	岡山～鬼高・玉垂	○	南浦(23)・伊六(23)・五領(5)・古墳(5)			(14)
23	鬼	原	古	貝塚			○						(15)
24	小	中	台	集落址	○	○		加曾利E・鬼高～鬼高	○	加曾利E(2)・鬼高(5)			(16)
25	東	ノ	上	貝塚			○	○		圓之内～加曾利E			(17)
26	稻	田	包含地										(18)
27	下	田	集落址				○	真間～圓分	○	真間(1)・圓分(3)・圓立(3)			(19)
28	内	原	包含地				○	加曾利E～安行墓C	○				(20)
29	園	生	貝塚										(21)

周辺遺跡一覧表

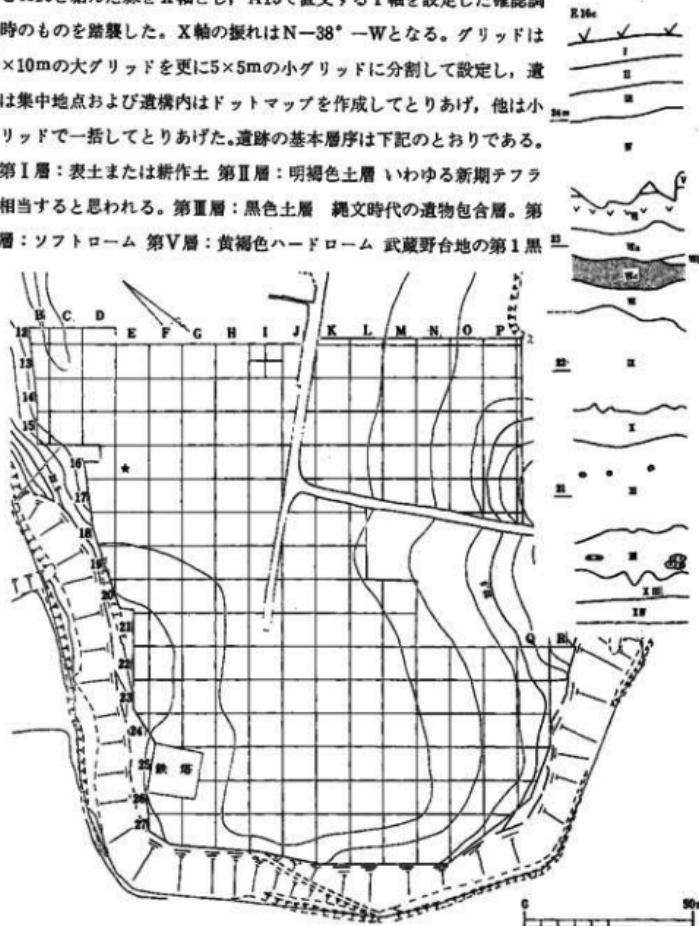
〔文 献〕

1. 千葉市教育委員会 1984 『千葉市埋蔵文化財分布地図(改訂版)』
2. 寺島 博 1985 『新堀遺跡発掘調査報告』 千葉市遺跡調査会
3. 千葉県教育庁文化課 1986 『千葉県埋蔵文化財発掘調査報告—昭和59年度—』
4. 芹沢長介  
戸沢充則 1961 「千葉県千葉市横綱貝塚」『日本考古学年報』9  
1969 「千葉県千葉市横綱貝塚(第2次)」『日本考古学年報』17
5. 田川 良他 1982 『本郷向』 千葉市遺跡調査会
6. 田川 良他 1982 『定原遺跡』 千葉市遺跡調査会
7. 加藤政信他 1983 『千葉市夷輪遺跡』 千葉県文化財センター
8. 田川 良他 1981 『千葉市宮野木原遺跡発掘調査報告書』 千葉市遺跡調査会
9. 千葉市 1976 『千葉市史 資料篇I』
10. 神尾明正 1964 『千葉県鳥込貝塚発掘報告』『千葉県文化財調査報告書』  
千葉県教育委員会
- 神尾明正 1967 『千葉市鳥込東貝塚』『日本考古学年報』15
11. 内藤美三夫他 1971 『鳥込貝塚』 鳥込貝塚調査団
12. 武部喜充他  
伊庭彰一他 1982 『エゴダ遺跡調査報告』 千葉市遺跡調査会  
1985 『エゴダ遺跡—北地区—調査報告』 千葉市遺跡調査会
13. 青木 豊他 1982 『谷津台貝塚』 千葉市遺跡調査会
- 山口直樹他 1983 『千葉市谷津台貝塚』 千葉県文化財センター
- 後藤和民・熊野正也 1984 『日本の古代遺跡18 一千葉北部—』
- 千葉県教育庁文化課 1987 『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報 一昭和58年度—』
14. 山田貴久他 1987 『千葉市小中台遺跡』 千葉県文化財センター
15. 西村正輔 1951 『千葉県都賀村園生貝塚』『日本考古学年報』1
- 神尾明正 1957 『千葉県千葉市長者山貝塚』『日本考古学年報』5
- 神尾明正 1958・63・64 「千葉県千葉市園生貝塚」『日本考古学年報』7・10・12

## I 調査の概要

子和清水遺跡は花見川に開口する横橋支谷の最奥部の標高24mの台地上に立地する。遺跡の東西に浅い谷が入り込み支谷に張り出す状態となる。グリッドは地形測量時に用いた基本杭A15とA16を結んだ線をX軸とし、A15で直交するY軸を設定した確認調査時のものを踏襲した。X軸の振れはN-38°-Wとなる。グリッドは $10 \times 10\text{m}$ の大グリッドを更に $5 \times 5\text{m}$ の小グリッドに分割して設定し、遺物は集中地点および遺構内はドットマップを作成してとりあげ、他は小グリッドで一括してとりあげた。遺跡の基本層序は下記のとおりである。

第Ⅰ層：表土または耕作土 第Ⅱ層：明褐色土層 いわゆる新期テフラに相当すると思われる。第Ⅲ層：黒色土層 縄文時代の遺物包含層。第Ⅳ層：ソフトローム 第Ⅴ層：黄褐色ハードローム 武藏野台地の第1黑



第2図 調査区設定図(1/500) 基本層序図(1/50) ★印は基本層序記録地点

色帶に相当。第Ⅳ層：明褐色ハードローム ATに由来する火山ガラスを多く含む。第Ⅴa層：黄褐色ハードローム スコリアを多く含む。第2黒色帶上部に相当。第Ⅴb層：黄褐色ハードローム  $\pm 5\text{ cm}$  程の暗橙色ブロックを主とするが、Ⅴc層に取り込まれて層をなさない場所もある。第Ⅴc層：暗褐色ハードローム 色調から識別が比較的容易である。粘性強い。第2黒色帶下部に相当。第Ⅵ層：黄褐色ハードローム スコリアをあまり含まなくなる。ここまでが立川ロームに相当し、第Ⅶ層の上部から武藏野ロームになるものと思われる。第Ⅷ層：しまりの悪い暗褐色ローム。第Ⅸ層：明褐色ハードローム。第ⅩⅠ層：褐色ハードローム 上部にスコリアの小ブロックを含む。第ⅩⅡ層：東京輕石層を含む褐色土。第ⅩⅢ・ⅩⅣ層：褐色粘性土層。XIV層以下は白色粘土となる。

（田中・築瀬）

## II 遺構と遺物

### 1. 旧石器時代

旧石器時代の調査の方法は、2m四方の試掘坑を各10mグリッドに設け、立川ローム層下部から武藏野ローム層上部まで掘り下げて石器の有無を確認した。石器の検出された地点については周囲を拡張し調査を行った。この確認調査を経て検出されたのは3地点（第4・7・10地点）のみで、他の地点は縄文時代以降の遺構および包含層の調査中に石器群の存在を確認したものである。

ここに報告するのは、尖頭器の単独出土地点を含む計10地点、資料総数845点（表採資料等は含まず）である。出土層位は第Ⅴc層（第2黒色帶下部）からⅢ～Ⅳ層上部までであり、主体となるのは第V層中に生活面の考えられる石器群である。第1・2地点は縄文時代草創期（旧石器時代終末期）の尖頭器群、第3地点は武藏野台地の層序でのⅤ層上部の尖頭器を伴う石器群と対応すると考えられるもの、第4・5・6・8・10地点は同じくⅣ層の下部、第7地点は第2黒色帶下部（Ⅴ層）の石器群である。第9地点は資料数が少な過ぎるが、出土層位から第3地点に近い時期のものであろう。第4地点には小規模ながらも礫群が伴っており、第10地点では炭化物の集中部が検出された。H-21-aグリッドとI-23-aグリッドにおいては、それぞれ黒曜石の剥片がV層からVI層にかけて検出されたが、結局単独資料であった。なお、今回ひとつの試みとして礫群の伴った第4地点において、古地磁気測定による炉跡位置の推定を行うために試料を採取し、会田信行氏（千葉県立成田園芸高校教諭）に分析を依頼した。関東では初めての試みであったが興味深い結果が得られている。また、第5地点においては石器集中部の土壤を採取し水洗選別による微細遺物の検出作業を行った。

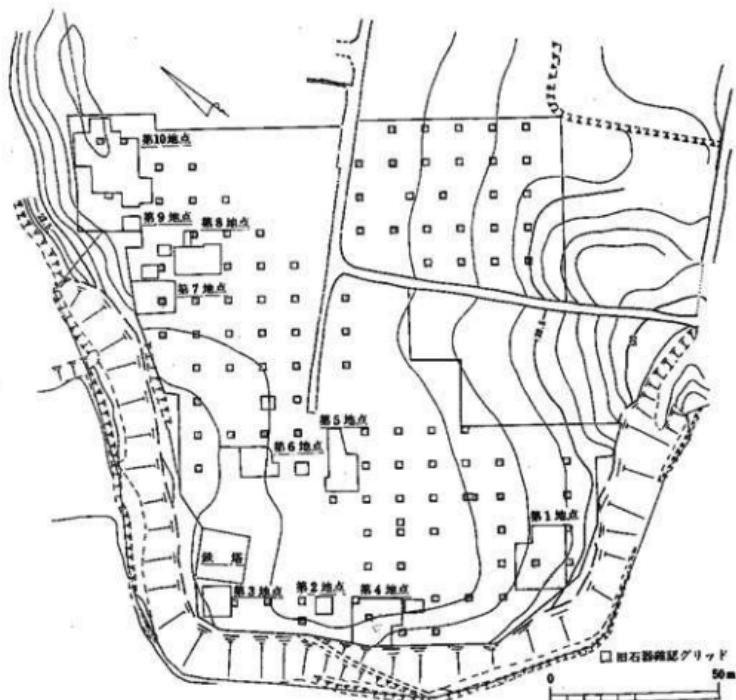
各地点別の石器組成は本節の最後に示した（第1表～第6表）。この表中における分類は嚴

密な石器型式学的な分類ではなく、従来一般的に行われてきているところに従う。碎片は1cm四方の枠のなかに収まるものとした。

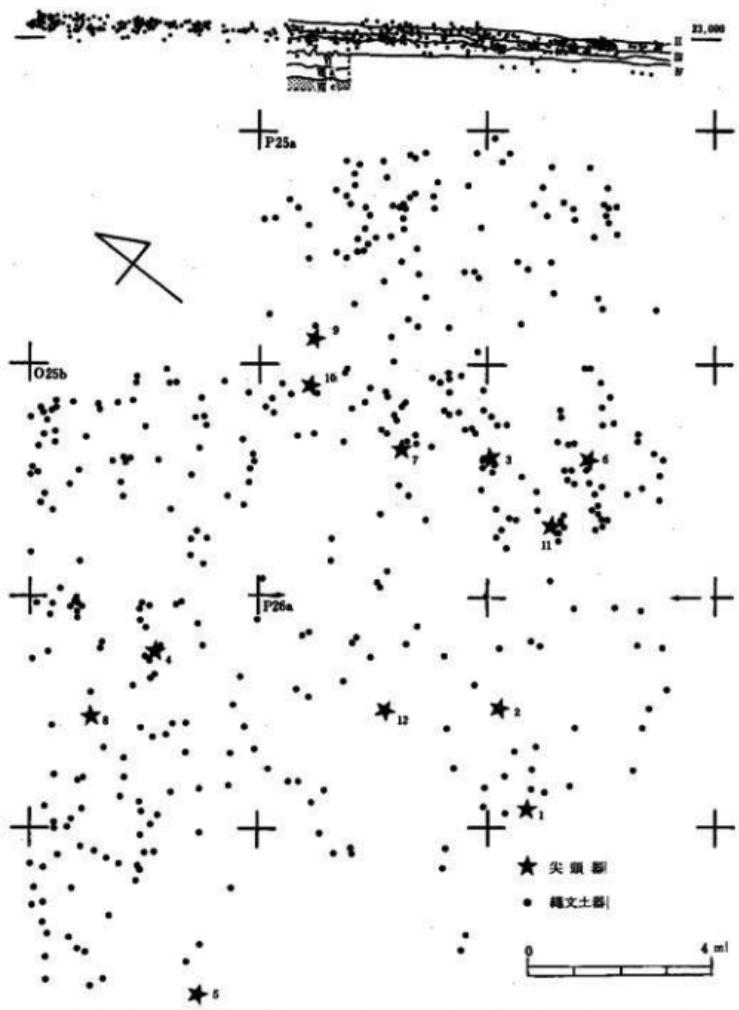
整理・報告作業は各地点別とするが、各地点は必ずしも単一のブロックよりなるものではない。ただし、それぞれの地点内においては新旧の石器群の重複は認められなかった。したがって、各地点は共伴資料として一括できるものと考えられる。地点間の接合、または確実な同一個体別資料の共有関係は認められなかった。

#### 第1地点（第4～6図、図版5）

縄文時代の遺物包含層の調査中に尖頭器が含まれていることに気づき、尖頭器の検出作業を引き続き行った。尖頭器の出土状況は縄文土器（前期～晚期）と混在したものであり、土器の出土レベルの下半に集中しているものの明確な分離はなし得ない（第4図）。このような在り方は旧石器時代終末から縄文時代草創期にかかる時期の石器群の千葉県下における一般的出土状況である。本地点と同様の尖頭器の検出されている元割遺跡（田村 1986）でも同じ出土状



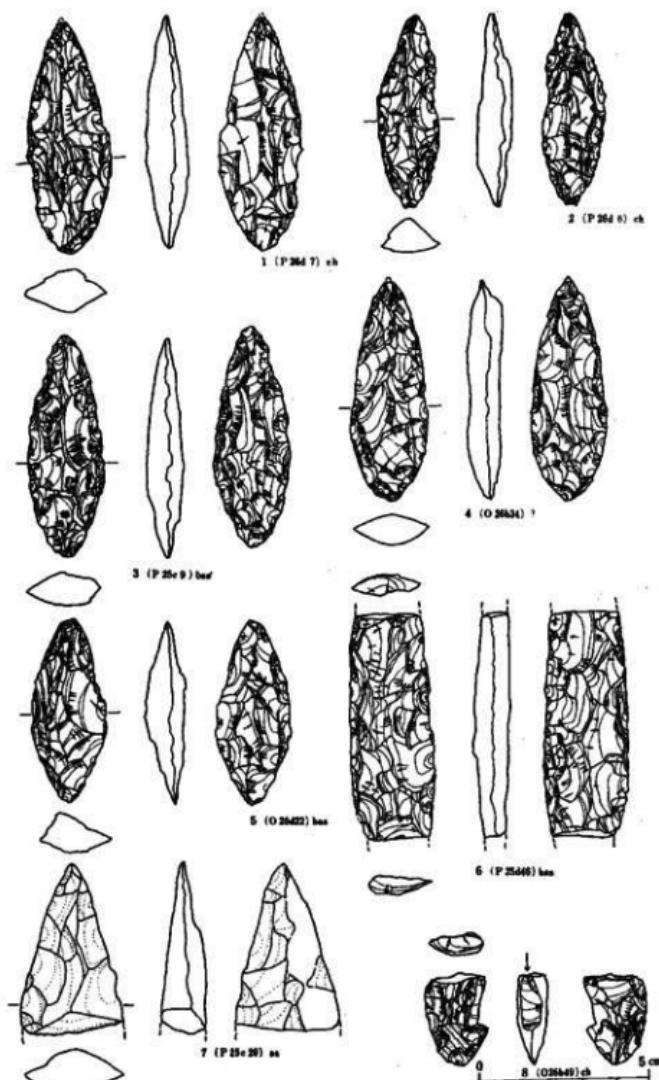
第3図 旧石器時代調査区・石器群の分布図(50m)



第4図 第1地点遺物分布図 [16] →←はセクションライン 番号は実測図と対応

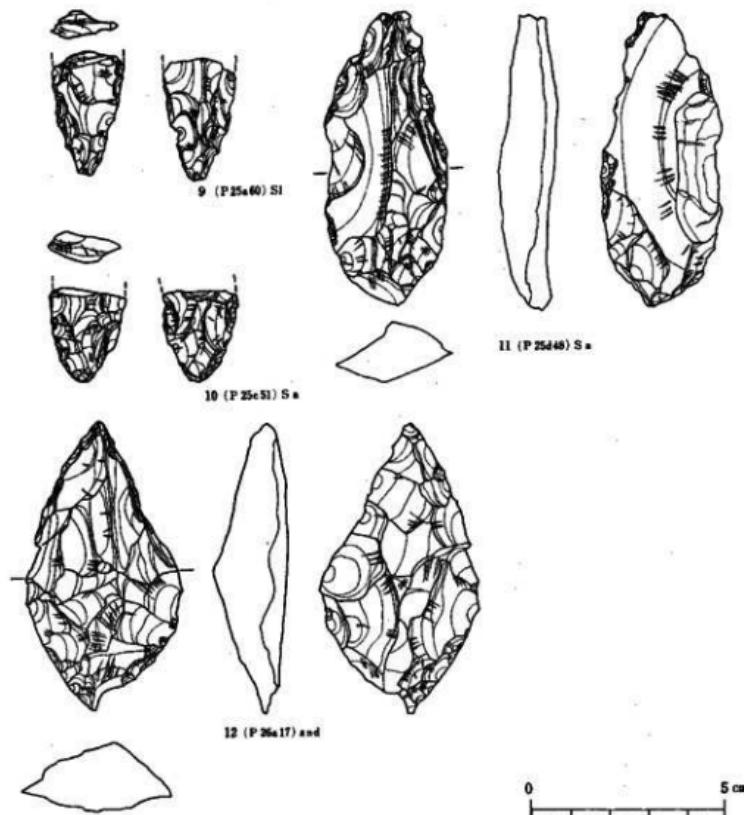
況を示している。縄文土器と混在しているものの、本石器群に伴うと考えられる土器は認められなかった。分布域は直徑が10m以上におよび散漫な分布状態である。

出土資料には製作工程に関連するものは存在せず、全て完成品もしくは折損した尖頭器であ



第5図 第1地点出土遺物(1)(3)

Ch: チャート bas: 宝武岩  
Se: 砂岩



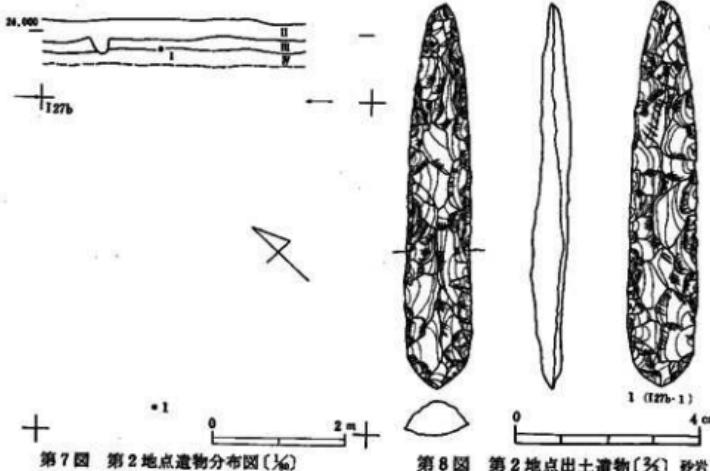
第6図 第1地点出土遺物(2)(2%)

Sa: 杉板岩 and: 安山岩

る(第5・6図)。1・2はチャート製で同一個体である可能性が大きい。1～5は形態的に良くまとまりを見せており、6～10は折れ面を有する尖頭器である。6は大型の尖頭器の両端を欠くものである。8は折れ面を打面としてファシットが加えられている。11・12は粗製の尖頭器で、11は半両面加工品、12は断面がD字形を呈する。11の尖頭部は搔器の刃部状を呈しており、1～5の尖頭器とは機能を異なる可能性がある。

#### 第2地点(第7・8図、図版5)

Ⅲ層とⅣ層(ソフトローム)の境界付近から尖頭器が単独で検出された。尖頭器は先端部をわずかに欠くが完形品と呼べるものである。かなり細身の作りで表裏とも細かい調整によって



第7図 第2地点遺物分布図(3%)

第8図 第2地点出土遺物(3%) 砂岩

丁寧に仕上げられている。基部は丸味をもって終わる。基の作り出しが認められない。

#### 第3地点 (第9図・10図、図版6)

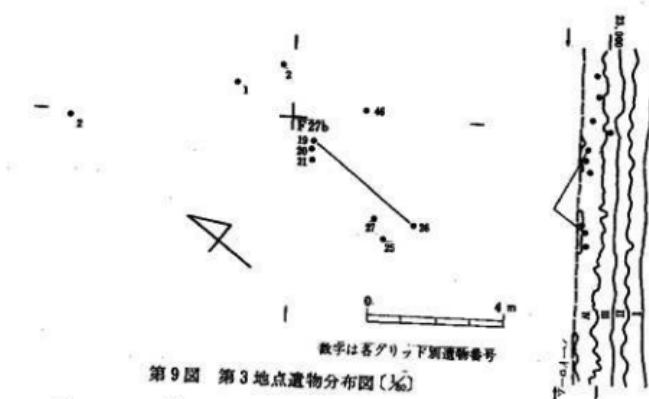
玄武岩の同一個体別資料による石器群である。資料数は10点 (接合1組)のみで、第10図に全点図示した。出土層位はソフトローム (V層) 中である。本地点でも縄文時代の遺物が検出されているが、はっきりとしたレベル差を有して分離可能であり、第1・2地点より相対的に古くなる。1・2は尖頭器の未完成と考えられるものである。ともに縫面を有する剣片を素材としている。3は周辺加工の尖頭器でふたつに折れている。製作途中の破損品の可能性が大きい。4~9は剣片である。

本地点は資料数が貧弱であるが、尖頭器の製作に関連した石器群である。

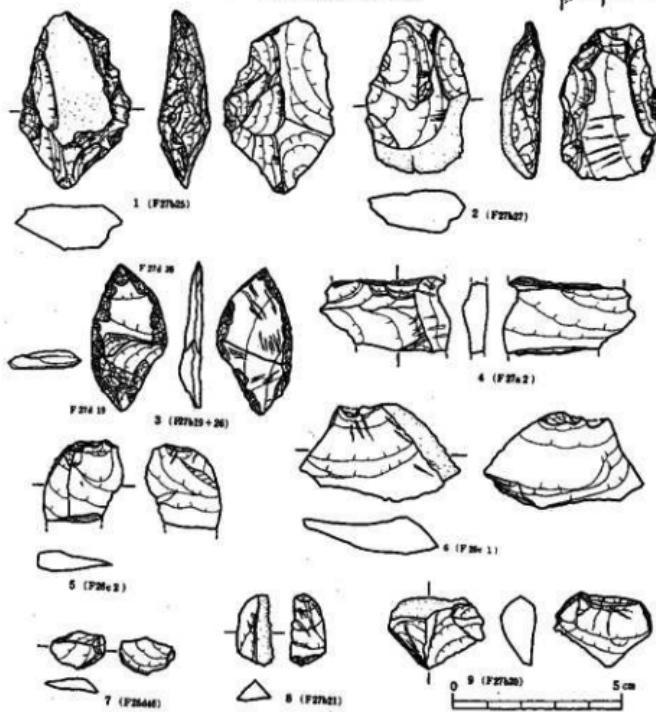
#### 第4地点 (第11~14図、図版3・6)

本遺跡では3番目に資料数の多い地点で、また、唯一縛群が検出されている。全161点のうち半数近くが縛である。出土層位はⅤ層からⅥ層にわたり、そのピークはⅤ層の下部に求められる。第11図の断面投影図中で西側の部分がⅤ層を中心として分布しているように見えるが、これは断面図の記録位置が石器集中部の傾斜と一致しないためである。東側の部分の縛群の分布状態からも明らかのように、Ⅴ層の下部に本来の生活面を復元することができる。

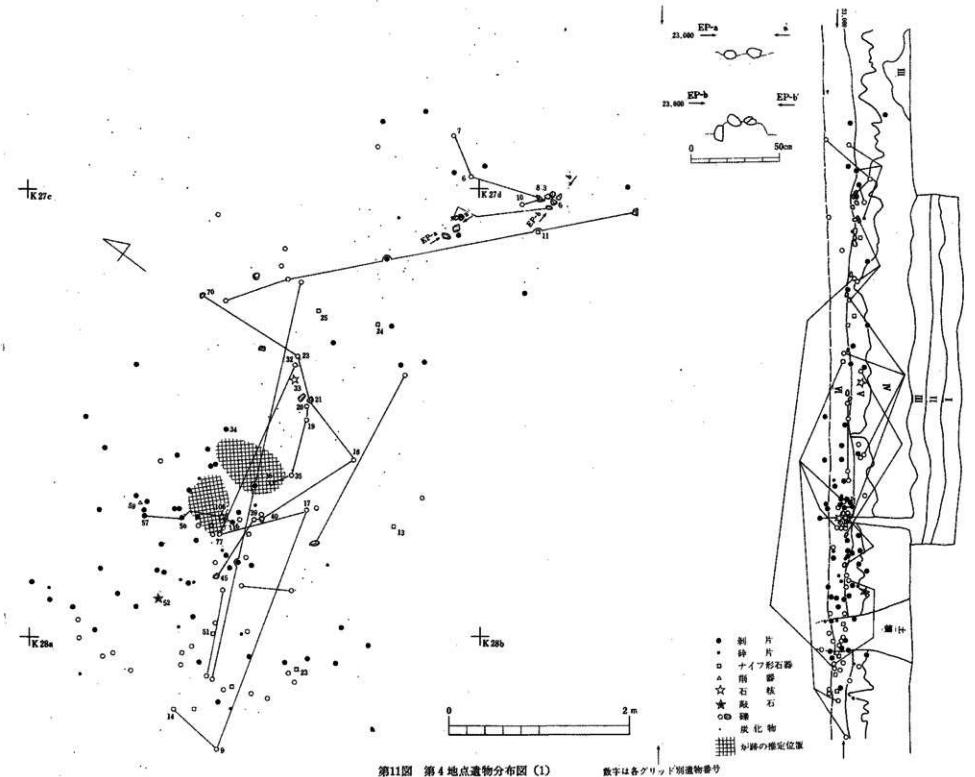
検出された縛群は小規模なものである。東側に分布の中心があり、この地点の中では大型の部類にはいる縛がまとまっている。縛のほとんどが焼けており、受熱の痕跡が認められないものは少ない。タールもしくは煤状の付着物の認められるものも存在する。縛と他の石器類とは



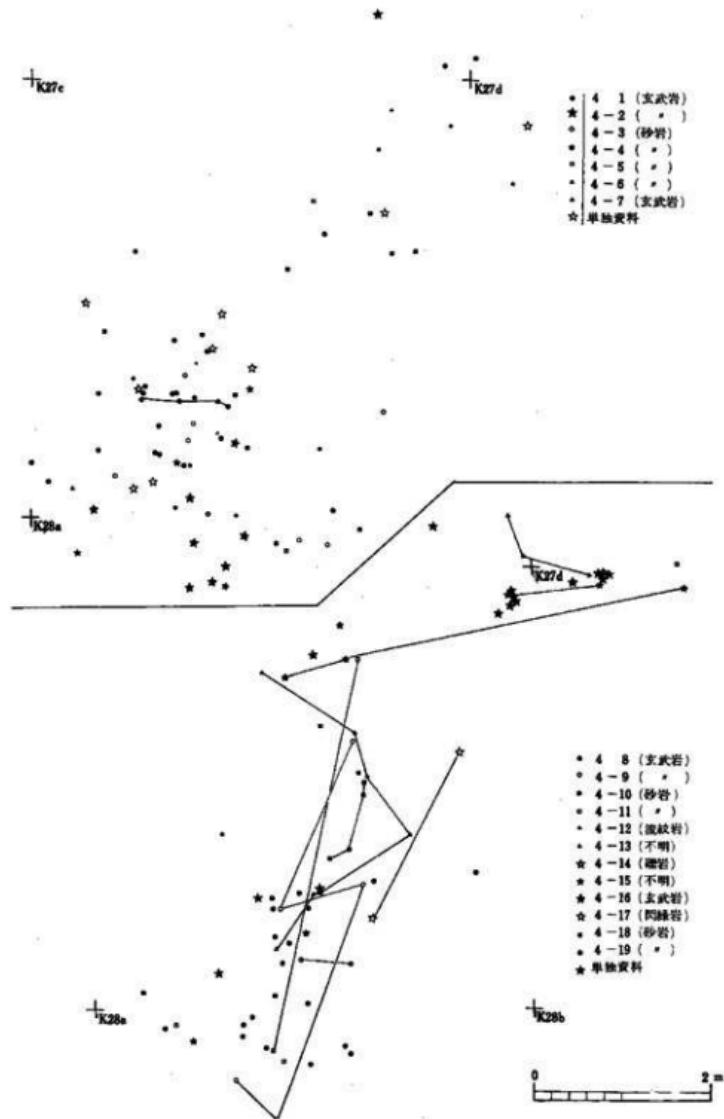
第9図 第3地点遺物分布図(下)



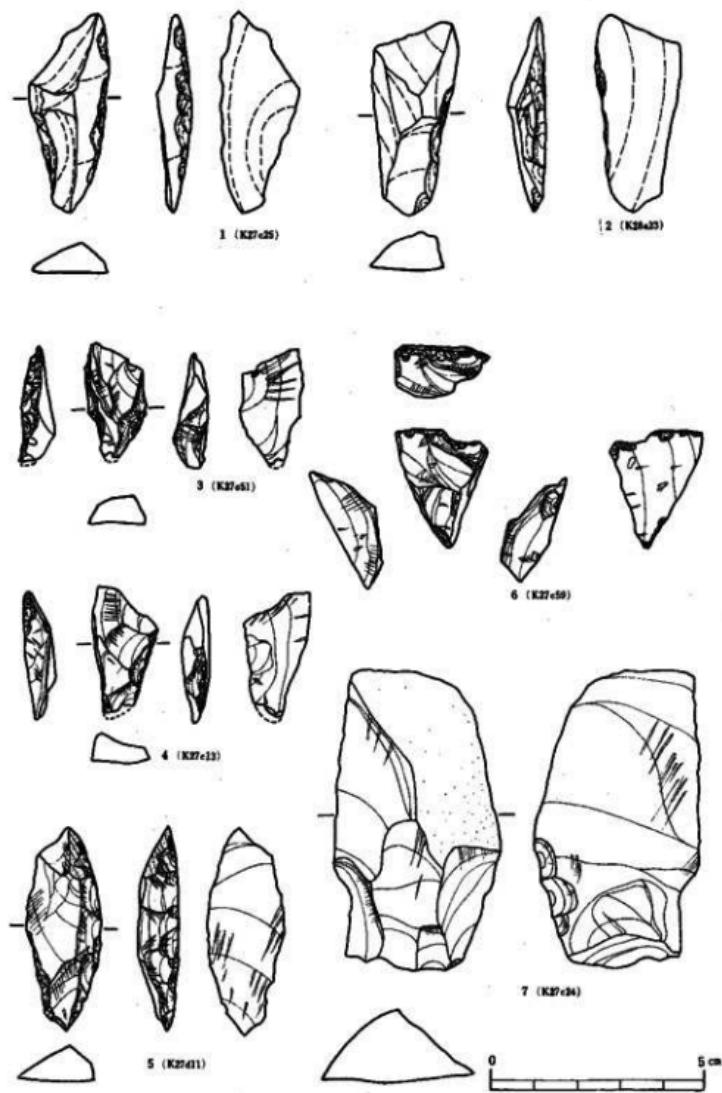
第10図 第3地点出土遺物(下) 1~8式武器



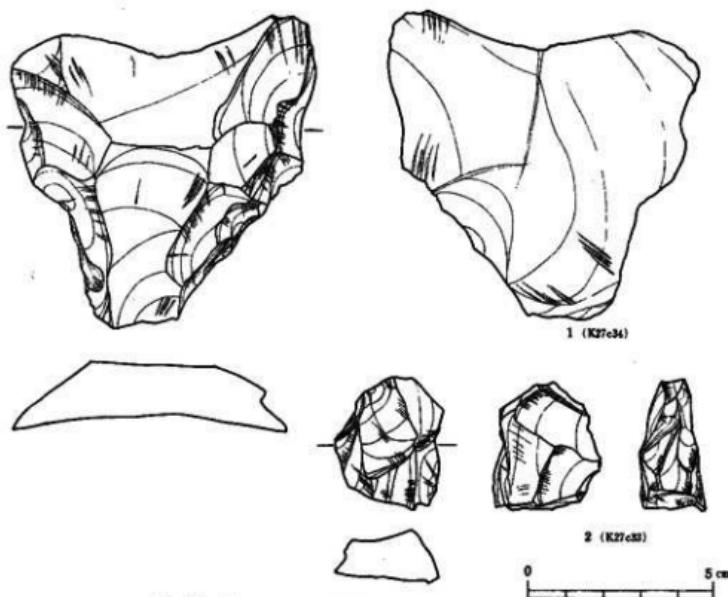
第11圖 第4地點遺物分布圖（1）



第12図 第4地点遺物分布図(2)個体物 資料別 上段：石器 下段：礫(火石)



第13圖 第4地點出土遺物(1)(%)

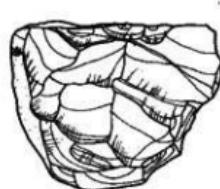
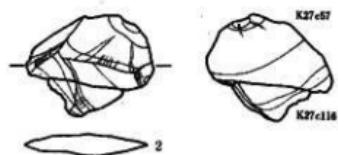
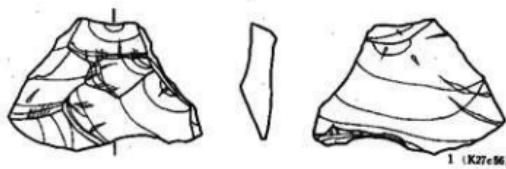


第14図 第4地点出土遺物(2)(%)

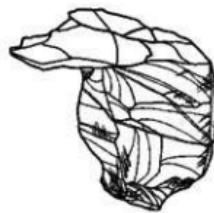
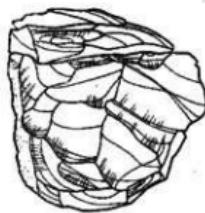
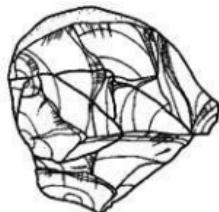
両者に分布のズレが見られ、相互に補完的な分布のあり方を示している。

第13図1～5に示したのがいわゆるナイフ形石器である。5を除いていずれも横長剝片を素材としている。6は唯一の黒曜石製の資料で、両側辺に折れ面があり素材の縁辺に対して部分的な調整が加えられている。7は腹面側に調整が加えられている。第14図1は打面を調整により除去したもので、大型の剝片を用いている。2は石核である。第15図には資料番号5～1の接合資料を示した。石核に剝片が接合している。第16図1は敲石、2は玄武岩製の石器の原石と考えられるもの。3～7には接合した縫を示した。5を除いて受熱痕が認められる。6には煤状の付着物が割れ面に認められる。

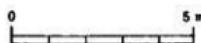
本地点では火を用いた場所を明らかにするために古地磁気の測定用試料を採取した。礫群を検出した後、その直下を試料採取面とし、石器の分布するほぼ全域に25cmの方眼を設定し、25cmの間隔で計495個の試料を採取した(図版3)。測定は会田信行氏に依頼した。詳しくは会田氏の報告及び考察のところで述べることにするが、2ヶ所の炉跡と推定される部分が検出されている(第11図スクリーンの部分)。



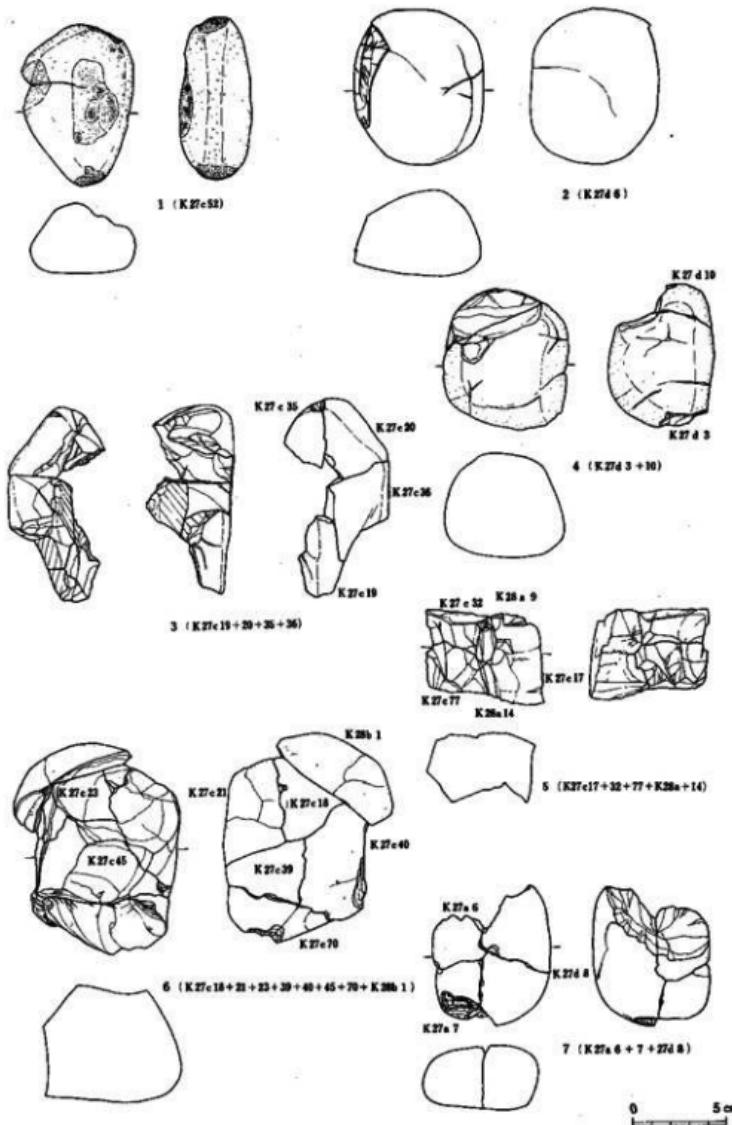
3 (K27e106)



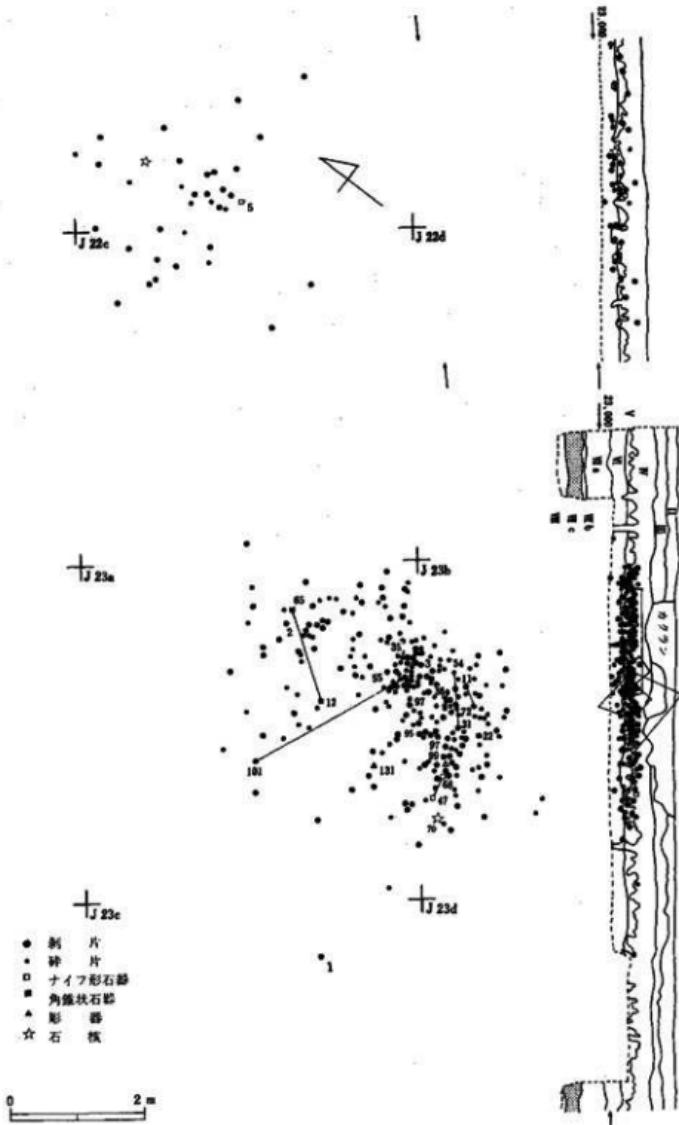
4 (K27e57 + 116 + 56 + 106)



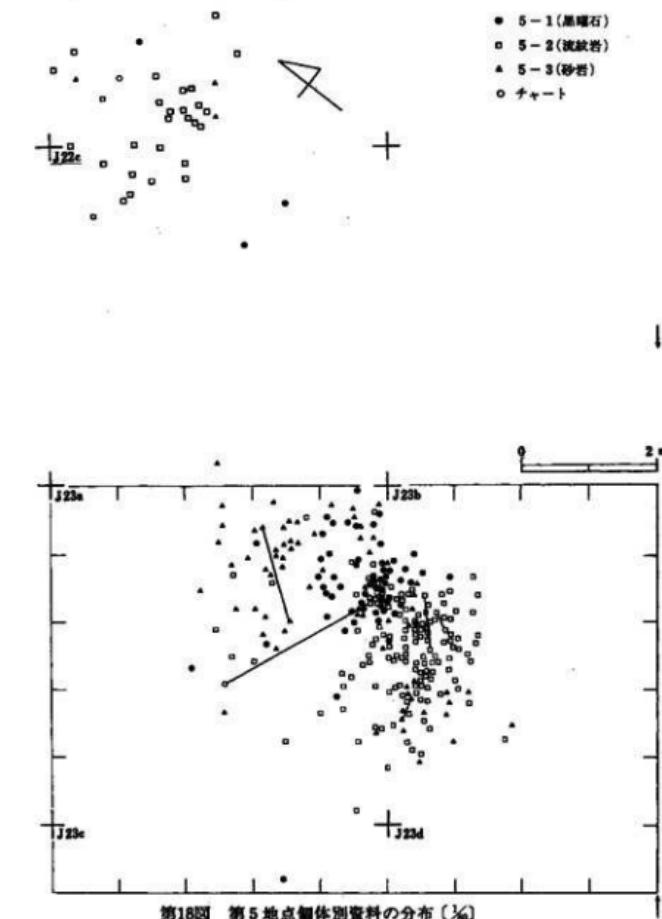
第15圖 第4地點出土遺物(3)(%)



第16図 第4地点出土遺物(4) [36]



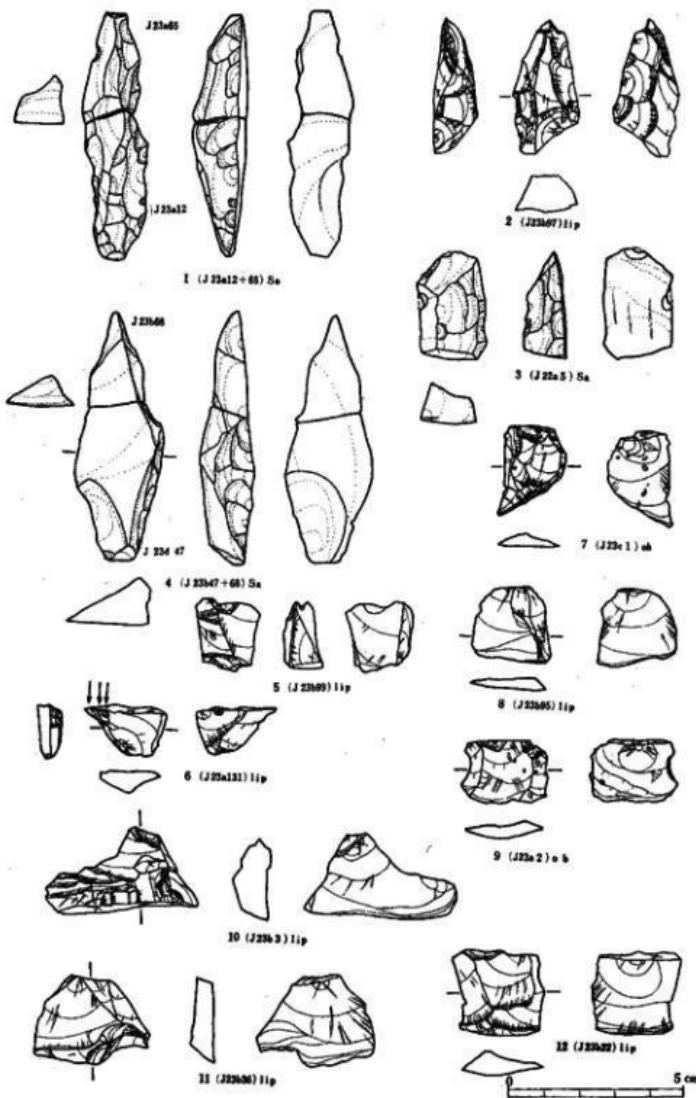
第17図 第5地点遺物分布図(16) 南側の部分のセクションラインは第18図に示した



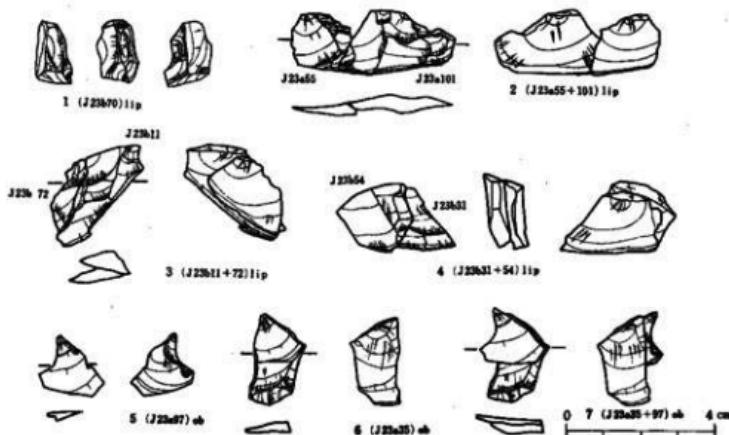
第16図 第5地点個体別資料の分布(%)

#### 第5地点(第17~21図、図版5)

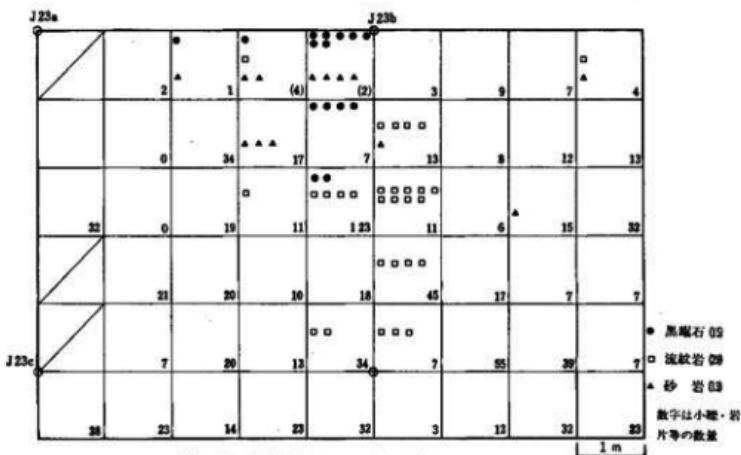
資料総数は304点で本遺跡では最も多い。この他に水洗選別によって碎片が57点検出されている。出土層位はV層中にピークがある。2つのブロックよりなるが、同一個体別資料を共有していることから、ふたつのブロックは同時期に形成されたものと考えられる。1点のチャートを除けば、黒曜石・流紋岩・砂岩の3つの個体別資料によってブロックは形成されている。



第19図 第5地点出土遺物(1)(%) lip:流紋岩 ob:黒曜石 sa:砂岩

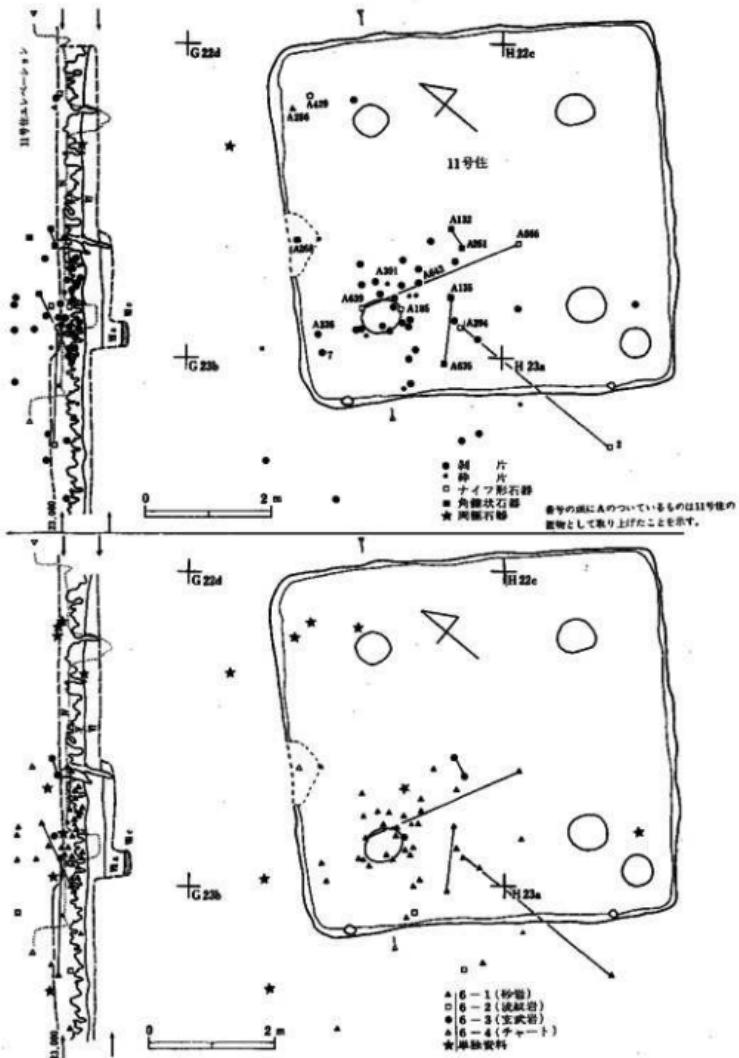


第20図 第5地点出土遺物(2)(%)

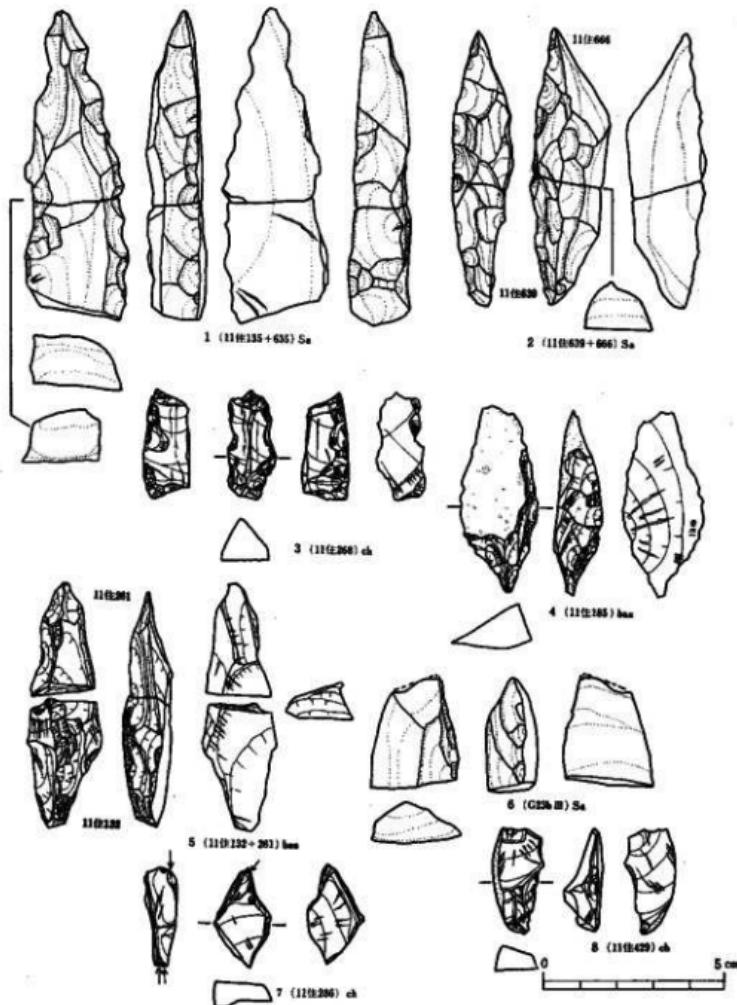


第21図 水洗選別による微細遺物検出結果

碎片が多く50%を越えている。トゥールはナイフ形石器2点・角錐状石器2点・彫器1点・削器1点である。なお本地点では、微細遺物の水洗選別(1mmメッシュ・フルイ)を行った。碎片の分布は発掘調査によって得られた遺物の分布と対応している(第21図)。



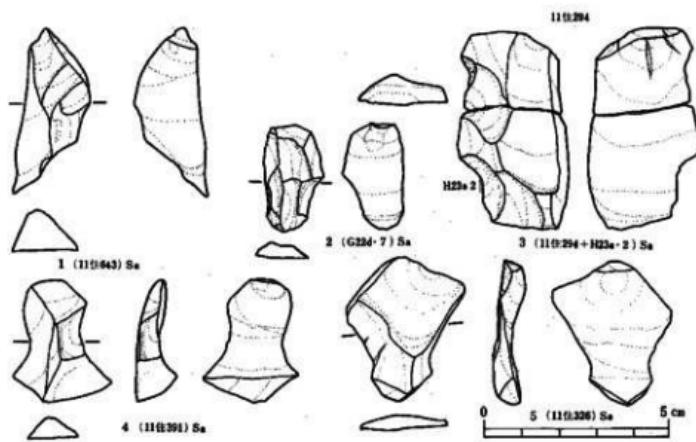
第22図 第6地点遺物分布図(16) 上段：型式別 下段：個体別



第23図 第6地点出土遺物 (1) (%) sa : 砂岩 ch : チャート bas : 宝武岩

第6地点 (第22~24図、図版2・5)

古墳時代前期の第12号住居址の調査中に石器が出土したので、住居址の調査終了後に石器群の調査を行った。本地点の石器群の分布の中心は第12号住居址のなかにある。したがって、原



第24図 第6地点出土遺物(2)(2%)

位置を失って第12号住居址の覆土中から出土した資料も多い(第22図)。この石器群はV層中に生活面の求められるものである。第23図1は大型の角錐状石器、3は小型のものである。横長剥片を素材としたナイフ形石器(第6図2・4)も検出されている。

#### 第7地点(第25・26図、図版2・6)

Vc層から覆層にかけて検出された石器群で、当遺跡では最古期に位置付けられる。資料は第26図に示したものがすべてである。1~4はチャート製の資料で、同一個体である。いずれも平坦打面から剝離されており、南関東でも古い時期の縦長剥片剝離技術に共通した特徴を備えている。5は緑色を帯びたやや粗粒の石材を用いた尖頭状石器である。素材の剝離を両板打法によっている可能性がある。6はシルト質の砂岩製の石器で腹面側から調整加工が加えられている。

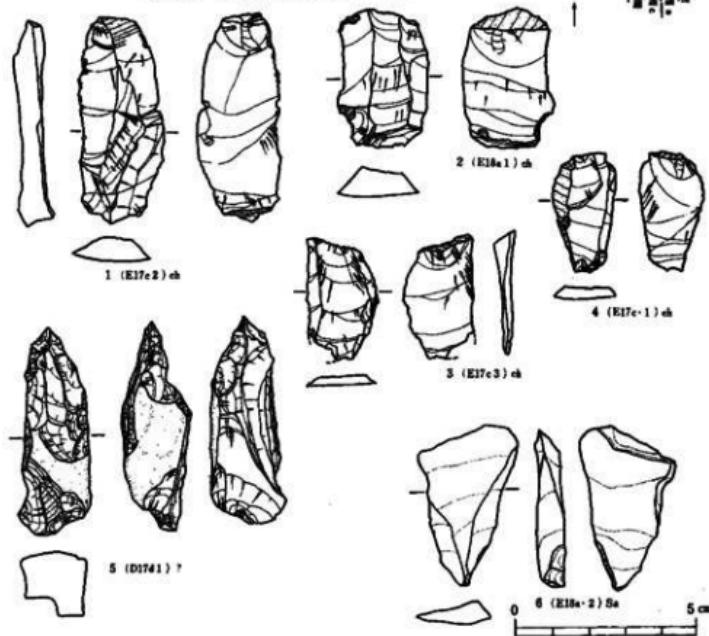
#### 第8地点(第27・28図、図版7)

V層を中心として検出された小規模な石器群である。石材は黒曜石が半数を占めるが、少点数の個体別資料が多い。

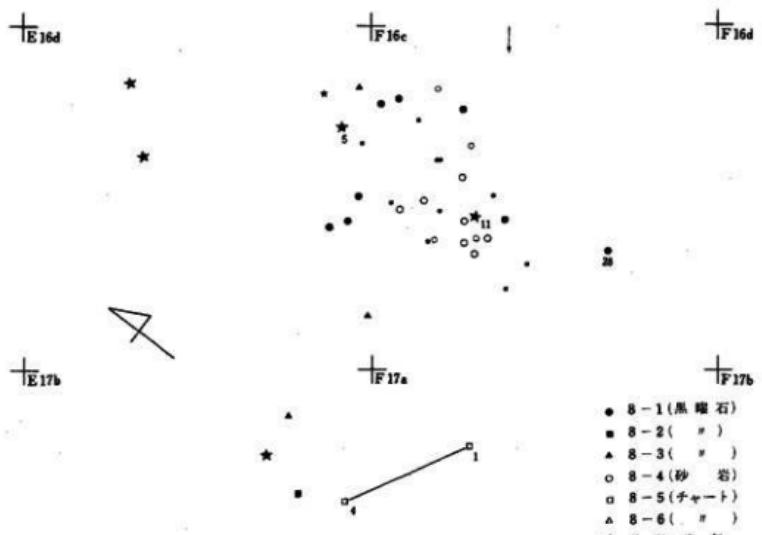
第28図1は背面が疊面に被われる剝片を素材としている。両側辺は折れ面からなり、先端に疊面側からの調整がある。2は剝片、3は剝片の両側辺に調整が加えられている。4は黒曜石の石核、5・6と7・8はチャートの接合資料である。6は石核である5から剝離されているが、石核の素材は剝片である。6には細齒状の調整が加えられている。8は形器である。石核である7から剝離されている。石核の方は剝離が進行してかなり小型の残核になっている。



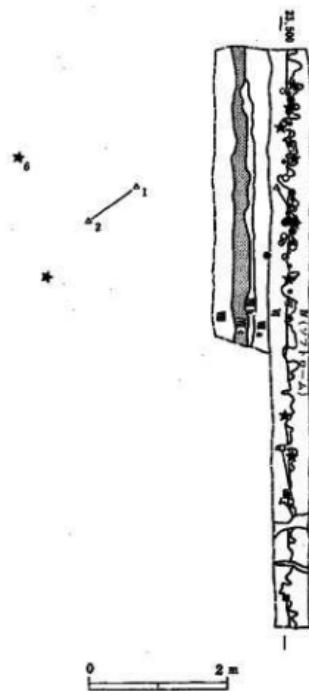
第25図 第7地点遺物分布図(%)



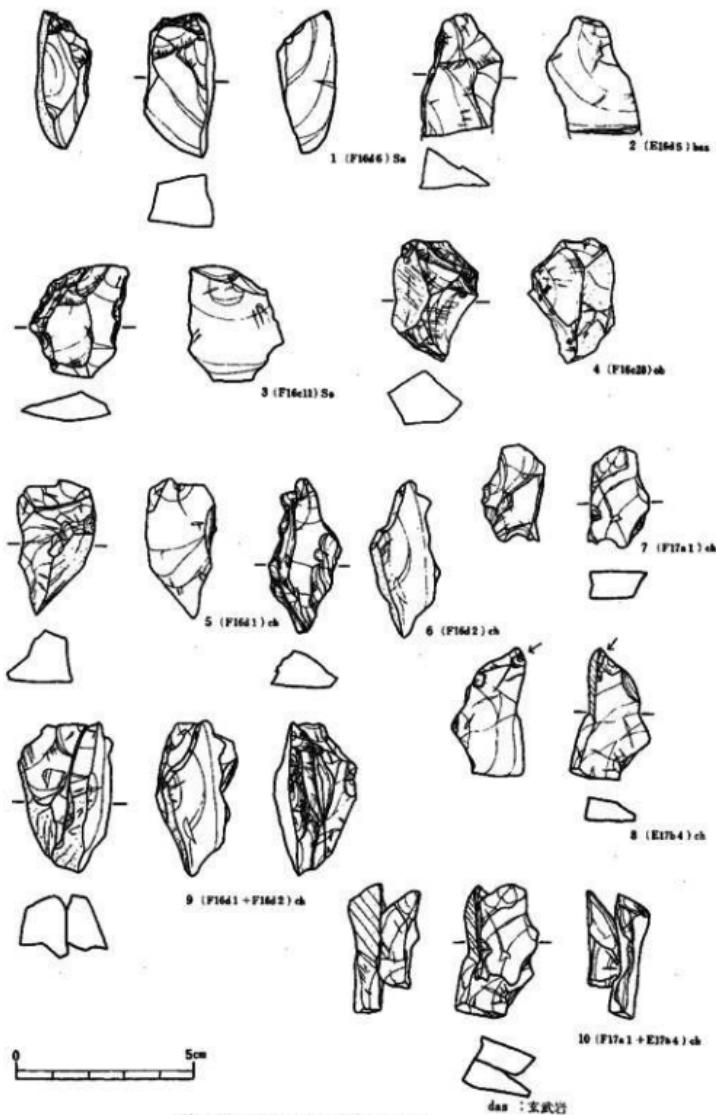
第26図 第7地点出土遺物(%)



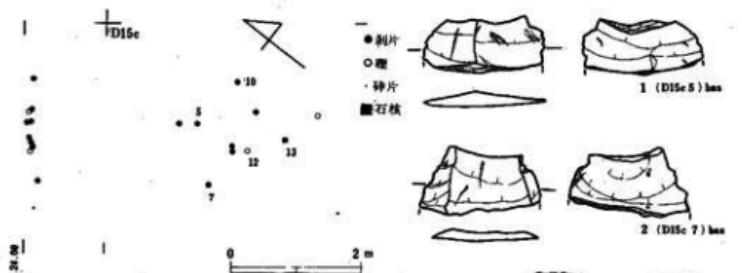
● 8-1(黒曜石)  
■ 8-2( " )  
▲ 8-3( " )  
○ 8-4(砂岩)  
□ 8-5(チャート)  
△ 8-6( " )  
★ 単独資料



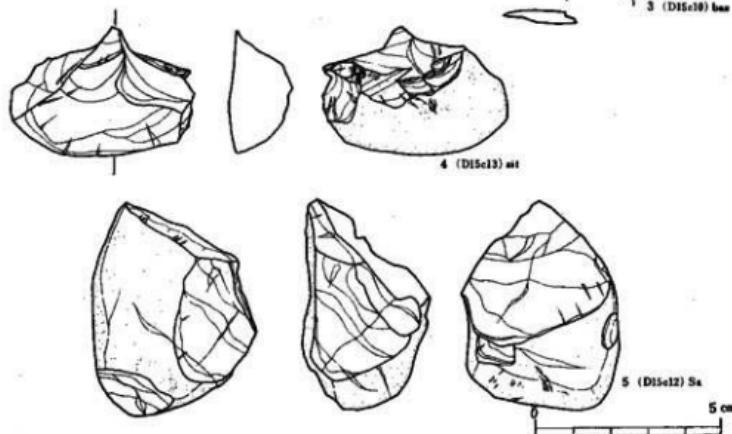
第27図 第8地点遺物分布図(母岩別)〔%〕 数字は遺物番号



第28図 第8地点出土遺物(36)



第29図 第9地点遺物分布図(ノロ)



第30図 第9地点出土遺物(ノロ) 1-3玄武岩・4真岩・5砂岩

#### 第9地点(第29・30図、図版7)

縄文時代遺物包含層の調査中に検出された小規模なブロックである。出土層位はソフトローム層中で、縄文時代の遺物とはレベル差をもって出土しており、第3地点と同様の出土状況である。時期を特定する内容に欠けているが、第3地点に近い時期のものと考えている。

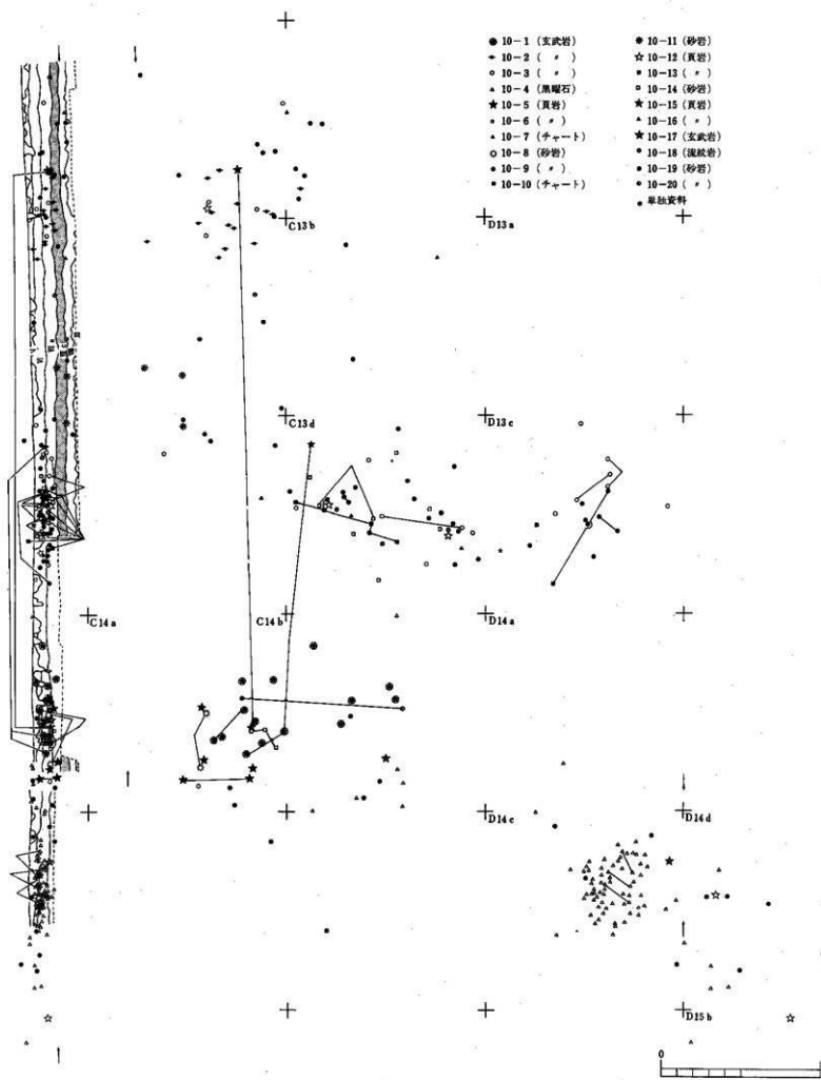
資料数は全部で11点である。このうち個体No. 9-1(玄武岩)の資料が大半を占める。石器群の内訳は剥片7・碎片1・核1(第30図4)・礫2(第30図5)である。

#### 第10地点(第31~35図、図版4~7)

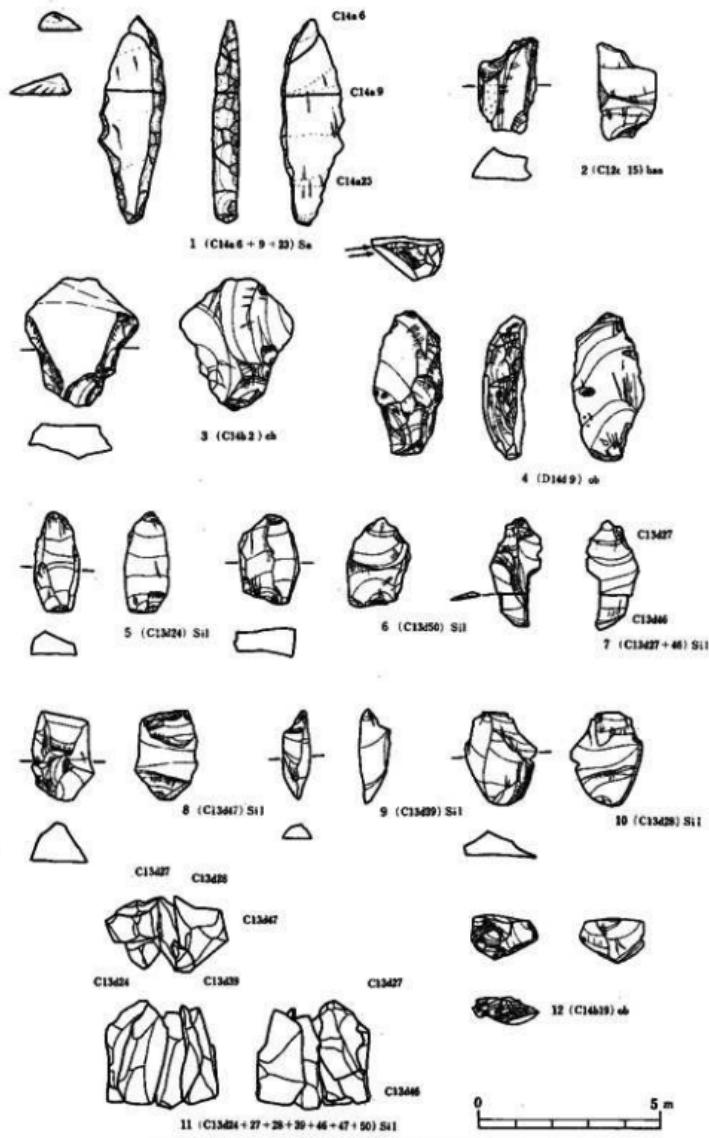
350m<sup>2</sup>程の範囲に240点の石器が検出されている。4ヶ所程のブロックに分けられる。しかし、相互に同一個体別資料の共有または接合関係があるので、各ブロックの形成時期に大きな



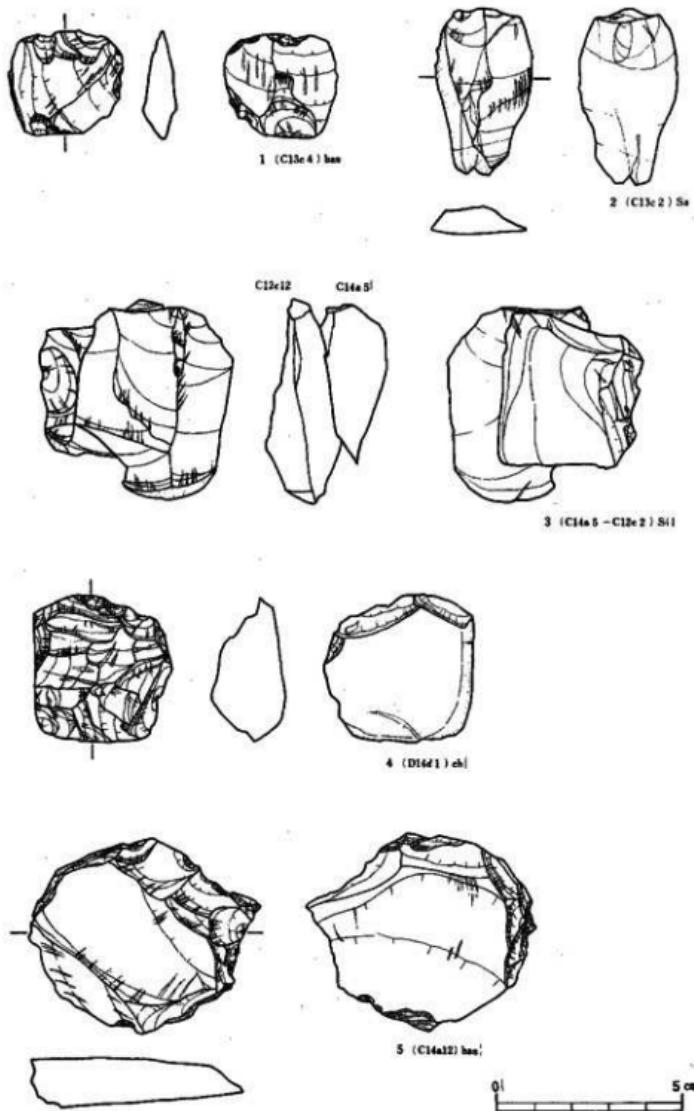
第31図 第10地点遺物分布図 (No.10)



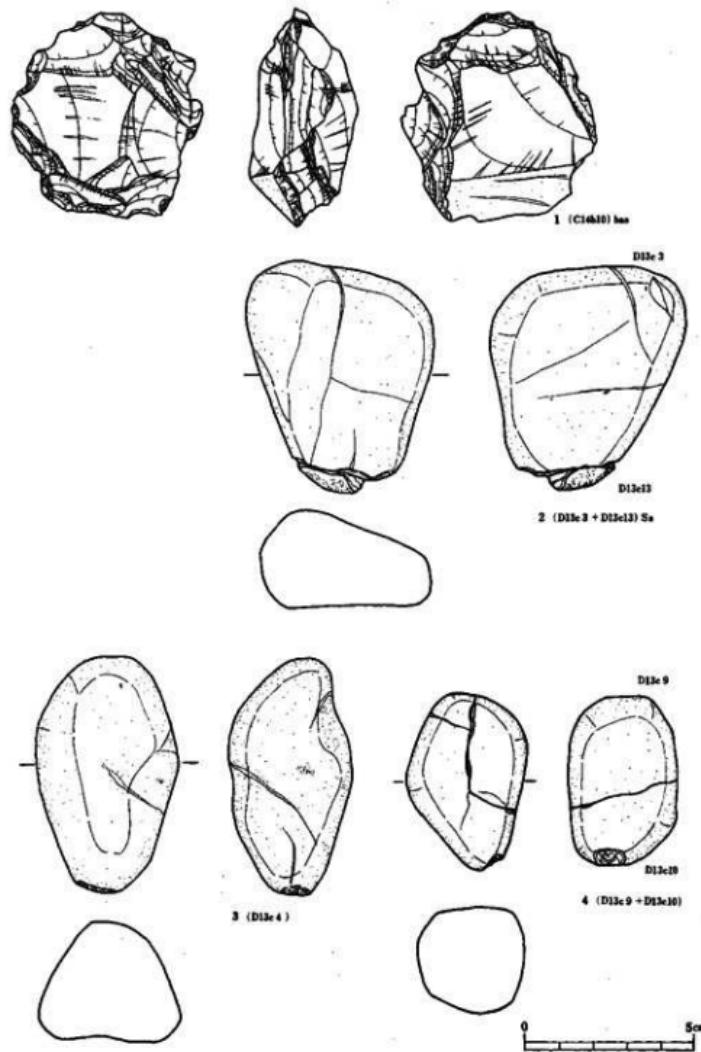
第32図 第10地点遺物分布図・個体別資料の分布〔%〕



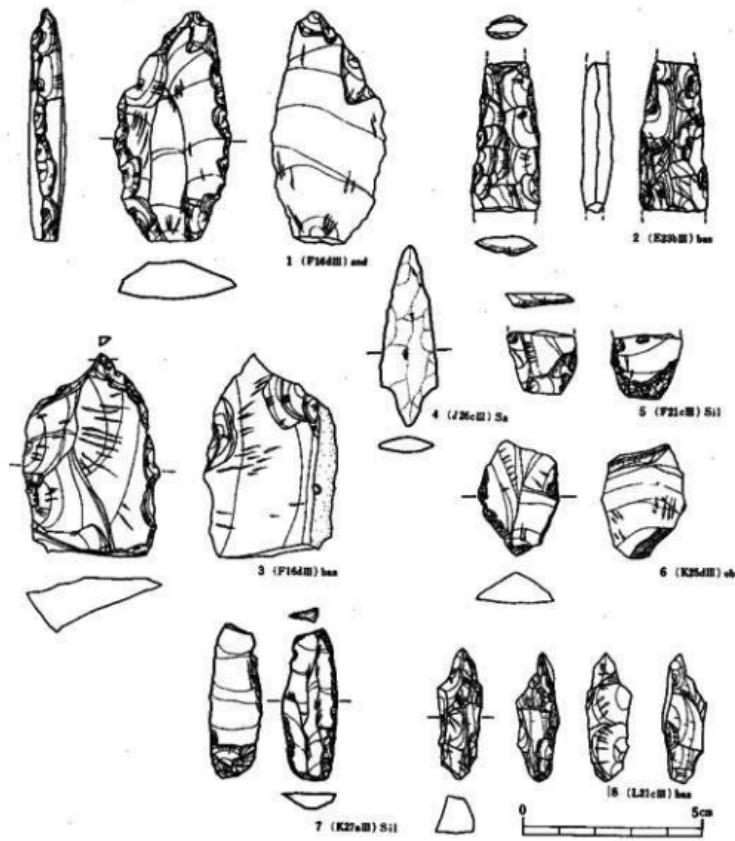
第33圖 第10地点出土遺物(1)(%) sil :頁岩



第34図 第10地点出土遺物 (2) (%)



第35図 第10地点出土遺物 (3)(%)



第36図 表面採集遺物

時間差はないと考えられる。出土層位はIV層（ソフトローム）からⅤ層におよぶが、Ⅴ層中に分布の中心がある。ただし、C-12-c-d、C-13-a+bグリッド付近の資料は、他の部分に比べ出土層準が下位にある点は気にかかるところではある。上述のように個体別資料の関係から分離することはできないと考えられるが、第Ⅴ層から検出されている遺物には母岩上では単独資料になるものが多く、明確な帰属は決定し難いところがある。本報告では全て一括して取り扱うこととしたが、より詳細な検討を経て分離される可能性がある。

全体的な分布状況は、少量の資料数からなる多数の個体別資料によって構成されている。同

一個体による資料を他に持たない単独石材資料も多い。このようななかにあって資料 No.10-4の黒曜石の個体別資料は資料数もある程度まとまっており、分布の上でもはっきりとしたブロックを形成している。なお、本地点では炭化物の集中部が3ヶ所程検出されている。石器の分布は炭化物の分布状態とは一致しない。石器の分布密度の小さい部分に多くの炭化物が検出されている。炭化物の分布密度は一回だけの平面確認に終わったのでどうしてもドットの量が少なくなりがちである。

第33図から35図に主要な遺物を図示した。第33図1はナイフ形石器である。2は両極削片素材の削器、3は両側刃に調整を加えて基部を作りだしている。4はナイフ形石器とも彫器とも呼べるものである。5~11は頁岩の両極石器の接合資料である。12は黒曜石の振器の刃部破片である。第34図1は両極石器(ピエス・エスキュー)。2は縦長削片。3は頁岩の接合資料である。途中で打面を90度移動している状況がわかる。4・5と第35図1は石核である。いずれも打面が周囲に設定される円盤状の石核である。第35図2・3・4は蔽石(ハンマー・ストーン)である。本地点では蔽石が4点検出されており、蔽石と両極石器が多いのが特徴である。

#### 表面採集遺物(第36図)

縄文時代の遺物包含層の調査中に検出され、出土地点を記録せず、層位のみの記録で取り上げた資料を第36図に示した。1と3を除けばいずれも単独資料である。1は本来3とともに一群を形成していた資料と思われる。2は尖頭器の折損品。4はシルト質砂岩製の有舌尖頭器。5は調整が平坦な面的加工になっている半両面加工尖頭器の基部。6・7はナイフ形石器。8は玄武岩の角錐状石器である。三面とも調整が加えられている。

(集瀬 裕一)

第1表 第4地点個体別石器集計表

個体No.	剝片	碎片	石核	ナイフ 形石器	角錐状 形石器	形器	削器	計
4-1	34	7	1			1	43	
2	7	4		2			13	
3	6			2			8	
4	2		1				3	
5				2			2	
6	2	1					3	
7	2	2					4	
砂岩	2			1			3	
黒曜石					1	1		
玄武岩	2	1			1	4		
不明	1					1		
計	58	15	2	7	3	85		

個体No.	剝片	碎片	石核	ナイフ 形石器	角錐状 形石器	形器	削器	計
4-8						19	19	
9						5	5	
10						5	5	
11						6	6	
12						8	8	
13						4	4	
14						7	7	
16						2	2	
17						2	2	
18						2	2	
19						2	2	
砂岩						4	4	
玄武岩						1	1	
不明						1	8	9
計						1	71	72

第2表 第5地点個体別石器集計表

個体No.	剝片	碎片	石核	ナイフ 形石器	角錐状 形石器	形器	削器	計
5-1(黒曜石)	24	43						67
5-2(流紋岩)	86	79	1		1	1	1	79
5-3(砂岩)	35	27		3(2)	2(1)			27
チャート			1					1
計	145	149	2	3	3	1	1	304

第4表 第7地点個体別石器集計表

個体No.	剝片	碎片	石核	ナイフ 形石器	角錐状 形石器	形器	削器	計
6-1(チャート)	4							4
砂岩						1		1
不明							1	1
計	4	1	1					6

第3表 第6地点個体別石器集計表

個体No.	剝片	碎片	石核	ナイフ 形石器	角錐状 形石器	形器	削器	鉋石器	計
6-1(砂岩)	27	7		4(2)	2(1)				40
2(流紋岩)	2								2
3(玄武岩)				1	2(1)				3
4(チャート)			1		1				2
チャート	1	1	1			1	1	5	
黒曜石	1							1	
玄武岩	2	1							3
計	33	9	1	6	5	1	1		56

注( )内は接合後の数

第5表 第8地点個体別石器集計表

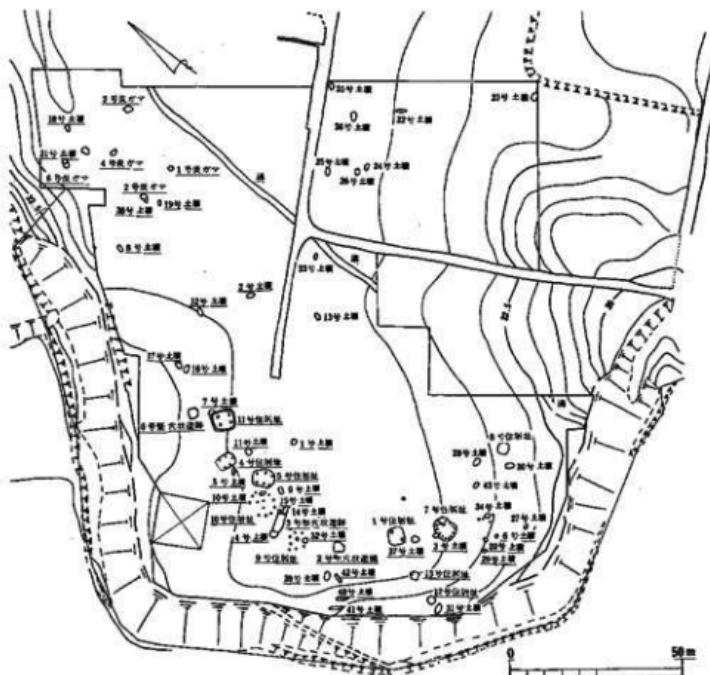
個体No.	剝片	碎片	石核	ナイフ 形石器	角錐状 形石器	形器	削器	鉋石	計
8-1(黒曜石)	6	10	1						17
2( )	2								2
3( )	2	1							3
4(砂岩)	7	4							11
5(チャート)						1	1	2	
6( )			1			1	1	2	
チャート								1	1
玄武岩	2								2
黒曜石						1			1
夏谷	1								1
不明							1		1
計	20	15	3	1	4	1	1	44	

第6表 第10地点個体別石器集計表

種別 個体名	剝片	碎片	石块	ナイフ 形石器	削器	搔器	圓盤 石器	敲石	漆	計
10-1	12	1	1							14
2	10	3			1					14
3	18						1			19
4	31	43		1	2	1				76
5	5									5
6	2									2
7	2									2
8	2									2
9	2									2
10	2	2								4
11	2									2
12	4	1								5
13	2	1					4			7
14	5	3		3(1)						11
15	2									2
16	4									4
17	2									2
18		3			1					4
19								6	6	
20	2									2
黒曜石	2	1								3
チャート	5	2	2	1			1	1	1	13
砂岩	4							2	6	
頁岩	7	1								8
メノウ	4	1	1					1	7	
安山岩	2			1		1				4
鉄石英	2									2
粘板岩	2					1				3
玄武岩						1				1
石英斑岩							1			1
半花崗岩							2(1)			2
不明							2(1)	2	4	
計	137	62	4	6	4	1	9	6(4)	12	241

## 2. 繩文時代

縄文時代の遺構は堅穴住居址および堅穴状遺構10軒・炉址状遺構2基・土壙43基が検出されている。住居址は台地先端部に集中しており、堅穴状遺構とした炉址をもたない遺構も多い。内訳は前期中葉～末葉が7軒・加曾利E式期2軒・称名寺I式期1軒で、他に晩期後半の遺物集中地点が4地点発見されている。晩期の包含層はI層とII層の間の黒褐色土層で後世の移動をかなり受けている。炉址状遺構のうち1基は明確に晩期の土器を伴出しているものの、遺物集中地点より離れており今後の課題をのこしている。第10号住居址としたI-24～27グリッド周辺は前期から晩期の遺物が集中しており、特に晩期後半の遺構の存在を示唆する遺物の集中がみられ、浅鉢が伏せた状態で出土したが遺構の検出までには到らなかった。関東地方の晩期後半の遺跡はこのような黒褐色土に遺物を包含する例が多く、遺構の検出を困難なものとしている。今後新たな調査方法の検討が望まれる。

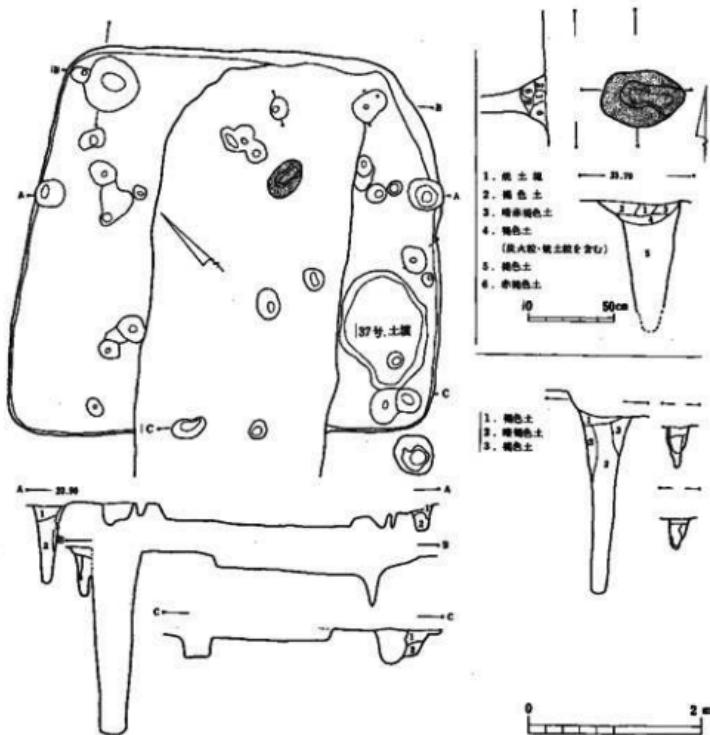


第37圖 遺構配置圖 ( $K_{3,6}$ )

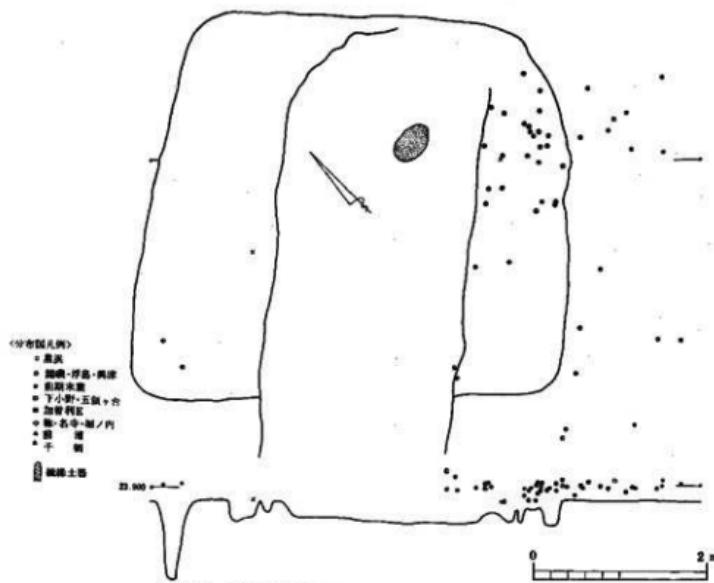
## (1) 穹穴住居址・竪穴状遺構

### 第1号住居址（第38図～第40図、図版8）

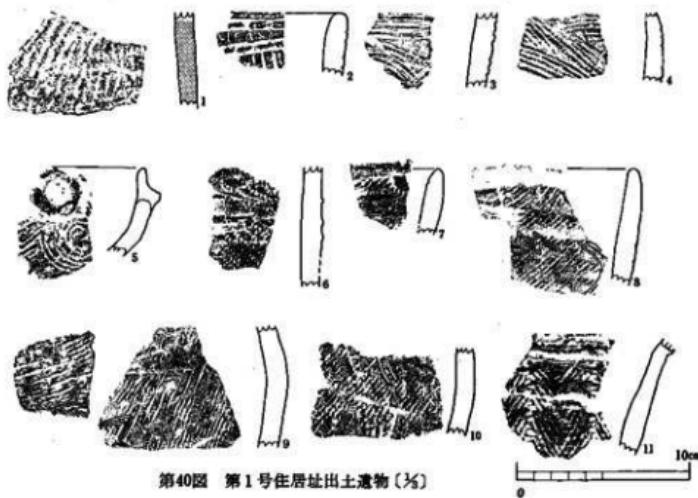
L-26-d・M-26-aグリッドから検出されたもので、 $4.8m \times 4.4m$  の東側が短い不整方形を呈する。床面は軟弱で壁高は10cmに満たない。中央やや東寄りに50cm×33cm-12cmの炉址を有し、南側は第38号土壇に切られ、北側には深さ2mのピットがある他、浅いピットが不規則な配列を示す。遺物は東側に集中しており、北側および西側からはほとんど検出されていない。第40図1は黒浜式、2～4は浮島式の後半、6は浮線文を施し5と共に諸磈b式にそれぞれ比定される。8～10は無節繩文内に鋸齒状の線刻を施しており出土遺物の大半を占めている。このような鋸齒状をモチーフとする文様は東北地方の大木6式にその源流が迫れ、船橋市西ノ台遺跡出土の土器では蛇をモチーフしたと思われる線刻がみられる。



第38図 第1号住居址実測図(住居1号・炉1号)



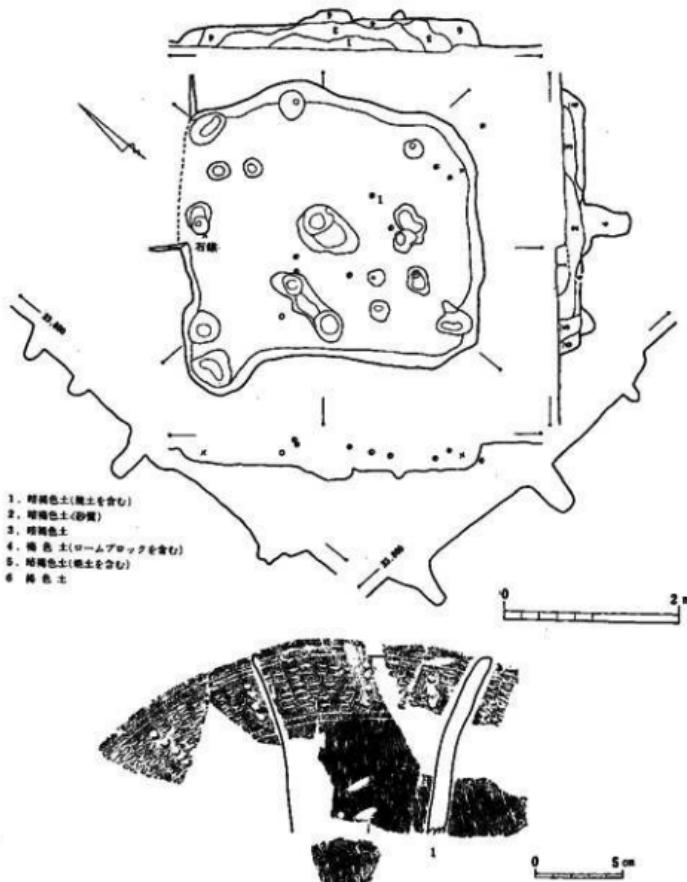
第39図 第1号住居址遺物出土状況(%)



第40図 第1号住居址出土遺物(%)

第2号堅穴状遺構（第41図、図版8）

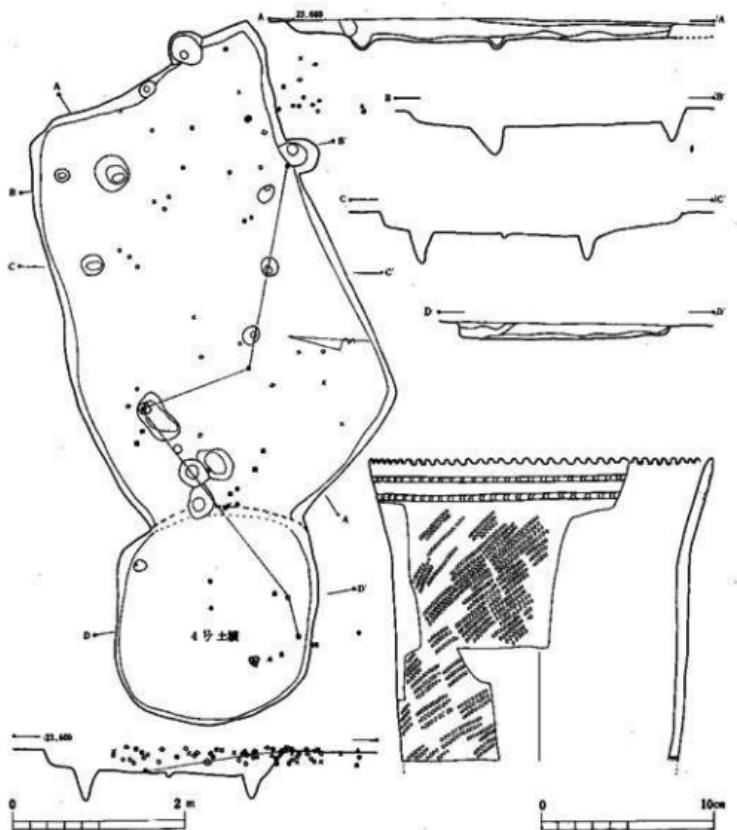
K-26-b・dグリッドから検出され  $3.5m \times 3.1m$  の方形を呈する。炉址を持たず、中央部と西側に径40cm、深さ50cmのピットがみられる他浅いピットが不規則な配置を示す。床面は軟弱で中央部に向かって皿状に窪む。遺物の出土は少なく、遺構内および周辺グリッドからは第41図の土器と第92図5の石器が出土しているにすぎない。1は小型の土器で変形爪形文に区画された脇部上半に横位の、下半に縦位の刺突文が施され浮島I式に比定できる。



第41図 第2号住居址実測図〔住居%・土器%〕

### 第3号堅穴状遺構（第42図）

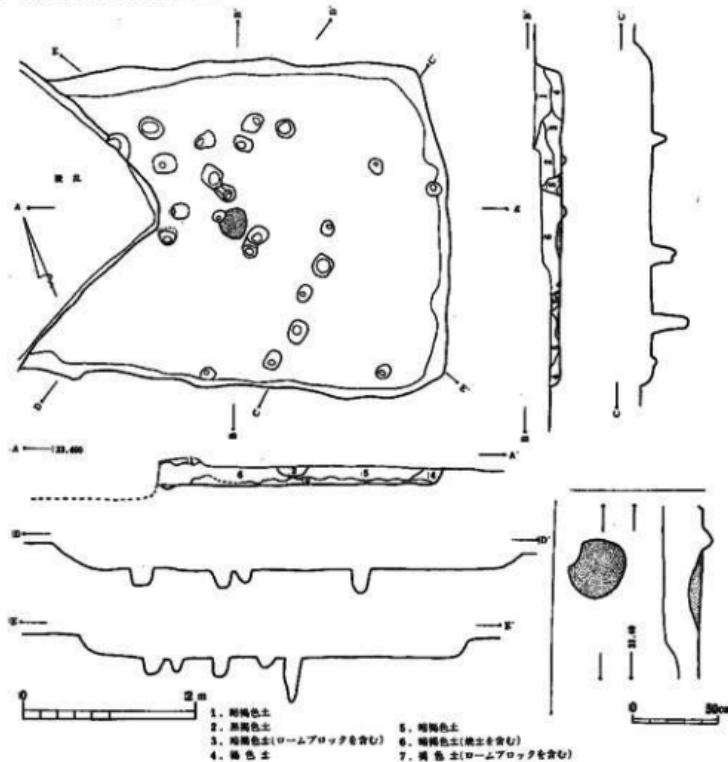
I-25-dグリッドから検出されたもので、 $5.0\text{m} \times 3.1\text{m}$  の不整方形を呈する。西側は第4号土壇と重複している。床面は軟弱で炉址はみられない。壁高は約20cmで明確には把えられないが覆土中に焼土粒を多く混入する。ピットは径15cm・深さ15cmのものが約10本検出されたが北側は一部第10号住居址と重複しているものがある。遺物は第42図に示した詰磧a式土器が中央部床面より出土しており、ほぼこの時期の遺構と考えられる。土器の他には第92図35の石器および36の石錐が出土している。



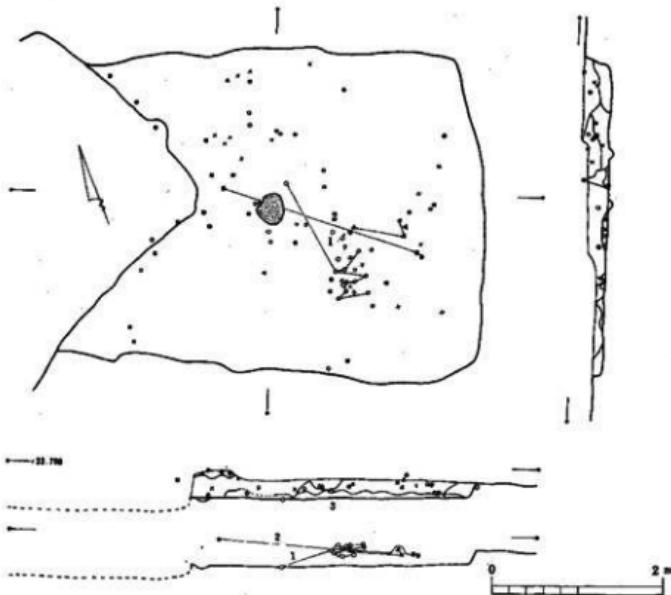
第42図 第3号住居址実測図(住居%・土器%)

第4号住居址（第43図～第45図、図版10）

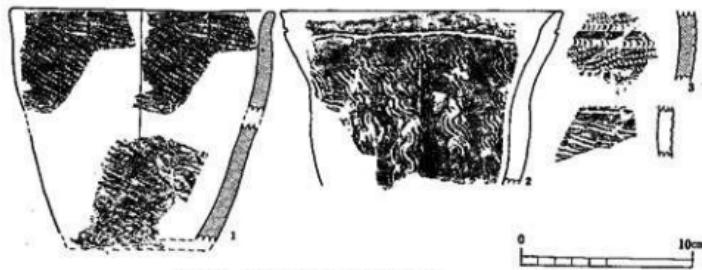
H-24-a グリッドから検出されたもので、 $5.0\text{m} \times 3.8\text{m}$  の方形を呈するが、西側は攪乱を受けている。壁高は約30cmで床面は軟弱である。ピットは約20本検出されたが、深いものは $p_1$ ～ $p_7$ の7本で配置は不規則である。炉址は中央部に $88\text{cm} \times 70\text{cm}$  の規模で設けられており、掘り込まれずに焼土の堆積のみがみられる簡単な地床炉である。出土遺物は黒浜式・浮島式土器が大半を占めるものの覆土中位より千綱式土器が出土するなど層の混乱がみられる。第45図1・3は縦維土器で、R Lの縦文を全面に施した後に3にはC字形の爪形文を3段施文しており、黒浜式土器でも新しい段階のものであろう。2は口縁部に沈線を巡らした後に梯齒状工具により縦位の波状文を施している。前期の土器と思われるが縦位の波状文を施す類例はなく今後の検討を要する資料である。



第43図 第4号住居址実測図(住居H-24-a, 炉H-24)



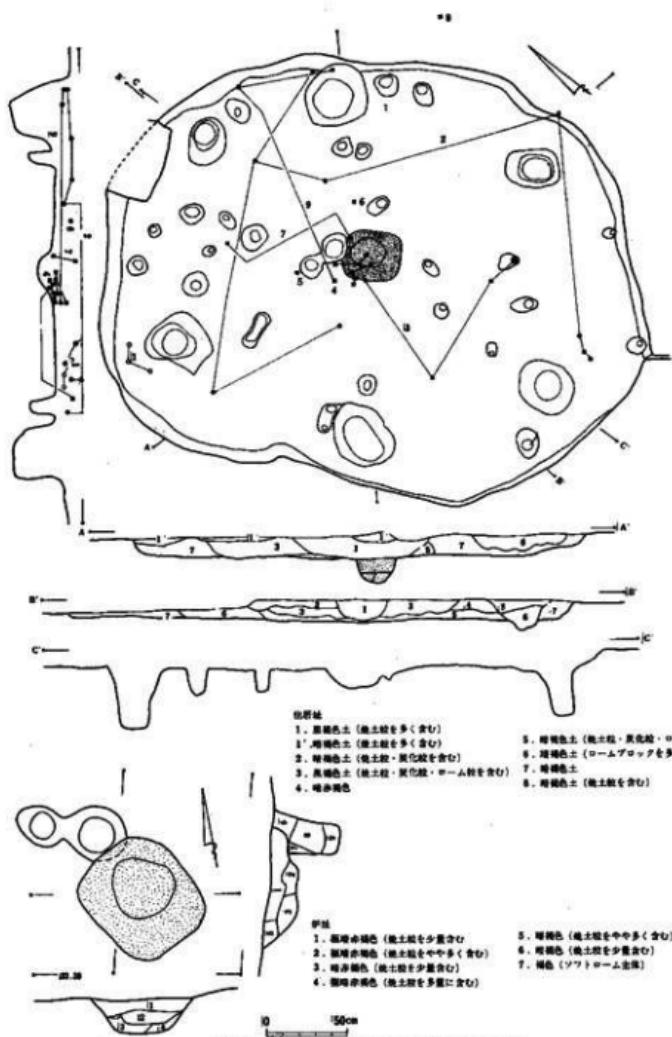
第44図 第4号住居址遺物出土状況(%)



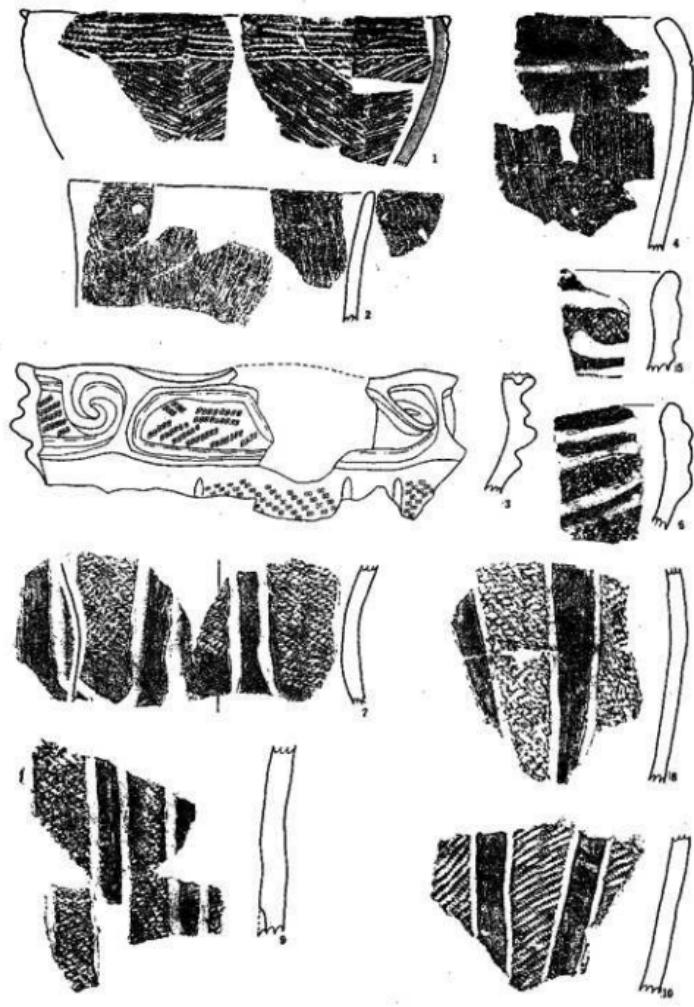
第45図 第4号住居址出土遺物(%)

#### 第5号住居址（第46図・第47図、図版11）

I-24-a・c グリッドから検出されたもので、 $6.6\text{m} \times 5.2\text{m}$  の梢円形を呈する。径  $80\text{cm}$ ・深さ  $70\text{cm}$  の深い主柱穴を壁に沿って 6 本有し、中央の柱穴には径  $30\text{cm}$ ・深さ  $30\text{cm}$  の補助柱穴が設けられている。壁高は約  $20\text{cm}$ 、床面は軟らかく中央部がやや窪む。中央部に  $74\text{cm} \times 63\text{cm}$ ・



第46図 第5号住居址実測図（住居第5号）



第47図 第5号住居址出土遺物(36)

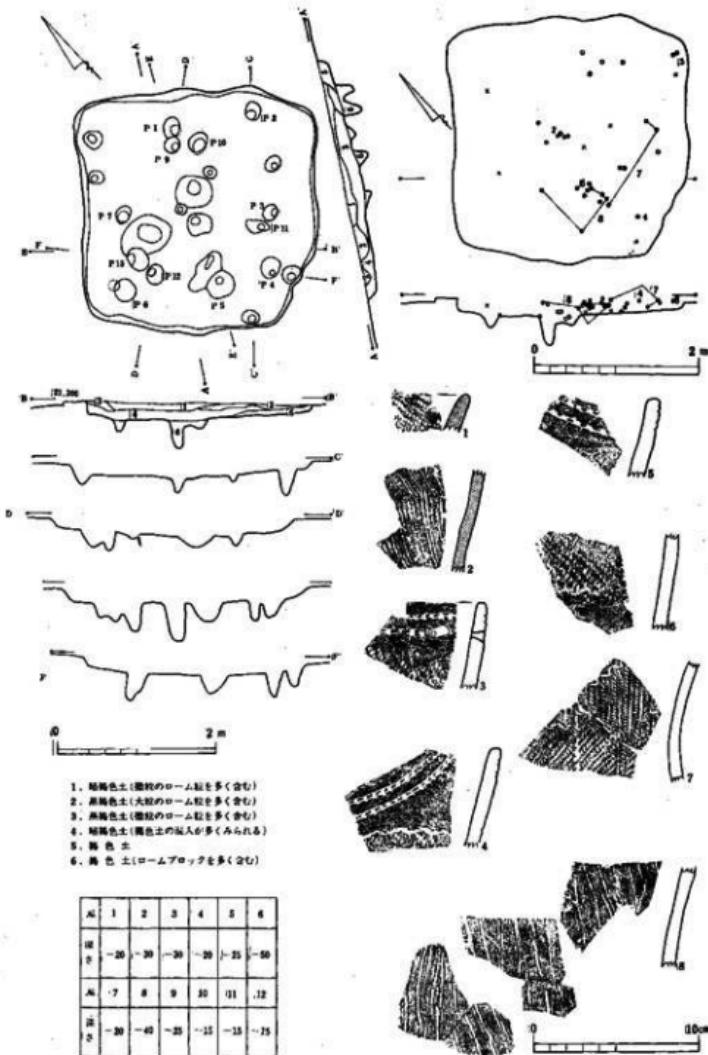
22cmの地床炉を有する。第47図1は附加縄文に類する複雑な原体を用いて羽状縄文を形成する織維土器で、口縁部には竹管による押し引き文が見られ小さな突起を有する。2は貝殻押し引き文を全面に施している。3は隆による渦巻文を特徴としており、複節の縄文R L Rを口縁部と懸垂文の間に施している。4は口縁部無文帯を有する条線文の土器であり、7はU字状の磨消縄文を構成している土器である。8~10は磨消縄文を施した胸部破片で、9には複節の縄文R L Rを施している。1は黒浜式の新しい段階に、2は浮島式土器に比定され覆土上位および中位からの出土である。3~11は加曾利E II式~E III式土器で、3と7の一部と6の土器が炉址内および周辺の床面から出土しており、加曾利E II式期の住居址と伝えられる。土器の他には第92図18・29の石鏃および第94図55の凹石、第96図80の玉製品が出土している。I-24グリッドからI-26グリッド周辺は前期から晩期までの遺物が集中して検出されており、遺構内出土遺物と周辺グリッド出土遺物の接合作業によっては、今後若干の資料の増加が予想される。

#### 第6号竪穴状遺構（第48図）

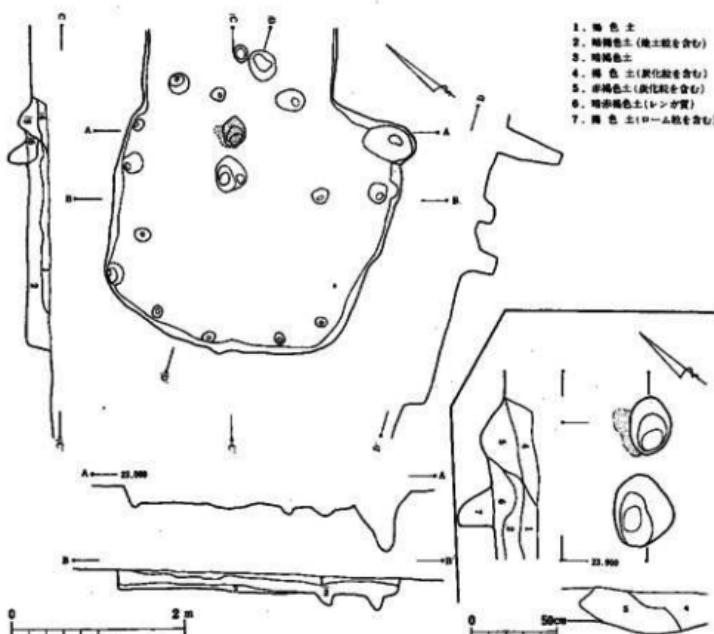
G-22-cグリッドから検出されたもので、3.0m×2.85mの方形を呈する。壁高は約20cmで炉址を持たず、床面は軟弱である。遺構中央部および西側に径50cm・深さ20cmのピットがある他、小ピットが数多く見られる。小ピットは深さ20~30cmのものが方形に並ぶ(p<sub>1</sub>~p<sub>7</sub>)他、中心に深さ40cmのp<sub>8</sub>がみられ一応の規則性が窺える。第48図1・2は織維土器で、1はR Lの縄文を、2は胸部下半に無節縄文Rを施している黒浜式土器である。4~6は波状口縁を呈する土器で同一個体と思われる。2段のC字形半截竹苞文と結節縄文に特徴付けられ、諸磯a式に比定される。7は結節縄文に特徴付けられる前期末葉の所謂粟島台式と呼ばれる土器であり、8は浮島式土器の胸部破片である。諸磯式・浮島式土器はいずれも覆土中位からの出土で、床面およびピット中からは黒浜式土器が出土しており、本遺構は黒浜式の新しい段階のものと考えられる。なお土器の他には第92図12の石鏃が1点出土している。

#### 第7号住居址（第49図）

P-23-dグリッドから検出されたもので、3.2m×3.2mの方形を呈する。床面は軟らかく壁に沿って小ピットがみられる他、東側にやや大きいピットがみられる。壁高は30cmで、東側は確認調査時のトレーナーにより一部壊されている。炉址は36cm×18cm~20cmの地床炉が東側より検出されたが、これに伴う焼土塊は覆土下面より検出されている。遺物は前期後半の貝殻文の土器が少量出土しているが、いずれも細片で図示できない。



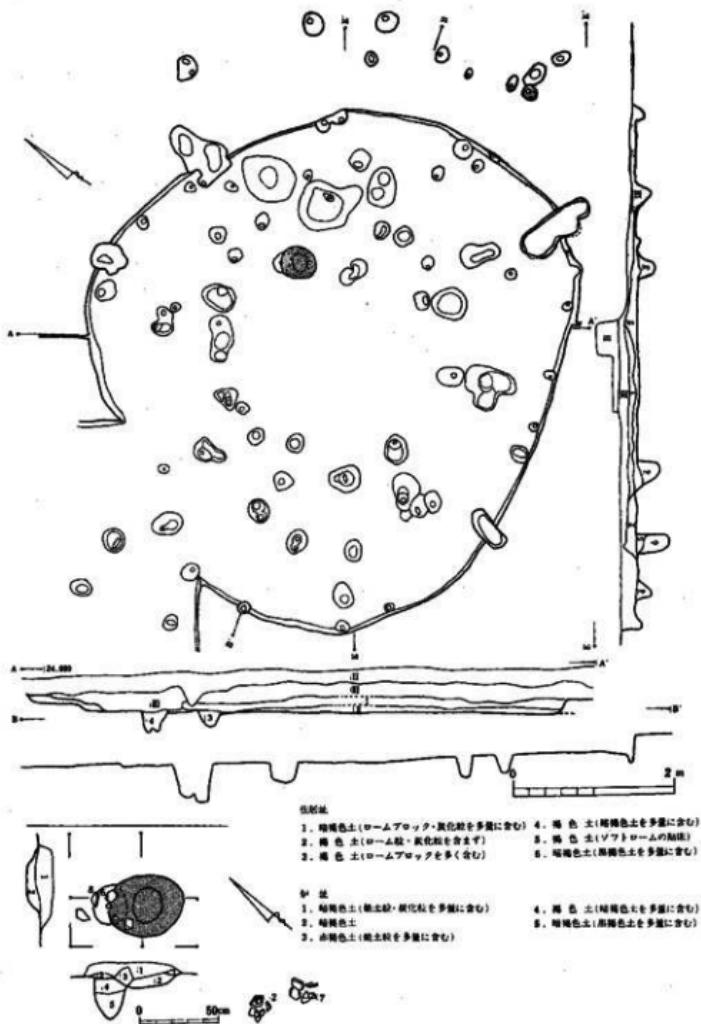
第48図 第6号住居址実測図・出土遺物(住居16・遺物5)



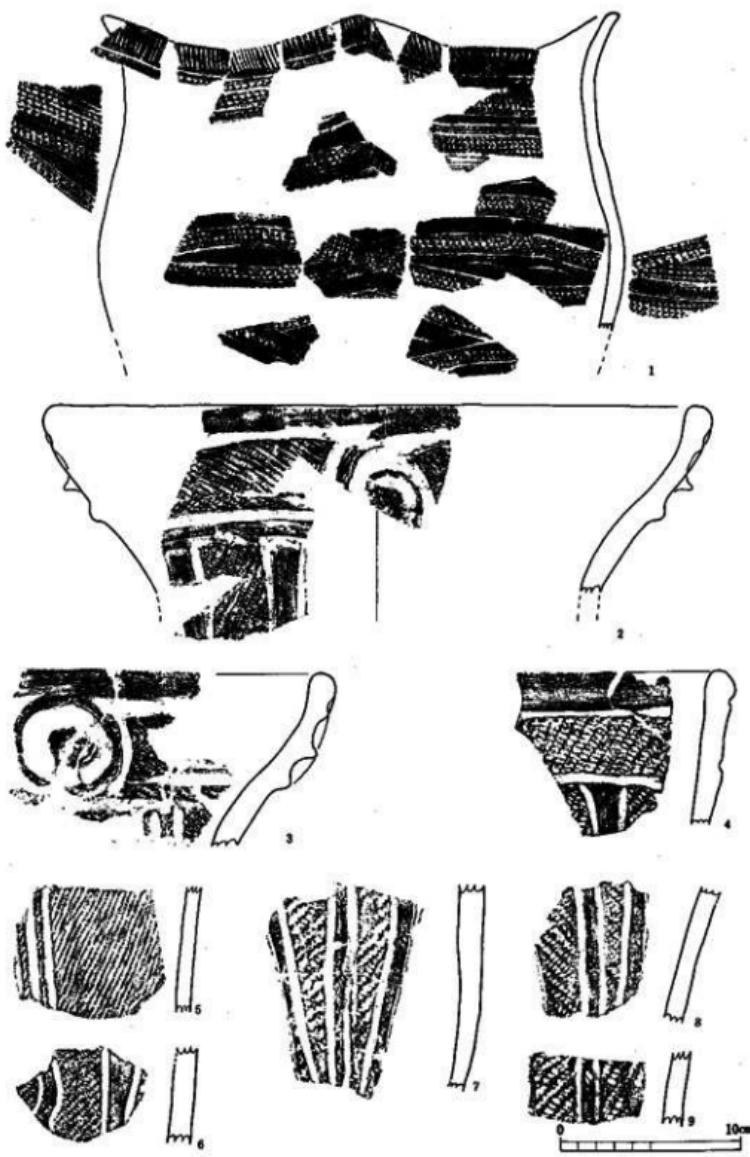
第49図 第7号住居址実測図(住居場跡・炉場跡)

第8号住居址(第50図・第51図、図版12)

N-26-c・N-27-aグリットから検出されたもので、 $7.0\text{m} \times 5.0\text{m}$ の歪んだ梢円形を呈する。壁高は20~30cm、床面はソフトローム上面で軟らかい。住居址東側の3基の大形ビットは別造構で住居址よりも新しい。柱穴は同心円状に2重に巡り、壁際には小ビットがみられる。覆土内から興津式土器が多く出土しており、その時期の遺構に伴う小ビットが残存している可能性もある。炉址は北東寄りに  $58\text{cm} \times 36\text{cm} - 15\text{cm}$  の地床炉を有しているが、炉址周辺の床面も軟弱である。第51図は住居址全面より出土した興津式土器で、接合関係は少なく茨城県興津貝塚出土例に基づいて推定復元した。口縁は波状を呈し条線帶を施し、胸部は貝殻圧痕と沈線により菱形文と梢円文を構成する。2・3は口縁部文様帶が梢円文を形成する加曾利EⅡ式土器で、6~9は懸垂状の磨消繩文を有し6は磨消部分が一部蛇行する。6と8が炉址内か



第50図 第8号住居址実測図(住居)(a)

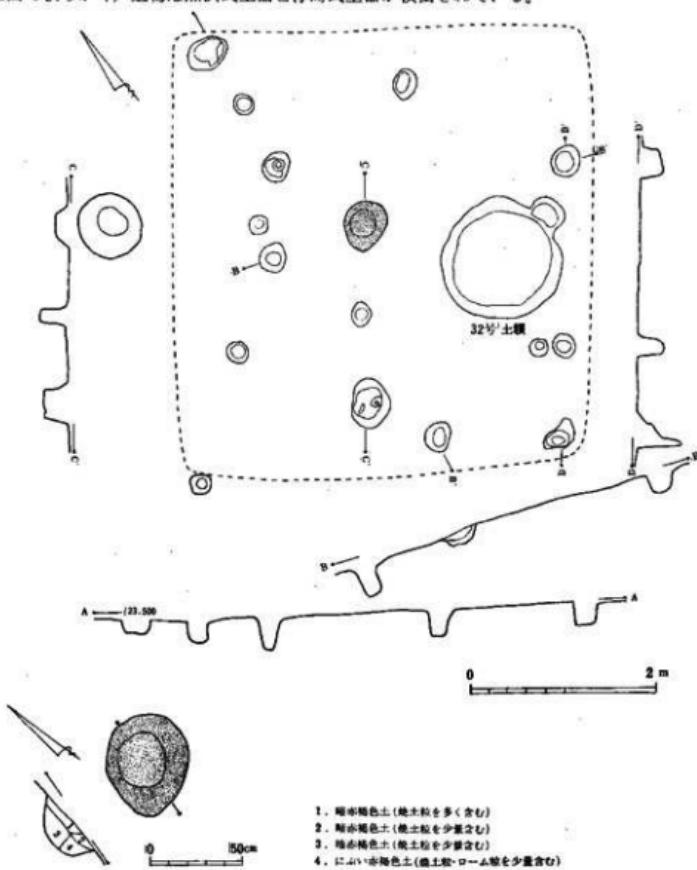


第51図 第8号住居址出土遺物(分)

ら出土した他は覆土上位からの出土である。本遺構は加曾利EⅡ式でも新しい段階の住居址として位置付けられる。

#### 第9号住居址（第52図）

J-26-aグリッドより炉址が検出され、精査した結果径15cm・深さ15cmの小ピット15本が発見された。4.9m×4.6mの方形プランが推定され、南側を第32号土塁が切っている。炉址はほぼ中央に57cm×45cm-16cmの規模で掘り込まれ、底面は良く焼けている。床面はソフトローム上面で軟らかく、遺物は黒浜式土器と浮島式土器が検出されている。



第52図 第9号住居址実測図(住居址と炉)

### 第10号住居址（第53図～第56図、図版13・14）

第5号住居址の西側、第3号竪穴状遺構の北側より検出されたもので、円形の配列を示す柱穴と遺物出土状況から住居址の残存と判断した。柱穴の配置は径7.4mで外周が円形に巡る。炉址は攪乱により破壊されたらしく検出されなかった。遺構上部および周辺には浮島式土器から千網式土器までを内包する厚い包含層が堆積しており、遺構に伴う遺物は明確に断定できないが、p<sub>1</sub>から第55図3の称名寺式土器が出土している。出土遺物においては遺構に直接に関係すると思われる後期前半の土器のみをとりあげた。第55図1・2は「鉤状文」と呼称される充填縄文を施した称名寺I式土器である。7～11は沈線文と列点文に特徴付けられる称名寺II式土器である。15は口縁下と胴部中央の横位の隆起線と3本の垂下する隆起線文に区画された中に沈線と列点で文様を構成するもので称名寺III式土器として把えられるが類例は少ない。14は4単位の表裏装飾文を持つ把手と、その中間を飾る円形貼付文および両者を中離する太い沈線によって口縁部文様帶を構成している。16は口縁下と胴部中央と両者を結ぶ縦の隆起線文に区画された中に櫛状工具により文様を充填しており、隆起線上およびその両側には刺突が加えられ口唇上にも円形刺突文を施している。12も縄文を施した隆起線文を口縁下と縦位に施している。いずれも堀之内I式の新しい段階の土器である。17～23は堀之内I式土器である。24～30は把手で31は蓋形土器である。刺突を加えた隆起線文を中心線としており一部に沈線文を施している。これらのうち確実に遺構に伴う土器は前記した3の称名寺I式土器のみで、他の大型破片は遺構東側から南側にかけて流れ込みを示す接合関係が見られるが、今後周辺グリッドの遺物との関係も含めて検討を要する。なおp<sub>2</sub>には薄い焼土の堆積がみられた。

### (2) ピット群

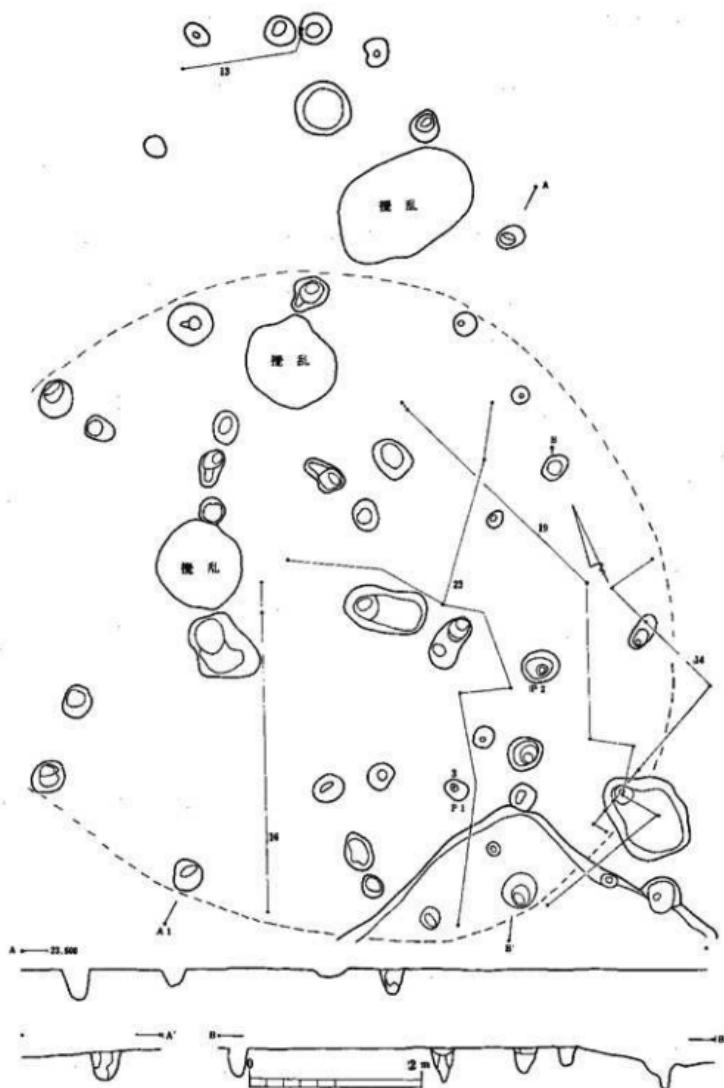
#### 第1号ピット群（第57図）

第1号住居址北側より発見されたもので、径20～50cm・深さ20～50cmのピットが12本認められたが、配置に規則性はみられず遺物の出土も多くない。第57図の1は纖維を含む黒浜式土器で、3・4は浮島式土器である。2は結節縄文を施す前期末葉の土器で、5は充填縄文と刺突文が施される称名寺式土器である。

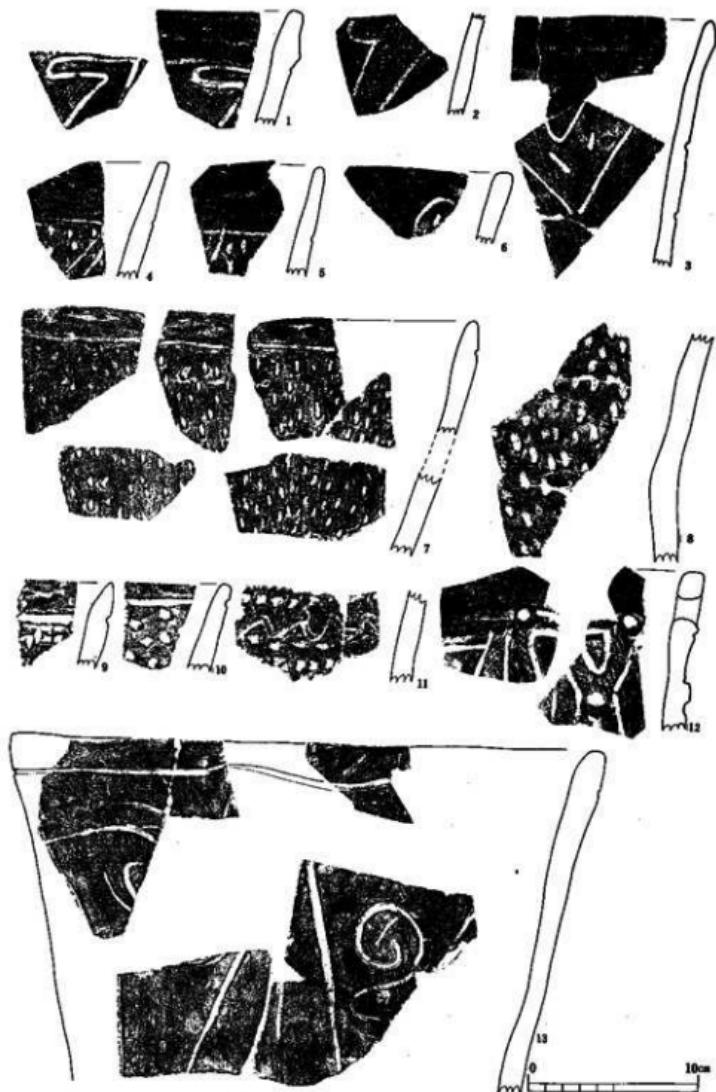
### (3) 炉址状遺構

#### 第1号炉址状遺構（第58図）

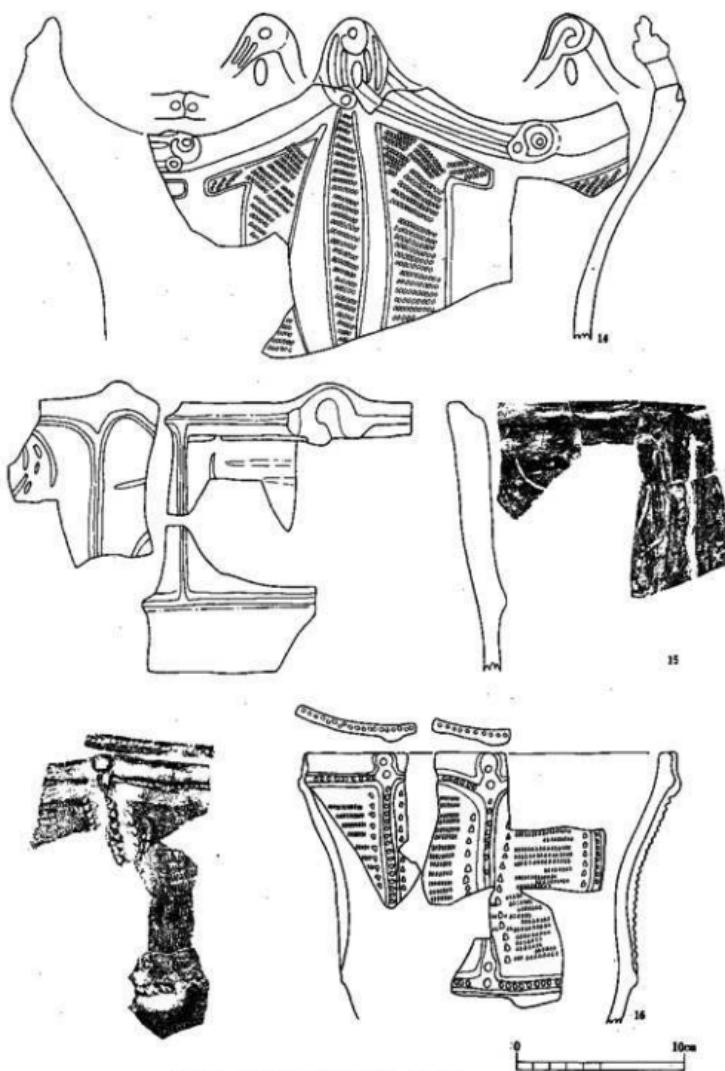
H-27-dグリッドから検出されたもので明確な焼土層を形成している。82cm×62cm—16cmの規模で掘り込まれ、炉址内からは千網式土器が出土している他、周辺からは第92図9の石器が出土している。本遺構は千網式土器の集中地点から離れており、周辺からも同時期の遺物の



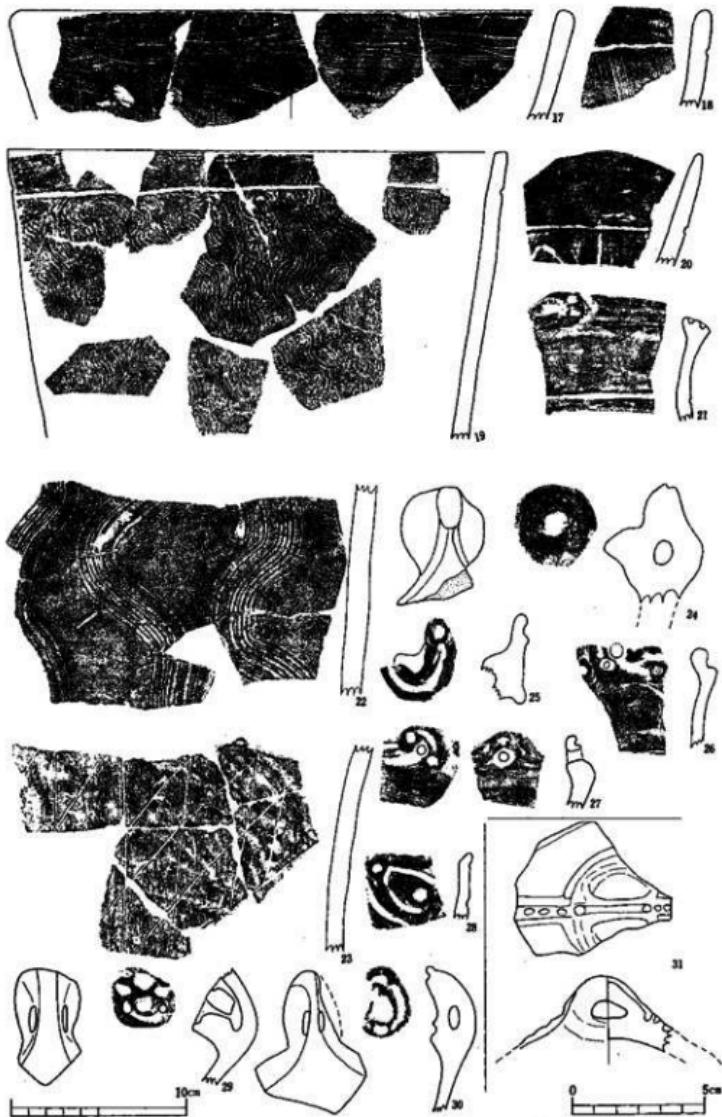
第53図 第10号住居址実測図(%)



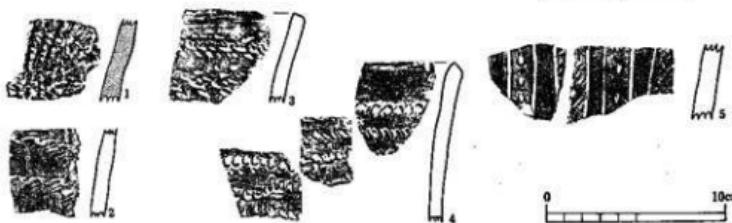
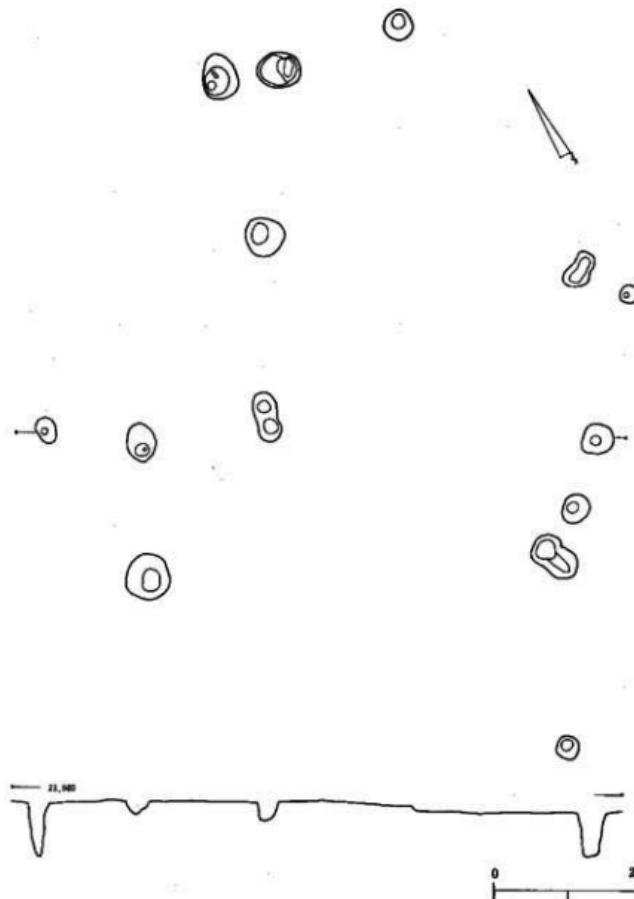
第54図 第10号住居址出土遺物(1)(3)



第55图 第10号住居址出土遗物 (2) (3)



第56図 第10号住居址出土遺物 (3) (3%) (31:3%)

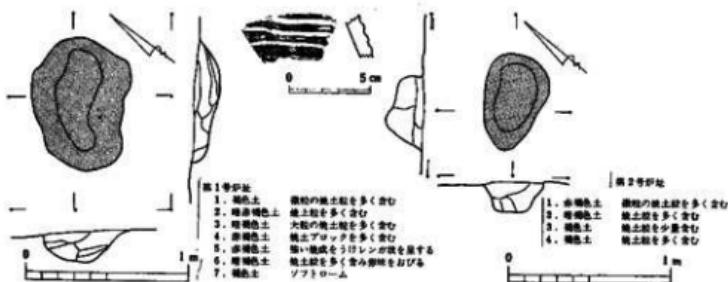


第57図 第1号ピット群実測図(遺構%, 遺物%)

出土が少ない点や明確な床面および柱穴が発見されない点から単独遺構と考えられる。

#### 第2号炉址状遺構（第58図）

F-26-Cグリッドから検出されたもので、薄い焼土の堆積（覆土1）が61cm×40cm—10cmの規模で認められたが、明確な掘り込みはみられない。周辺からは黒浜式土器と加曾利E式土器が出土している。



第58図 炉址状遺構実測図

#### (4) 土 壤 (第59図～第74図)

42基検出されており、平面形態よりA～Cの3つに分類できる。

A類一所謂「陥穴」と呼ばれる土壙で更に3つに分類される。

1類一底面に付属施設をもたず、橢円形を呈する。

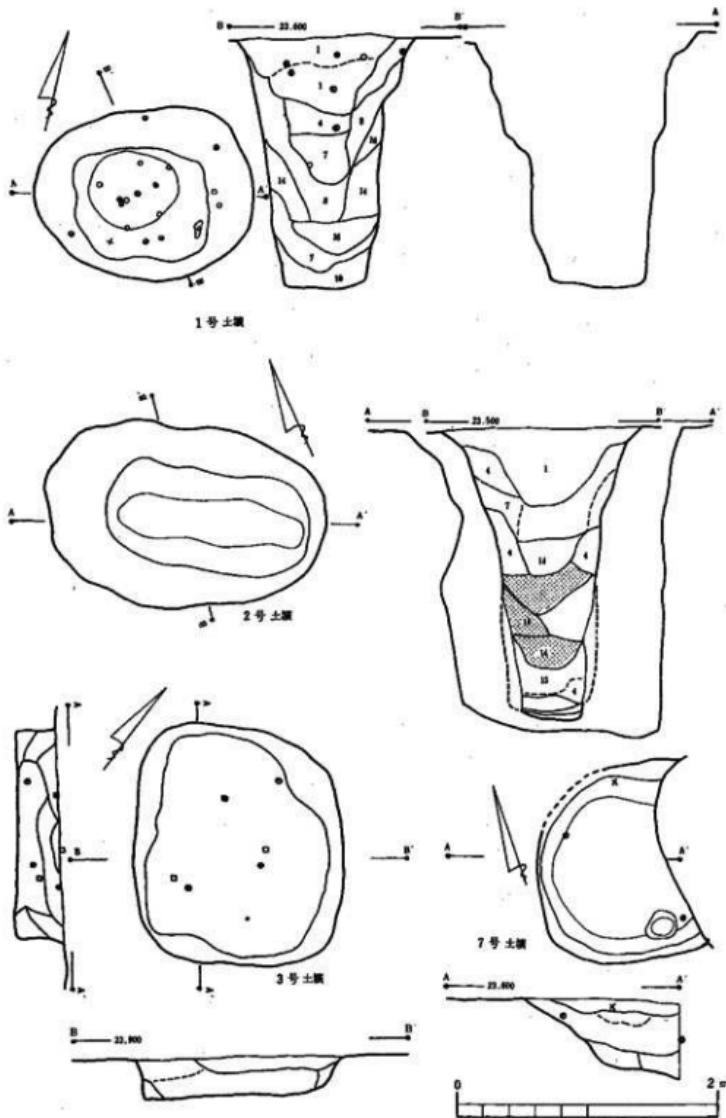
2類一底面に方形のピットを有する。

3類一長橢円形を呈し、長軸に対して短軸が極めて短い。

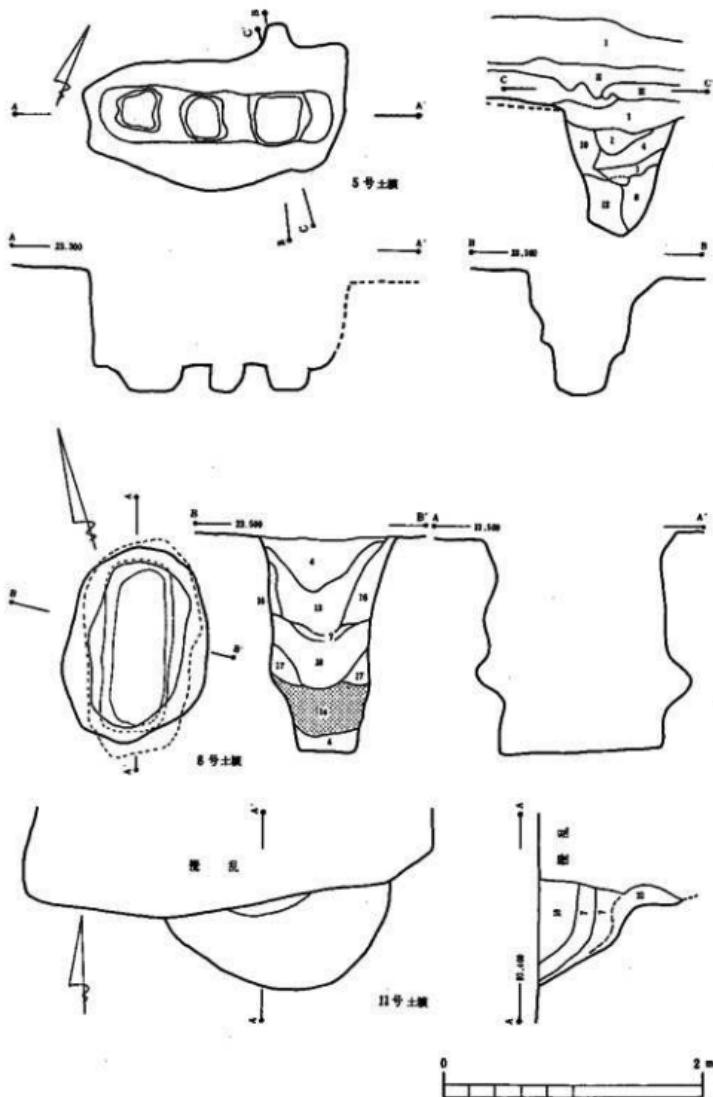
B類一円形を呈し、底面は平坦面を形成する。

C類一その他の縦文土壙

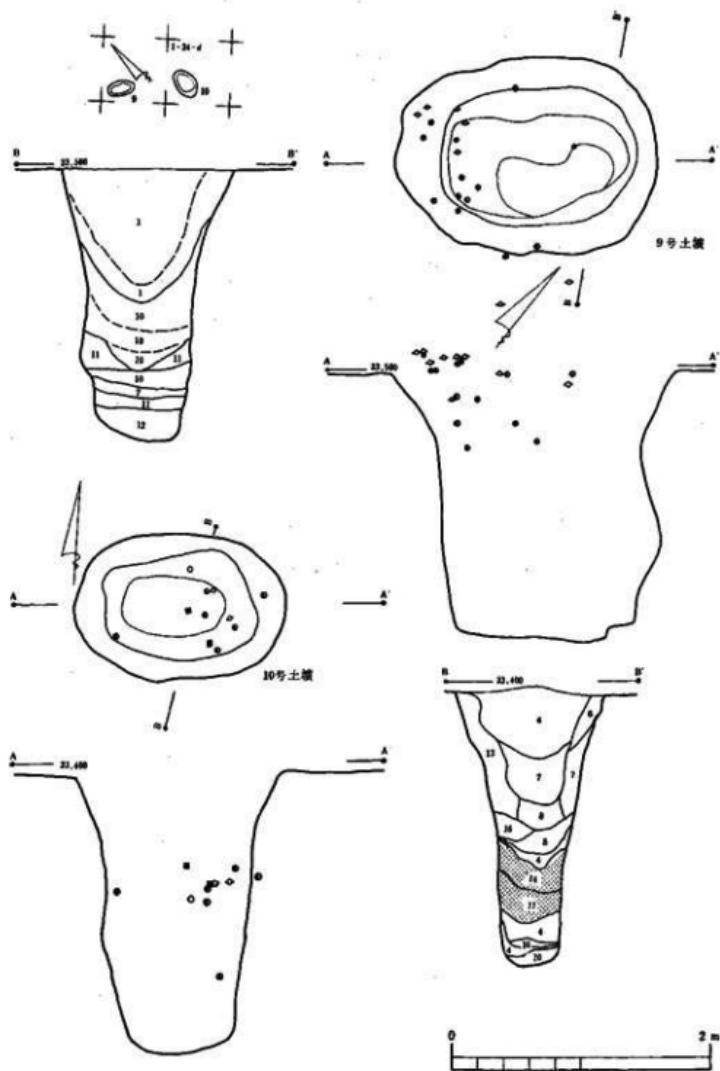
A類の土層堆積はほぼ共通しており、覆土中位にローム層の人为的貼り床が認められるものもある。土壙内からの出土遺物は第73図・第74図に示してある。A類においては土壙に直接伴う遺物は把えられないが、いずれも前期前半から中期後半の遺物が出土している。B類とした土壙のうち第29号土壙周辺からは加曾利E式土器が集中して出土しており、第74図の復元土器は第29号および第27号・第30号土壙とかなり離れた地点からの接合関係がみられる。なお石器としては第92図25の石鎚が第34号土壙から出土している他、第1号土壙から石皿が1点出土している。第16表の土壙一覧表中の出土遺物については土器の時期別を記載し、実測図中の土層説明は第70図の凡例に統一した。



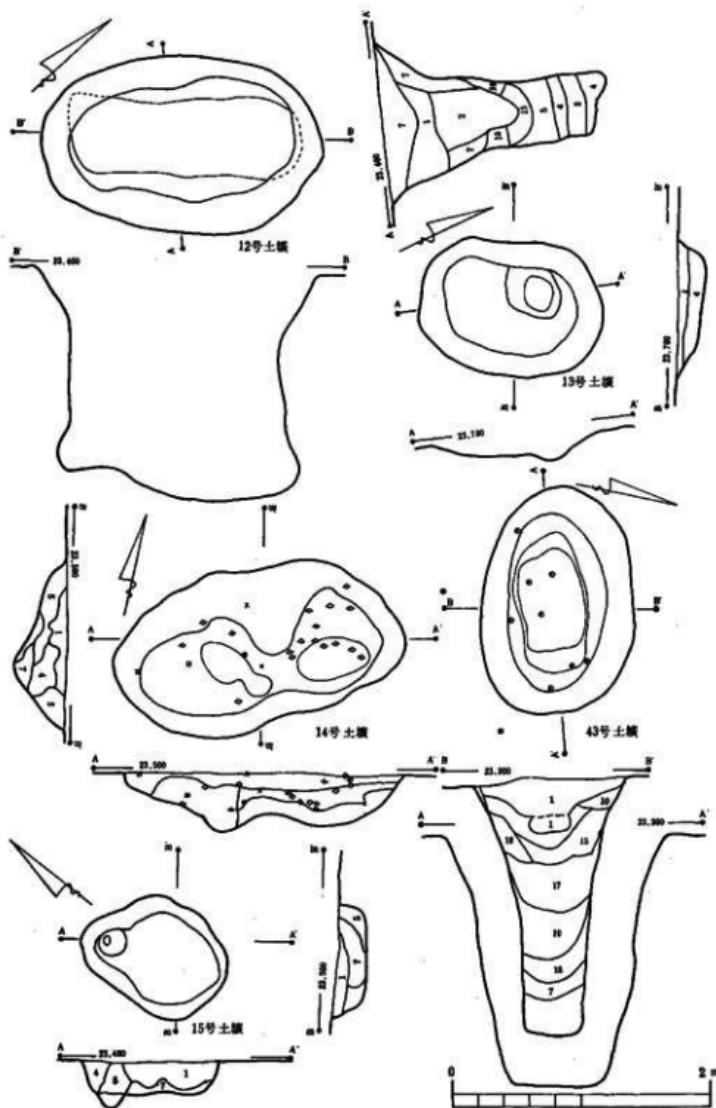
第59图 土壤剖面图(1)(A)



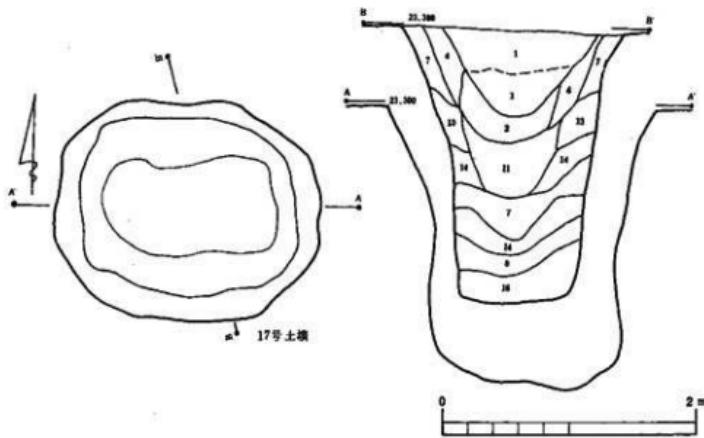
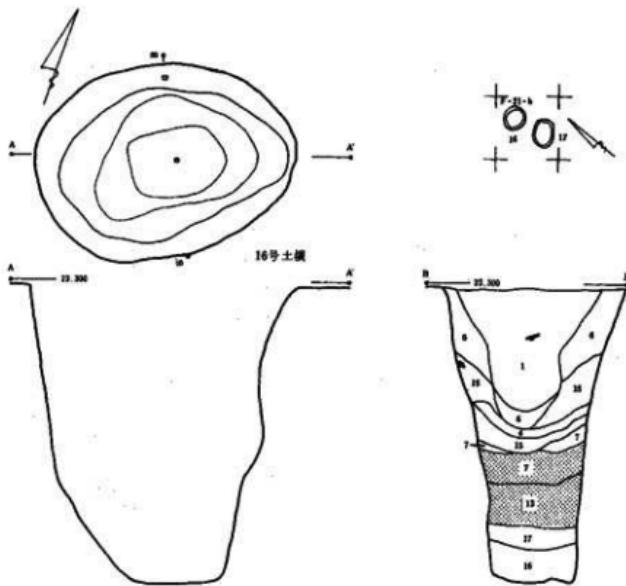
第60図 土壌実測図(2)(%)



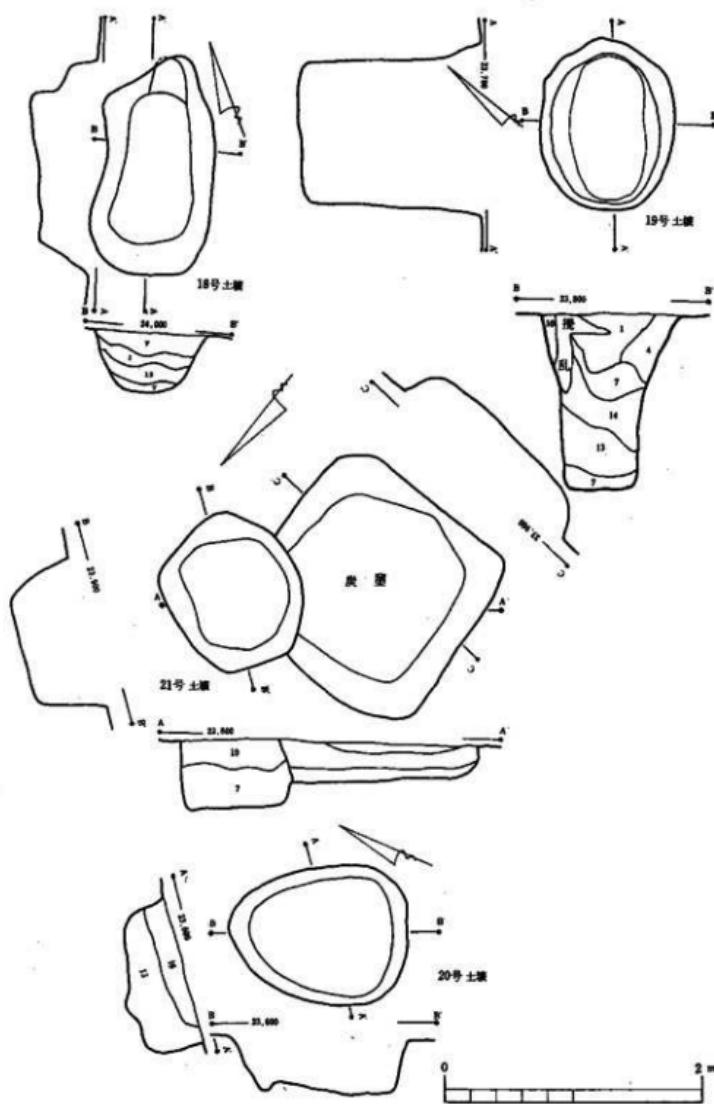
第61図 土壌実測図(3)(A)



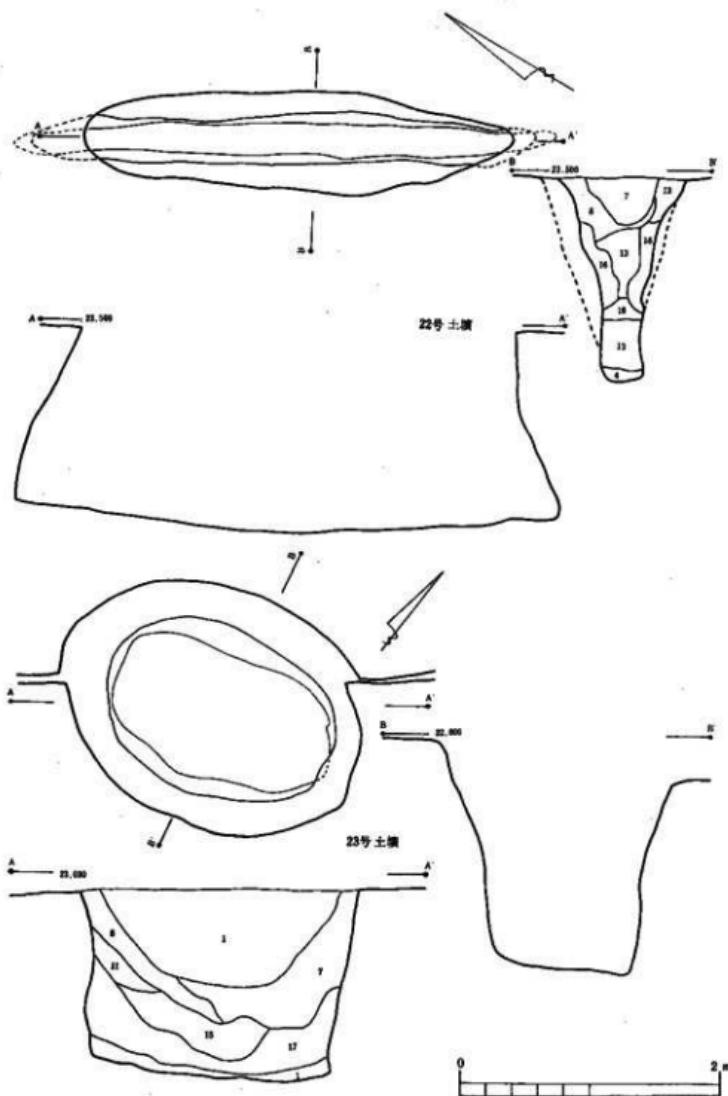
第62図 土壌実測図(4)(1/4)



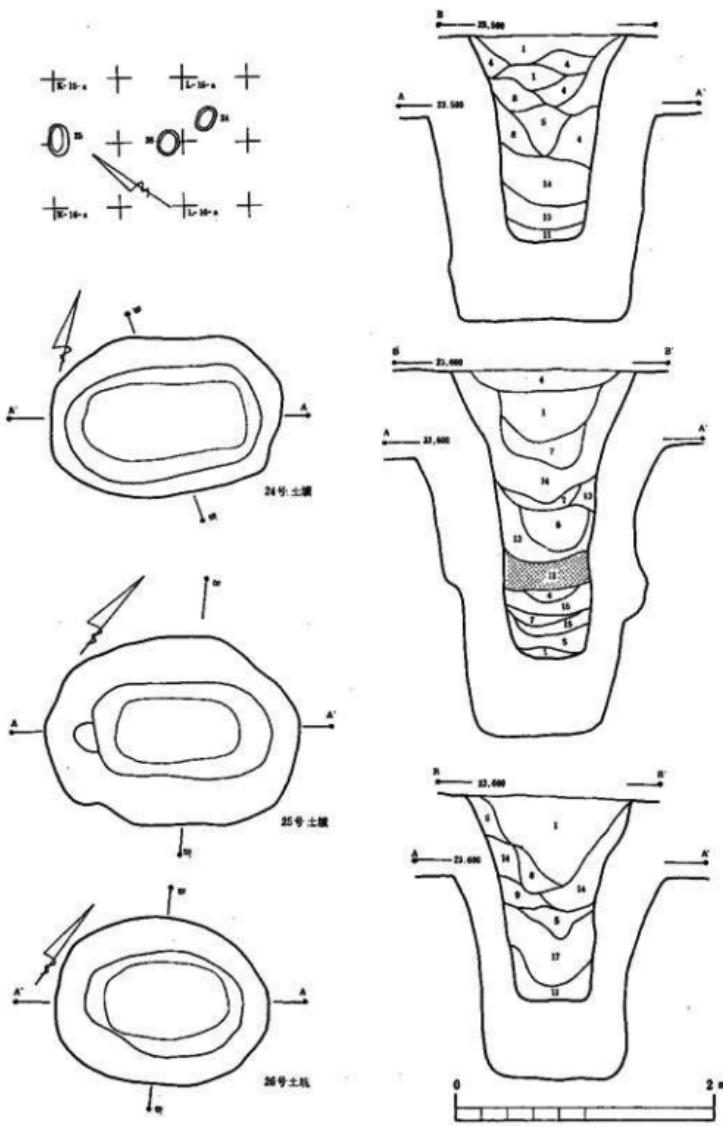
第63圖 土壤実測図(5) (16)



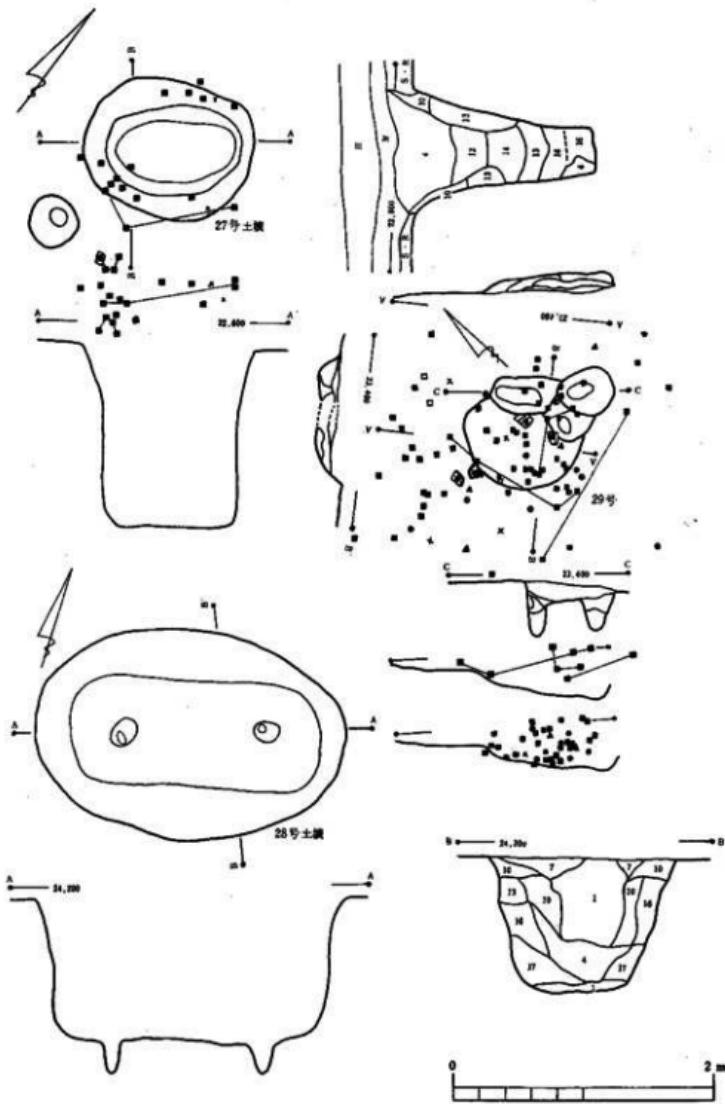
第64図 土壌実測図(6)(七)



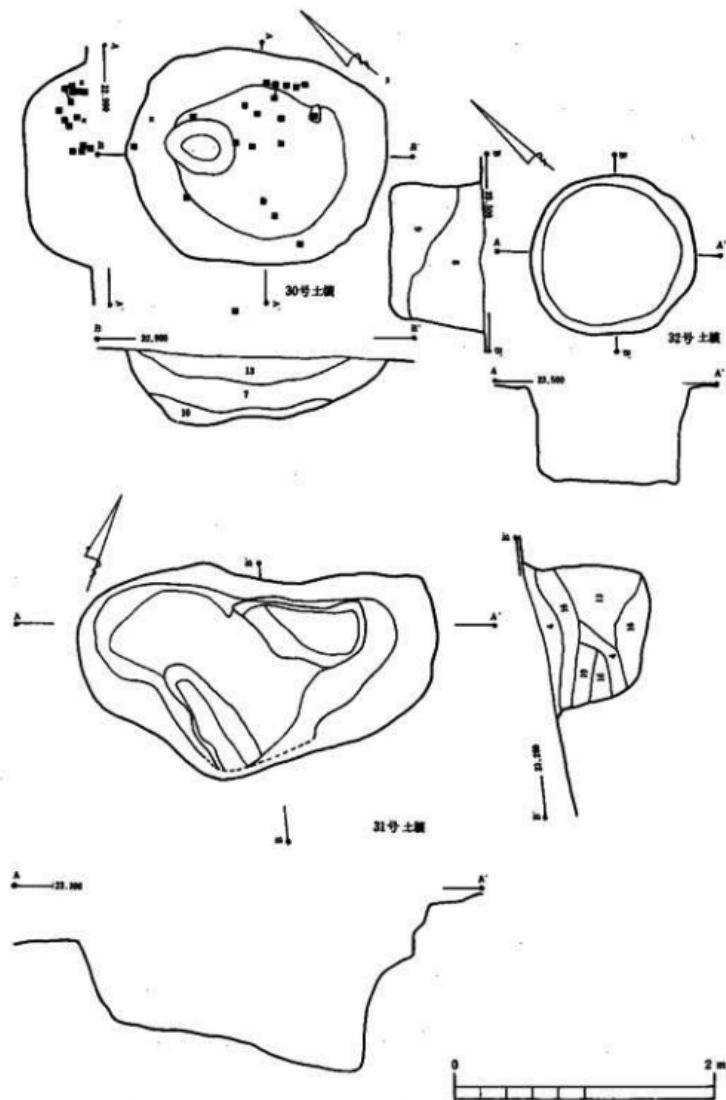
第65図 土壌実測図(?) (14)

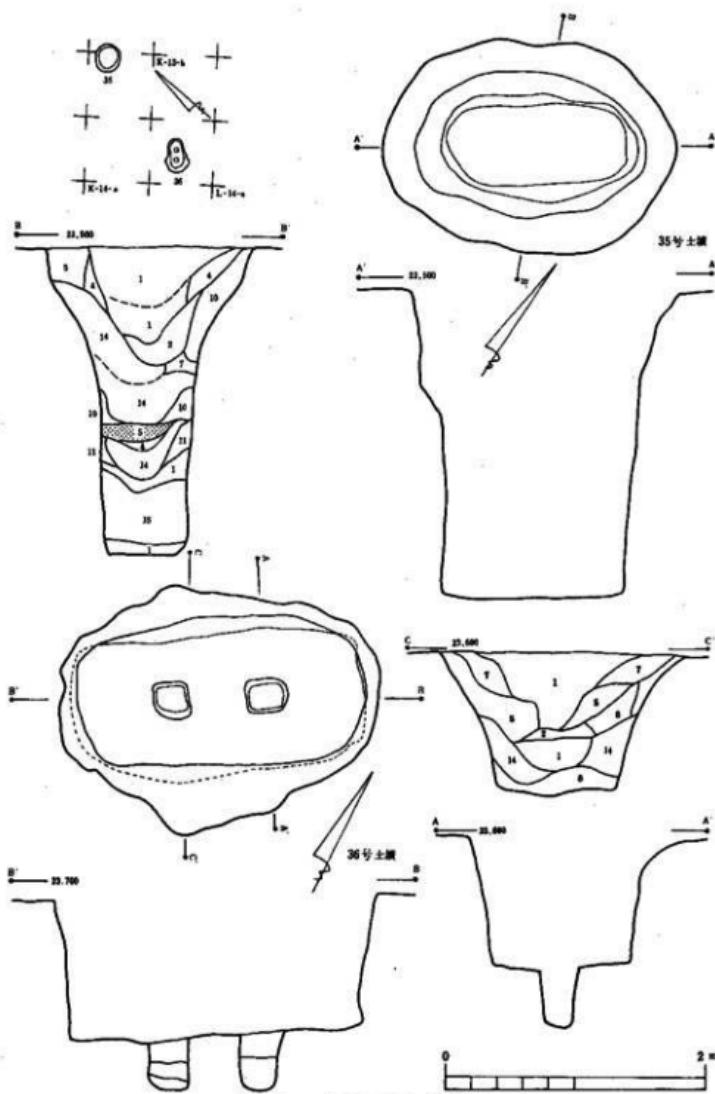


第66圖 土壤実測図(8)(%)

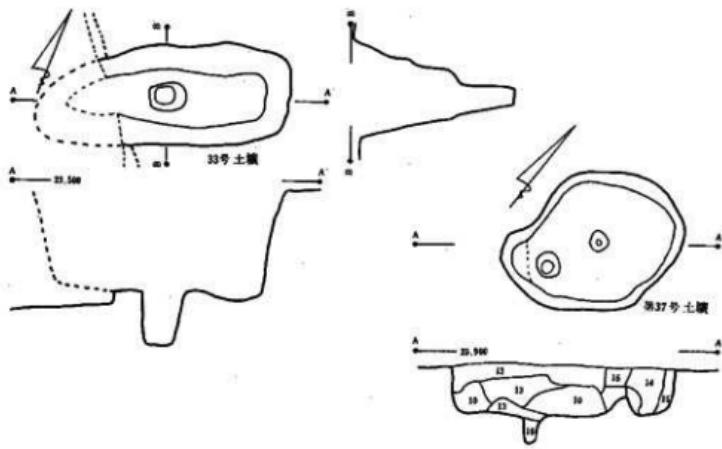


第67図 土壌実測図(9)(%)





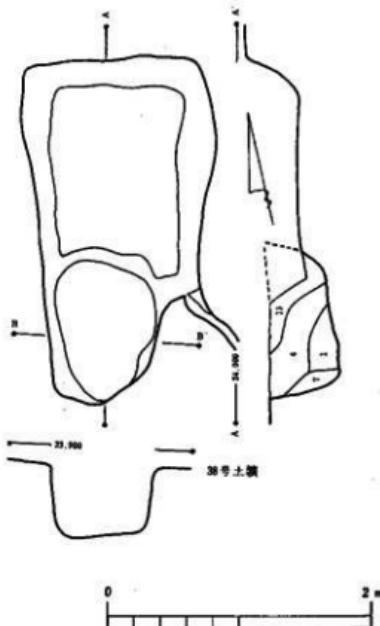
第69図 土壌実測図(11) (16)



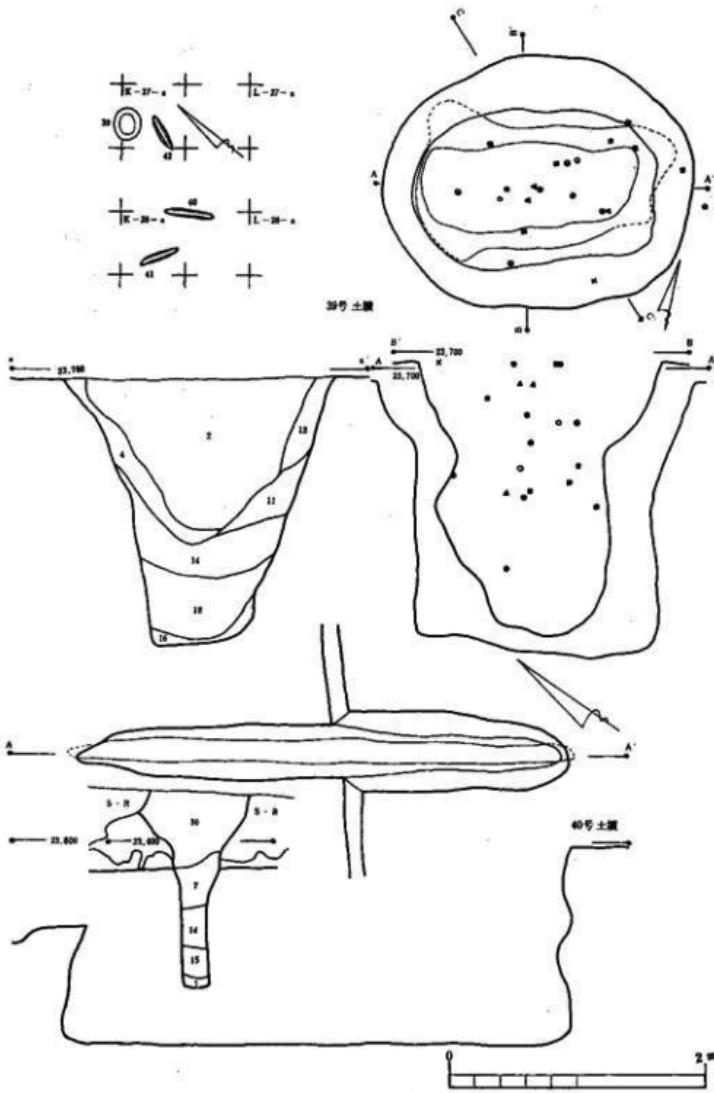
(土壤 施土層剖面)

色調	厚さ (cm±5)	含水率(%)
1 黑褐色	3/2	0.5-1.0cm大
2		1.0-2.0cm大
3		3.0cm以上
4 暗褐色	3/3	0.5-1.0cm大
5		1.0-2.0cm大
6		3.0cm以上
7	3/4	0.5-1.0cm大
8		1.0-2.0cm大
9		3.0cm以上
10 黄色	4/3	0.5-1.0cm大
11		1.0-2.0cm大
12		3.0cm以上
13	4/4	0.5-1.0cm大
14		1.0-2.0cm大
15		3.0cm以上
16	4/5	0.5-1.0cm大
17		1.0-2.0cm大
18		3.0cm以上

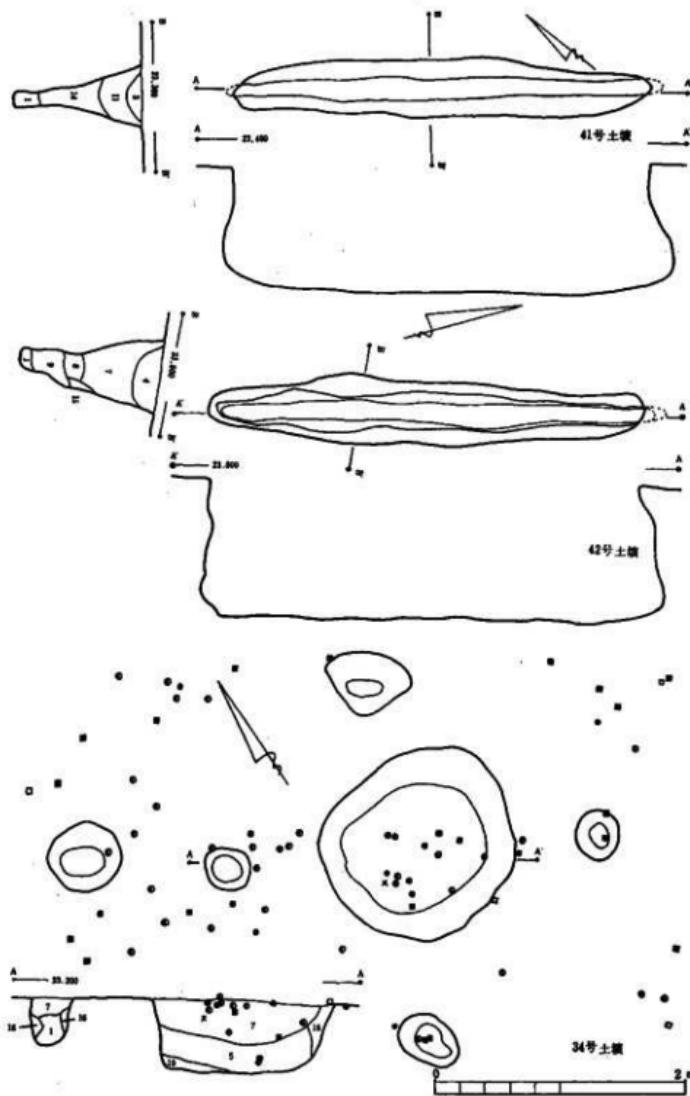
■ 黏土層(0-10cm)



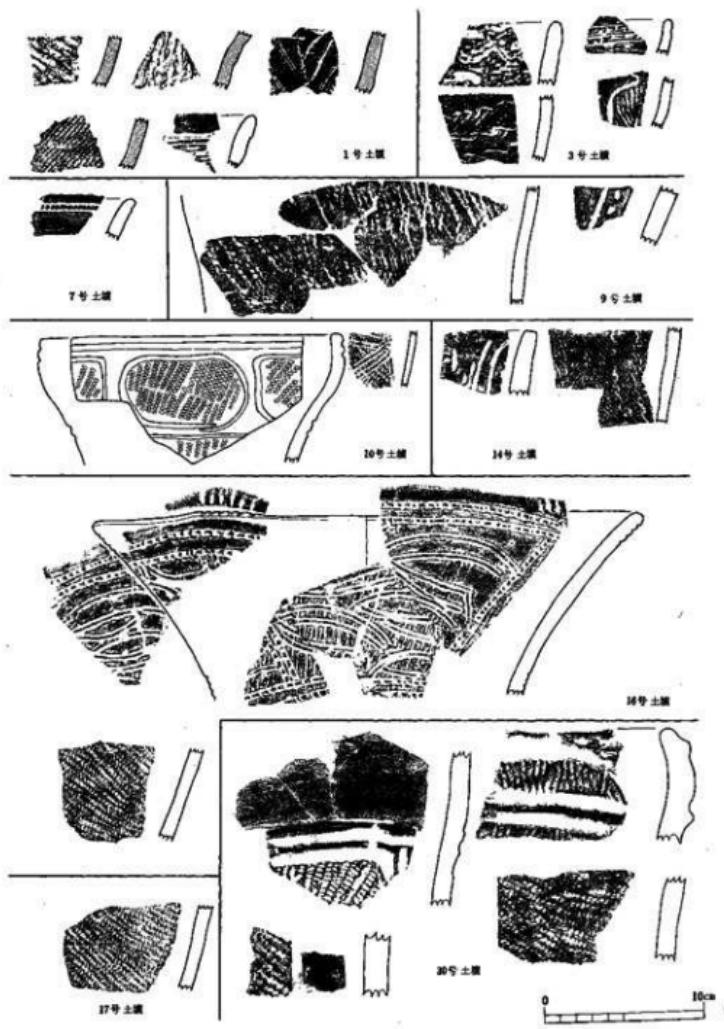
第70図 土壤実測図(12) (%)



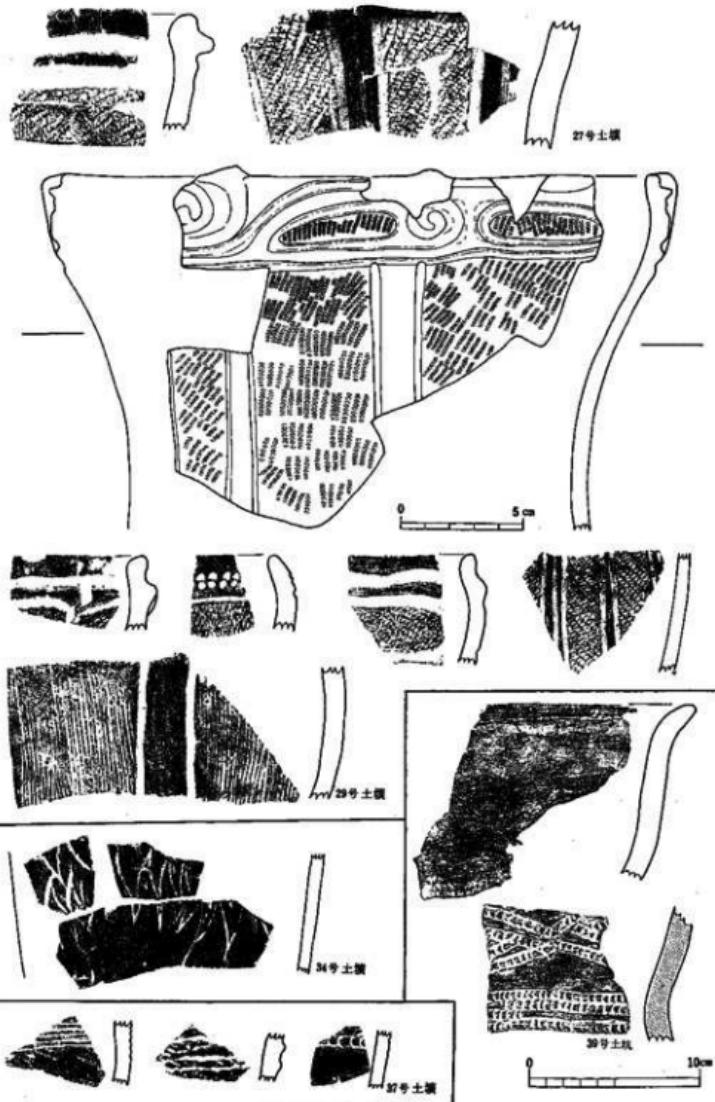
第71圖 土橫穿測圖(13) (%)



第72图 土壤剖面图(14)(%)



第73图 土壤内出土遗物(2)(分)



第74図 土模内出土遺物(1)(3)

## (5) 遺構外出土遺物

### a. 土器

#### 第Ⅰ群土器（第75図1～8） 早期前半の撚糸文土器

1～4は撚糸文Rを施した土器で、5・6は格子目状に施文している。I—25グリッドからやや遡まって出土している他は散漫な分布を示す。稲荷台式として把えられる。

#### 第Ⅱ群土器（第75図9～21） 前期前半の黒浜式土器

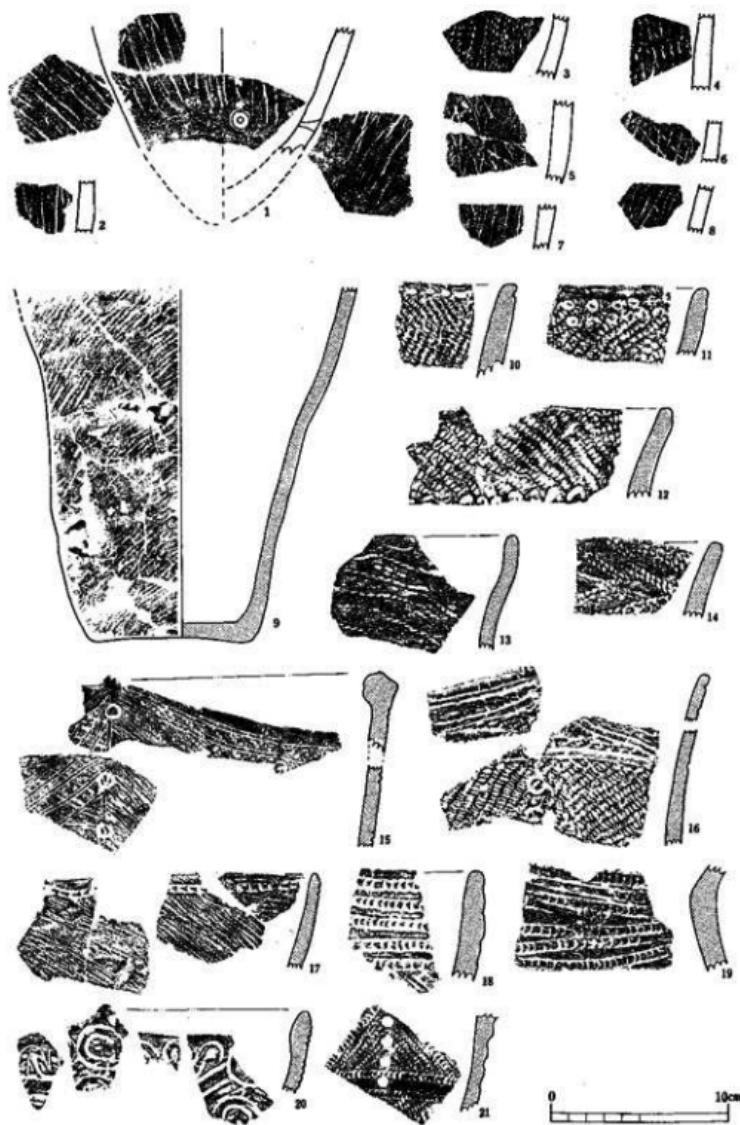
縄文のみの土器（9・13・14）や口縁部および頸部に円形刺突文を有する土器（10・11）から、波状口縁を有し沈線と円形刺突文で文様を構成する土器（15・16）、連続爪形文で文様を構成する土器（18・19・21）等文様要素は多様である。20は口縁部に小突起を有する土器で、半截竹管により円形および曲線の沈線を描いている。第2号炉址状遺構周辺およびI—22～24グリッドからK—22～24グリッドの間に集中する。

#### 第Ⅲ群土器（第76図・第77図 22～43） 前期後半の諸磯式・浮島式土器

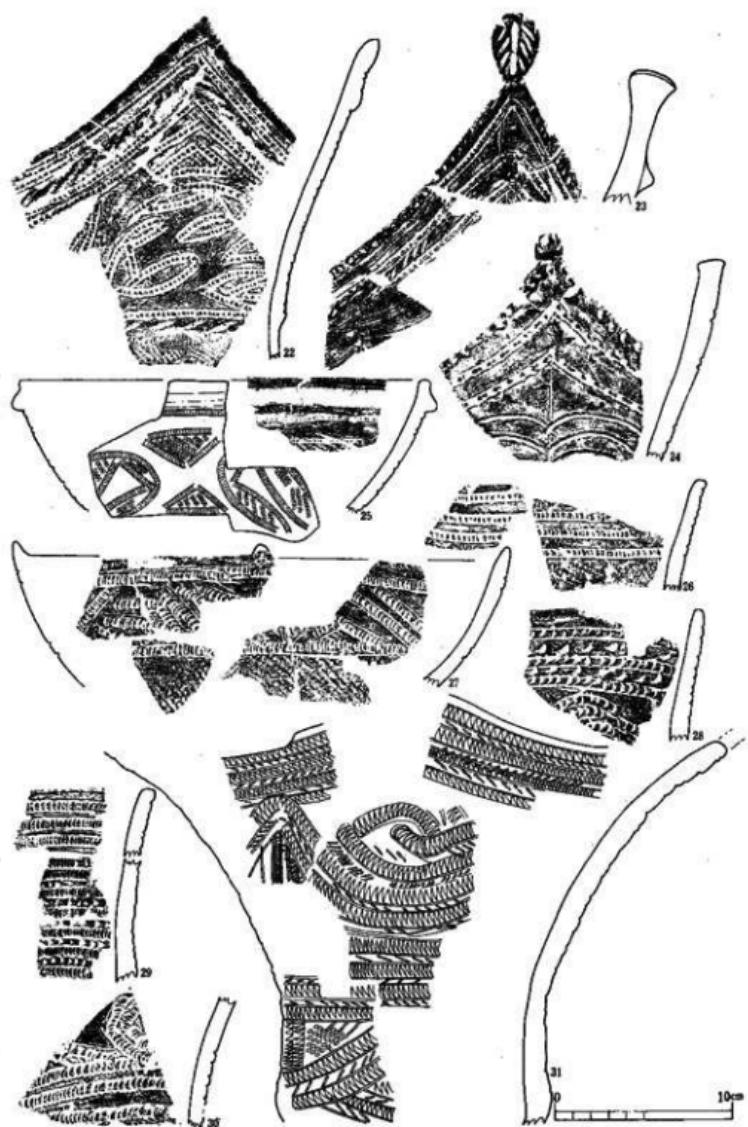
22～24は大形波状口縁を有する土器で、口縁下には連続爪形文を施す。短沈線か撚糸文を配した隆帯を伴い、胴部文様は木葉文か肋骨文となる。33・34は同様な文様モチーフを持つ平縁口縁の土器。25～27は連続爪形文と縄文で文様が構成される土器で、25は口縁下に細い隆起線を連続爪形文と共に巡らせ、胴部は爪形文による弧状入組文様を描き赤彩の痕跡がある。以上の土器は諸磯a式に比定されるが、27は諸磯b式であろう。28～32は連続爪形文により幾何学的な文様を構成する土器で、31は他の土器と異なり変形爪形文により文様を描出する。37・38は浮線文を貼付する土器である。以上の土器は諸磯b式に比定される。36・39・40は撚糸文の地文上に木葉文等の文様を描出する土器で、雅拙な貝殻圧痕文を特徴とする41と共に浮島I式に比定される。三角文を施した42、貝殻波状文を施した43は浮島II式である。本群の土器は遺跡の南西部に広く分布しており、特に第4号竪穴状遺構周辺からの出土が多い。

#### 第Ⅳ群土器（第78図・第79図 44～86） 前期末葉から中期初頭の土器

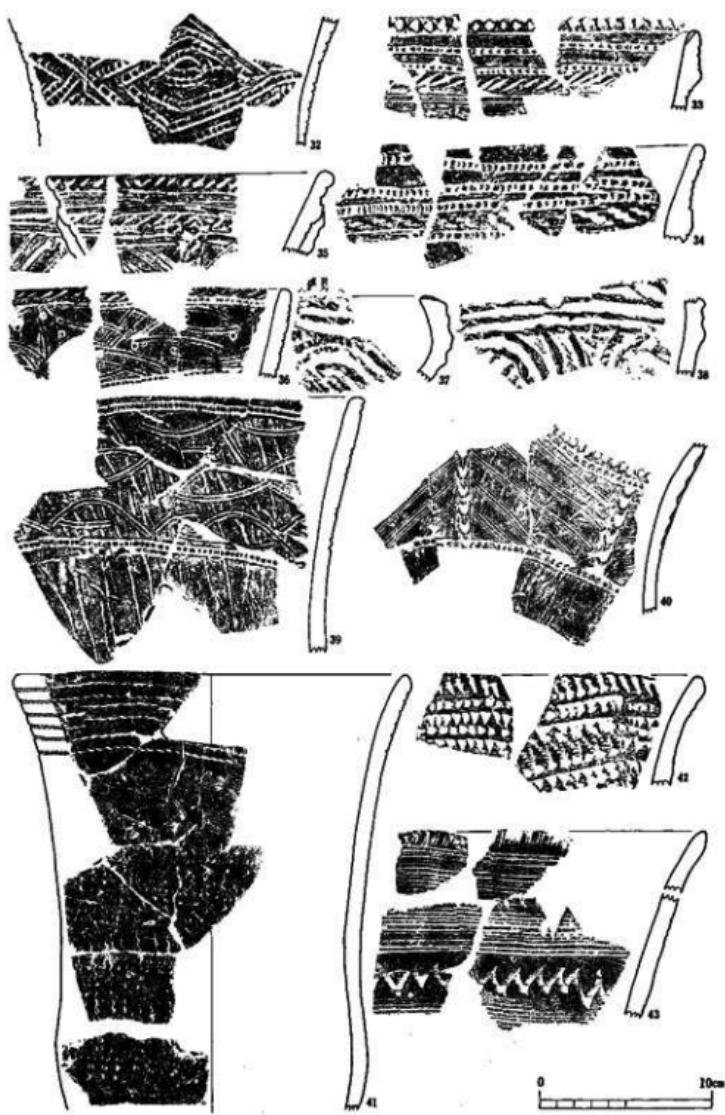
44～49は結節浮線文に代表される十三苔台式土器で、45・46には結節ではなく、49は集合沈線文系の土器である。50～52は波状口縁を呈する土器で半截竹管により波状文や渦巻文を形成する。53・55は直線的な竹管文を施す土器で、53には口縁部に撚糸の圧痕が、54の口唇部には刺突文が加えられている。55～58は折り返し口縁に波状の条線文を施し輪積み痕がみられ、55・56には口唇部に刻目が入る。60は太い波状沈線を施す大型の土器である。61～71は側面圧痕文を施す土器で、口唇に刺突を加えたり、口縁が内傾するものや結節文を伴う例がみられる。73～77は折り返し口縁の土器で、78～82は結節文を有する土器である。83は胴部と口唇部に刺突を加える土器で、84・85は削り痕が顕著な無文の土器である。75～85は下小野式に対比されるが、他の土器については編年的位置が確定しておらず今後の検討を待ちたい。



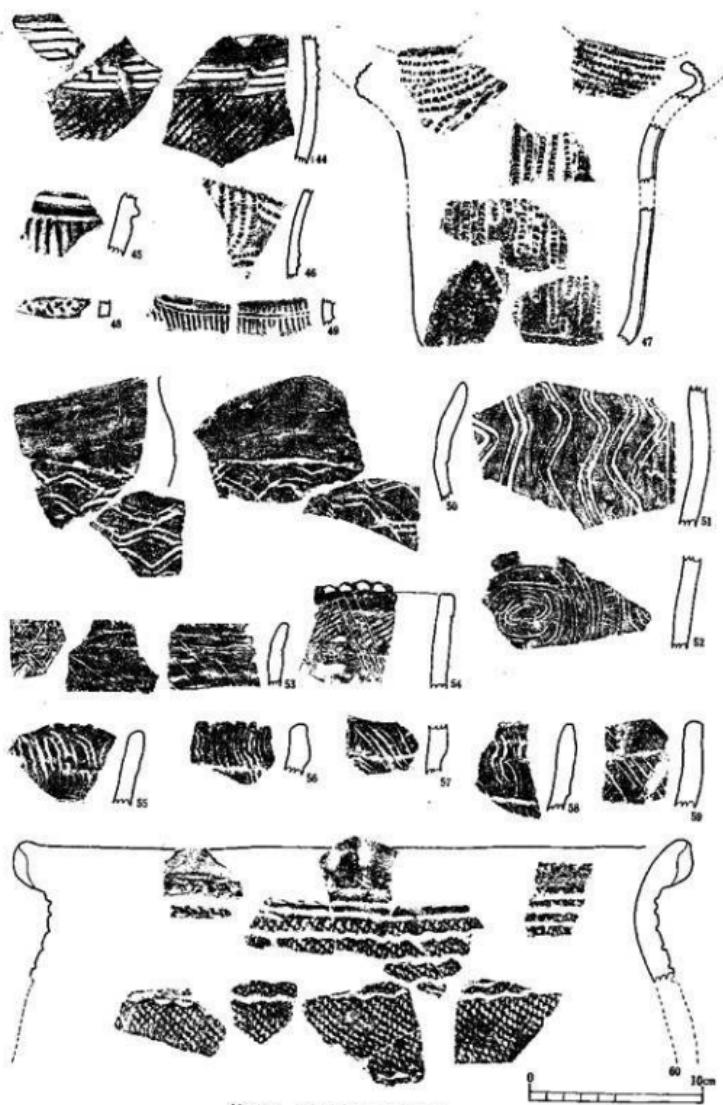
第75図 第Ⅰ群・第Ⅱ群土器〔36〕



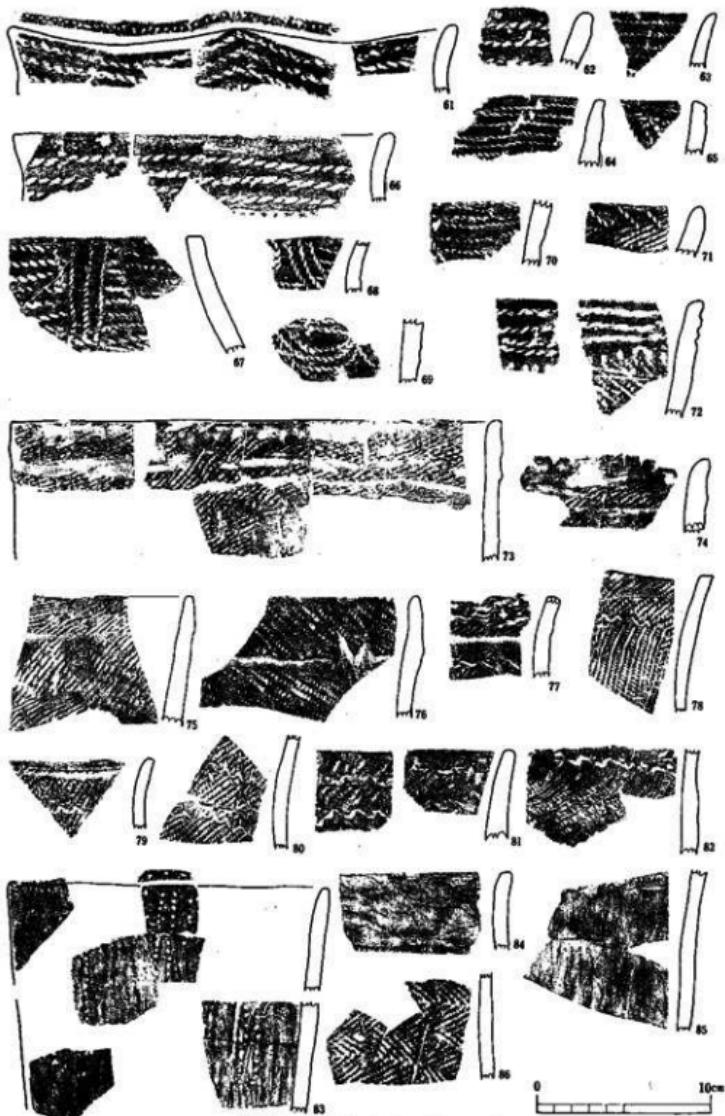
第76図 第三群土器(1)(36)



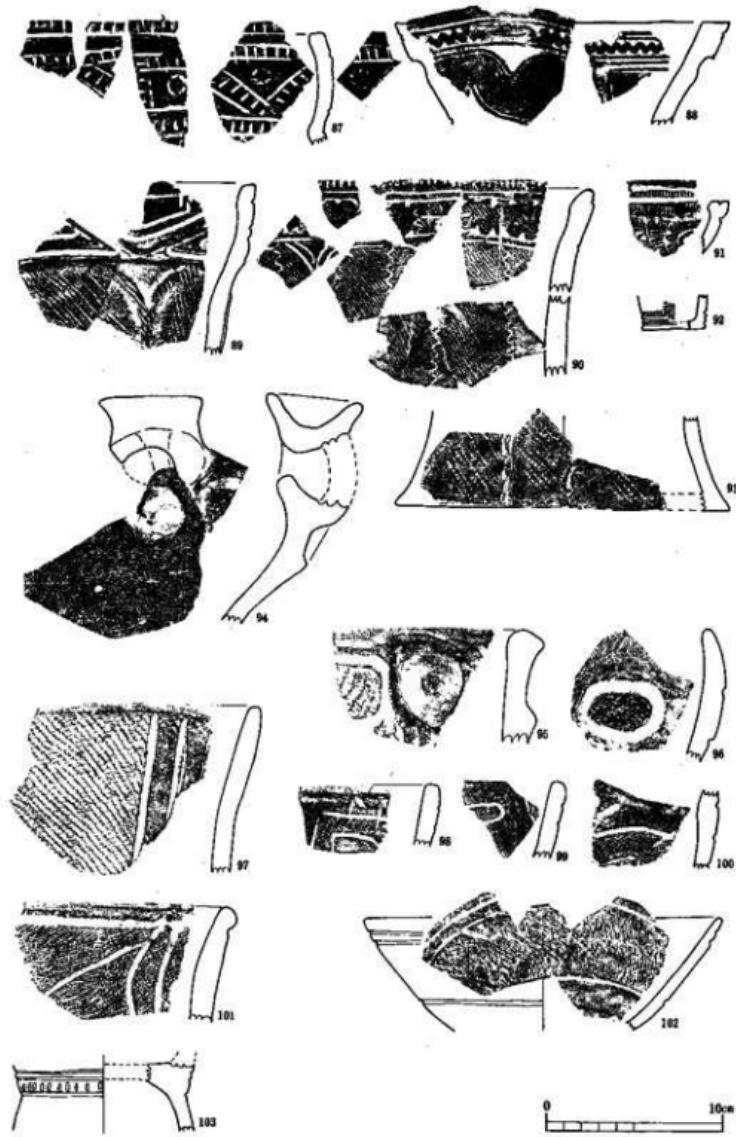
第77図 第Ⅲ群土器(2)(3)



第78図 第IV群土器(1)(1/2)



第79図 第IV群土器(2)(分)



第80図 第V群・第VI群・第VII群・第VIII群土器(分)

#### 第V群土器（第80図87～93） 中期初頭の五領ヶ台式土器

87は短沈線を充填した平行沈線で文様が構成され、口唇部にスリットが入る。88・90は鋸齒状の文様によるもので、90の胴部は縦の結節文が走る。89は波状口縁を呈し、沈線により三角形刻文を配して胴部にはY字状の隆起線文を描く。各グリッドより散発的に出土している。

#### 第VI群土器（第80図95～97） 中期後半の加曾利E式土器

94は渦巻文と橋状把手で特徴付けられる加曾利EⅡ式土器で、95・96は渦巻文が梢円文に変化する加曾利EⅢ式土器、97は口縁部文様帯が消失する加曾利EⅣ式土器である。出土地点は第5号住居址を中心とした遺跡の南西部に集中し、94は第27号土壙・第29号土壙・第30号土壙と関連するもので、97のような新しい段階の土器はI-26グリッドを中心に出土が見られる。

#### 第VII群土器（第80図98～101） 後期前半の称名寺式・堀之内式土器

98～100は充填繩文の称名寺Ⅰ式土器で、101は堀之内Ⅰ式土器である。

#### 第VIII群土器（第80図102～103） 後期中葉の加曾利B式土器

102は浅鉢、103は脚部で共に加曾利BⅡ式である。出土量は10点に満たない。

#### 第IX群土器（第86図143） 晩期中葉の前浦式土器

太い舟形の仲状文を特徴とする深鉢形土器が第13号住居址周辺から2個体出土している。

#### 第X群土器（第81図～第91図 104～228） 晩期後半の千綱式・荒海式土器

104～142は全面ドットを行った第1・第2地点、144～228はそれ以外からの出土である。

##### 第1類（104～121・144～167） 浅鉢形土器

A種（104～117・144～166） 浮線文を有する土器。肩部文様帶に連続浮線梢円文やレンズ状付帯文を有する土器（110・147・149）、胴部文様帶に梢円文を施す土器（112・113・152～154）や梢円文の中央に横線を入れる土器（155・156・165）、菱形連繩文の土器（109）、口外帶を有し2重のレンズ状浮線文を描く土器（131・139・160）などがみられる。

B種（118～120・167） 沈線文を有する土器。119・167は沈線の一部をくい違わせることによって工字文風のモチーフを描出しており、119には口外帶に5個の突起がみられる。

##### 第2類（168～176） 壺形土器

168・171は浮線工字文をモチーフとしており、169の土器は文様描出が宮城県山王圓遺跡出土の浮線渦巻文土器に類似するが、胎土・色調より168と同一個体とも考えられる。172・176は太い沈線を施しており、174は大洞A式にみられる細頸の壺形土器と思われる。

##### 第3類（121～142・181～216） 深鉢形土器

A種（121・181・196・198） 浮線文を有する土器。121は連続する梢円状の沈線を施すことにより工字文風のモチーフを描き、胴部は刺突を伴う隆帶がみられる。181は長野県水遺跡・群馬県千綱谷戸遺跡で一般的にみられ小型深鉢形土器で、頸部に大括弧状と梢円の浮線文を有

しその下に菱形状の沈線を施している。なお口縁および胴下半にはLRの縦文を有する。

196は頭部に菱形連繋文を施し、胴部は刺突を巡らせている。198は三角連繋文を有する。

B種 (122~130・181~190・199~201) 沈線文を有する土器。122~126は沈線により山形文や平行線を描出するもので、茨城県殿内遺跡において殿内B V式土器のD群、千葉県荒海貝塚において第X類土器とされたものである。128~130は近年須和式土器に繋がる土器として注目されている土器で、129は山形の沈線内に刺突を施し、130は三角連繋文内に刺突を施している。胴部は两者共に擦痕であるが、128の胴部には浮線横円文が描かれ、このような充填刺突の技法が浮線文土器の後半においてみられることが指摘できる。なお129は千葉県宝田鳥羽遺跡層出土土器に比定されるが、130の類例は現在みられない。182は綾杉文と太い沈線により構成されるもので、183は三角連繋文を構成する。185~187は同一個体と思われ、口縁部および胴部に2対の瘤状突起を有し、胴部上半は縱と横の沈線によって文様を構成する。188は荒海貝塚で菱形文とされた土器で地文にハケ目を施す。この他に142のように外間に山形および渦巻状の沈線を施し、内側にも工字文を沈線で描くものや、199のように擦痕の地文上に王字文風の沈線を有する土器が見られる。213は神奈川県杉田遺跡の粗製土器2群とされた櫛目状擦痕を有する土器で、他に稻妻状の鋸い沈線を伴う例も出土している。

C種 (131~135・202~208) 擦糸文を有する土器。口唇部に貝殻压痕や擦糸の圧痕を有する折り返し口縁の土器が多く、132・203は胴部に瘤状の突起を有する。

D種 (138~141・210~226) 櫛目・ハケ目・条痕等の文様を有する土器。波状口縁や折り返し口縁のものが多いが、口唇部に貝殻压痕等を施す土器は少ない。

以上の土器の他に227・228の袖珍土器が出土している。227は楕円形を呈し千網谷戸遺跡出土の舟形土器に類似が求められる。木葉痕・網代痕の底部は図示したものが全てである。

第9表 第X群土器地点別土器出土表

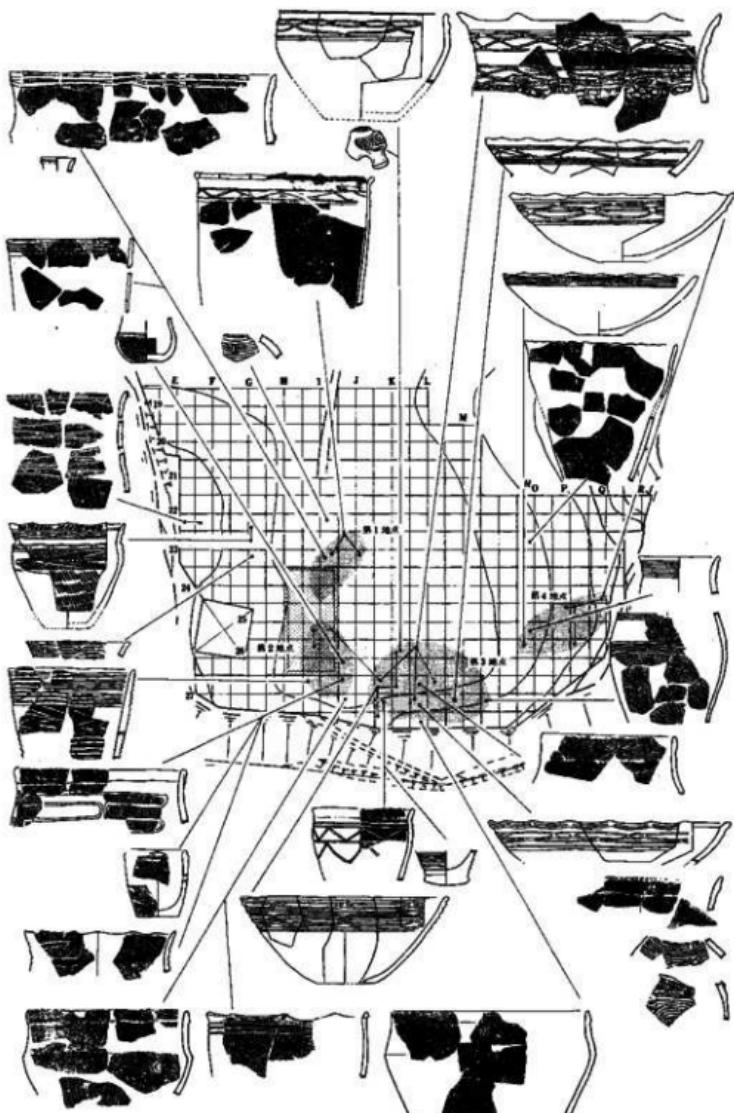
	第1地点	第2地点	第3地点	第4地点
後 井	104, 106, 107, 111, 161, 162 105, 106, 109, 110, 111, 112, 113 114, 117, 120, 151, 154, (119)		145, 146, 147, 148, 155, 160 144, (167)	
塙	171, 174		168, 169, 173, 175, 197	172
津 井	130, 132, 137, 139, 196, 223 132, 133, 136, 127, 128, 129, 132 136, 136, 138, 140, 141	200, 202, 204, 206, 210, 211 212, 224, 225, 226	201, 207	

### b. 土 製 品 (第91図)

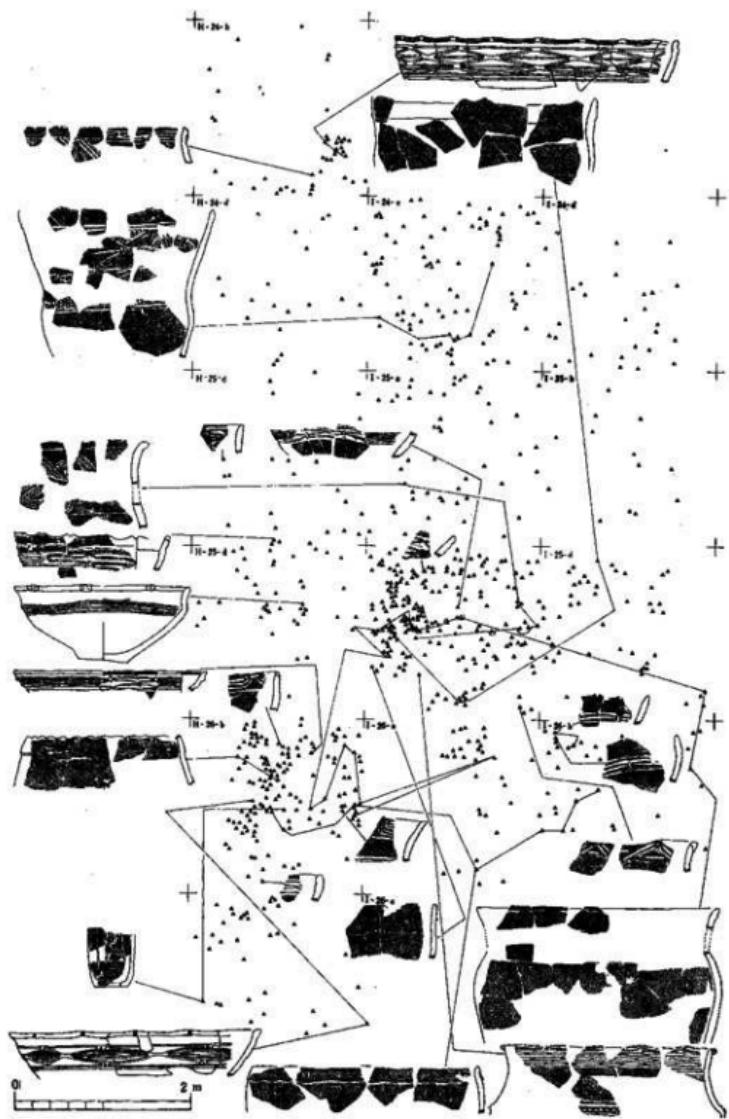
土偶 (1・2) 1は非常に小型のもので沈線により文様を描出している。埼玉県如来堂C遺跡出土の土偶に繋がるものと思われる。2は肩の部分で刺突文を有しており、東北地方に分布する刺突文土偶との関連が考えられる。共に第X群土器に伴うものである。

块状耳飾 (3) 文様を持たないものが一点出土している。

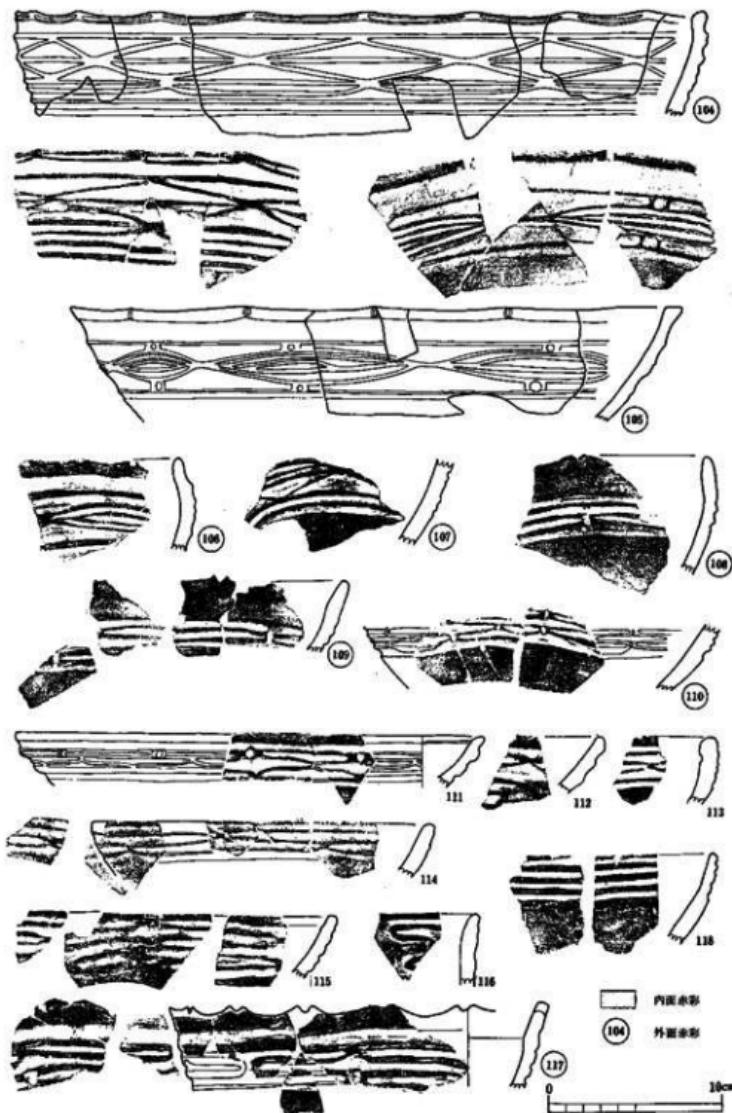
土鍾 (5~15) いずれも土器片鍾で加曾利E式期のものである。 (田中 英世)



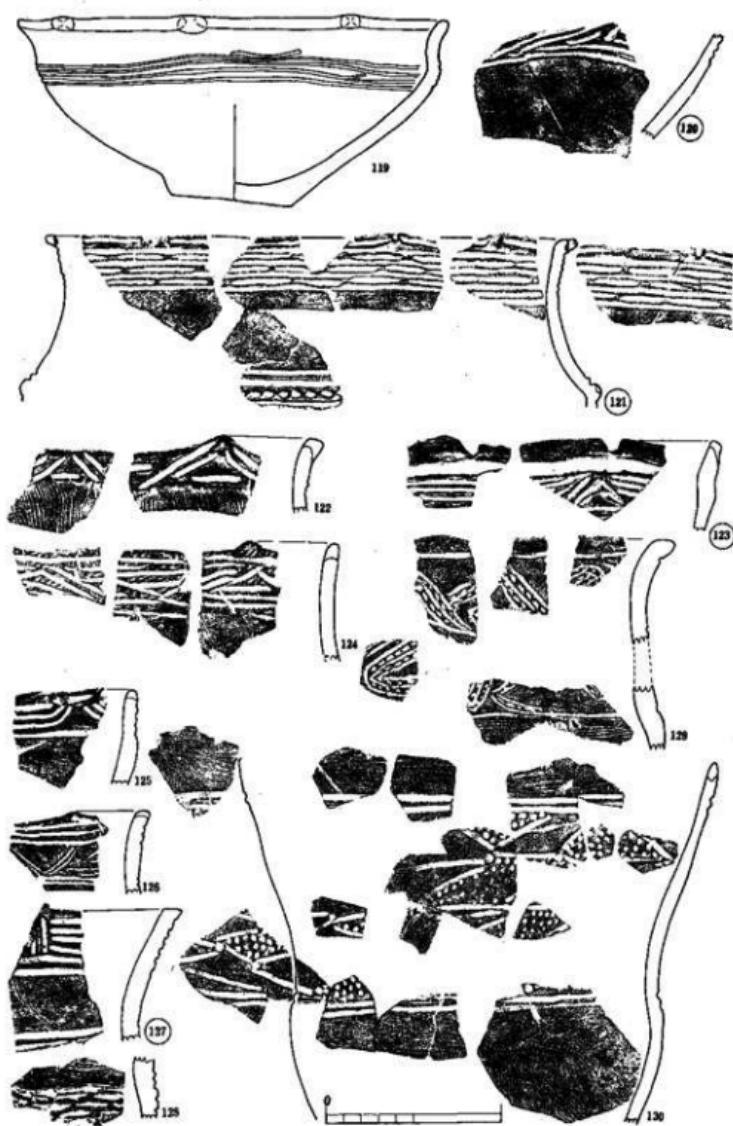
第81図 第X群土器分布図



第82図 I-24~I-26グリッド遺物分布図(第X群土器)(%)



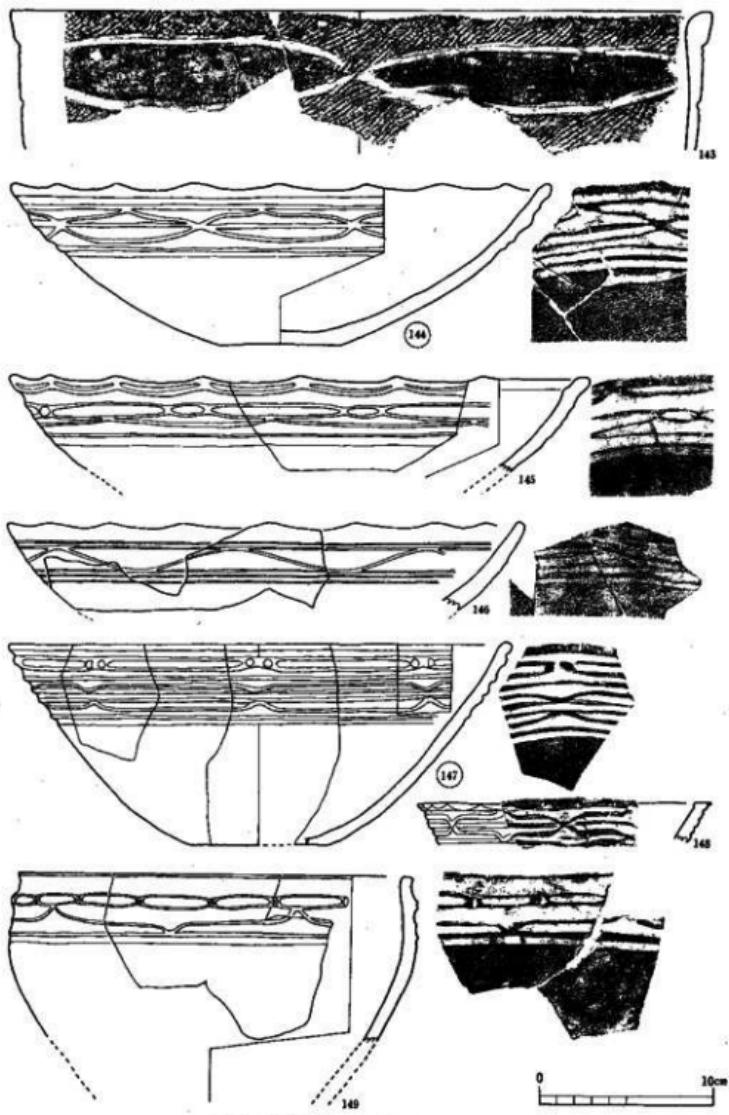
第83図 第X群土器(1) (I-24~I-26グリッド出土)(1)(3)



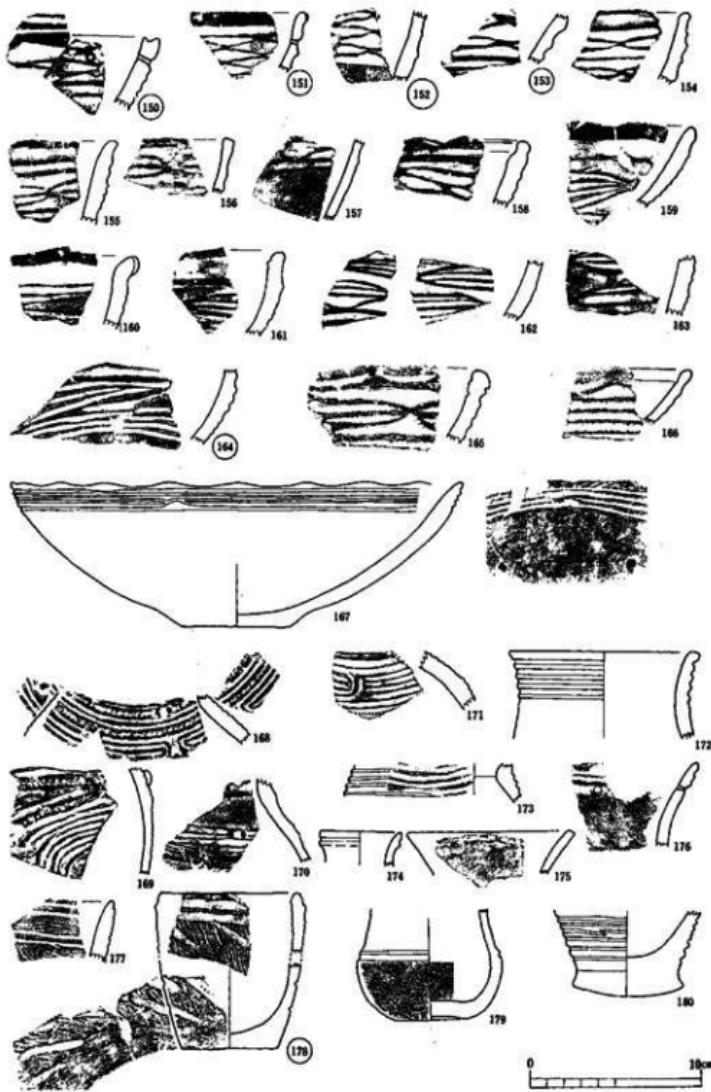
第84図 第X群土器(2) (I-24~I-26グリッド出土)(2)(3)



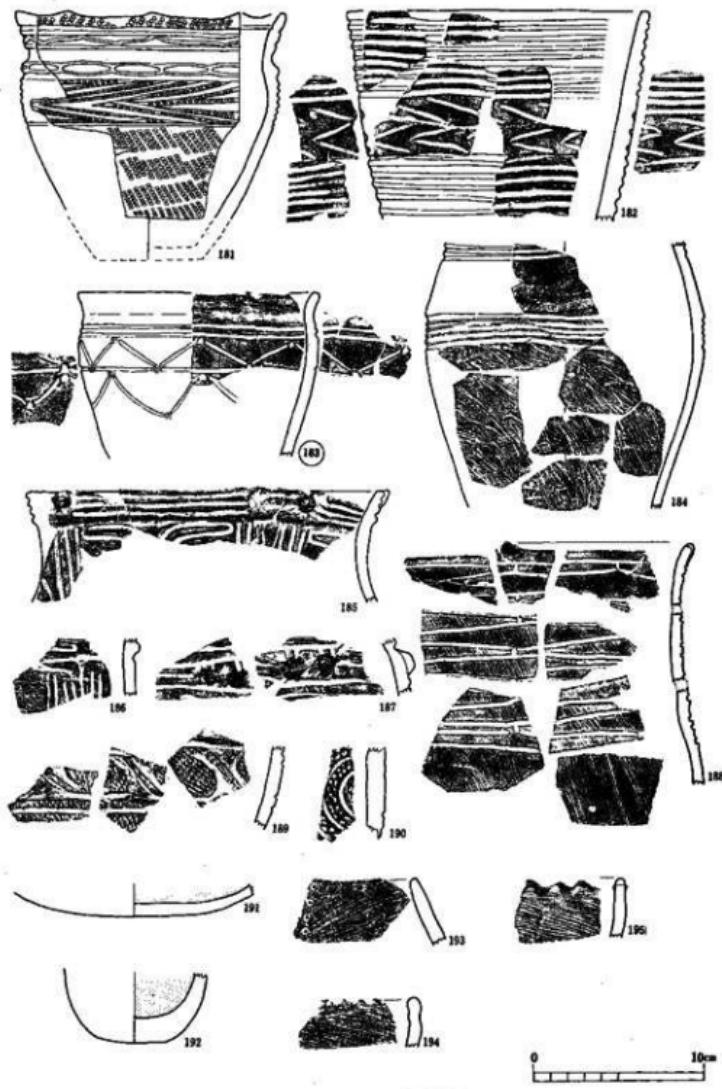
第85図 第X群土器(3) (I-24~I-26グリッド出土)(3)(3)



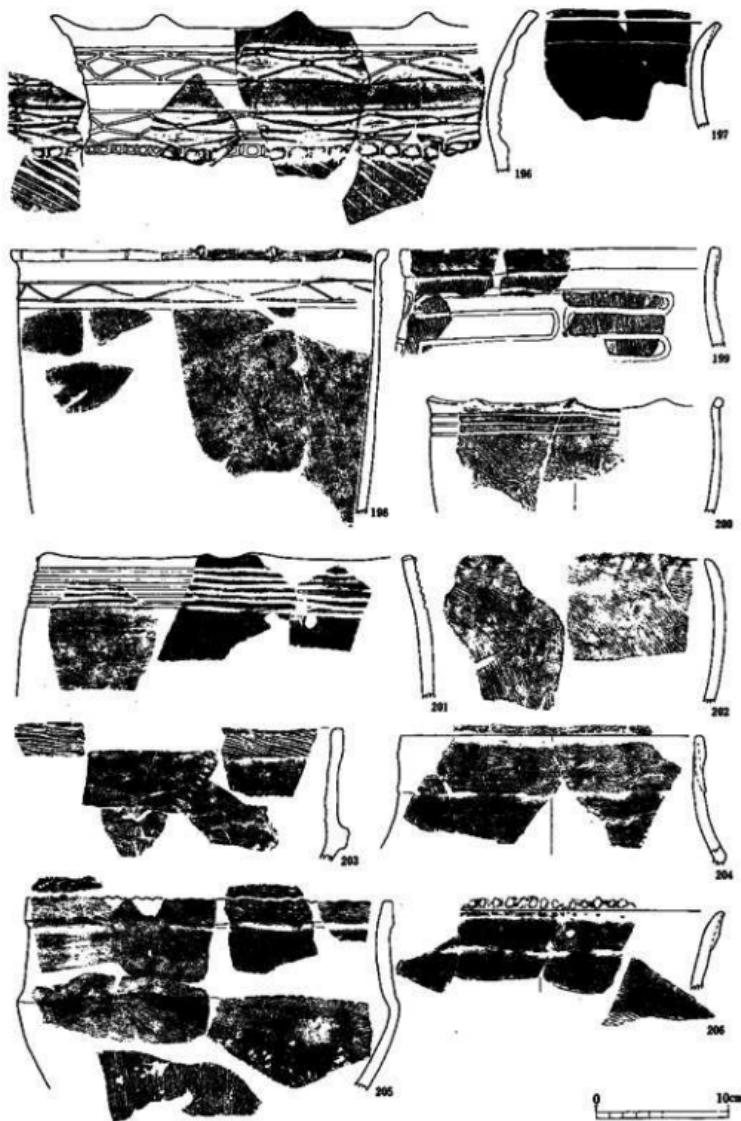
第86図 第X群土器(4)(36)



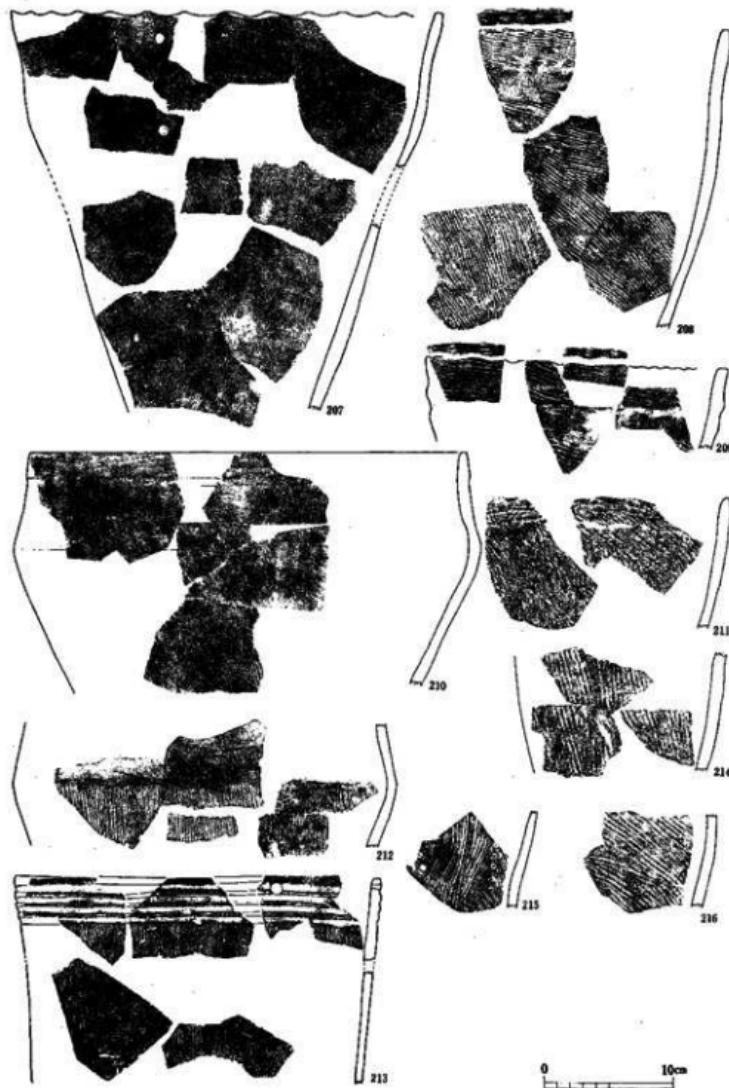
第87図 第X群土器(5)(%)



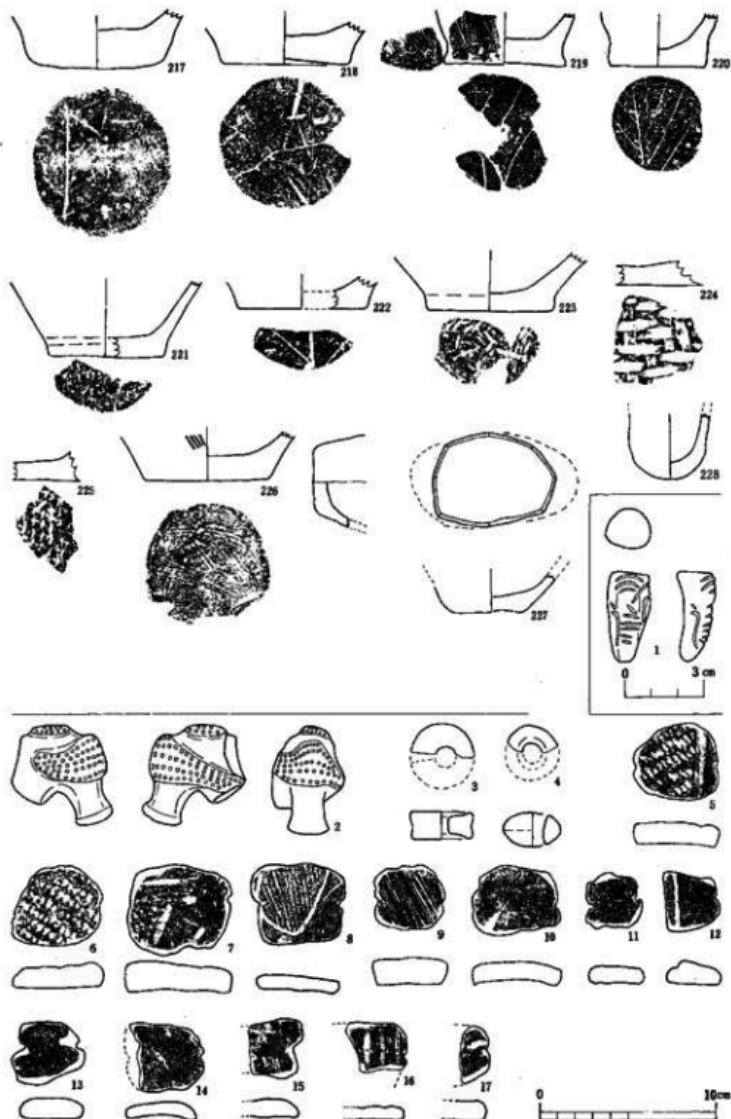
第88図 第X群土器(6)(%)



第89図 第X群土器 (7) (3/4)



第90図 第X群土器(8)(3/4)



第91図 土器底部・土製品 [× 1:3]

### c. 石器

検出された石器は第9表のとおりである。遺構からの出土は少なく、包含層から得られたものが主体となる。包含層からは早期から晩期までの土器が出土しているので、各石器の細かい時期決定は特定なもの以外困難である。全石器資料のうち礫および礫素材の石器（磨石・敲石・凹石など）が4割をこえている。剝片石器は、単なる剝片やここで便宜的に両極石器と分類したものと除くと比率は一桁台である。

以下、図示したものを中心各石器について説明を加える。

第8表 銀文時代石器集計表

種別	剝片	神片	石核	石錐	石錐	両極石器	尖頭器	不定形石器	打製石器	磨製石器	標印	計
住居址	17	2	2	6	1	8		1				37
土器	1			2	1		2					6
遺構外	158	26	19	30	6	90	6	6	16	11	3	371
計	176	28	23	37	7	100	6	7	16	11	3	434

種別	石皿	敲石	磨石	圓石	石棒	鉄鉈石	輕石	礫	玉頭	滑石	計	総計
住居址		2	1	1				1	5	1		12
土器	1											6
遺構外	13	56	64	9	1	1	54	200	8	15	481	852
計	14	58	65	10	1	1	55	265	9	15	483	907

\* 遺構は銀文時代のもののみ。古墳および平安時代の住居址から出土したものは遺構外として処理した。

\* 玉頭には未成品も含む。

#### ・石錐（第92図1～30）

石材はチャートと黒曜石が主になる。形態的には凹基から平基までのバリエーションがみられる。

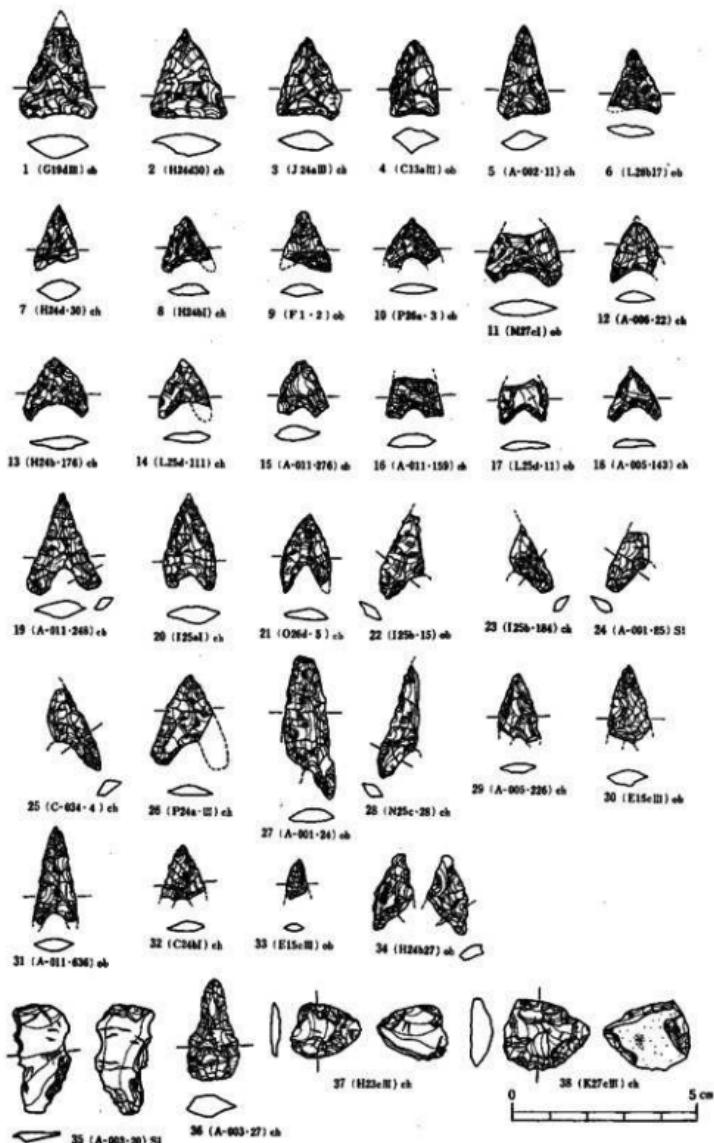
#### ・石錐（第92図36）

7点存在するが、図示したものは1点である。第92図36はチャート製で、先端部に使用による磨滅痕は認められない。この資料以外には、尖頭器状のもの、両極削離による素材を利用した棒状のものなどがある。

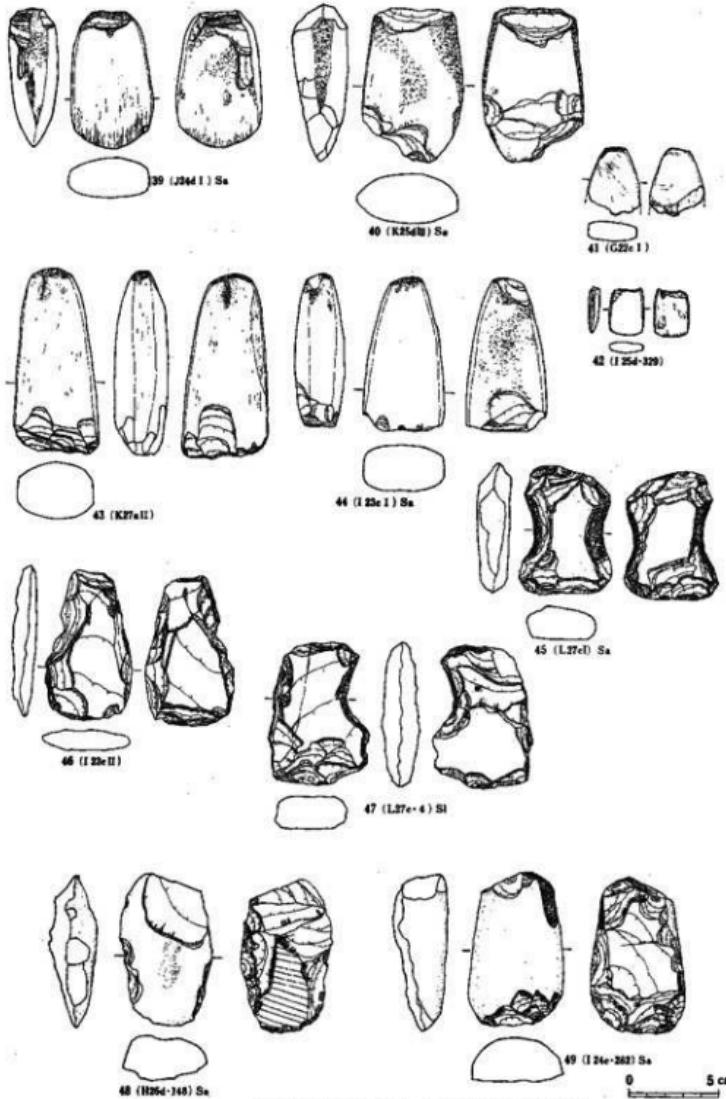
#### ・両極石器（第92図37・38）

両極削離痕を有するものをここではすべて両極石器として一括して取り扱った。大別するなら石核タイプとトゥールタイプ（ピース・エスキュー）および剝片（または削片）の3者になりそうであるが、詳しい検討は加えていない。

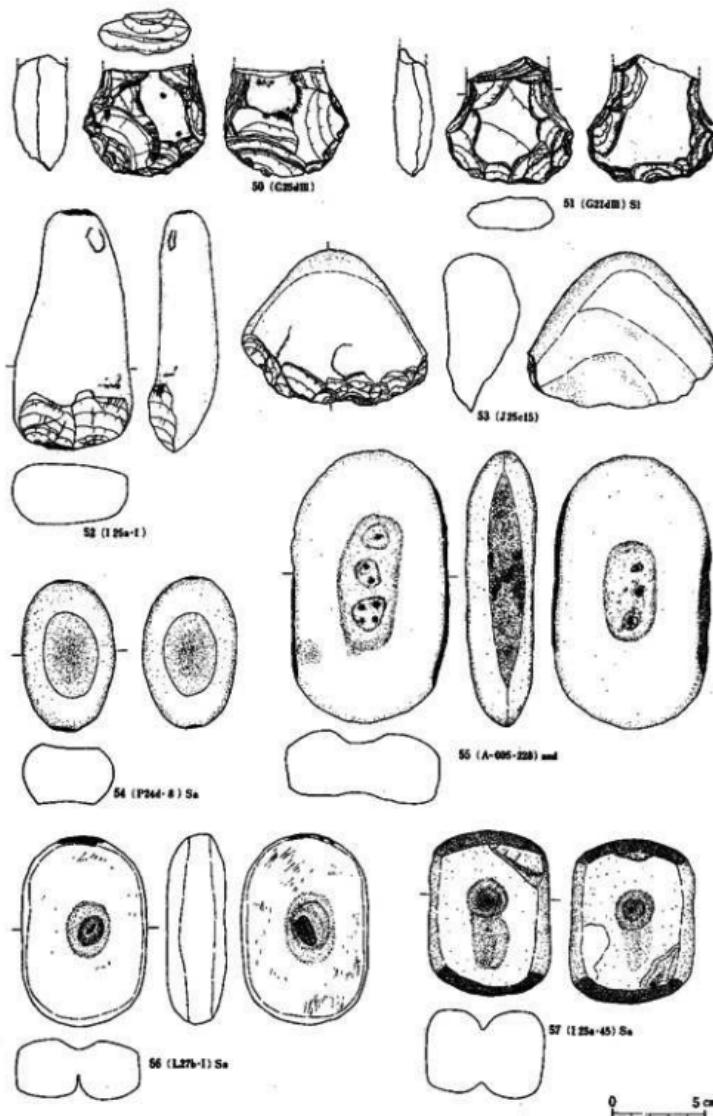
両極石器の中心となっているのは、直径3cm前後の偏平盤もしくは円盤を両極打法によって打削したものである。チャートの小碟がほとんどであるが、これらは成田層中に含まれているこ



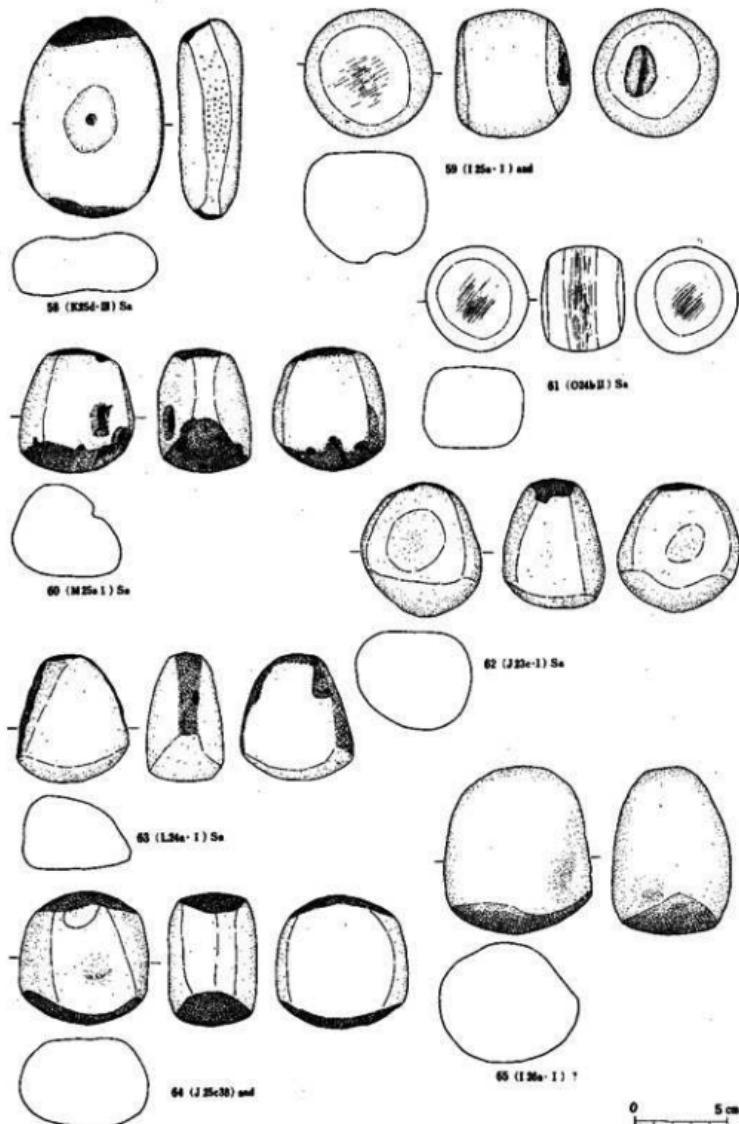
第92図 石器実測図(1)石鎚他〔36〕ob:黒曜石 ch:チサト ch:粘板岩



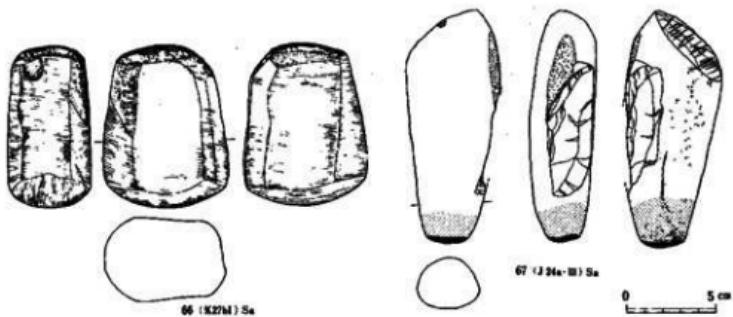
第93圖 石器夾測圖(2)石斧(刃)



第94図 石器実測図(3) 石斧、礫器、凹石(3)



第95図 石器実測図(4) 凹石・磨石〔36〕



第96図 石器実測図(5) 磨石・敲石(5)

とがあり、石器用の石材に恵まれていない本県においては、こうした小さな石材を利用するため積極的に両極打法を採用している形跡がある。得られた素材は石鎚などに加工されることになるのであろうが、製品との対応関係は明らかではない。

#### ・石斧(第93図・第94図39~53)

磨製が11点、打製が16点出土している。破損しているものが多い。39・40はやや幅広の形態、43・44はいわゆる定角式である。41・42は蛇紋岩製の小型のもの。緻密で良質な石材をていねいに研磨している。打製石斧は形態と製作技術から3種に分類できる。46は圓形、45・47・50は分側形。48・49は片側に諫面を残し、調整加工は片面が主となるものである。52・53は諫に片側からのみ調整を加えた諫器(チョッパー)である。

#### ・磨石・敲石・凹石(第94図~第96図54~67)

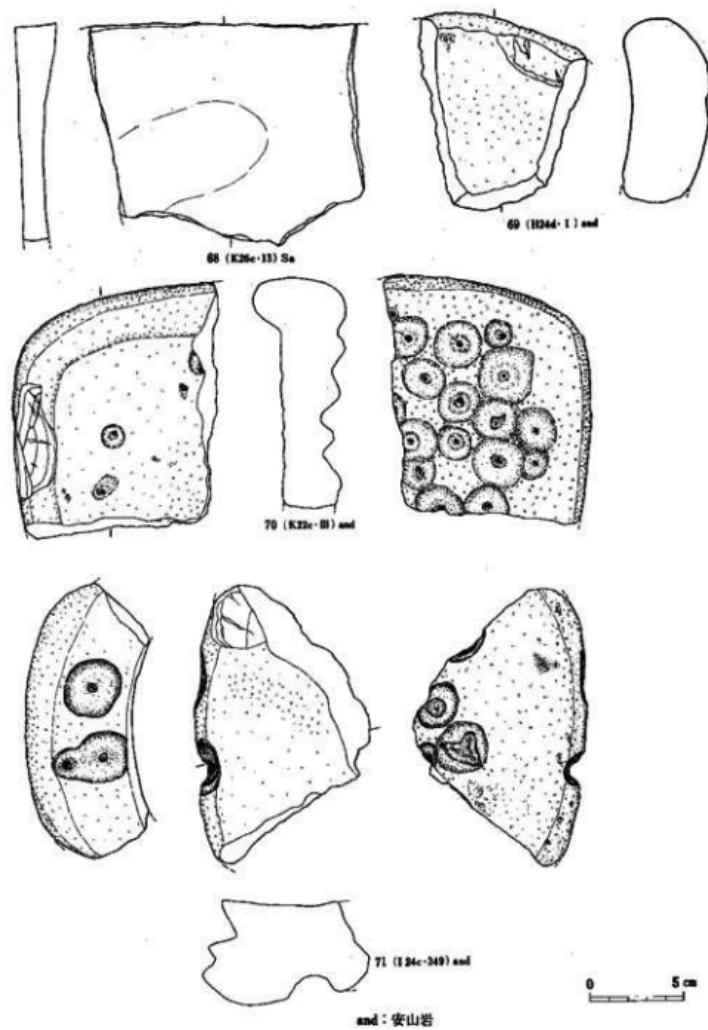
磨石・敲石・凹石は分類が明確にしにくいので、ここではひとまとめにしておく。第10表中にある3者の分類はあくまで便宜的なものである。ただし、諫の一部に敲打痕を有するだけの敲石は旧石器時代から続くものであり、分類に問題は少ないだろう。55~58は敲打による凹みが両面にあり、磨痕と敲打痕を共有している。54は研磨による凹みをもつ。59・61は磨痕だけをもつもので、磨石としてよいだろう。60・62~66は磨痕と敲打痕を共有している。67は端部に敲打痕があり、スクリーンで示した部分に赤色の付着物が認められる。

#### ・石皿(第97図68~71)

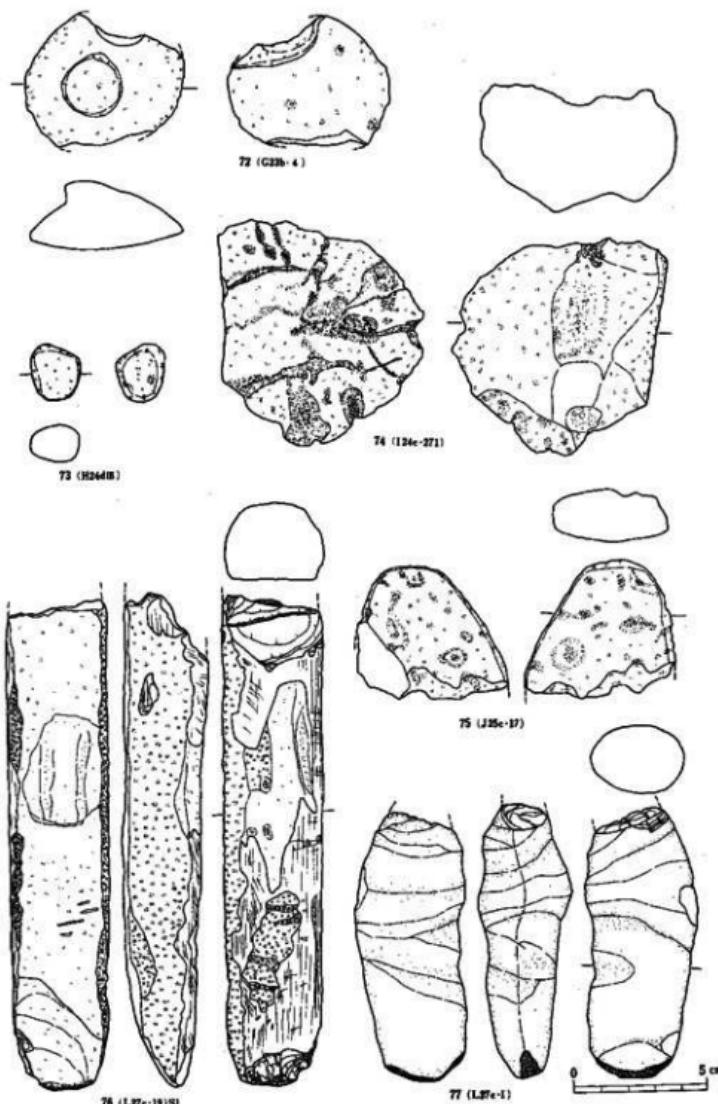
すべて破片で検出された。砂岩製で板状のもの(68)と多孔質の安山岩製で厚手のもの(69~71)があり、安山岩製のものには底面および側面に凹孔をもつもの(70・71)がある。

#### ・輕石(第98図72~75)

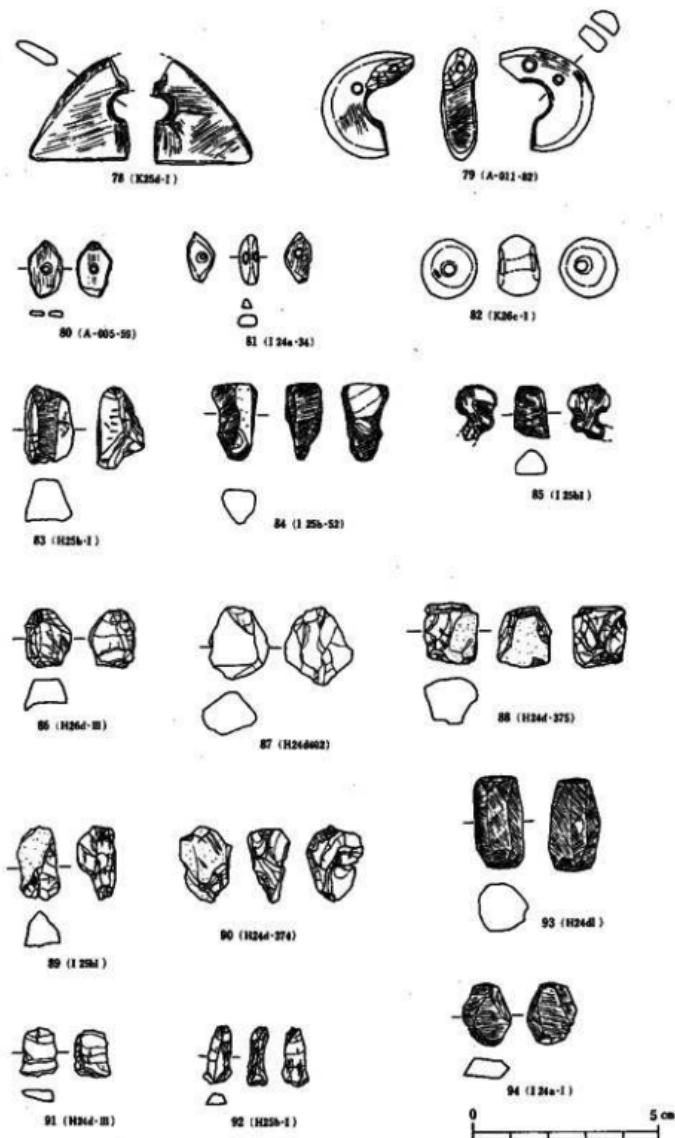
55点検出されたが、成形されているものは72と75のみである。74のような不形定のものがほ



第97図 石器実測図(6) 石皿(%)



第98図 石器実測図(7) 鮎石・石棒・猿鉛石(△) 72-75鮎石 77石头相面岩



第99図 石器実測図(8) 王類・滑石 [36]

とんどである。73のような小円錐様のものもみられる。72はつまみのついた蓋の形をしている。75は表裏面と側面が成形されている。

・石棒（第98図76）

粘板岩製で基部側が折れている。敲打によって成形した後、部分的な研磨によって仕上げられている。

・独鉛石（第98図77）

石英粗面岩製であるが、軽石に近い石材で軟質である。片側は折れている。先端部には敲打痕が認められる。石棒と独鉛石は、出土地点からも晩期のものと考えられる。

・玉類および滑石（第99図78～94）

玉類とそれに関する資料を第99図に一括して示した。いずれも滑石製である。78・79は块状耳飾の半成品である。78は薄緑色を呈し、完形状態では平面形が三角形になる。79は断面が円形に近く、完形なら円環状になるものである。破損後に穴を2孔穿っている。80・81は良く似た薄緑色の石材を用いている。80は加曾利E式の住居址覆土中から検出されている。82も薄緑色であるがやや硬質な石材である。なお、79～82の小孔はいずれも両側から穿孔されている。

83～94は玉類の未成品と玉類の製作に関連する資料である。83～92のうち85が濃い緑色でやや良質の石材を用いている以外はいずれも薄緑色の滑石でよく類似しており、同一個体の可能性がある。これらは勾玉の製作に関連した一連の資料と考えられる。この勾玉の製作に関連した資料は全部で18点で、遺構から出土したのではなくいくつかのグリッドにまたがって散漫に分布している。所属時期は晩期であろう。93・94は黒色の滑石製で、玉の未成品である。この2点は他の資料とは石質が異なるが、出土地点が近いので同時期のものと考えられる。83は部分的な研磨痕がある。84は勾玉の未成品である。おおまかな整形段階のものである。85も勾玉の未成品であるが、84よりも加工が進んでいる。86～92は玉類の原石と素材および加工の段階で剥離されたと考えられるものである。原石の加工には両極打法が採用されている。これらから勾玉の製作工程をうかがい知ることができる。小型の原石を両板打法によって粗削し、それによって得られたサイクロ状の素材を研磨によって整形してゆくものである。

このような縄文時代の玉の製作跡は県内においては検出例は非常に少ない。最近の集成でも5遺跡のみ（寺村・谷川 1986）であり、当遺跡と同じく晩期に滑石を用いて玉類を製作している遺跡としては、大多喜町堀之内上の台遺跡（寺門 1979）があげられるにすぎない。当遺跡では玉の製作を行っているにしても非常に小規模なものである。また、砥石等の加工用の工具や遺構は検出されなかった。

（集瀬 裕一）

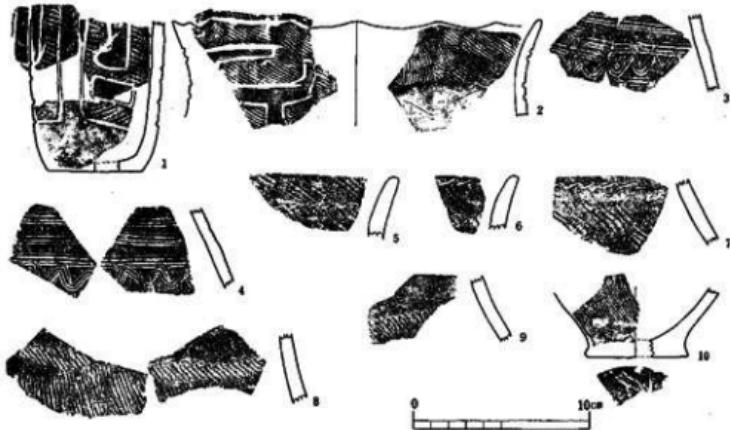
### 3. 弓生時代

遺構は検出されず、土器片のみ約30点出土した。

#### a. 土器（第100図 1~10）

1は磨消繩文を有する筒形土器。2は波状口縁を有する土器で、口唇部および裏面にまでおよぶ無節繩文Rが施されており、1と同様磨消繩文が施されているが破片のため構図は不明である。いずれも北関東系の野沢I式土器と考えられる。1はH-26-bグリッドの繩文時代晚期の遺物集中地点南側より出土し、2はJ-27-aグリッドからの出土である。3・4は波状の櫛描文に特徴付けられる中期後半の土器で、5~10は後期の臼井南式土器である。前者はG-22グリッド周辺に出土が限られ、後者は遺跡の南側から散発的に出土している。

千葉県内において中期前半の北関東系土器を出土する遺跡としては佐倉市天神前遺跡・流山市桐ヶ谷新田遺跡があげられる。佐倉市天神前遺跡第4号土壙第1例土器は工字文を有する文様モチーフや口縁部内側にも繩文を付しているなど、文様描出の方法は2と同じであるが器形や工字文の外側を磨消している点などで若干の差異がみられる。桐ヶ谷新田遺跡出土例は磨消しは行っていないものの、沈線により山字文風のモチーフを描出している。（田中 英世）



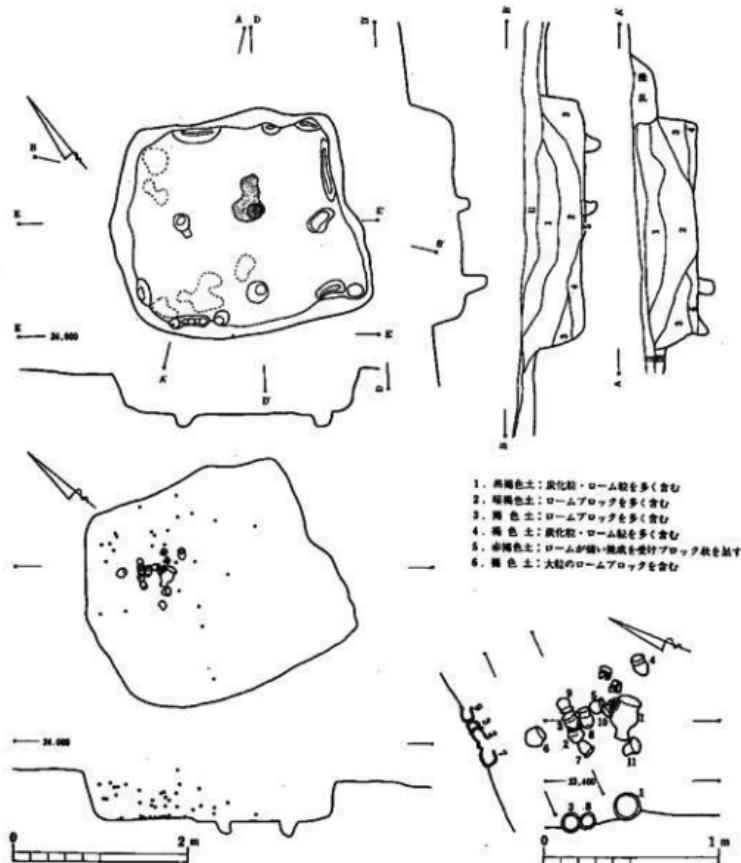
第100図 弓生土器(3)

### 4. 古墳時代

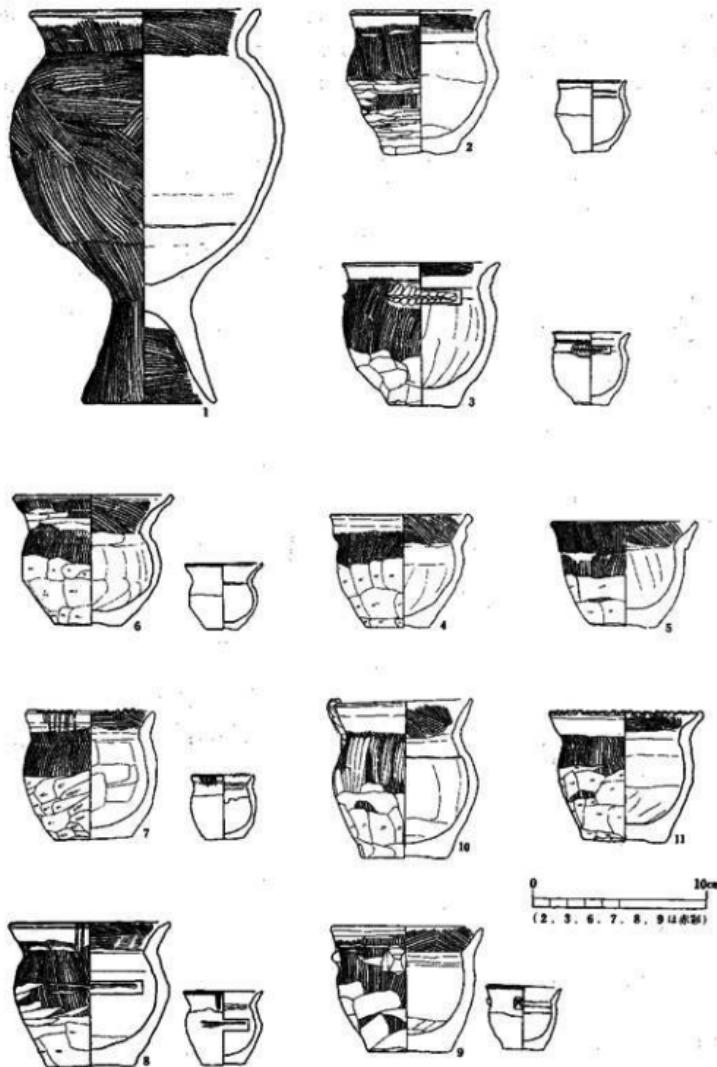
#### 第11号住居址（第101図、図版22）

遺跡の南側N-27グリッドから検出されたもので、第12号住居址とは80m離れている。規模は2.9m×2.6m、壁高50cmを測る。中央に50cm×30cmの炉址がみられ、炉址の底面は強い焼成

をうけており、径15cm・深さ15cmの小ピットを有する。柱穴は中央に2本と南側に1本、南壁際に1本の計4本が見られるが定型化した配置は示していない。床面は堅固で周溝は部分的にみられる。遺物は台付壺形土器1、小型壺形土器10の計11個体が北側の床面上より軽く出でていている。なお住居址西側の床面上に焼土の分布がみられたが、廃棄によるものと思われる。古墳時代の住居址は本址と第12号住居址の2軒のみで、台地縁辺部に単独で存在している点や遺物が1点を除けば全て小型壺形土器である点等から特殊な遺構と思われる。（田中 英世）



第101図 第11号住居址実測図（住居 $\frac{1}{6}$ ・遺物 $\frac{1}{6}$ ）



第102図 第112号住居址出土遺物(分)

第11表 第11号住居址出土遺物観察表

遺物回数	器種	法 (cm. ±)	A. B. C. 色 調 成	器形の特徴	整形の特徴	用 考 (遺物 No.)
1	台付甕 完存	口径 13.0 頸部径 11.6 底部径 15.8 器高 7.5 容積 22.9 1.6	真石及び 2 cm 大までの 砂粒目立つ。 淡黄褐色。 良好。	口縁部は端部に面をもち やや緩やかに「く」の字 形に外反する。胴部位に 最大径をもつ。胴下部に 結合部ある。底面のあ れ程くわずか。	口縁部内面左端より上りナナメハ ケ、外面左端より緩々後ヨコナズ。 胴部上半左端より横ハケ、中位以下右 端より横ハケ。接合部以下右端よりタテ ハケ。脚部内面右端より横ハケ。 ハケ状工具(当たり) 5 本と 7~10 本	脚部内面下半 にわざかと。 外側は脚部か ら胴下半にか けて底付着。 (40)
2	小形甕 完存	口径 8.1 胸部径 7.7 底径 4.2 器高 8.3 容積 1.7	真石目立つ。 小砂粒若干含む。 合む。 淡黄褐色。 良好。	口縁部は「5」の字状を 呈し、胴中位に帶状の突 起をもつ。胴部球形。底 部は輪台状。	口縁部内面右端よりナナメハケ、外側 ヨコナズ。胴部外側上半右端よりタテ ハケ。中位以下左端よりタテハケ。中 位、下半横方向ミガキ。	脚上半赤形 (33)
3	小形甕 完存	口径 9.0 胸部径 8.8 底径 4.0 器高 8.3 容積 0.06	真石、小砂 粒若干含む。 淡黄褐色。 良好。	口縁部は「5」の字状を 呈し、頭部に一狀の瘤塊 をもつ。胴部球形。底 部は輪台状。	口縁部内面左端よりナナメハケ、外側 ヨコナズ、胴部外側右端よりタテハ ケ 2 本。下半左端よりタテハケ。中 位、内面板ナズ。	脚上半赤形 赤形貼りつけ。 (36)
4	小形甕 完存	口径 7.3 胸部径 7.8 底径 3.7 器高 6.5 容積 0.06	長石、小砂 粒若干含む。 淡黄褐色。 良好。	口縁部は「5」の字状を 呈する。頭部は上半に最 大径をもつ。側脚形に近い。 底部は輪台状。	口縁部ヨコナズ、内面は左上リナナ メハケ残る。胴部上半左端よりタテハ ケ口縁部の一部までよぶ。胴部中 位以下右端より横方向削り 3 本。内 面はナズ。	脚半面黒斑 (46)
5	小形甕 完存	口径 4.2 胸部径 6.3 底径 3.7 器高 6.0 容積 0.07	真石、小砂 粒若干含む。 淡黄褐色。 良好。	口縁部は貼りつけで「5」 の字状を呈する。頭部は上半に最 大径をもつ。側脚形に近い。底部は輪 台状を呈する。	口縁部左端よりタテハケ、内面は右下 リナナメハケ、ヨコナズは一部。胴 部上半左端よりタテハケ残る。中位以 下は横方向 2 段削り、内面ナダ条 線観察できる。	折り返し状だ が「5」の字 状を呈する口 縁 (43)
6	小形甕 完存	口径 8.9 胸部径 8.0 底径 3.8 器高 7.5 容積 0.13	長石、小砂 粒、赤色或 者若干含む。 淡黄褐色。 良好。	口縁部「く」の字状を呈 し、嘴部のつまみ出しによ つて面をもつ。胴部球 形に近い。底部は輪台状。	口縁部左端ヨコナズ、頭部ナズ、 左端よりタテハケ。内面左上リナナ メハケ残る。胴部は左端よりタテハケ上 半に残る。中位以下 3 本に亘る横方 向の難削り。	(35)
7	小形甕 完存	口径 7.1 胸部径 7.7 底径 4.4 器高 7.4 容積 0.24	赤色、黄色 の 1~2 cm 大的の粒々。 小砂粒子含 む。淡黄褐色。 良好。	口縁部延く「く」の字状に外 反し、嘴部を立ち上 げる。胴部は中位に最大径 をもち球形に近い。底 部は平底を呈する。口縁部 1~2 本の難削りあり。	口縁部ヨコナズ、内面、左上リナナ メハケ残る。胴部左端よりタテハケ頭 部、胴上半まで残る。胴部中位以下右 上リタ方削りに 4 段削りを行う内面 ナダ。	口縫、胴上半 にかけて内 外とも赤形。 口縫一部 脚部付着 (34)
8	小形甕 完存	口径 9.3 胸部径 9.0 底径 5.0 器高 8.5 容積 0.17	赤色粒、長 石 1~2 cm 大の粒々。 小砂粒子含 む。淡黄褐色。 良好。	口縁部「く」の字状に外 反し、嘴部を立ち上 げる。胴部は上半に最大径があ り、側脚形を呈する。底 部輪台状。口縫部、胴 部中位に比較的難削 り。	口縁部ヨコナズ、内面、横方向ハケ 残る。口縫下半から胴部にかけて左 端よりタテハケ残る。胴部中位以下横 方向 2 段削り一部ミガキが入る。 内面ナダ。(ハケ一本/cm)	口縫部から脚 上半にかけて内 外とも赤形。 口縫一部 脚部付着 (36)
9	小形甕 完存	口径 8.0 胸部径 8.0 底径 2.7 器高 7.3 容積 0.1	赤色粒、長 石 1~2 cm わざかに含む。 小砂粒子含 む。淡黄褐色。 良好。	口縁部「く」の字状に外 反し、嘴部を立ち上 げることによつて面をもつ。 胴部は上半に最大径をも ち、やや球形に近い。底 部輪台状。頭部に合形状 の突起を一ヶ所貼り付 けがある。	口縁部ヨコナズ、内面ナナメハケ 残る。頭部は輪台ヨコナズ。中位以下砂粒 の移動伴わぬ板状工具による横方向の ナダ、内面ナダ。	口縫部から脚 上半にかけて内 外とも赤形。 脚部後 突起貼り つけ、一部難 削り。
10	小形甕 完存	口径 7.5 胸部径 8.4 底径 5.0 器高 9.0 容積 0.16	黄色粒長石 目立つ。 小砂粒わざ かに含む。 淡黄褐色。 良好。	口縁部「く」の字状に外 反し、嘴部を立ち上 げる。胴部は上半に最大径をも ち、側脚形に近い。底部は輪台状。口縫部全 面に丸みをもつ。	口縁部ヨコナズ、内面右下リナナ メハケが残る。胴部上半は左端よりや や左上リタテハケ残り。一部に縦方向 のミガキ、中位以下、横方向難削り 2 段。胴部内面は上半に接合痕を残 しナダを行なう。	(41)
11	小形甕 完存	口径 8.6 胸部径 7.8 底径 4.8 器高 7.5 容積 0.13	黄色粒、長 石 2~3 mm 大目立つ。 小砂粒量含む。 淡黄褐色。 良好。	口縁部「く」の字状に外 反し。嘴部を立ち上 げる。胴部上半に最大 径をもち、側脚形に近い。 底部輪台状。口縫部全 面に丸みをもつ。	口縫部ヨコナズ、内面ナナメハケ残 る。頭部は左端よりタテハケ残る。中 位以下横方向の難削り 3 本に亘って 行なう。胴部内面ナダ。	口縫部一部に わざかに脚部 付着 (39)

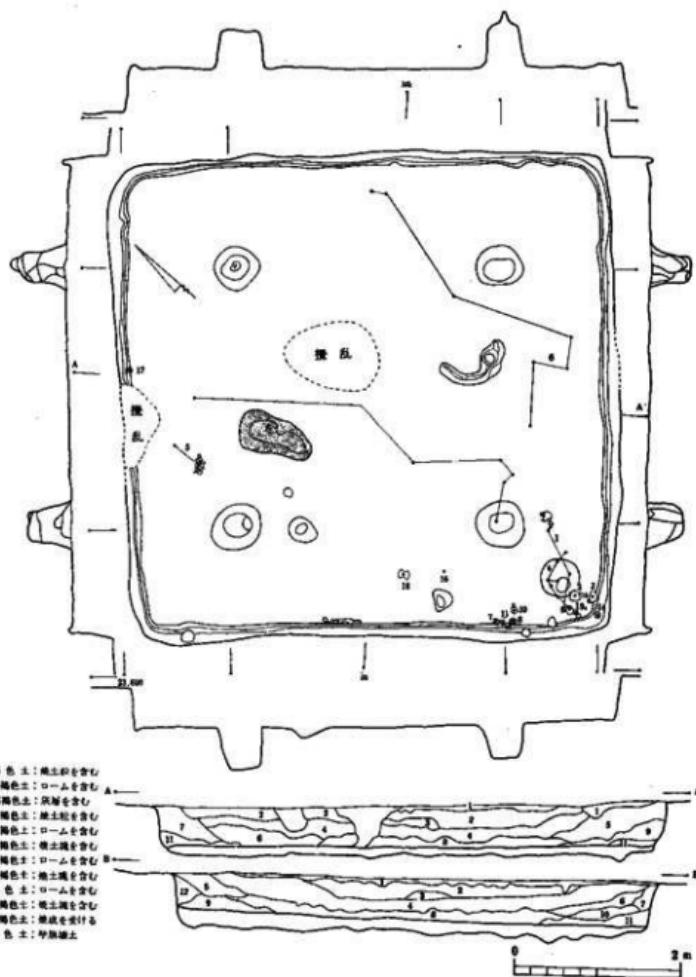
(第11表 第11号住居址出土遺物観察表)

### 第12号住居址（第103図、図版23）

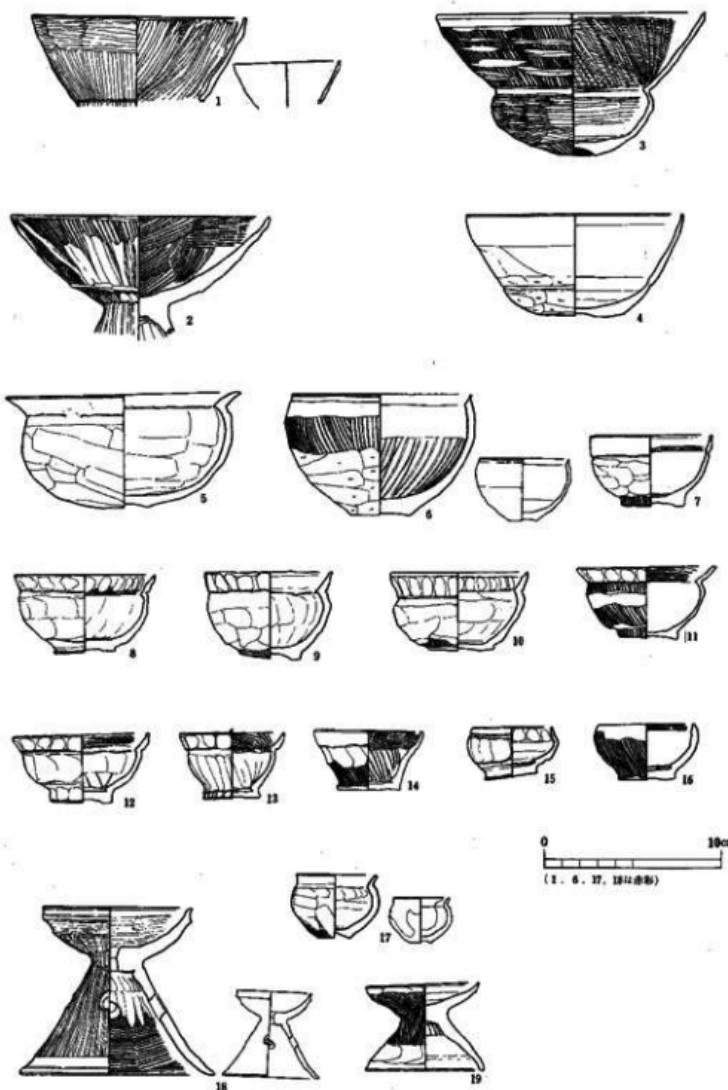
遺跡の西側C-22グリッドから検出されたもので、規模は6.5m×5.8mで壁高は約50cmを測る。西寄りに92cm×42cm-8cmの炉址を有し、床面には焼土と炭化物の分布がみられ火災住居址と思われる。柱穴は径60cm・深さ40cm~50cmの主柱穴4本で南隅に径44cm・深さ66cmの貯蔵穴がある。床面は堅固で幅10cmの周溝が全周する。遺物は壺3・高杯1・小型器合2・鉢2・碗11の計19個体が床面上から出土し、うち12個体は貯蔵穴周辺から出土しており8と11は入子の状態であった。1・6・17・18は赤彩が施されている。(田中 英世)

第12表 第12号住居址出土遺物觀察表

器種 番号	器 種 遠存度	法 長 (cm. ±)	A. 筋 B. 色 C. 構 成	器 形 の 特 徴	整 形 の 特 徴	考 察
1	齒 頭部欠 損	口径 7.4	12.0 横幅 7.4 石英 長石 小粒含む。 淡黄褐色。 良好。	口縫部は幅2mmと深い、 くちや内縫気味に立ち上がり、口縫部上端 に面をもつ。	口縫上部後方向のミガキ。中位以下、 窓部にかけて後方方向のミガキ。 口縫内面、ナメハケ後斜方向のミ ガキ。	赤彩 (613)
2	高 杯 脚部欠 損	口径 7.5 下耳 容積	14.8 5.0 7.5 0.4 長石、石英 小粒含む。 やや沙ばく ザラつく。 淡黄褐色。 良好。	口縫部は長く、やや内縫 気味に外方に開き、窓 部下半に面をもつ。口縫 内面にしま上げの結果 縫をもつ。偏平な器形を 呈する。	口縫部左側リナメハケ(6本/cm) 後斜方向一部ミガキ。脚部前方向 ミガキ。稜下に右上がりナメハケ ある。窓面直7~8本/cm)ナメ ハケ残る。	最終調整が欠 けた結果、精 確な感受を受 ける。
3	小 形 丸底座 充 存	口径 底径 高さ 容積	15.2 9.2 2.2 8.1 0.2 長石、石英 小粒含む。 黒色。 黄緑。一部 淡黄褐色。 やや悪い。	口縫部は長く、やや内縫 気味に外方に開き、脚 部に張りをもつ。底盤は 小形で上げ底(丸底)。	脚部外側左側リナメハケ後、 一部脚部前方ミガキ。内底右下リナメ ハケ後、斜方向ミガキ。脚部横方向 ミガキ。底部付近右側リナメハケ。 内底面ミガキ。口縫ロコナヂ。	器形があ っているために不 明瞭だが赤彩 の可能性ある。
4	小 形 丸底座 口縫一 部欠損	口径 下耳 容積	12.3 8.3 5.8 0.1 長石、赤色 小粒少量含 み。淡 褐色。 良好。	口縫部長く、やや内縫し て外方に開き、脚部に 張りをもつ。脚部は浅く 底部上げ底(丸底)。	口縫横部ヨコナヂ。口縫部ナヂ、脚 部及び作部砂粒の移動伴うナヂ。	黒底が広がる (610)
5	小 形 丸底座 充 存	口径 下耳 脚部径 高 容積	13.5 11.3 11.9 0.4 長石、石英 小粒少量含 み。淡黄褐色。 良好。	口縫部はよく反対する。 脚部は張りをもつ。底部 は上げ底(丸底)。	口縫部ヨコナヂ。脚部板状の工具に よるナヂ。口縫部と脚部の間に複合 残る。底部内面に指揮痕残らずか に残る。	器壁2mmと薄 い。(533)
6	小 形 丸底座 充 存	口径 下耳 底径 器高 容積	10.2 10.8 3.3 6.9 0.3 長石粒目立 ち、ややあ らい。 暗褐色。 良好。	口縫部はよく口状につ まみ上げる。脚部上半に張 りをもつ。脚部に張 りをもつ。底部上げ底 (丸底)。	口縫部ヨコナヂ。脚上半右側リタ ハケ。中位、下位は3段に立て側 方向斜面引出を行。脚部内面は上半 までヨコナヂ。以下斜方向ミガ キ。	赤彩(口縫及 び脚上半)。 (45)
7	純 口縫一 部欠損	口径 脚部径 底径 脚高 容積	6.8 6.6 2.6 4.0 0.05 長石、石英 小粒含 み。黑色一部 淡黄褐色。 良好。	口縫部短く、やや内縫氣 味に立ち上がる。脚部は 外方に張り出す。底部輪 合状の張りつけ。	口縫部ヨコナヂ。内面にタチハケ残 る。脚部外板状工具によるナヂ。脚部 内面ナヂ、底部付近タチハケ残る。	口縫外一部 保付着 外側一部剥離 (619)
8	純 充 存	口径 脚部径 底径 脚高 容積	8.0 7.4 3.4 4.4 0.07 長石小粒含 み。外側一部黃 褐色他無。	口縫部短く、広口状に外 傾する。脚部は外方に張 り出す。底部輪合状の張 りつけ。	口縫部ヨコナヂ(指痕底残る)。脚部 外板状工具によるナヂ。脚部内面 タチハケ残る。底部、脚部張り付け 残る。底部タチハケ。	口縫一部及び 内面黑色(深 ?) (616)
9	純 (純) 充 存	口径 脚部径 底径 脚高 容積	7.2 6.9 3.4 5.0 0.06 長石小粒含 み。外側一部黃 褐色他無。	口縫部短く、広口状に外 傾する。脚部は外方に張 り出す。底部輪合状の張 りつけ。	口縫部ヨコナヂ(指痕底残る)。脚部 外板ナヂ。底部、脚部接合底残る。 底部タチハケ残る。	外側黑色(深 ?) (618)



第103図 第12号住居址実測図(%)



第104図 第12号住居址出土遺物(3)

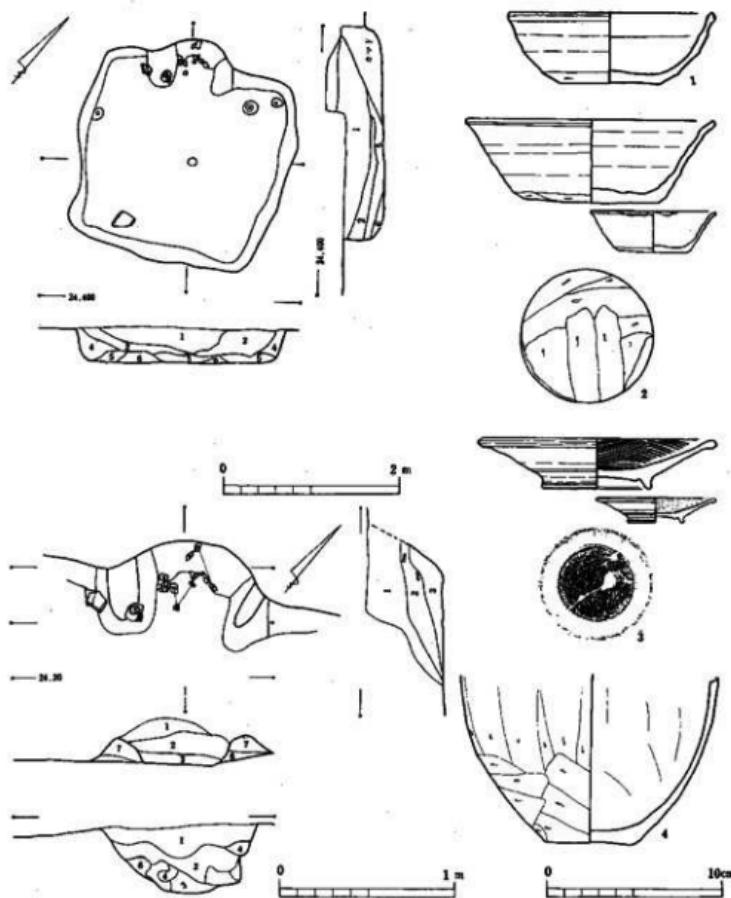
10	純 完 存	口径 胸径 底径 器高 容積	7.9 7.4 3.7 4.4 0.08	長石小粒含 外面一部黃 褐色他三褐 色。 良好。	口縁部短く、広口状に外 張する。胴部斜面で張り を持つ。底部平底の貼り つけ。	口縁部ヨコナデ(指痕残る)。 胴部ナデ。底部タテハケ残る。	(615)
11	純 完 存	口径 胸径 底径 器高 容積	8.0 6.7 3.8 4.1 0.05	長石小粒含 小砂粒直立 つ。 褐色。 良好。	口縁部短く、広口状にや や強く外張する。胴部は 外方に張り出す。底部斜 合状の貼りつけ。	口縁部ヨコナデ(指痕残る)。内面 機方向ハケ。胴部外側タテハケ後、 胴部中位にナデが入る。 底部タテハケ(6本/cm)。	器壁外側 2/3 粗削面。 (616)
12	純 完 存	口径 胸径 底径 器高 容積	7.8 6.8 3.5 3.9 0.04	長石小粒含 粒子細かい 褐色。 良好。	口縁部短く、やや内側氣 味に外張する。胴部は外 方に張り出す。底部斜 合状の貼りつけ。	口縁部ヨコナデ(指痕残る)。内面 ナメハケ残る。胴部外側及び底部 ナデ。	口縁部一部に 爆竹層、器壁 一部剥落。 (617)
13	純 口縁一 部欠損	口径 胸径 底径 器高 容積	5.8 4.9 3.2 3.7 0.02	長石小粒含 小砂粒含む。 黃褐色。 良好。	口縁部短く、やや内側氣 味に外張する。胴部はや やくコップ状。底部は 平底貼りつけ。	口縁部ヨコナデ(指痕残る)。内面 ナメハケ残る。胴部内、外側板状 工具によるナデ。	爆付層なし。 (618)
14	純 完 存	口径 底径 器高 容積	5.8 3.4 3.4 0.02	石英わずか に含む。 褐色。 良好。	口縁部短く、やや内側氣 味に外張する。胴部は直 線的に外張する。底部平 底貼りつけ。	口縁部ヨコナデ、内面ヨコハケ残る。 胴部上半板状ナデ。下半タテハケ。 内面ナメハケ。	成形が不完全 で粗糙な感 (607)
15	純 完 存	口径 胸径 底径 器高 容積	4.5 5.1 2.9 3.8 0.01	英石わずか に含む。 褐色一部 黃褐色。 良好。	口縁部短く、内傾する。 胴部は扁平で外方に張り 出る。底部は平底貼りつけ。	口縁部内面指痕残る。胴部と底部、 口縁部の接合度残る。	粘土輪積み底 を残し粗糙な 感を受ける。 (625)
16	純 完 存	口径 胸径 底径 器高 容積	5.5 6.1 3.2 3.2 0.03	長石、石英 小粒含む。 黃褐色一部 黒褐色。 良好。	口縁部短く、内傾する。 胴部は湾曲をもつて張り 出る。底部斜合状で貼り 付け部外側面不明。	口縁部ヨコナデ。内面ヨコハケ残す。 胴部外側底部付近までナメハケ。	複合破片一部 残っている。 (598)
17	小 形 丸底盛 完 存	口径 胸径 底径 器高 容積	4.5 5.0 1.8 3.6	長石、石英 小粒含む。 黑色。 良好。	口縁部短く外反する。胴 部は球形に近く、底部上 げ底。	口縁部ヨコナデ。胴部板状工具によ るナデ、底部付近にナメハケ残る。 胴部内面に指痕残る。	口縁部から胴 部の内面にかけ て赤彩。や や磨耗。 (532)
18	器 合 調部一 部欠損	口径 脚径 底径 耳孔径	8.6 3.0 11.0 11.1 1.2	長石、石英 小粒含む。 全體的に胎 土細かい。 褐色。 良好。	受け部は内側氣味に外張 し、端部をまんじるることによって面をもつ。 胴部は直線的に広がり宿 部で外反する。胴部に4 孔の穿孔を有する。	端部ヨコナデ。受け部横方向のミガ キ。脚部から受け部横方向のミガ キ。胴部内面横方向のハケ後ナデを 穿孔部付近に加える。	受け部内面 及び脚部外側 赤彩。 (620)
19	器 台 完 存	口径 胸径 脚径 器高	6.4 2.6 6.8 4.9	長石、石英 小粒含む。 淡黄褐色。 良好。	鼓状結合の形態をとる。 口縁部底つまみ上げによ って面をもつ。	口縁部、脚部基部ヨコナデ。坪体部 左上がりナメハケ、脚部上半板方 向ハケ。	(609)

(菊池 健一)

## 5. 歴史時代

### 第13号住居址(第105図、図版27)

第12号住居址の北側より検出されたもので、 $2.6m \times 2.3m - 0.4m$  の小型の住居址である。床面はソフトローム上面で軟弱であり、柱穴は径15cm・深さ10cmのものが北隅と西壁間に各1本みられる。カマドは北壁に位置し、主軸長60cm・幅100cm・壁への掘り込み25cm・煙道上昇角50°、火床の掘り込みはみられず焼成もほとんど受けていない。袖幅30cm、遺物は壺形土器2



第105図 第13号住居址実測図〔住居場所・カマド場所・遺物場所〕

高台付皿形土器1・變形土器1で、第105図1と4はカマド内の天井部崩壊土の中から、3は左袖上からの出土で、2はカマド右側前面からの出土である。歴史時代の住居址は本址1軒のみである。

(田中 英世)

第13表 第13号住居址観察表

標団号	標高 推定	法 量 (cm・g)	A. B. C. D. E. F.	器 形 の 特 徴	整 形 の 特 徴	備 考 (遺物 No.)
1	坏 土 脚 2/3残	口径 11.6 底径 5.9 器高 4.0 容積 0.34	墨色、赤色 稲谷み細い、 淡黄褐色。 良好。	体部は下半部が丸味をもつて立ち上がり、口唇部で丸味をもつ。	胴部中位から下位にかけて縦方向下にむけて底部削り後、底座周辺3段に左上リナメ方向に底部削り。底部底部削り。	内面底部付近にカーボン付着。 (25)
2	坏 土 脚 一部欠	口径 14.0 底径 7.8 器高 4.8 容積 0.36	長石小粒目 立つ。 赤褐色。 良好。	体部は外傾する。口唇部をつまみ出す。	底部及び底部外周削り。	口縁端部の一部に黒色(ターン)。(13)
3	坏 土 脚 2/3残	口径 13.2 底径 6.3 器高 2.8 容積 0.13	長石、墨色 小粒目立つ。 淡黄褐色。 良好。	体部は直線的に開き、口唇部で若干外反する。高台部は若干外反し、盤付部が若干内傾する。	底部圓軸条切り、内面ミガキ。	内黒(27)
4	坏 土 脚 脚中位 以上欠	底径 5.2	長石、小砂 粒目立つ。 暗褐色。 良好。	胴中位以下は円筒状を呈し、底部ですばまる。	胴部中位から下位に向けて縦方向に底部削り。胴下半以下底部まで左上に向かって左旋りに3段の底部削り。	(18~20)

(著者 健一)

第14表 土製品一覧表

No.	遺物名	出土地	大きさ(cm)			重 量(g)	備 考
			長 さ	幅	厚 さ		
1	土 球	I-25-b	3.5	1.7	1.7	—	脚部・荒海
2	土 球	K-26-b	—	—	—	—	肩部・千綱
3	球 状・耳 鏡	H-24-d	—	3.5	1.5	—	1/2
4	土 玉	表 探	(3.2)	(3.2)	1.7	—	1/2
5	土 球	N-25-d	4.7	4.4	1.2	35	脚部
6	土 球	N-27-d	5.0	4.6	1.3	50	脚部
7	土 球	N-27-a	5.6	5.3	1.7	55	脚部
8	土 球	K-27-d	4.5	4.4	0.6	25	脚部
9	土 球	I-26-a	3.7	3.7	1.5	45	脚部
10	土 球	K-27-b	4.6	3.9	1.1	35	脚部
11	土 球	表 探	2.7	3.5	1.0	25	脚部
12	土 球	I-24-a	3.0	3.4	1.3	25	口縁部
13	土 球	表 探	3.0	3.7	1.2	25	脚部
14	土 球	K-27-b	4.2	3.8	0.8	25	脚部

第15表 住居址一覧表

No.	調査区	規 模 (m) (長軸) × (短軸) × (深度)	形 状	主軸 方 向	時 期	出土遺物・備 考	回No
1	L-26-b	5.00 × 4.24 × 0.2	不整方形	N-49°-E	前 期 後 半	西側に土壤	2
2	K-25-a	3.40 × 2.90 × 0.23	不整方形	N-32°-W	浮 着 Ⅲ	石鏡(92-5)・伊なし	3
3	I-25-c	4.90 × 2.70 × 0.30	不整方形	N-72°-W	諸 種 Ⅲ	石鏡(94-35-36)・伊なし	4
4	H-22-d	4.90 × 3.90 × 0.25	方 形	N-62°-W	前 期		5
5	H-24-b	6.60 × 5.27 × 0.23	横 円 形	N-25°-W	加曾利Ⅱ	石鏡(94-18-29) 圓石(95-55)	6
6	F-22-b	2.90 × 3.00 × 0.18	方 形	N-51°-E	黑 沈	石鏡(94-12)・伊なし	7
7	P-23-d	3.20 × 3.20 × 0.30	方 形	N-74°-W	前 期 後 半		14
8	N-25-c	5.93 × 6.50 × 0.20	不整横円形	N-85°-W	加曾利Ⅱ		12
9	J-27-s	4.90 × 4.60 (推定)	不整方形	—	前 期 後 半		15
10	I-26-a	6.00 × 6.00 (推定)	不整横円形	—	横 / 内 I		13
11	M-27-d	2.88 × 2.58 × 0.50	方 形	N-46°-W	五 類		10
12	G-22-d	5.60 × 2.80 × 0.56	方 形	N-51°-E	五 類		1
13	M-27-a	2.28 × 2.56 × 0.40	方 形	N-20°-W	圓 分		9

第16表 土 壤 一 覧 表

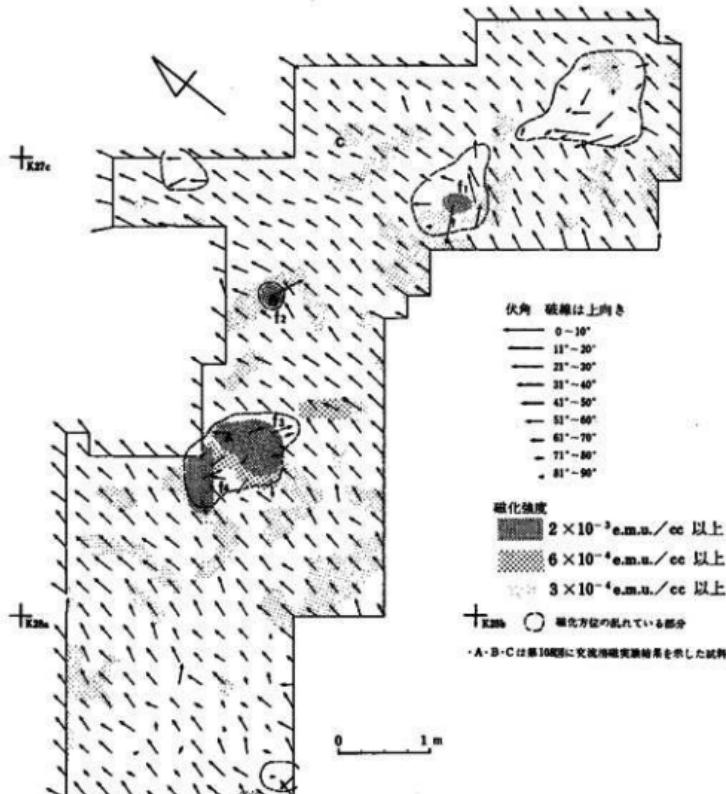
No.	調査区	規格 (長軸)×(短軸)×(深度)	形 状	主軸方向	分類	出 土 物	備 考	田 No.
1	J-22-b	1.70 × 1.30 × 1.90	椭円形	N-75°-E	A-1	(石器)・黒		1
2	H-19-b	2.15 × 1.60 × 2.35	椭円形	N-65°-W	A-1			41
3	M-26-b	1.85 × 1.60 × 0.30	方 形	N-40°-W	B	箭末・加E		3
4	I-26-a	2.65 × 2.30 × 0.18	円 形	—	—	浮・加E		4
5	H-24-a	2.00 × 1.14 × 0.73	方 形	N-65°-E	A-2			5
6	O-26-b	1.35 × 0.65 × 0.30	椭円形	N-60°-W	C	青		—
7	G-22-d	1.70 × 1.50 × 0.54	円 形	N-70°-W	B	諸・浮		7
8	D-17-d	1.45 × 1.05 × 1.66	椭円形	N-18°-W	A-1			44
9	I-24-d	2.20 × 1.80 × 2.07	椭円形	N-50°-E	A-1	浮・青		9
10	J-24-c	1.62 × 1.15 × 2.21	椭円形	N-82°-W	A-1	諸・加E		10
11	H-23-d	1.80 × 0.70 × 1.15	—	—	—	黒	風倒木底により半埋	13
12	G-19-c	2.15 × 1.40 × 1.80	椭円形	N-45°-E	A-1			18
13	J-20-b	1.40 × 1.05 × 2.00	椭円形	N-18°-W	C			20
14	I-25-b	2.30 × 1.20 × 0.44	椭円形	N-75°-W	C	五・青		14
15	I-25-b	1.20 × 0.85 × 0.25	円 形	N-24°-W	C			15
16	F-21-b	2.07 × 1.54 × 2.33	椭円形	N-70°-E	A-1	黒・浮・鉛		16
17	F-21-b	2.13 × 1.75 × 2.17	椭円形	E-W	A-1	諸		17
18	C-14-a	1.70 × 0.85 × 0.60	椭円形	N-22°-E	C			22
19	F-16-a	1.35 × 1.05 × 1.45	椭円形	N-38°-W	A-1			19
20	O-26-b	1.40 × 1.10 × 0.45	椭円形	N-23°-W	B			27
21	C-15-a	1.20 × 0.85 × 0.55	円 形	N-53°-W	B			21
22	M-13-c	3.35 × 1.00 × 1.60	椭円形	N-30°-W	A-3			36
23	P-13-b	2.20 × 1.80 × 1.52	椭円形	N-53°-E	A-1			40
24	L-15-a	1.75 × 1.25 × 1.60	椭円形	N-70°-E	A-1			24
25	K-15-a	2.00 × 1.45 × 2.25	椭円形	N-48°-E	A-1			25
26	K-15-b	1.68 × 1.30 × 1.58	椭円形	N-53°-E	A-1			26
27	P-25-d	1.10 × 1.10 × 1.40	椭円形	N-53°-E	A-1	加E		38
28	G-23-c	2.40 × 1.43 × 1.10	椭円形	N-74°-E	A-1			28
29	O-26-d	—	—	—	—	加E	風倒木により半埋	13住
30	P-24-a	2.00 × 1.70 × 0.50	椭円形	N-38°-W	B	加E		30
31	N-28-a	2.00 × 1.40 × 1.40	椭円形	N-71°-E	C			31
32	J-25-a	1.30 × 1.25 × 0.75	円 形	N-38°-W	B	諸		32
33	J-17-d	1.90 × 0.74 × 1.27	方 形	N-68°-E	A-2			45
34	O-25-d	1.55 × 1.45 × 0.56	円 形	N-57°-W	B	(石器)・浮・加E		34
35	K-12-c	2.14 × 1.80 × 2.40	椭円形	N-56°-E	A-1			35
36	K-13-d	2.50 × 1.60 × 1.10	方 形	N-63°-E	A-2			37
37	M-26-a	1.40 × 1.10 × 0.40	椭円形	N-52°-E	B	諸		39
38	E-15-b	1.20 × 0.80 × 0.60	円 形	N-12°-E	C			33
39	J-27-b	2.50 × 1.95 × 2.06	椭円形	N-50°-E	A-1	黒・浮・鉛水・浮E		2
40	K-28-b	3.00 × 0.60 × 1.20	方 形	N-35°-W	A-3			42
41	K-23-a	3.34 × 0.45 × 1.02	方 形	N-38°-W	A-3			43
42	K-27-a	3.45 × 0.45 × 1.10	方 形	N-15°-E	A-3			12
43	O-24-c	1.70 × 1.20 × 1.93	椭円形	N-74°-E	A-1	浮		33

### III 第4地点におけるローム層の古地磁気測定

会田 信行

#### はじめに

ローム層は褐色に風化した火山灰層であり、その古地磁気は堆積残留磁化を示すと一般的に考えられているが、その磁化機構はよくわかっていない。最近になってローム層の中からも肉眼で判別できない炉跡・焚火跡等の位置決定を古地磁気測定によって行なおうとする試みがなされている（真鍋 1985, 安川他 1985, 真鍋 1986）。炉跡の土壌が加熱されることにより、より大きな磁化強度をもち、しかも安定性の高い熱残留磁化を得ることによって、まわりの堆積土から区別出来るためである。

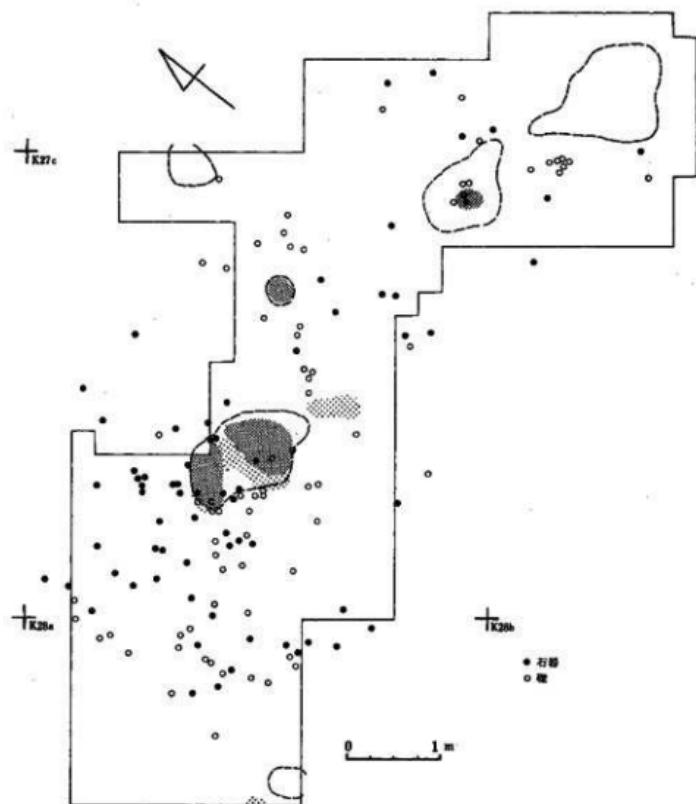


第106図 自然残留磁化方位と磁化強度〔3〕

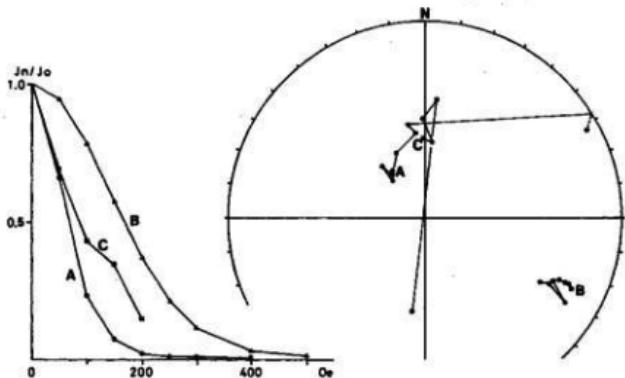
子和清水遺跡においても、疊群の伴った第4地点において土壌（ローム層）を採取し炉跡位置の推定を試みることにした。疊群直下（ATを含む第VI層の上面付近）をサンプリング層準とし、石器の検出された範囲に25cmの方眼を設定して495個の試料を採取した。測定の結果、磁化強度の違いから炉跡の位置を推定したので報告する。

#### 試料採取方法と測定

市販されているポリカーボネイト製のサンプリングケース（1インチ立方）をローム層に垂直に押し込んだ後、上面に磁北の方向を記入し、ローム層から取り出す。ケースに蓋をした上で、ケースごと測定する。測定には北海道大学理学部のスピナー磁力計を使用した。さらに測定結果の信頼性を確かめるために交流消磁実験を行った。



第107図 古地磁気測定結果と石器の分布状況(%)



第108図 交流消磁実験結果 交流消磁に伴う磁化強度の変化(左)と磁化方位の変化(右)

A・B・Cの試料採取は第106図

### 測定結果

得られた偏角・伏角・磁化強度を第106図に示した。ほとんどの試料が現在の北の方向に近い偏角を示すほか、伏角は $+50^\circ \sim +60^\circ$ である。これはローム層の磁化が粘性残留磁化であることを暗示させる。しかし、破線で囲んだ部分は偏角・伏角がまわりの試料とは異なり、さまざまな方位を示している。逆帶磁を示す試料も2つある。

磁化強度は大部分が $0.5 \sim 3.7 \times 10^{-4}$  emu/cc であるが、4地点(f1~f4)10試料でその10倍~100倍の強い磁化( $2.4 \sim 35.2 \times 10^{-3}$  emu/cc)をもっている。第106図では磁化強度が $3 \times 10^{-4}$  emu/cc以上、 $6 \times 10^{-4}$  emu/cc以上、および磁化強度特に強い試料( $2 \times 10^{-3}$  emu/cc以上・f1~f4)に分けてスクリーントーンで示した。磁化強度特に強い試料の磁化方位は周囲のものとは異なる方位を示している。

交流消磁実験結果を第108図に示した。A・Bは磁化強度特に強い試料である。Aの磁化方位は最大交流磁場150エルステッド(oe)までほとんど変化しないが、200~300oeで多少変化する。さらに400oeで大きく移動し、逆帶磁となる。Bは500oeまで消磁してもほとんど変わらない。非常に安定性のよい試料といえる。一方、Cは $3 \times 10^{-4}$  emu/ccの磁化強度をもつ試料である。150oeまではあまり変化しないが、200oeで大きく変化し、南偏角となる。

図には3試料の結果しか示していないが、磁化強度の大きい試料は交流消磁の結果は安定であり、熱残留磁化を示しているものと思われる。いちばん東寄りの破線で囲まれた部分などでは、500oe消磁で破線外の部分の結果と調和的な結果が得られることからすると、それほど磁化強度の大きくない試料は二次的な弱い磁化が付着しているものと考えられる。

## 考 察

古地磁気測定を行った試料のうち、磁化強度の特に強い試料は4地点から10個である。それらは安定性も高く、試料の獲得した磁化が熱残留磁化であると推定される。4地点のうち、2地点(f1・f2)は各1試料のみであり、これが炉跡であるかどうかは判断が難しい。炉跡の可能性が高いのはf3とf4の2地点である。この2地点は接近しており、しかも周囲にやや強く磁化した部分を伴っていることから、1つの炉跡の可能性が高い。馬場塙A遺跡では、炉跡と考えられる範囲の磁化方位はそういうことが報告されている(真鍋1985)が、本遺跡ではさまざまな方位を示す(ただし北向きの試料は少ない)。伏角が負の逆帶磁を示す試料も含まれていることから、炉形成の後、炉が乱されたものと推定される。

## IV ま と め

### 1. 旧石器時代

#### ・石器群の編年的位置付け

各地点ごとの出土層位および石器の形態的特徴によって次の4期に分けられる。

第1期……第7地点

第2期……第4・第5・第6・第8・第10地点

第3期……第3地点（第9地点）

第4期……第1・第2地点

田村・横本（1984）による千葉県下の旧石器時代の編年案に従えば、当遺跡の第1期はⅡa期に、第2期はⅡb期、第3期はⅡc期、第4期はⅢb期後半に相当する。

第1期は局部磨製石斧や縦長剥片を素材としたナイフ形石器などを本来組成しているものと考えられる。第7地点の資料はその一端を示しているものであり、平坦打面の縦長剥片が特徴的である。

第2期は最も多くの石器群が残された時期である。第5地点と第6地点はともに角錐状石器を伴出しており、石材も一部に共通性があり、また位置的に近く、密接な関連が考えられる。第4地点では砾群が検出されている。

第3期は資料数が少ないが、石器の出土層位および尖頭器が伴うことから武藏野台地のⅣ層上部の石器群に対応すると考えられる。第9地点もこの時期のものと考えておきたい。なお、F16dグリッド付近には図示した資料（第36図1・3）以外にも剥片が検出されており、この時期のブロックが存在した可能性が大きい。

第4期は旧石器時代の最終末から縄文時代の初頭にかかる時期である。第1地点で得られたような石器群が縄文時代のものかそれとも旧石器時代のもののかは見解がふたつに分かれていていわゆる本ノ木論争として知られている（芹沢・中山1957、山内・佐藤1962）。千葉県下での類例は、南大浦袋遺跡（戸田1973）・両国沖Ⅲ遺跡（篠原1982）・元削遺跡No.1地点（田村1986）・赤三郎第2遺跡（田村・横本1984）などがあり、いずれの遺跡においても共伴関係にあると考えられる土器は検出されていない。しかし、同様の尖頭器群が検出されている神奈川県寺尾遺跡（鈴木・白石1980）・東京都前田耕地遺跡（秋川市教育委員会1970）・長野県中島B遺跡（大竹1987）では土器の種類は異なるが、土器の共伴が報告されている。

該期の編年は非常に複雑な問題をかかえているが、この問題解決のためには単に土器の共伴関係を問題にするのではなく、遺跡の性格と遺物の残されたを改めて検討してゆくことから始めなければならない。検出されてもその量は僅少であることの多い該期の土器資料は、検

出機会が偶然に左右される部分もかなり多く、発掘調査における共伴・非共伴という所見は資料の構成と遺跡の性格の分析を経たうえで意義付けを行う必要がある。

#### ・石器群の平面分布研究について

平面分布の研究においては、まず第一に分布の形成プロセスの解明と遺跡内での場の特定化が重要なテーマであると考えられる。分布の形成プロセスとは、発掘調査によって現れるそれぞれに固有の分布状態をもつてゐる石器群が、いかなる過程を経て形成されたかということである。現在の研究は個体別資料の分析が主眼となっているが、平面分布が直接的に人間行動を反映する以外に、遺物が人間によって残されて以後の自然環境下の影響も十分に考慮しなければならない。平面分布についての遺棄と廃棄に大別する考え方（岡村 1979）は最も基本的なモデルでもあるが、実態はより複雑であろうからより多くのモデルが必要になってくる。また、石器製作実験（阿子島 1985、佐藤 1986）は分布の理解に大きな手がかりとなる。

場の特定化というのは、例えば炉跡であるとか、明らかに石器製作を行った場所や、可能なら住居址などの遺構を検出し、より具体的な場の機能を明らかにすることである。平面的分析にあっては、このような座標の原点ともなるべきものを設定するのが有効であろう。南関東では今のところ旧石器時代の遺構を検出するのは困難である。したがって、遺構の欠落を埋めるためのより詳細な情報が必要となる。具体的に述べるなら炭化物や焼土などの火を用いた痕跡、土壤の水洗選別によって得られる碎片、さらにはより細かな微細碎片 Microdebitage (Fladmark 1982)、赤色砂岩 (山下 1985) や古地磁気などの土壤中に残された痕跡である。炉跡や石器の製作場といった特定の性格をもつた地点と遺物の分布状況とを合わせて分析を行ってゆくことによって、平面分布研究はさらに内容が豊かなものとなる。

以上の観点に立って、子和清水遺跡においても、第4地点では古地磁気測定による炉跡の推定、第5地点では微細遺物の水洗選別を行った。第4地点では、炉跡と考えられる場所が1ヶ所検出されている。2ヶ所の磁化の強い部分からなっており、これがひとつの炉跡であるとすると、やや大型の炉と思われる。遺物の分布とはずれており、ここで砾が焼かれた可能性もあり、砾群の使用法を知る手がかりとなるであろう。

これまでに行われた3つの測定例 (安川他 1985、真鍋 1985・1986) では、炉と推定されている場所は石器群の中心部ではなくて周辺部にあると報告されている。炉は遺跡においてかなり重要なものであると考えられ、今後測定例を増やして詳しく比較検討していく必要がある。古地磁気による炉跡の推定は、ローム層自体の動きが考えられる南関東では初めての試みであったが、有効性がある程度確認できたと言えるだろう。

第5地点では碎片とともに微細砾が回収された(第21図)。微細砾の分布は石器の分布とずれる傾向があり、人間行動と何らかの関連があると考えられる。また、赤化していると思われ

るものも認められたが、ローム中に含まれる赤色を呈した岩片との区別が困難なので、小礫および岩片の数量の表示にとどめた。

旧石器時代の調査の場合、単に調査によって遺物を“回収”することを目的とするのではなく、遺跡においてできる限りの情報を集めることに努め、遺跡内での人間行動の復元をより精密に行ってゆくことが必要である。今回の報告ではその一端を示すにとどめたが、遺跡での人間活動をより具体的に明らかにしてゆかねばならないと考えている。（築瀬 裕一）

## 2. 繩文時代

子和清水遺跡から検出された住居址は前期後半から末葉7軒、中期後半2軒、後期前半1軒の計10軒であり、この他に晩期の遺物集中地点が4ヶ所検出されている。ここでは前に分類した晩期の土器を出土地点により再構成して（第9表）時期的変遷を追ってみたい。なお浮線文土器の分類は長野県内の土器を3群に分けた石川日出志氏の分類（石川 1985）に従う。

先に分類した第X群土器のうち第3類B種とD種の一部の土器が荒海式である他は千綱式・氷1式の範疇に入り、石川氏による浮線文土器の第2群土器・第3群土器が主体を占める。

第1地点：I-23・24グリッドを中心とした地点で、104の浮線文土器は第2群土器の典型的なものであり、198の口外帶を有する三角連繋文の粗製土器はより新しい段階のものである。

第2地点：I-25・26・27グリッドを中心とした地点で、105のように浮線文土器の第3群土器に位置付けられるものや、155のような第2群に含まれる浮線文土器がみられる。なお119は105に伴う土器であろう。第2地点からは浮線文土器の他に荒海式土器（第3類B種）の出土もみられ、その分布は第1地点と一部重なる。子和清水遺跡から出土している荒海式土器の土器組成は浅鉢類等の精製土器を欠いており、今後の課題を残している。第2地点出土の粗製土器は撚糸文・細密条痕文・条痕文と多種類にわたっており、撚糸文：条痕文の割合は2：3で条痕文が勝っている。なお第91図1の土偶は荒海式土器に伴うと思われる。

第3地点：台地の縁辺部K-26・27、L-26・27グリッドを中心とした地点で、145・147・149のように第1群土器の名残りである精円文がみられる土器や、150・151・159・160のように第3群土器に含まれるものなど時間的な幅がみられ、146の三角連繋文や164の浅鉢が浮線文土器の中で最も新しい段階のものと思われる。当地点は壺形土器の出土も多く見られる。粗製土器は撚糸文と条痕文との割合が3：2で撚糸文の方が多くなり、第2地点とは逆転する。その中で214～216のような貝殻条痕文土器の出土は注目される。土器の他には第91図2の土偶と第98図76の石棒および77の独鉛石が出土している。独鉛石と石棒は同一グリッドから出土し、隣接したグリッドから土偶が出土している。第3地点は比較的広い範囲にわたっており、今後の検討では更に2地点に分かれる可能性がある。

第4地点：南側斜面で遺物の纏まつた出土はみられないが、復元可能な土器が数個体出土し

ている。144 の土器は荒海貝塚・殿台遺跡から出土しているもので 167 の土器と共に第 2 地点とほぼ同じ時期とみることができる。なお図示していないが、同地点からは殿台遺跡第Ⅳ群土器とされた羽条沈線を有する土器も出土している。

他に第 1 号住居址周辺から 148 と 181 が、西側の台地縁辺部からは晩期終末から弥生初期に属すると思われる 188 の土器が 189・190 と共に出土している。このように第 1 地点は石川氏の分類で第 2 群土器、第 2 地点では第 2 群・第 3 群土器および荒海式土器、第 3 地点では第 2 群土器・第 3 群土器、第 4 地点では第 3 群土器に相当する土器が各々主体を占める。

南関東においては晩期終末の纏まつた資料の報告例は少なく、杉田遺跡・殿内遺跡の浮線文土器と比較しても重層する文様が少ない等、殿内遺跡により近い様相を示しており、浮線文土器の後半の時期に位置付けられる。荒海式土器は少ないながらも纏まつた資料であり、文様のモチーフに片寄りが見られる。188 の土器は殿内遺跡第 1 号小堅穴出土の土器に類似することは荒海貝塚で指摘されており、130 の土器とともに弥生土器に繋がる土器として注目される。

子和清水遺跡においては縄文時代前期後半から中期初期にかけての良好な資料も出土しており、今後石器組成等も含めて改めて検討したい。  
(田中 英世)

### 3. 古 墓 時 代

今回の子和清水遺跡の調査では古墳時代前期に属する住居址が 2 軒検出されている。

#### 第 11 号住居址

当住居からは 1.6m の台付甕 1 点と、0.2m 未満の小型土器 10 点が検出された。出土土器には各個体ごとに南関東地方の弥生時代後期から古墳時代初期まで通有に認められる在地的特徴と、古墳時代初期から一般的になる他地域の系譜をひく外来的特徴の他に、それ以外の特異な特徴が認められる。外来的特徴としては以下の特徴が小型土器に認められる。

1. 北陸的特徴 口縁が「5」の字状を呈し、胴部は倒卵形、底部は輪台状を呈する。

第 102 図—2・3・4・5

2. 縦内の特徴 口縁が「く」の字状に外反し端部に面をもつ。胴部は球形で底部は輪台状。

第 102 図—6・8・9・10・11

1 は北陸地方の有段口縁の甕、2 は近畿地方の庄内式から布留式にかけての系譜が迫れるが、文様としての赤彩を施したり、口縁部や胴部に棒状の沈線や隆線を入れたり、口縁の一部を刻み、胴部に貼り付けを施す等、他の地域ではみられない装飾が当住居の土器にはみられる。

土器に赤彩を施すことは南関東地方の弥生時代後期に認められる特徴であるが、棒状の沈線や隆線の貼り付けは当地域にあっても特異な文様である。以上の装飾を加えないより縦内の系譜に近い土器としては 6、北陸の系譜に近い土器としては 4 があげられる。

関東地方では、古墳時代の初期に、技法上・形態上から畿内・北陸等の地域からの影響や東海地方の影響を受けた土器がかなりみられ、中にはそれらの地域からも持ち込まれたと思われる土器もある。しかしながら当住居址出土資料は厳密な意味では畿内・北陸地域の土器の複製品と規定できない。当遺跡ないし当遺跡周辺で製作された段階で、新しい形・技法の模倣とともに從来の土器にみられる赤彩手法に新しい文様を組み合わせるという傾向があり、遠隔地域の形を地域の中で変容させたものと考えられる。

型式概念の中におきかえると当住居址出土土器は畿内布留Ⅰ式と対比して五領Ⅰ式とされる。

#### 第12号住居址

当住居から出土した土器は広口壺1・0.1~0.6㍑の小型丸底壺2・0.4㍑の鉢2・0.1㍑未満の碗11・高杯1・小型器台2の計19点に及ぶ。時期は小型精製土器群（小型丸底壺・小型丸底壺・小型器台）と高杯が共存するため五領Ⅰ式ととらえられる。五領式と布留式が深い関係にあることは既に指摘されており、当住居址出土遺物は布留Ⅱ式の影響を受けている。しかし、製作技法上からみると、3・8・9・12・16の碗の底部が輪台風であり、装飾上では1・6・17・18の広口壺・鉢・碗・器台の各1点が赤彩されている。出土土器で赤彩という文様、輪台状の底部という布留式には含めにくい特徴をもつのは、布留式の影響下に成立した小型精製土器をもちらがらも、技法上・装飾上の地域性として考えられる。

#### ま と め

最後に遺跡内での2軒の位置について触れてみたい。

1. かなり大規模な発掘調査にもかかわらず、当該期の遺構は2軒のみである。
2. 2軒の住居は同じ古墳時代前期でも若干の時間差がある。
3. 2軒とも土器の組成上からみると小型土器が5割から9割を占める。
4. 第11号住居出土の台付甕には煮沸痕跡がほとんどない。

以上の点から遺跡内で2軒は時を同じくして存在した可能性は少ない。また2軒とも土器組成上煮沸具である甕の比率が低く、貯蔵用具である壺も第12号住居址に1点認められるのみである。これに対して供獻用の土器がその大半を占め、割合は1:9ないし1:5に及ぶ。以上の点より集落の本体からはずれた位置に独立して単期間形成された住居であり、儀式の場とも考えられる。

（菊池 健一）

今回の調査・報告では、会田容弘・青木幸一・青沼道文・阿部朝衛・飯島義雄・石川日出志、織笠明・梶原洋・白井久美子・中山吉秀・橋本勝雄・原田昌幸・山田晃弘・渡辺昌宏の各氏および東北大学考古学研究室等の諸機関より助言・協力を賜った。記して感謝申し上げる。

## 引用参考文献

### 〈旧石器時代〉

- 秋川市教育委員会 1979 『前田耕地遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
- 阿子島香 1985 「石器の平面分布に関する静態と動態—実験的研究—」『東北大学考古学研究報告』1 東北大学考古学研究室
- 大竹恵昭 1987 「中島B遺跡」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書1』
- 佐藤宏之 1980 「石器製作空間の実験考古学研究 遺跡空間の機能・構造探求へのアプローチ」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』IV 東京都埋蔵文化財センター
- 篠原 正 1982 「両国沖遺跡発掘調査報告書」富里村教育委員会
- 鈴木次郎・白石浩之 1980 「守尾遺跡」神奈川県教育委員会
- 芹沢長介・中山淳子 1957 「新潟県津南町本ノ木遺跡調査予報」『越後研究』12号
- 高井戸東遺跡調査会 1977 「高井戸東遺跡」
- 田村 隆・横木勝雄 1984 「房総考古学ライブリーI 先土器時代」千葉県文化財センター
- 田村 隆 1986 「元刻造跡」『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』千葉県文化財センター
- 戸田哲也 1973 「千葉県南大浦袋遺跡の調査」『考古学ジャーナル』78号
- 真鍋健一 1986 「馬場塙A遺跡第20層上面の残留磁気測定」『馬場塙A遺跡』
- 真鍋健一 1987 「青葉山遺跡B地点5層上面の残留磁化の測定」『東北大学埋蔵文化財調査年報』2
- 安川克己・井口博夫他 1985 「古地磁気を利用して旧石器時代の焚火跡の推定」『シンポジウム 旧石器時代の人間と自然』兵庫県教育委員会
- 山下弘樹 1985 「水洗選別による微細遺物の検討」『広野北遺跡発掘調査報告書』
- 山内清男・佐藤達夫 1962 「縄文土器の古さ」『科学読売』12-13
- Fladmark, K. R. 1982 "Microdebitage Analysis: Initial Considerations" Journal of Archaeological Science 9

### 〈縄文時代〉

- 愛知県考古学講話会 1985 『<条痕文系土器>文化をめぐる諸問題 一縄文から弥生一』
- 朝比奈竹男他 1979 『桐ヶ谷新田遺跡』桐ヶ谷新田遺跡調査会
- 石川日出志 1985 「中部地方以西の縄文時代晚期浮線文土器」『信濃』第37巻4号
- 伊藤信雄・須藤 隆 1985 『山王跡遺跡調査図録』宮城県一迫町教育委員会
- 柿沼修平・青木幸一 1984 「千葉県下総町龍正院(大原野)貝塚の調査」『奈和』第21号
- 群馬県考古学講話会他 1983 「東日本における黎明期の弥生土器」『第4回三県シンポジウム』
- 埼玉県教育委員会 1980 『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘報告X-甘粕山一』
- 設楽博己 1982 「中部地方における弥生式土器の成立過程」『信濃』第34巻4号
- 杉原莊介・戸沢充則 1963 「神奈川県杉田遺跡及び桂台遺跡の研究」『考古学集刊』2-1
- 杉原莊介・戸沢充則他 1969 「茨城県殿内(浮島)における縄文・弥生同時代の遺跡」『考古学集刊』4-3
- 杉原莊介・大塚初重 1974 「千葉県天神前における弥生時代中期の墓址群」

- 鈴木公雄 1963 「千葉県山武郡横芝町山武続山貝塚に於ける晩期縄文土器について」『史学』  
36-1
- 鈴木公雄・林謙作編 1981 『縄文土器大系4 晩期』
- 鈴木正博 1985 「『荒海式』生成論序説」『古代探査Ⅱ』
- 長野県教育委員会 1969 「御社宮司遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—茅野市5』
- 田部井功 1985 「縄文晩期・浮線文土器の研究—文様の構造と系統について」『古代探査Ⅲ』
- 寺門義範 1979 『大多喜町細之内上の台遺跡』 千葉県夷隅郡教育委員会
- 寺村光晴・谷川章雄 1986 「玉作」『千葉県生産遺跡詳細分布調査報告書』
- 中村五郎 1982 『東日本における畿内第1様式に並行する土器』
- 永峰光一 1969 「水遺跡の調査とその研究」『石器時代』9
- 西村正衛 1985 「石器時代における利根川流域の研究—貝塚を中心として—」
- 藤下昌信・喜多志介他 1984 「千葉県成田市殿台遺跡の調査」『奈和』第22号
- 渡辺修一 1986 「関東地方における弥生時代中期前半の地域相」『千葉県文化財センター  
研究紀要』10

# 房 地 遺 跡

# I 調査の概要

房地遺跡の発掘調査は、昭和60年7月17日より昭和60年12月12日にかけて実施された。調査対象地は、前年度千葉市教育委員会により実施された確認調査の結果にもとづき、事業地内の2地区であった。この確認調査においては、「本郷向遺跡」として調査が行われたが、本調査の時点では、事業地中央に西から東へ谷が存在し、この谷が農耕処理場として埋め立てられていましたことが明らかとなつたため、本郷向遺跡のI区を「房地遺跡」と改めて実施した。また本郷向遺跡II区は、確認調査において近世以降の溝状遺構のみであったため、暫定的に房地遺跡II区として取り扱うこととした。

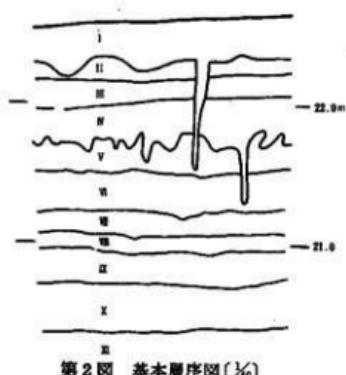
## 1. 調査の方法

グリッドは確認調査時のものを使用することとして、磁北方向にX軸をとり、これに直交するY軸を設定し、10m方眼の基本区を設けた。この基本区を4分割して5m方眼の調査区とし、この調査区により調査を実施した(第3図・第4図)。

I区においては、包含層中から晩期を含む幅広い時代の遺物が多量に出土したが、検出された遺構が少ないと本遺跡の性格を考えて、包含層遺物及び遺構出土遺物については全てドットマップを作成した上で取り上げることとした。実測は簡易通り方測量を基本として行った。

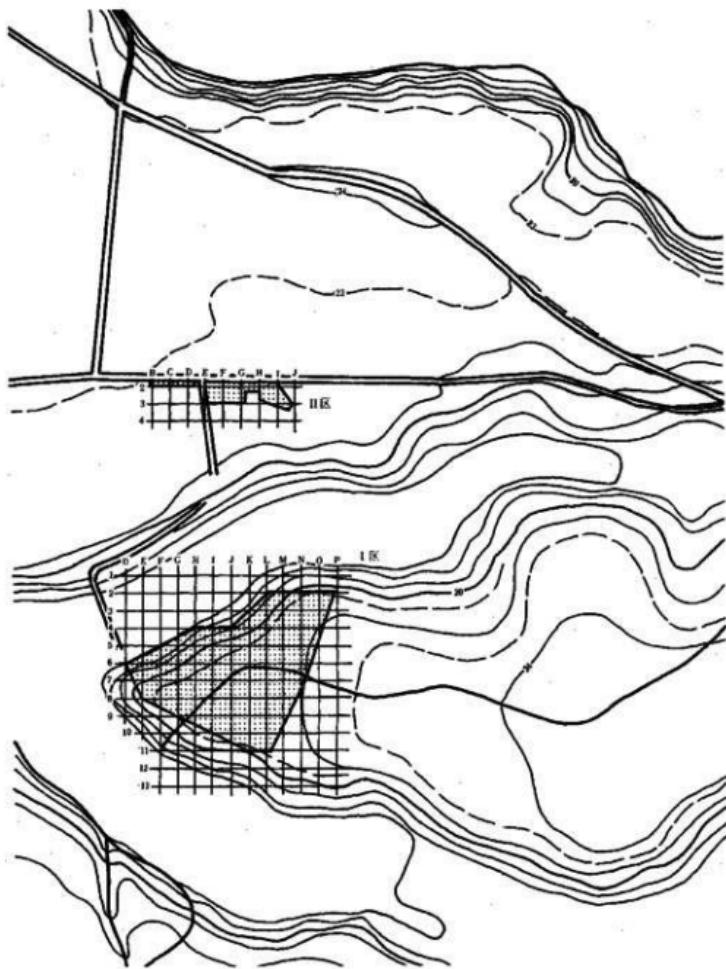
## 2. 基本層序(第2図・図版28)

I区I-4-aグリッドの土層である。I : 表土層 (7.5 YR 4/4)。II : 明褐色土層 (7.5 YR



5/8) いわゆる新期テフラ相当層である。この下部からⅢ層上部にかけて縄文時代晩期及び弥生時代の土器が検出される。Ⅳ : 暗褐色土層 (7.5 YR 4/6) 縄文時代包含層。台地中央では、30~40cmの厚さを持ち、やや黒色を帯びる。

Ⅴ : 黄褐色土層 (10 YR 5/6) ソフト・ローム層。Ⅵ : 黄褐色土層 (10 YR 5/6) ブロック状を呈し、武藏野台地第1黒色带相当層と考えられる。Ⅶ : 明褐色土層 (10 YR 6/8) 乾燥して白濁しやすい性質をもち、火山ガラスを多く含むAT相当層。Ⅷa : 黄褐色土層 (10 YR 5/8) スコリアをやや多く含み、部分的にやや暗い色調をもつ、第2黒色帶上部に相当。Ⅷb : 黄褐色土層 (10 YR 5/8) Ⅷa層との識別は困難であるがややオレンジ色を呈したブロックをわずかに含む。Ⅷc : 黄褐色土層 (10 YR 5/6)



第3図 周辺地形図・グリッド設定図(1/500)

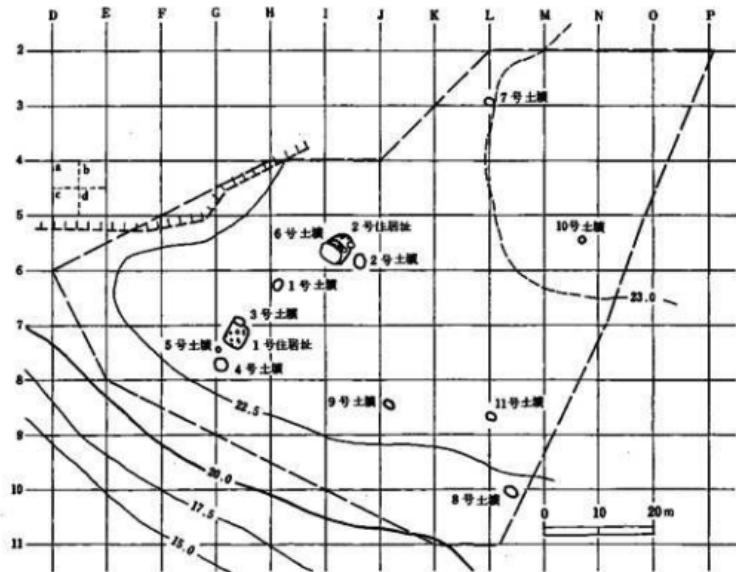
粘性が強く暗い色調をもつため、図b層とは容易に区別される。図c層：黄褐色土層(10 YR 5/8)スコリアをわずかに含み、図c層より明るい色調をもつ。図d層：にぶい黄褐色土層(10 RY 5/4)やや灰色を帯び柔らかくなる。スコリアをほとんど含まない。本層より武藏野ローム。

(注) 土色については「新版標準土色帖」農林省農林水産技術会議事務局監修による。

### 3. 遺跡の概要

本遺跡は、小中台・稻毛をへて東京湾へ流れる小河川の支谷に挟まれた西へ張り出す舌状台地上に立地し、調査地区はこの先端部に位置している。また、北には花見川の支谷である横橋支谷が迫り、これに面して本郷向遺跡が展開している。

調査によって検出された遺構は、I区からは縄文時代前期後半及び中期後半の住居址2軒、縄文時代の土壙11基（うち陥穴3基）、II区からは、近世以降と思われる溝2条であった。しかしながら、I区包含層中からは、先土器時代彫刻刀1点・縄文時代草創期の有舌尖頭器1点・尖頭器3点をはじめ、縄文時代前期後半・中期後半・後期・晚期・弥生時代中期・古墳時代前期の土器及び石器類が多量に出土している。遺構を伴わない各期の土器は、それぞれに集まりをもって出土しており、本遺跡の特色といえよう。出土遺物は、量的には前期後半及び後期の土器が多く、前期のものは第1号住居址を中心に分布している。また、後期の土器は、J-8区、K-8区から集中的に出土している。中期後半の土器は量的に少なく調査区の南側より出土している。晚期の土器は、前浦期のものがG-7区付近から出土し、千綱期のものはN-3区・J-8区から比較的まとまって出土しているが、その他は調査区東半部に希薄な分布が認められた。弥生時代の遺物は、J・K-4区の周辺に集中して検出されている。古墳時代前期の遺物は調査区北側に偏在しており、弥生時代よりやや広い範囲で検出された。

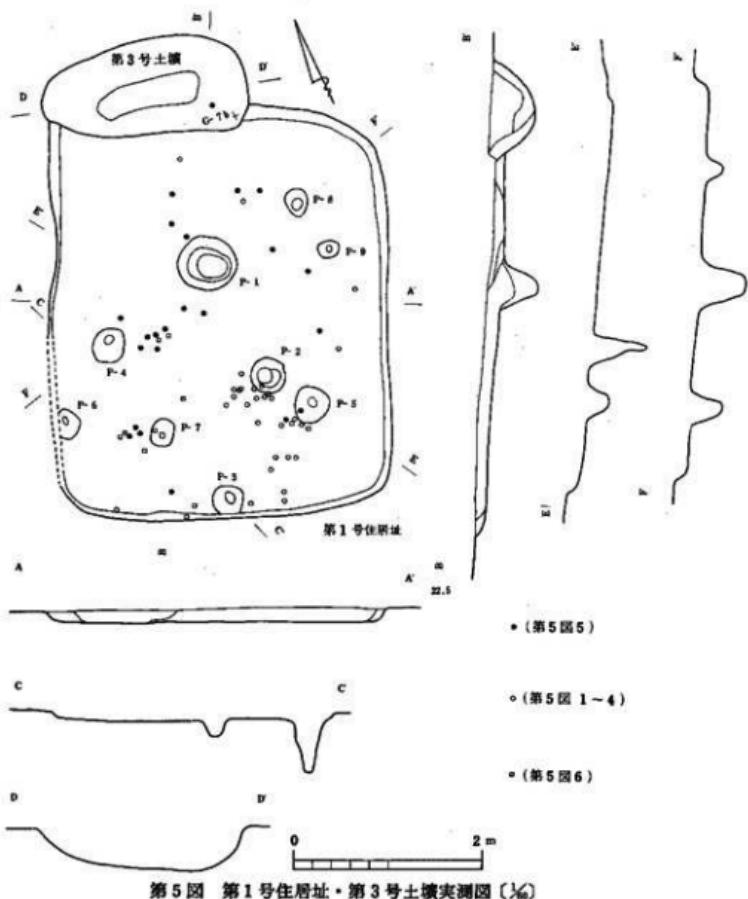


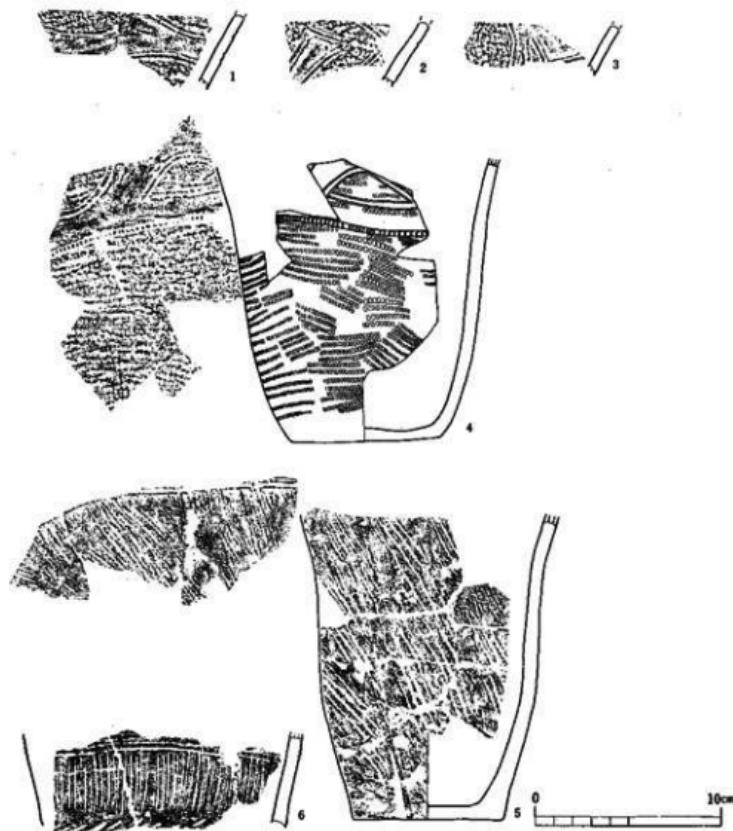
## II 遺構と遺物

### 1. 遺構と出土遺物

第1号住居址（第5図・6図、図版29）

台地先端部のG—6—c, G—7—a・b・cグリッドより確認調査において検出し、本調査に





第6図 第1号住居址出土遺物(%)

において精査した。遺物はⅢ層中から集中が見られたが、プランはⅣ層上面において確認された。覆土は、暗褐色土と明褐色土の混在する土層で、壁ぎわでローム粒子が多くなる。主軸方向はN-23°-Eである。プランは4.4m×3.6mの隅丸長方形で北西コーナを第3号土壙によって切られている。深さは確認面で約15cmで、立ち上がりは緩い傾斜をもつ。炉址は検出されなかった。柱穴は9本検出されたが不規則な配列である。床面は擾乱を多く受けているが、P-8、P-7、P-3付近で固くしまった部分を確認できた。

(出土遺物)

1～4は同一個体で、腹部上半が大きく外反する器形で、地文にはR Lの構文が横走する。

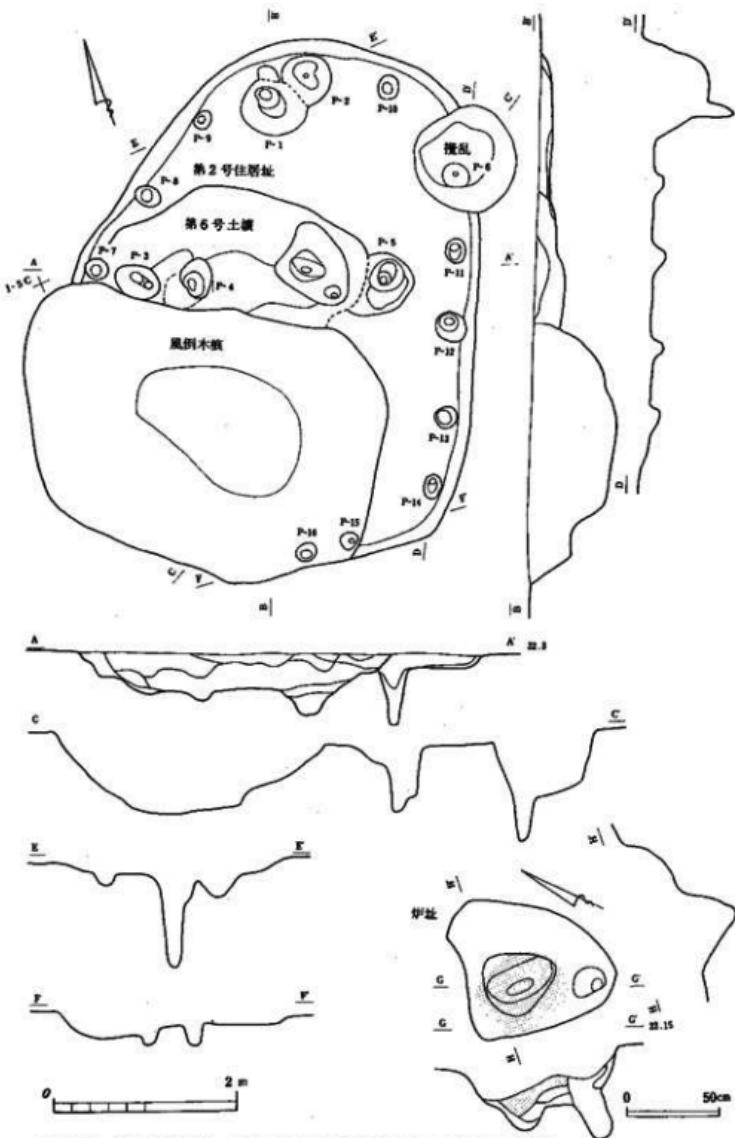
胸部のくびれにそって横位の爪形文が1条廻り、この上部には平行沈線による木葉文のくずれた幾何学文が施されている。5は1～4とほぼ同様の器形をもつと思われるが、くびれにそって平行沈線文を廻し胴下半部にはRの捺糸文を施している。6は胴上半部の破片であるが、棒状工具による圧痕文の上部に半截竹箸による平行沈線を横位に廻らし、その間を縦位の平行沈線文でうめられている。1～4は諸磯b式の古手、5・6は浮島I式に比定されよう。

#### 第2住居址（第7図・第8図、図版30）

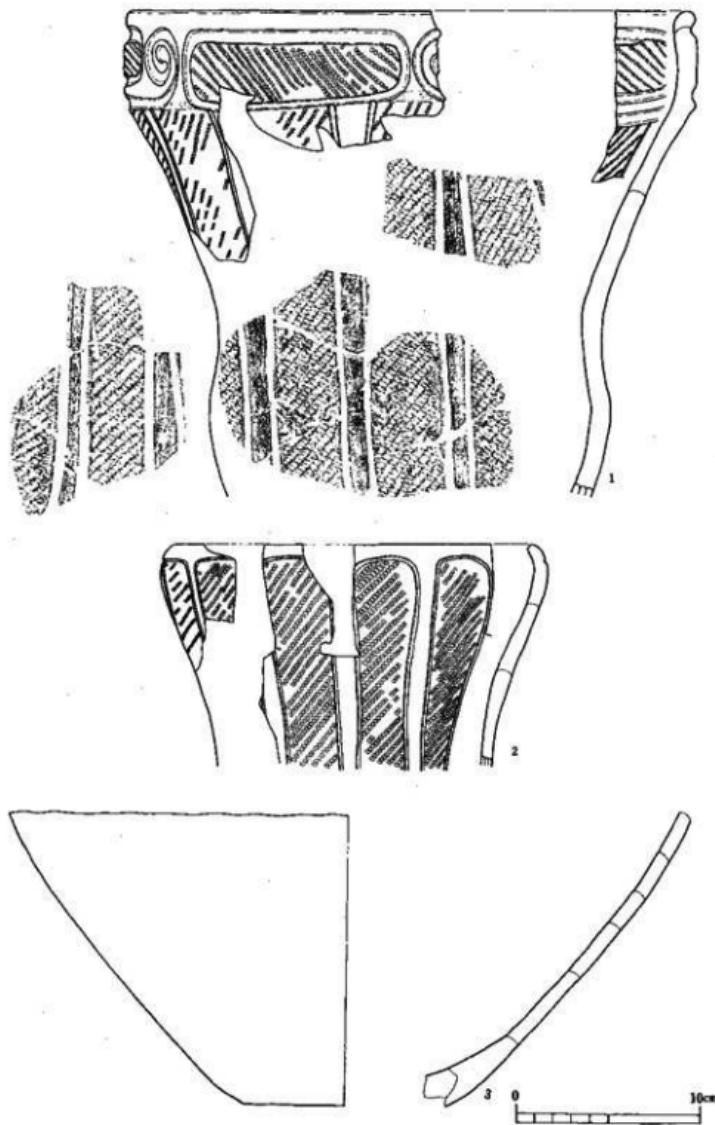
I-5-a・cグリッドより検出された。周辺部からの遺物の出土はほとんどみられなかつた。確認面はソフト・ローム上面で、第6号土壇及び風倒木痕によって南西部が切られている。平面プランは南西に開く隅丸の台形を呈し、主軸方向N-37°-Eである。北東辺及び南西辺はやや外側に張り出した曲線となる。壁面は傾斜をもって立ち上がり壁柱穴が廻っている。覆土はローム粒子を含む暗褐色土層で盛ざわにローム粒子が多くなり、しまりは良い。炉址は住居址中央のやや北東寄りに存在し、上部約20cmを第6号土壇によって削り取られ、その際に炉体土器が引き抜かれている。炉址の深さは焼土の下で床面下約50cmを計る。柱穴は16本検出され、床面からの深さは、P-1:102cm, P-2:26cm, P-3:64cm, P-4:44cm, P-5:74cm, P-6:108cm, P-7:10cm, P-8:10cm, P-9:15cm, P-10:24cm, P-11:13cm, P-12:18cm, P-13:18cm, P-14:16cm, P-15:25cm, P-16:24cmであった。このうち、P-1・3・5・6が主柱穴と考えられ、風倒木痕により2本が失われたと推定されることから、主柱穴は6本であったと考えられる。また、ほぼ60～70cmの間隔で壁柱穴が並んでいる。床面の状態は、炉址の北東側に一部固い面が認められたが、他はソフトローム面のままの状態であった。遺物の出土状況は、床着の状態のものは少なくほとんどが覆土中であり、大形破片等は第6号土壇覆土中に混在していた。

#### （出土遺物）

1は、床面及び第6号土壇覆土中から出土しており、胴下半部を欠失している。平縁口縁でキャリバー形を呈し、口縁部の文様帯が渦巻文と構円区画文で6単位に構成され、この区画内に横位の斜繩文RLを施している。胸部には同一原体を縦位に施し、2条の沈線を平行に垂下させ、その間を磨消帶としている。2は、第6号土壇覆土中より出土しており、1及び3と混在して検出された。あるいは土壇に伴う遺物であろうか。平縁口縁で緩やかなキャリバー形をなし、口縁部がやや内湾する。口縁部から逆V字状の沈線区画を配し、この中にRLの繩文を縦位に施している。3は、覆土及び第6号土壇覆土中より検出された胴下半部の土器で、内面に2次焼成をうけ煤の付着が見られ、炉に埋設されていたものと考えられる。輪横痕部分より切り離されており、胴上半部及び底部を欠失している。無文部であるが、外面には横位の擦痕が認められる。住居址の時代は、1及び3の土器から、加曾利EⅡ式期と考えられる。



第7図 第2号住居址・第6号土壤実測図(住居址 1/60, 炉址 1/50)



第8図 第2号住居址出土遺物(3分)

#### 第1号土壙（第9図、図版31）

H-6-a グリッドに位置する。平面形は不整橢円形を示すが底面では長方形に近い形態をもつ。長軸方向はN-29°-Eで長軸2.28m、短軸0.9m、深さ1.84mを計る。掘り込み面は重層上面で、覆土上部は暗褐色土、下部にはローム粒子及びローム・ブロックを多く含む褐色土となり、底部直上に、わずかに炭化材片が認められた。出土遺物は覆土上部よりわずかに縄文式土器が検出された。

#### 第2号土壙（第11図）

L-5-d グリッドより検出され、2号住居址の南東約1.5mに位置する。平面形は不整円形で、浅い皿状の掘り込みで、4本のピットをもつ。遺物は覆土中から縄文時代中期後半の土器片3点が検出されている。

#### 第3号土壙（第5図、図版29）

C-6-c グリッドより検出され、第1号住居址の北西隅を切り込んで構築されている。平面形は長椭円形を呈し、長軸方向N-74°-Wを示す。長軸2.2m、短軸1.03mで最大深度0.48mを計る。出土遺物は縄文時代前期後半の土器片で第1号住居址の遺物が混入したと考えられる。

#### 第4号土壙（第10図）

G-7-c グリッドより検出され、第1号住居址の南西に位置する。平面形は不整橢円形を呈し、長軸2.8m、短軸2.5mを計り、中央寄りに小ピット1本をもつ。壁は緩い傾斜をもって立ち上がり、深度は0.1mを計る。覆土はローム粒子をやや多く含む褐色土で、縄文式土器片をわずかに含む。

#### 第5号土壙（第9図）

C-7-a グリッドより検出され、第1号住居址及び第4号土壙のほぼ中間に位置している。平面形は橢円形を呈し、長軸方向N-22°-W、長軸0.88m、短軸0.64m、最大深度0.14mを計る。覆土に焼土粒を含み、多量のローム粒子を含む。ただし、底部に火床等の痕跡は認められないことから、炉址とは考え難い。

#### 第6号土壙（第7図、図版30）

I-5-c グリッドより検出され、第2号住居址のほぼ中央を掘り込んで構築されている。また、本址南側は風倒木痕により切りとられている。平面形は不整長椭円形を呈している。東側にピットを持つ。本址は第1号住居址の炉址上半部を切って作られているため、出土遺物の大半は第1号住居址覆土中出土遺物と接合関係をもつが、第1号住居址出土遺物（第8図）の2は本址覆土中のみに分布していたことからも本址に伴う遺物の可能性が大きい。

#### 第7号土壙（第10図、図版31）

K-2-d 及び L-2-c グリッドの境界に位置する。平面形は不整椭円形を呈し、底部ではほぼ円形を呈している。長軸方向N-77°-W、長軸2.0m、短軸1.3m、深さ2.28mを計る急傾斜な立ち上がりを持ち、立ち上がり中程に袋状の張り出しをもつ。

#### 第8号土壙（第3群土器11図、図版31）

L-9-c 及び L-10-a グリッドの境界に位置する。平面形は椭円形を呈し、底部では長方形となる。長軸方向N-46°-W、長軸2.68m、短軸1.8m、深さ2.98mを計る。壁面は、下半部ではほぼ垂直に立ち上がるが上半部で外に開いている。遺物は出土していない。

#### 第9号土壙（第9図）

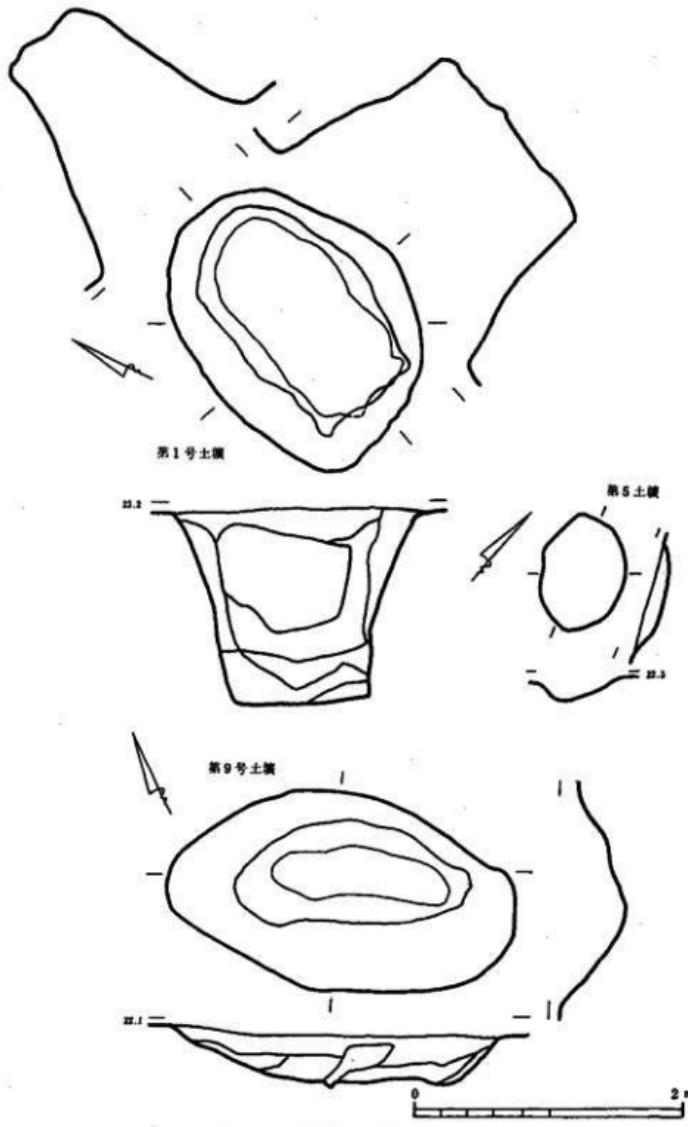
J-8-a 及び J-8-c グリッドの境界に位置している。平面形は不整椭円形を呈し、長軸方向N-51°-W、長軸2.6m、短軸1.46m、深度0.37mを計る。底部の不明瞭な摺鉢状の立ち上がりをもつ。覆土にはローム・ブロック及びローム粒子を含む。出土遺物は縄文時代後期前半の土器片が少量検出されている。

#### 第10号土壙（第10図）

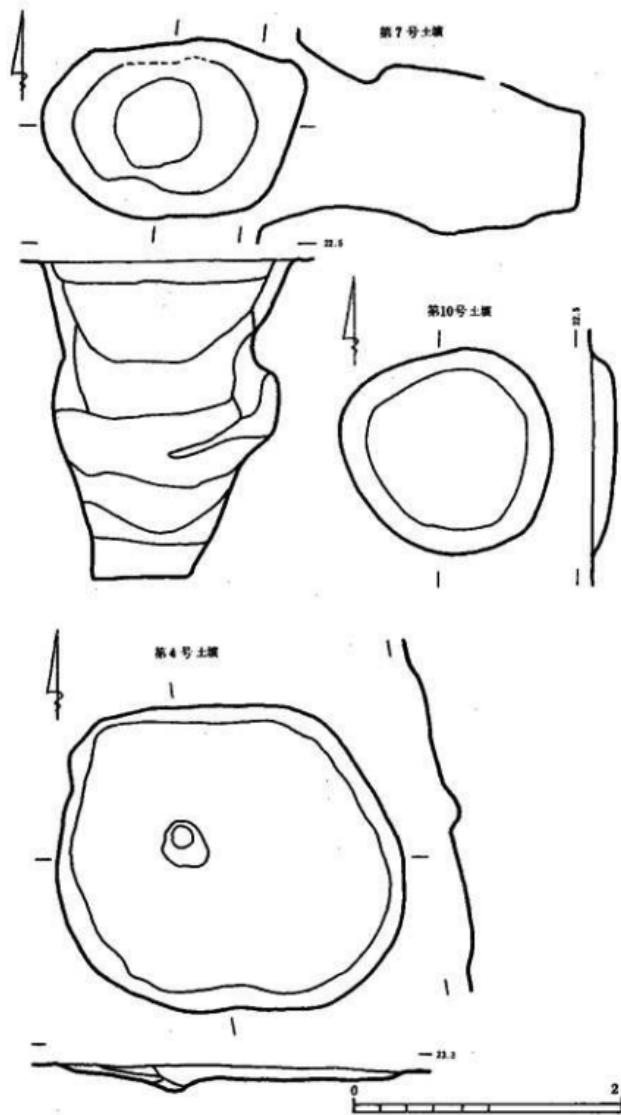
N-5-b 及び N-5-d グリッドの境界に位置している。平面形はほぼ円形を呈し、浅い皿状の掘り込みをもつ。覆土は褐色土で、遺物は出土していないが、周辺には縄文時代後期前半の土器片が集中的に分布していた。

#### 第11号土壙（第11図）

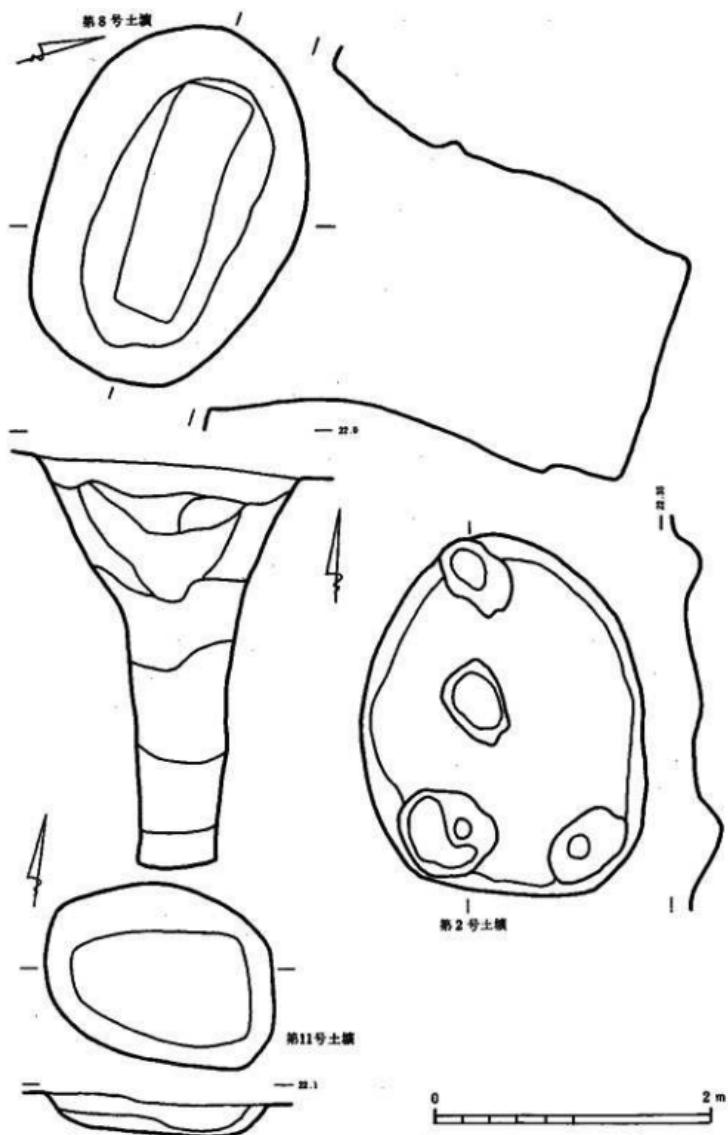
K-8-d 及び L-8-c グリッドの境界に位置している。平面形は不整椭円形を呈し、壁は緩く立ち上がる。覆土は暗褐色土で下部にローム粒子を多く含む。出土遺物はない。



第9図 土壠実測図(1)(3)



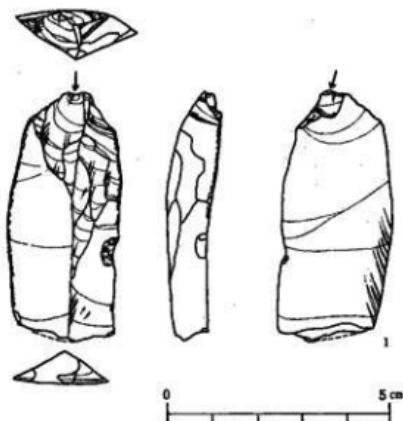
第10圖 土壤実測図 (2) ( $\lambda_6$ )



第11図 土壌実測図(3)(%)

## 2. 遺構外出土遺物

### (1) 先土器時代 (第12図1, 図版28)



第12図 先土器時代の石器〔%〕  
幅2.5cm, 重さは12.9gを計る。いわゆる神山型彫器の特徴をもつ。

確認調査において、H-4-cグリッドより検出された。出土層位はV層上面であった。本調査においてこの周辺部を拡張し、覆層まで掘り下がれたが遺物は検出されなかった。

#### 1. 彫 器 (第11図1)

比較的大型の縦長剝片(刃器状剝片)を素材とし、基部に調整剝離を施した後に、腹面及び背面の2条の剝離によって彫刀面を作出している。また、背面側縁には微細な剝離痕が認められ、下半部を折損している。

珪質頁岩製で、残存長5.5cm、最大

### (2) 繩 文 時 代

#### (a) 土 器

縄文式土器は、前期後半から晩期まで出土しており、大別すると下記の5群に分類される。

- |       |                |
|-------|----------------|
| 第1群土器 | 前期後半の諸磯系、浮島系土器 |
| 第2群土器 | 前期末葉の土器        |
| 第3群土器 | 中期後半の土器        |
| 第4群土器 | 後期の土器          |
| 第5群土器 | 晩期の土器          |

#### 第1群土器

量的に最も多く、第1号住居址を中心として調査区西半に広く分布していた。諸磯式・浮島式・興津式を本群とした。

##### 第1類 諸磯式土器 (第13図~14図1~26, 第17図102, 図版32)

1は平口縁で朝顔形に開く器形をもち、口縁部及びくびれ部に横走する連続爪形文をめぐらしてその間に半截竹管による波状沈線文が施され、胴下半部には細かい縄文R Lが施文されて

いる。3は細かい縄文を地文として平行沈線による入組木葉文が描かれ、外側を磨消している。4は縄文地に横走する連続爪形文と平行沈線による鋸齒状文が施文されている。1・3・4は諸磯a式に比定されよう。2はやや幅広の半截竹管による連続爪形文及び平行沈線文。5・6は平行沈線文及び刺突文が施文される。7~12は縄文地に連続爪形文が施され、11・12には斜めの刺突がつく。13~22は縄文地にいわゆる浮線文が施されており、13には獸面把手がみられる。これらは諸磯b式に比定される。23~25は条線を施文した後に粘土紐による貼付文とボタン状貼付文が施され、粘土紐上は半截竹管によって押引状の整形が加えられている。諸磯c式に比定されよう。26は、波状口縁をもって朝顔形に開く器形を持ち、連続爪形文及び粘土紐による貼付文で幾何学文様が構成されている。胴下半部には縦施文の縄文が施されている。諸磯b式である。

#### 第2類 浮島式土器（第14図27、第15図～第16図29～64、図版32・33）

27・29は地文に撫糸文をもち、口唇上に突起をもつ。30~32は同一個体で撫糸地文にアダラ属の貝による連続爪形文と竹管による平行沈線文が施されている。33~37は同一個体で半截竹管による平行沈線文と爪形文で構成され、36には撫糸文が見られる。38~41は同一個体で貝殻文と粘土貼付による隆帶文と平行沈線文で構成される。42は変形爪形文と鋭利な工具による横位の不連続な沈線文が施されている。27・29~42は浮島I式に比定される。43~52は波状貝殻文が施文され浮島II式である。53は三角文が施され、54・55・57・58は横位の波状貝殻文が施文され、56では縦位に波状貝殻文が施文されている。波状貝殻文はやや引きずるように施文されてやや幅広のものとなっている。59~62は輪横痕を残し波状貝殻文が施文されている。63・64は長く引きずるような貝殻文を施文している。53~64は浮島III式に比定されよう。

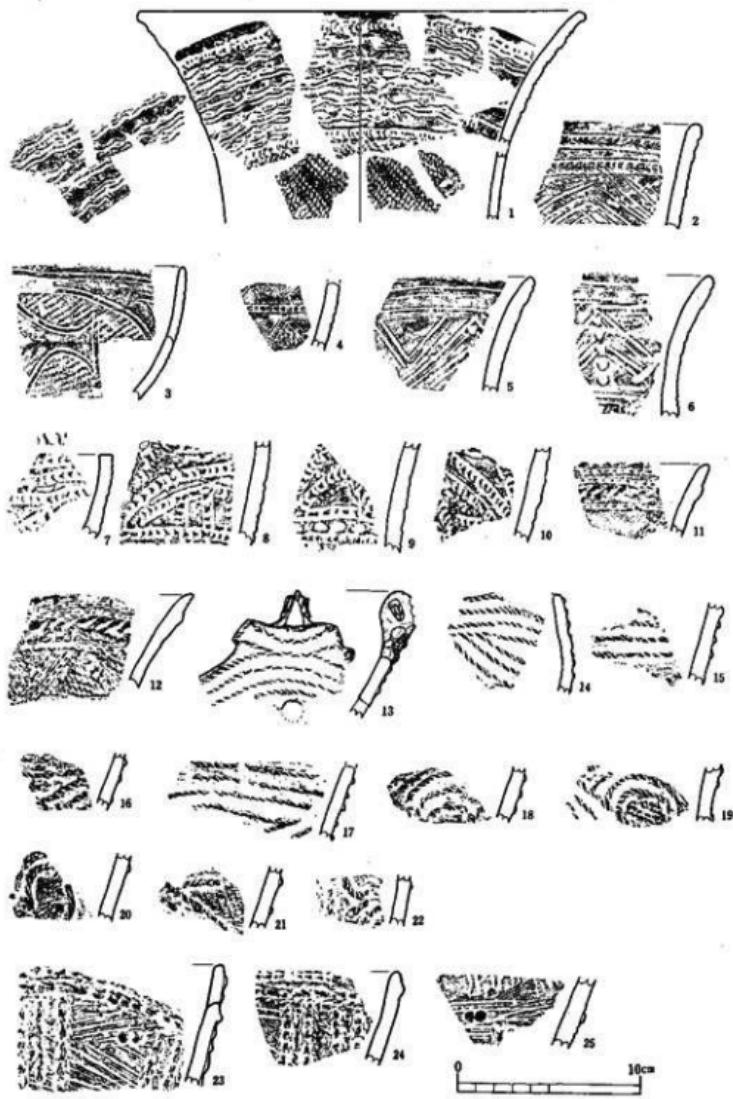
#### 第3類 舞津式土器（第16図65～68、図版33）

65は、棒状工具による刺突文と波状貝殻文の組合せによって文様を構成している。66~68はヘラ状工具による鋭い沈線文と貝殻文の組合せにより、66・67では区画文を作成している。

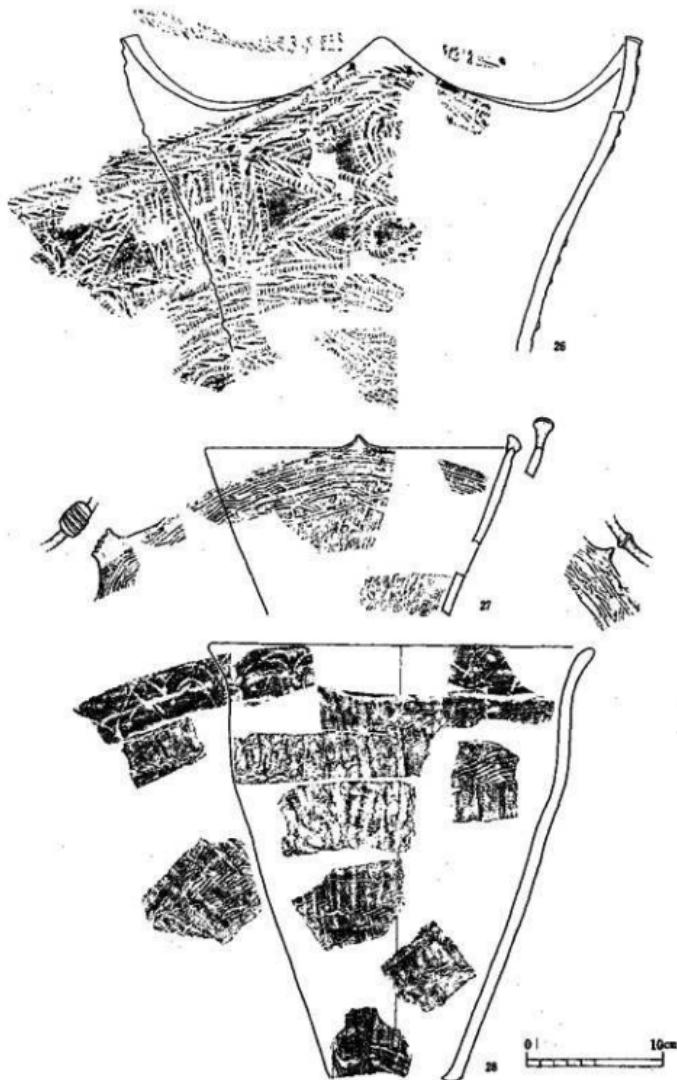
### 第2群土器

H-7区を中心に南の谷に面して分布が認められた。從来前期末葉～中期初頭として扱われてきた土器を本群とした。

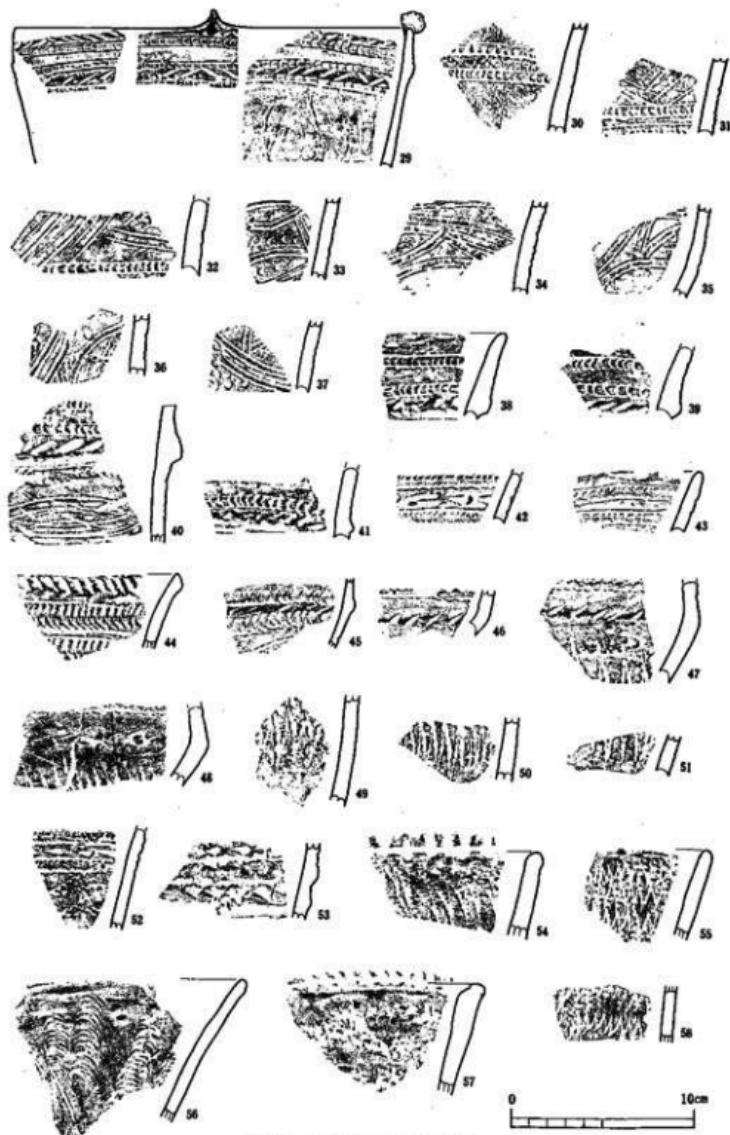
第1類 縄文のみの土器、結節文をもつ土器、格条体圧痕文をもつ土器（第16図・17図69～82、図版34）。69は口縁部がやや開く器形をもち全面にR Lの縄文が施文され、口唇部にも同一原体による回転縄文が見られる。70・73は同一個体で結節文をもつLの縄文を施文し口唇部に丸棒状工具による押圧痕が見られる。74は同一原体Lによって、口唇部に回転縄文、口唇直下に2条の格状体圧痕文、胴部に結節文をもつ縄文を施している。75は縄文のみであるが補修孔をもつ。81・82は格条体圧痕文を施文するが、胴部には縄文が施文されている可能性が強い。



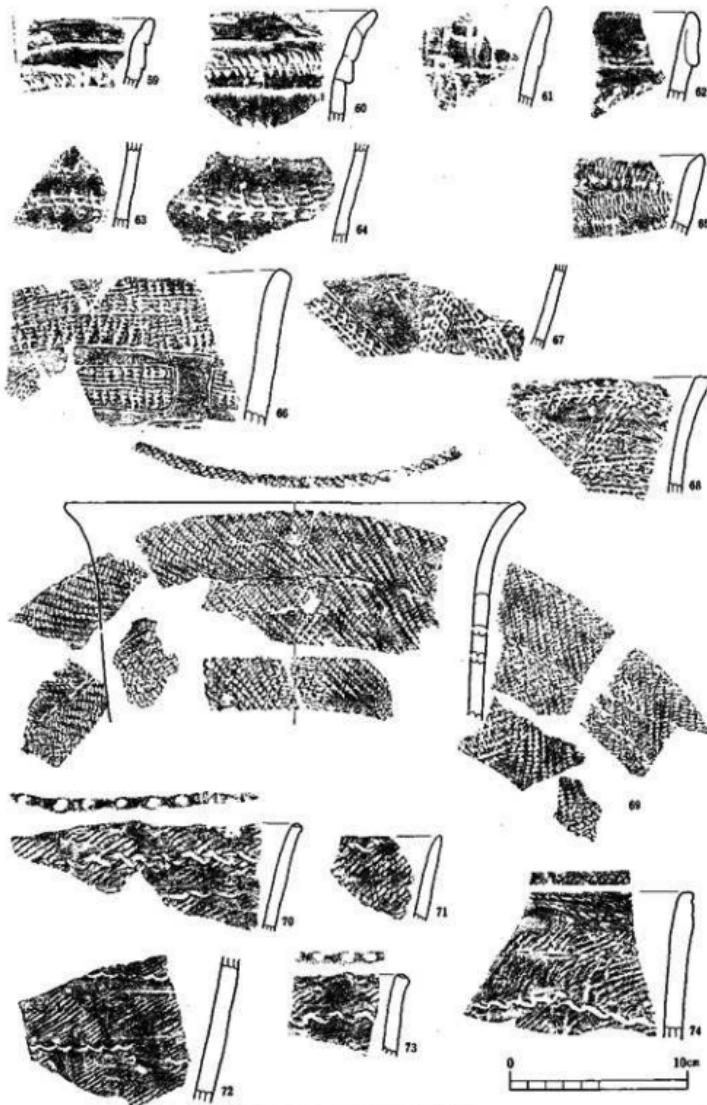
第13図 第1群土器 (1) (36)



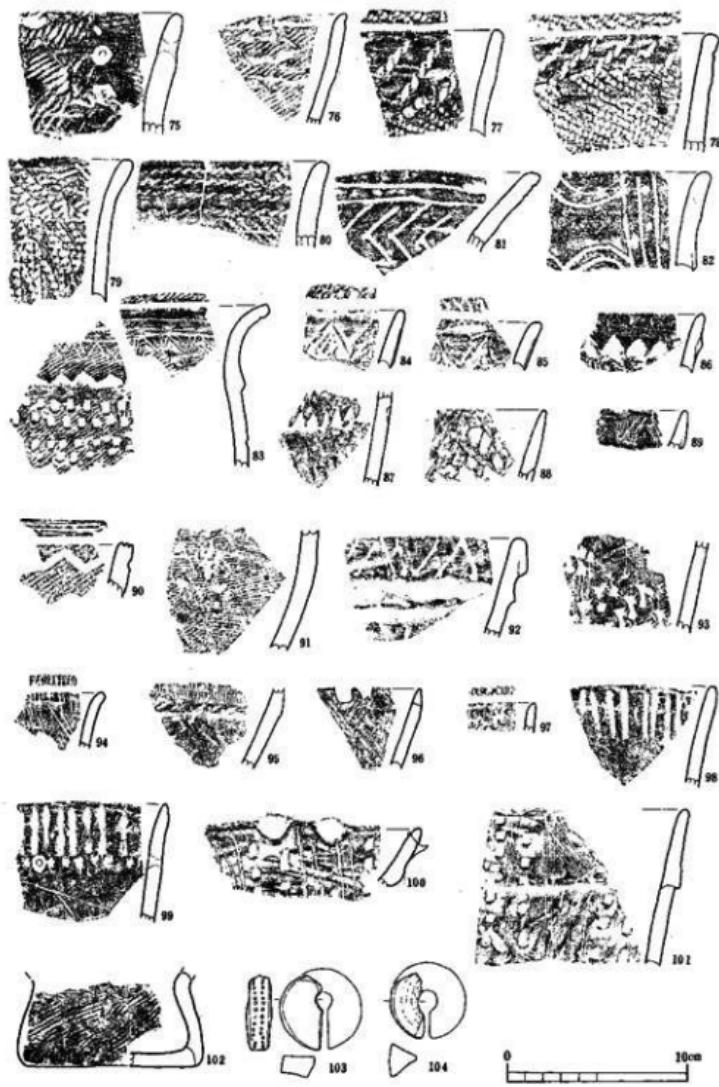
第14図 第1群土器(2)(3)



第15図 第1群土器(3)(%)



第16図 第1・2群土器(1)(%)



第17図 第1・2群土器(2)(3)

### 第2類 沈線文・刺突文・彫刻文をもつ土器（第17図83～101、図版34）

83は地文に縄文Lをもち口唇部にも施している。また口唇下に格条体圧痕文と鋸齒状沈線文を施し、頬部の輪積度を鋸齒状に削り取って三角文を作り出している。そして胴部には棒状工具による刺突文を施している。84～86は三角文がみられ、83・85は口唇上に刻目がみられる。87・88は三角文とヘラ状工具による沈線文を組合せ、88には整形痕が残る。90は丸棒状工具による鋸齒状文が施され、口唇上には半截竹管による押引き文が施されている。92は輪積痕を明確に残し、口縁部に沈線文を施している。96は鋭利な工具による沈線を斜方向に交叉させて菱形文を作り、口唇部を四角に削り取っている。97は半截竹管による刺突文を列点状に施している。98・99は丸棒状工具による幅広の沈線文が施され、99はこの下に円形の刺突文が加わり、補修孔もみられる。100・101は輪積痕を明瞭に残し、ヘラ状工具による沈線文及び棒状工具による列点文がみられる。また100の口唇部には指頭による押圧痕がみられる。

### 第3群土器（第18図105～119、図版35）

本群の土器の大半はJ-8-aグリッド及びJ-8-cグリッドを中心とした中期後半～後期の遺物集中区より検出されている。この集中区からは、小型磨製石斧2点が検出されている。

105は口縁部に横円区画文をもち、この区画内に横位の斜縄文RLを施し、胴部にはこの原体を縦位に施し、2条の沈線を垂下させ、その間を磨消帶としている。106～112は同一個体で3段の縄文RLを縦位に施した磨消縄文である。113は口唇部直下に横位のLRを帶状に施し、この縄文帯下部を同一原体により縦位に施し、沈線で逆U字形の区画文を描き、この外側を磨消している。114～116は横位の沈線1～2条により口縁部無文帯を作り、この沈線下に縄文を施している。117は折り返し口縁をもち、この部分を無文とし、それ以下に縄文が見られる。118は底部破片である。119は、2対の橋状把手をもち、胴部には原体RLの縄を横位方向に施している。最大径を胴上半部の肩部にもつ。北関東的な土器で後期初頭に入るかもしれない。

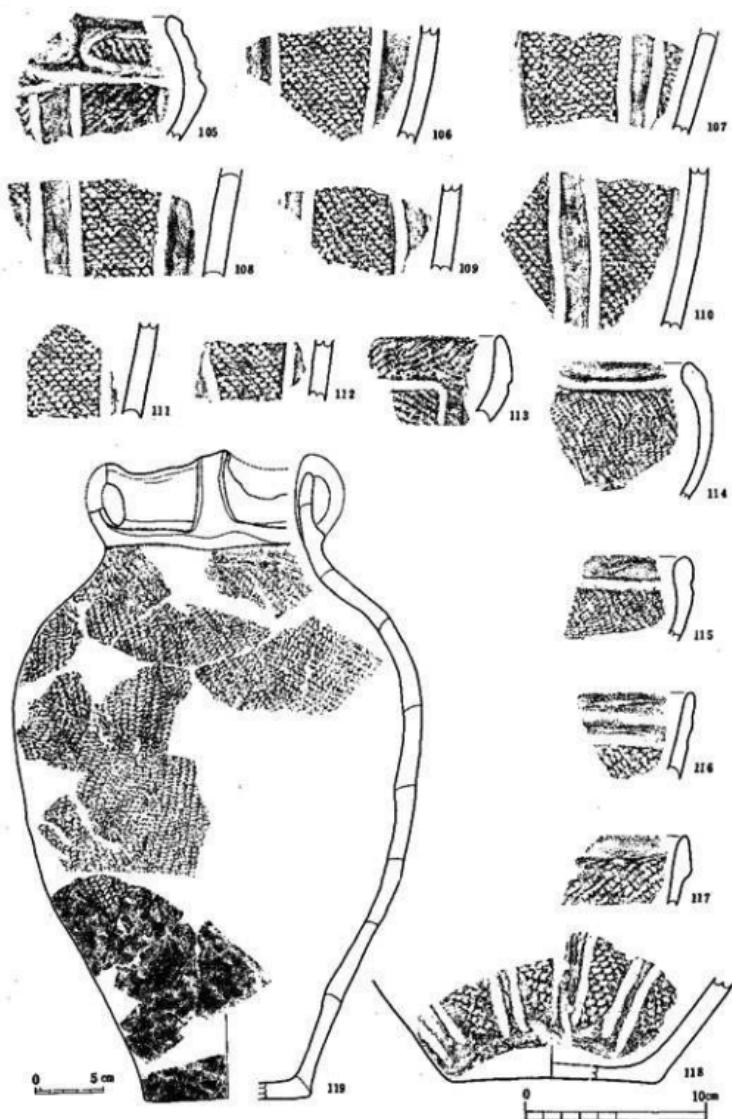
### 第4群土器

#### 第1類 称名寺式土器（第21図125～129、図版35）

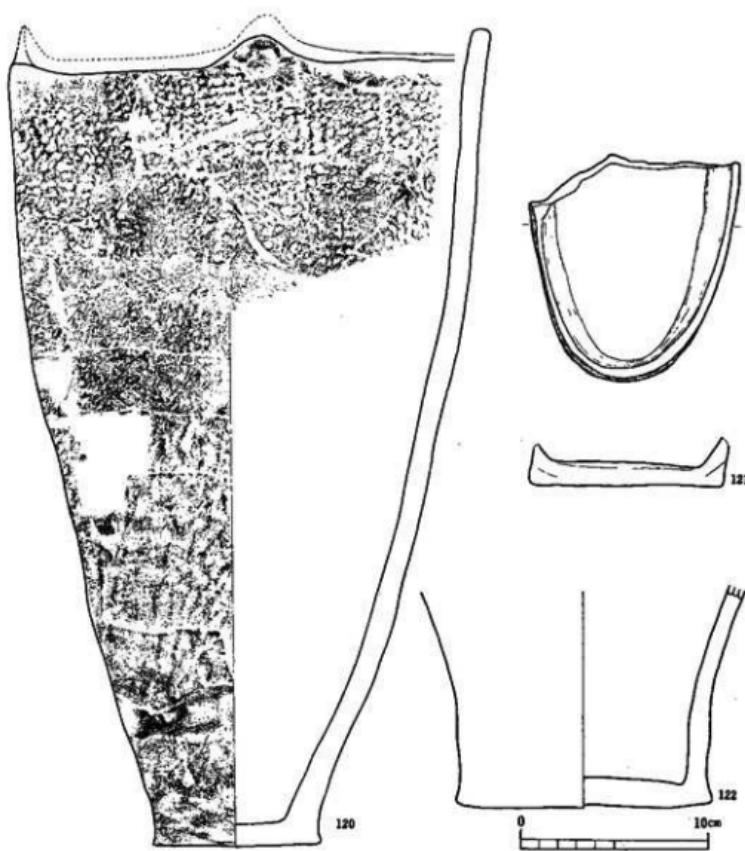
2条の沈線による区画内に列点文を施す。刺突具には、竹管状のもの、半截竹管状のもの、角棒状のものがみられる。器面は内外面ともに丹念な磨きがみられる。

#### 第2類 箕之内式土器（第19図～第21図120～124・130～144、図版35・36）

120は粗製土器で2対の突起がみられる。粗い縄文が施されているが胴下半部は縦方向の磨きが見られる。121は横円形の異形土器底部で輪積痕からはがれており上部の器形は不明である。123は地文にLRの斜縄文を施し、太い沈線による藤手状文が施されている。131・



第18図 第3群土器 (36. 119:34)

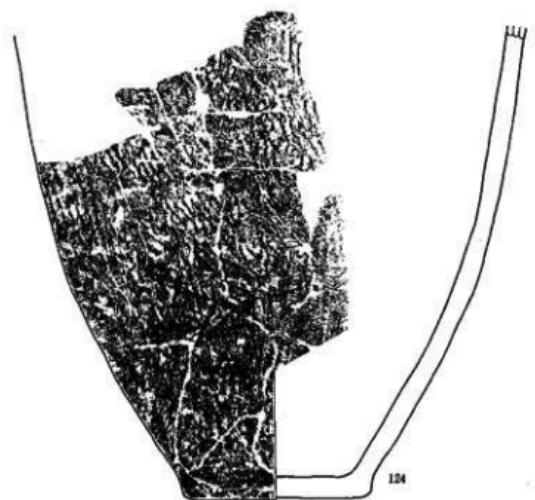


第19図 第4群土器(1)(3)

133～136・141は縄文を地文とし、沈線による幾何学文、蛇行する懸垂文等を施文している。  
142は波状口縁をなし、L Rの縄文を施文した後に半截竹管による沈線文を施している。144  
は底部に網代痕が見られる。

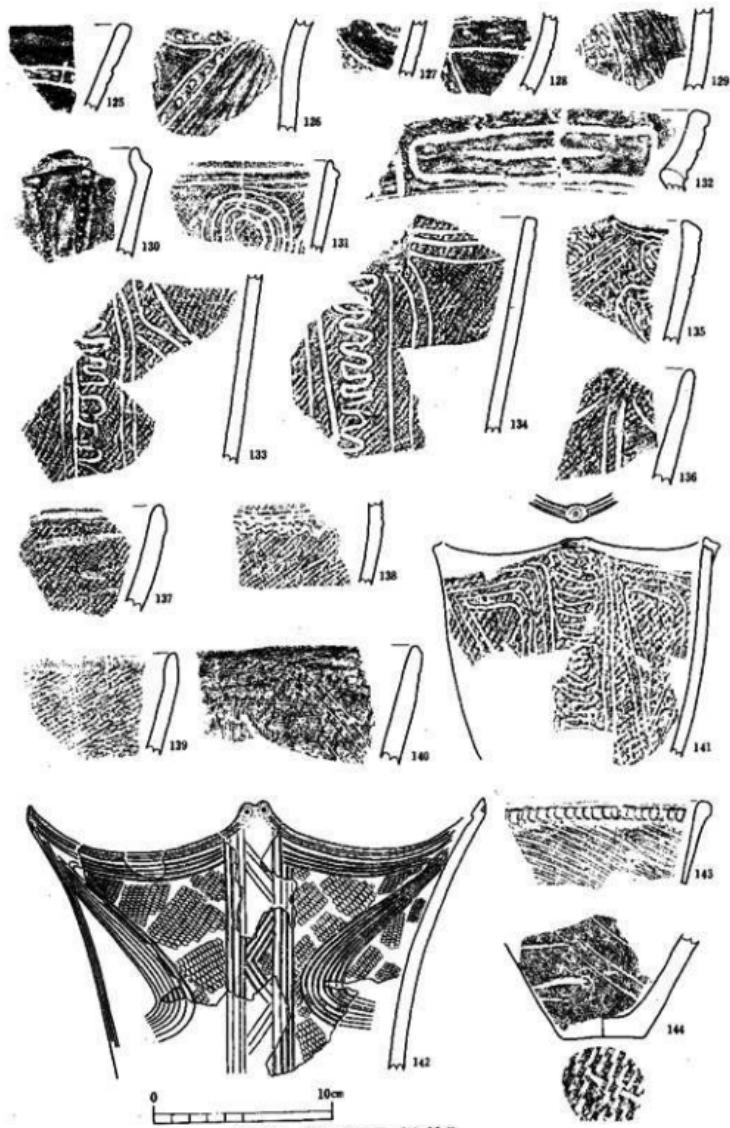
第3類 後期末葉の土器（第21図143、第22図145、図版37）

安行1・2式の粗製土器で、143は条線文を施文した後に口唇直下に紐線文を施している。  
145は、口唇直下に折り返し状の紐線文をせち、沈線文が施されている。

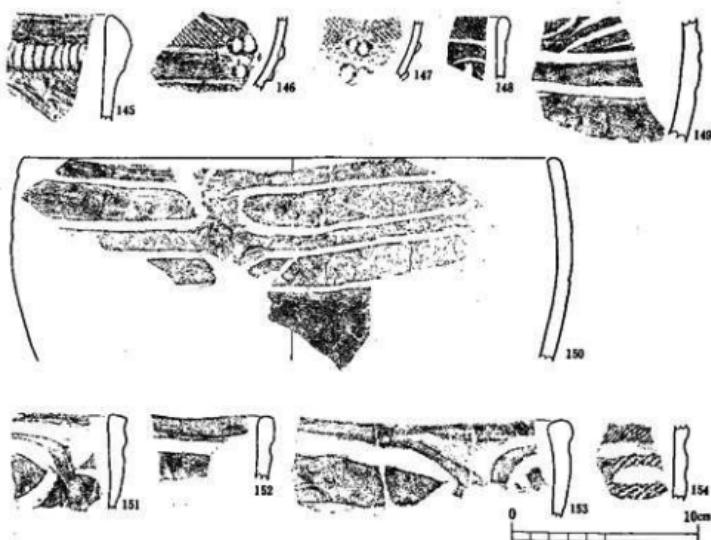


0 10cm

第20図 第4群土器(2)(3)



第21図 第4群土器 (3)(3)



第22図 第4群土器(4)・第5群土器(1)(36)

### 第5群土器

第1類 晩期前半の土器 (第22図146~148・150~153, 第23図155, 図版37)

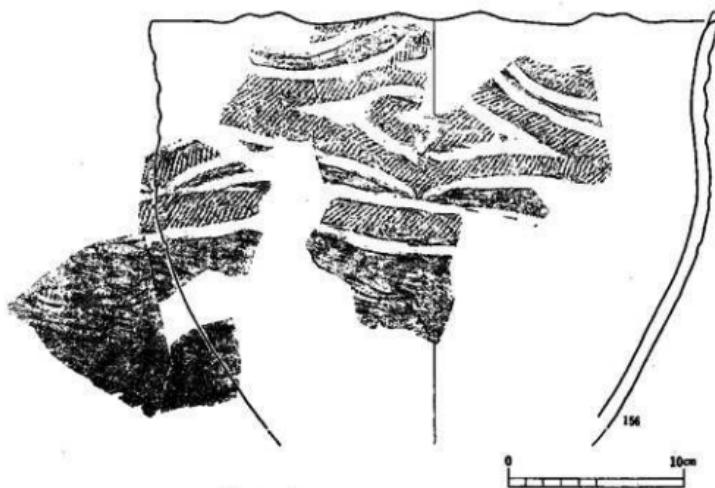
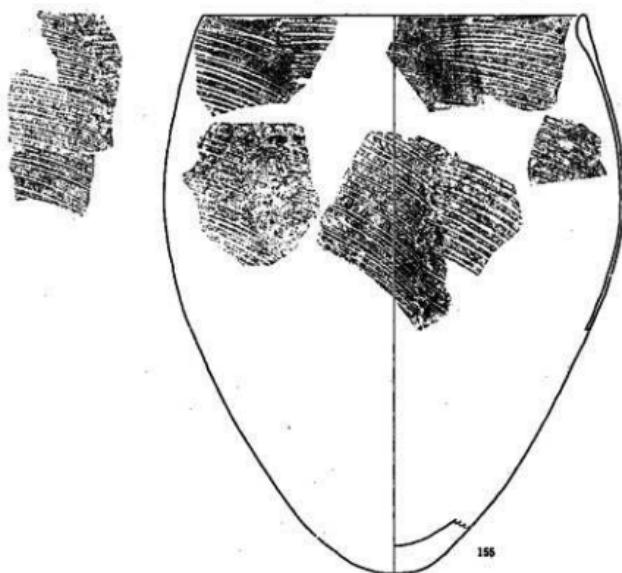
安行3a・3b式, 鮎山Ⅲ・Ⅳ式を一括して本類とした。146~148は帶状縄文で146・147には豚鼻状突起が見られる。150~153は鮎山Ⅲ式の粗製土器で、縄文は見られず柵状文が施されている。155は粗製の深鉢形土器で紐線文は見られず条線文が施されている。鮎山Ⅱ式と考えられる。

第2類 晩期中葉の土器 (第22図149・154, 第23図156, 図版37)

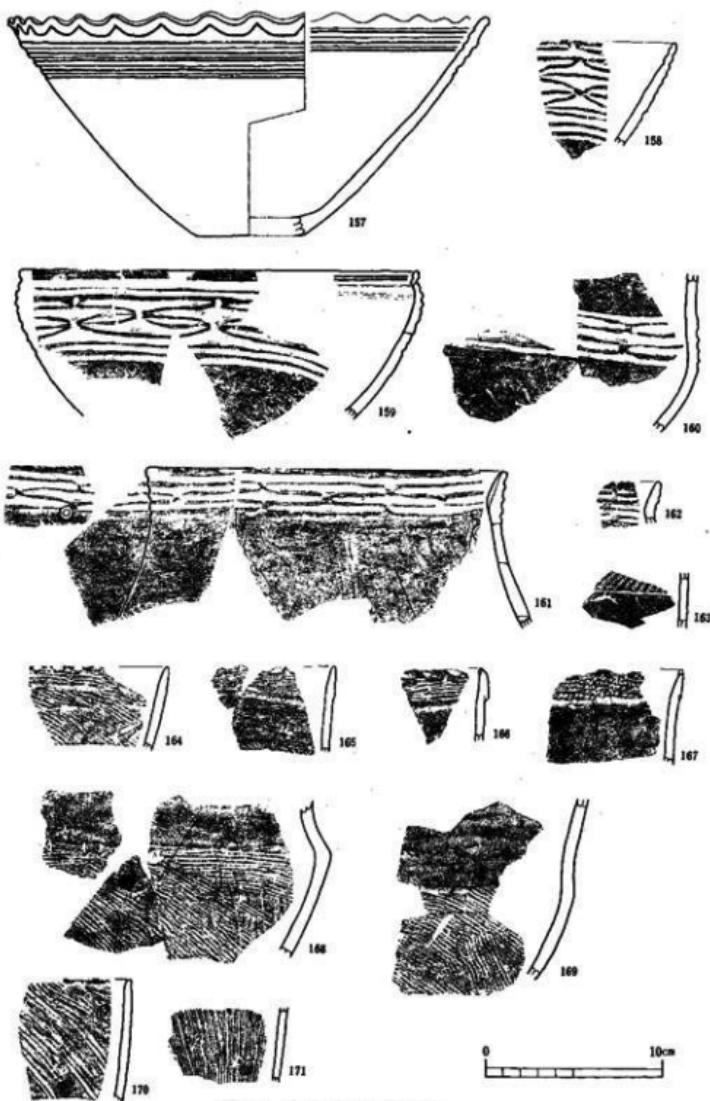
前浦式および安行3c式に比定される土器を本類とした。149は縄文はみられず太い平行沈線による区画と斜方向の沈線で構成され、安行3c式と考えられる。154・156は前浦式の土器で太い沈線と縄文によって文様構成がなされており、胴下半部は無文となっている。

第3類 晩期後半の土器 (第24図157~171, 図版39)

千網式土器を本類とした。157~162は精製土器で、浮線による平行線文、工字文、入組文、柵状文が施されている。内、外面とも良く磨かれており、158・159には朱塗の痕がみられる。163~171は千網式の粗製土器で、折り返し口縁で撻糸文をもつもの、胴上半部にくびれをもち、それ以下に撻糸文をもつもの、条痕文をもつもの等がある。また、口唇部には、指頭あるいは格子条体による圧痕がみられる。



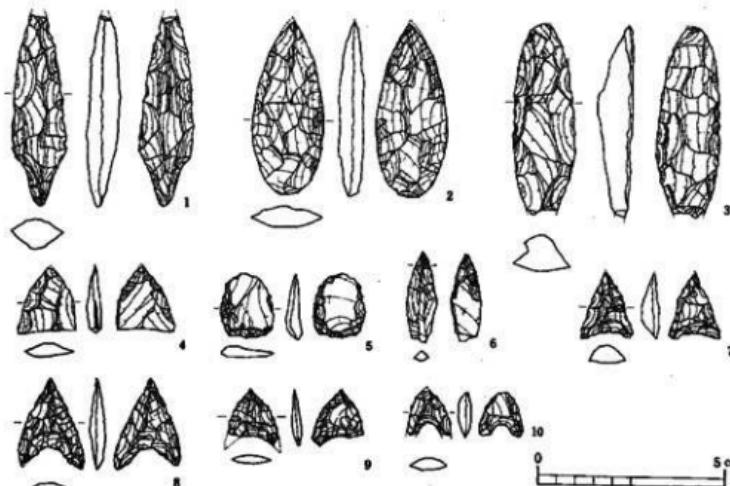
第23図 第5群土器(2)(%)



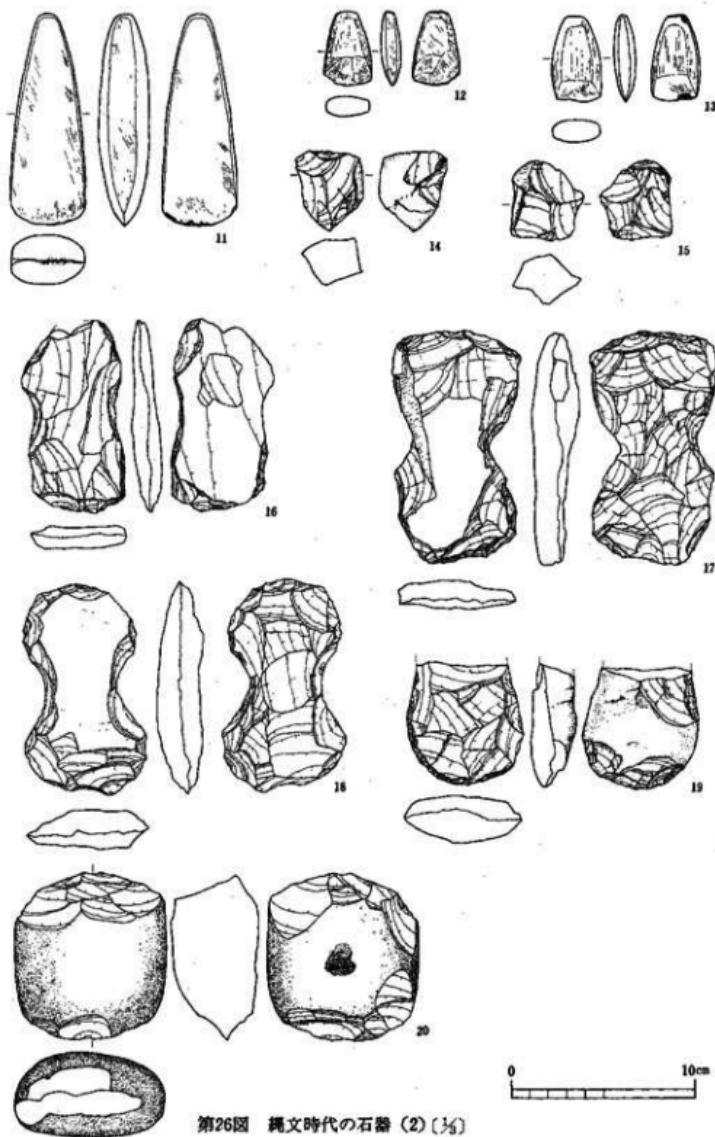
第24図 第5群土器(3)(3)

(b) 石 器 (第25図～第27図, 図版38・39)

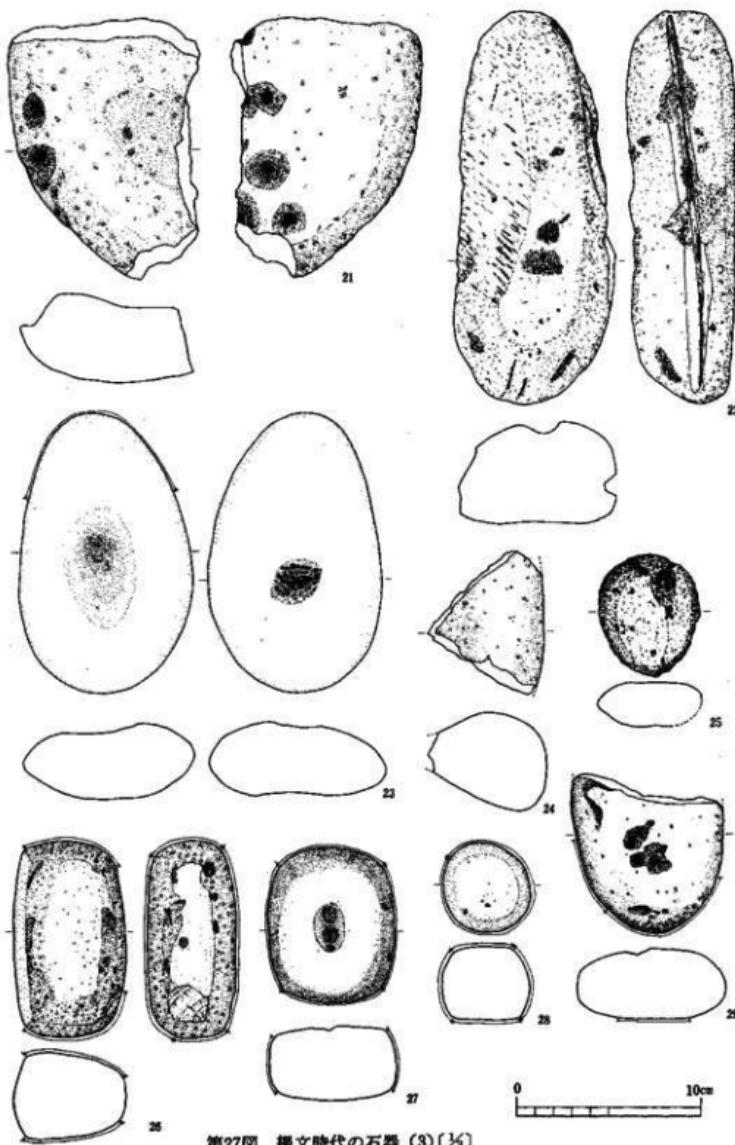
石器はすべて遺構外の出土であり, I区からは草創期の有舌尖頭期1, 尖頭期3, 中・後期に属すると考えられる磨製石斧3, 打製石斧4, 石鎌3, 石錐1, 2次加工のある石器2, 石核2, 砕器1, 石皿2, 浮子2, 凹石3, すり石3, 剥片類72の計102点が検出された。また, II区においては, 打製石斧1, 石鎌1の2点を検出した。石材は多彩で図示した以外の剥片類の中には黒曜石, メノウ等も含まれている。



第25図 縄文時代の石器(1)(36)



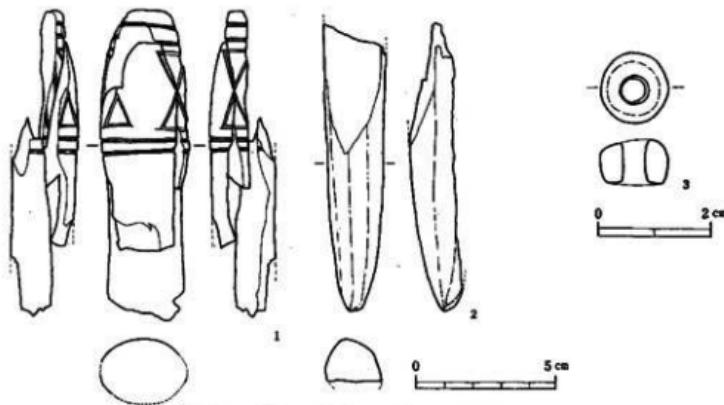
第26図 純文時代の石器 (2) (36)



第27図 繩文時代の石器(3)(3)

第1表 桶文時代石器観察表

No.	器種	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重量 g	石材	遺存状態	出土区	備考
1	有舌尖頭器	(5.1)	1.5	9.5	(5.9)	(火山岩)	先端部欠損	L-5-d	
2	尖頭器	4.7	2.0	0.7	6.0	珪質頁岩	ほぼ完存	E-7-a	
3	"	(5.0)	1.7	0.9	7.9	頁岩	基部欠損	I-8-a	
4	"	(1.6)	(1.6)	(0.4)	(0.9)	不 明	先端部のみ 残存	E-6-b	
5	2次加工のある石器	1.7	1.4	0.3	0.9	珪質頁岩	完存	F-8-b	
6	石錐	2.4	0.8	0.3	0.9	チャート	ほぼ完存	G-6-d	
7	石錐	1.9	1.4	0.4	0.9	黒曜石	"	Ⅲ区B-6	
8	"	2.4	1.7	0.4	1.1	チャート	完存	N-4-d	
9	"	(1.5)	(1.4)	0.2	(0.4)	黒曜石	脚部欠損	L-5-a	
10	"	(1.2)	(1.1)	0.3	(0.4)	チャート	先端・脚部 欠損	K-8-d	
11	磨製石斧	11.6	4.1	2.7	190.0	安山岩	完存	F-7-b	
12	小型磨製石斧	4.1	2.6	1.1	18.0	蛇紋岩	ほぼ完存	J-8-a	刃部・基部に打痕。
13	"	4.7	2.7	1.2	16.1	"	"	K-8-a	刃部に打痕。
14	石核	4.4	3.6	2.5	33.0	珪質頁岩	完存	L-4-d	自然面を残す。
15	"	4.3	3.8	2.8	45.7	砂岩	"	J-6-c	
16	打製石斧	(10.6)	5.4	1.5	(111.0)	粘板岩	基部欠損	L-5-b	
17	"	12.7	7.1	2.5	230.0	"	完存	N-3-c	
18	"	11.5	6.5	2.4	210.0	"	"	Ⅲ区	
19	"	(6.5)	(6.3)	(2.4)	(140.0)	砂岩	基部欠損	F-6-d	
20	礫器	9.1	8.2	4.7	510.0	安山岩	完存	E-6-d	
21	石皿	(14.1)	(10.4)	(4.6)	(1030.0)	"	約1/4残存	K-10-a	
22	浮子	21.2	8.6	5.5	360.0	軽石	ほぼ完存	N-2-d	
23	凹石	15.1	9.4	4.0	780.0	安山岩	完存	F-7-b	側面に敲打痕。
24	石皿	(7.8)	(6.3)	(5.0)	(280.0)	流紋岩	約1/10残存	L-5-c	
25	浮子	6.7	5.5	2.3	22.8	軽石	ほぼ完存	N-5-a	
26	磨石	10.6	6.1	4.7	500.0	砂岩	完存	K-4-a	敲打痕あり。
27	凹石	8.4	6.8	4.0	430.0	安山岩	"	F-6-d	側面に擦痕。
28	磨石	4.9	4.7	4.0	130.0	角閃石岩	"	F-7-b	側面に敲打痕。
29	凹石	(7.4)	(8.2)	(3.8)	(380.0)	安山岩	約1/2残存	J-6	"



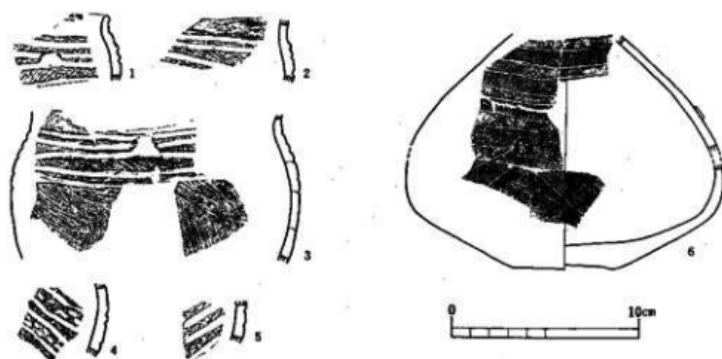
第28図 石剣・玉類 [1・2: 3: 3. 3: 厚寸]

(e) 石剣・玉 (第28図 1~3, 図版37)

1は、N-2-cグリッド及びN-2-dグリッドから検出された。出土層位はⅢ層下部であり、千網式土器の出土状態に対応している。2は、E-6区表土層から検出されている。3は、I-6-cグリッドⅢ層上部からの出土で、周辺部からは前期後半及び中期後半の土器が検出されている。

第2表 石剣・玉 紹表

No.	器種	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重量 g	石材	遺存状態	出土区	備考
1	石剣	(11.1)	(3.2)	(2.4)	(58.0)	頁岩	基部のみ残存	N-2-c N-2-d	
2	"	(10.3)	(2.1)	(1.6)	(41.4)	"	先端部のみ残存	E-6	
3	玉	—	1.4	1.5	2.8	不明	完存	I-6-d	



第29図 弥生土器(3)

### (3) 弥生時代

弥生時代の遺物は調査区の中央北側のJ-3, J-4, K-4区から検出されている。出土層位はⅢ層上部で、遺構は検出されなかった。

#### (a) 土器

##### a. 中期初頭の土器 (第29図1~5, 図版40)

東北地方南部に分布を持つ御代田式に比定されよう。地文に撚糸文をもち、沈線文と刺突文によって構成された文様をもつ。

##### b. 宮ノ台式期の土器 (第29図6, 図版40)

小型の細頸壺であるが上半部を欠損している。沈線により横位および「ハ」字状の区画が描かれ、この間に細縦文LRが施されている。また、区画の交点部分にはボタン状の貼付文がみられる。

##### (b) 玉類・石製品 (第30図1~7, 図版40)

勾玉は、J-4-b, J-4-dグリッドⅢ層上部から5点検出された。出土状態は、宮ノ台式土器と混在しており、近接して砾石が検出されている。管玉および石製模造品については古墳時代に属すると考えられるが、便宜的に一括した。



第30図 玉類・石製品(1~7:× 8:△)

第3表 玉類・石製品観察表

No.	器種	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重量 g	石材	出土区	備考
1	勾玉	0.8	0.5	0.6	0.5	(滑石)	J-4-b	
2	"	0.9	0.9	0.9	0.7	"	J-4-b	
3	"	0.8	0.6	0.7	0.9	"	J-4-d	
4	"	1.0	0.7	1.0	2.3	"	J-4-b	
5	"	1.3	0.9	0.7	2.9	"	J-4-b	
6	石製模造品	—	1.9	0.3	2.7	滑石	N-1	有孔円板
7	管玉	4.4	0.9	—	7.8	(滑石)	G-7-b	

### III 小 結

房地遺跡から検出された遺構は、縄文時代前期後半の住居址1軒、中期後半の住居址1軒及び土壙11基（うち陰穴3基）であったが、出土遺物は、先土器時代、縄文時代草創期・前期・中期・後期・晚期、弥生時代中期、古墳時代前期と多彩であった。これらの遺構・遺物を概観した場合、各期における主体部分を本調査区外に求める必要がある。特に花見川水系及び横橋支谷における遺跡立地のあり方が問題となろう。

#### 1. 先土器時代

確認調査において検出された彫器1点。いわゆる神山型彫刻刀の特徴をもつ。出土層位は、V層上面であった。

#### 2. 縄文時代

##### 1) 草創期

有舌尖頭器1点、尖頭器3点が検出された。出土層位はⅢ層下部で、縄文時代前期・後期の土器と混在して検出されている。共伴する土器は検出されず、いづれも単独の出土であった。

##### 2) 前期後半

浮島I式の住居址が検出されたが炉址を伴わない。諸磯b式の古手を約3割共伴していた。浮島・諸磯系土器は遺跡西半部に集中して検出されており、前期末葉の1群の分布とほぼ一致する。第2群第2類は、西の台遺跡第2次（新井和之、1985）で新井氏が指摘している東北地方、大木6式より火木7a式あたりに比定されるものである。

##### 3) 中期後半

加曾利EⅡ式の住居址1軒が検出された。この住居址は炉址部分を第6号土壙によって切られている。遺構外の遺物は、前期・後期に比べて少ない。

##### 4) 後期

称名寺Ⅱ式及び堀之内Ⅰ式土器及び安行1・2式の粗製土器が検出された。遺構としては第9号土壙・第10号土壙が堀之内Ⅰ式に比定されよう。

##### 5) 晩期

安行3a・3b（姥山Ⅱ・Ⅲ）式、前浦（安行3c）式、千網式土器が検出された。また、千網式土器と共に石劍が出土している。

#### 3. 弥生時代

中期初頭福島県に分布する御代田式土器および宮ノ台式土器が検出された。いづれもほぼ同一の分布をもち、この中より勾玉5点、砥石1点が出土した。

#### 4. 古墳時代

五領式土器が遺跡東側より検出されたが、量的にはすくない。

# 一枚田遺跡

## I 調査の経過と方法

調査は千葉市立横橋小学校敷地内のプール移築に伴って実施したものである。第Ⅰ地点はプール移築部分、第Ⅱ地点はプールの排水にかかわる集水井部分である。第Ⅲ地点は小学校正門前の畠で縄文時代の遺物が多数散布していた。表掲資料ではあるが遺跡理解の一助となると思われ掲載することとした(第2図)。

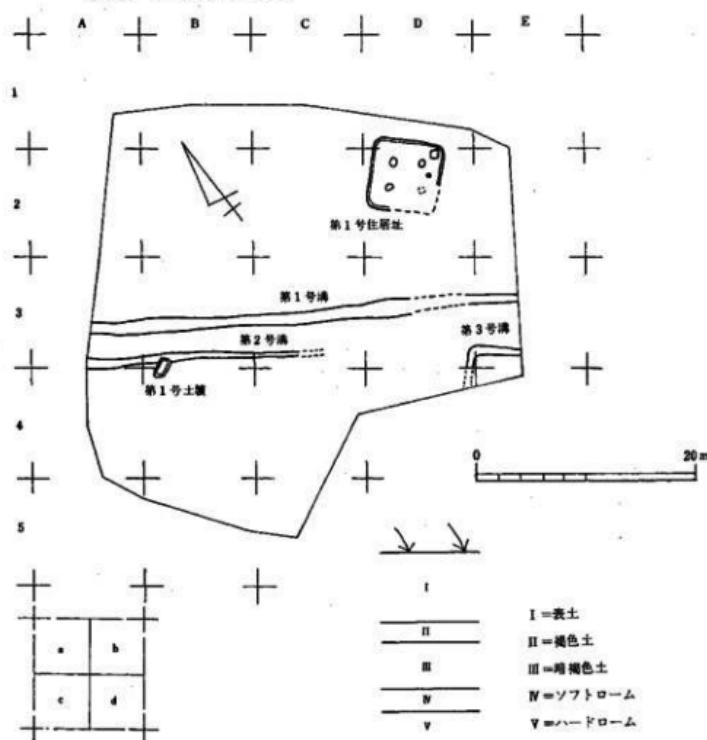
第Ⅰ地点の調査は昭和60年7月22日から9月2日にかけて、第Ⅲ地点は昭和61年1月24日・25日に実施した。

第Ⅰ地点の状況は東側と西側とで大きく異なっていた。東側は、校舎建設によるとおもわれる瓦礫がローム近くまで圧縮された状態であった。さらにローム深く掘り込んで瓦礫を詰め込んだ箇所が多数あり、住居址及び溝が大きく削りとられていた。西側は客土が厚く堆積していたが東側のような瓦礫は入っておらず、校舎建設の影響を受けていなかった。第3図の土層模式図は西側部分のものであり、東側では住居址を掘りぬいて重層の下部近くまでが削り取られていた。

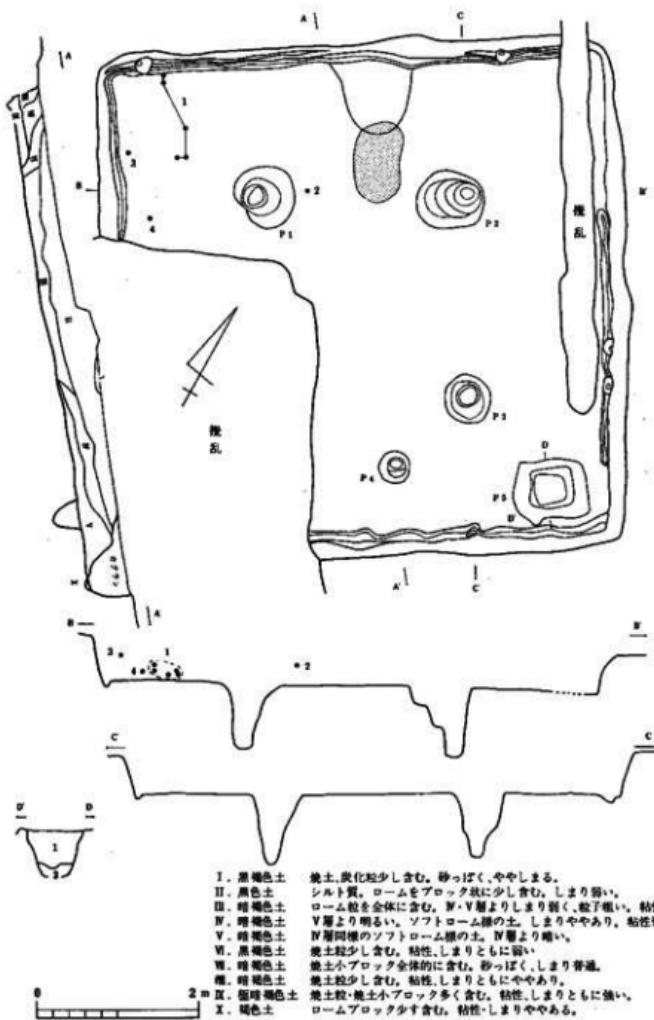
第Ⅰ地点では表土・客土・瓦礫等を除去した後、任意に10m×10mの方眼を設定し、北西を基準に南東へA～E、南西へ1～5と割り振り、各方眼をアルファベットの大文字とアラビア数字との組合せでA-1・A-2……とし、さらに各方眼をa～dの小文字を用いて5m×5mの方眼に4分割しA-1-a・A-1-b……と名付けた。(第3図)。包含層の精査・遺構確認は原則として、この5m×5mの方眼を単位として行った。

包含層の精査・遺構確認は西側から東側へと行っていった。まずA-2グリッドを中心として縄文時代中・後期の遺物が集中して検出され、さらにB-2-bグリッドの東側部分から加曾利EIV式の深鉢が一括出土し、遺構の存在が推定された。またB-4グリッドを中心に縄文時代の遺物が比較的多く検出された。このような状況の下で精査を行っていったが結果的には縄文時代と思われる遺構は検出されなかった。さらに予想外として調査区東側部分、D-1・D-2グリッドから古墳時代鬼高窓の住居址が1址検出された。古墳時代の遺物はほとんど出土しておらず、住居址以外から出土した遺物は第20図に掲載したものがその全容であり、他に小片が数片出土するのみである。

第Ⅱ地点は先述したことなくプールの排水用集水井設置にともない実施したものであり、校庭内の正門近くにあたる。砂が深く敷かれていたが包含層あるいは遺構覆土と思われる層が残存し遺物が多数検出された。土壌及び住居址の覆土とも思われるが、調査範囲が狭く確定できなく、遺物以外の掲載は割合した。



第3図 第1地点 遺構配置図・土層模式図



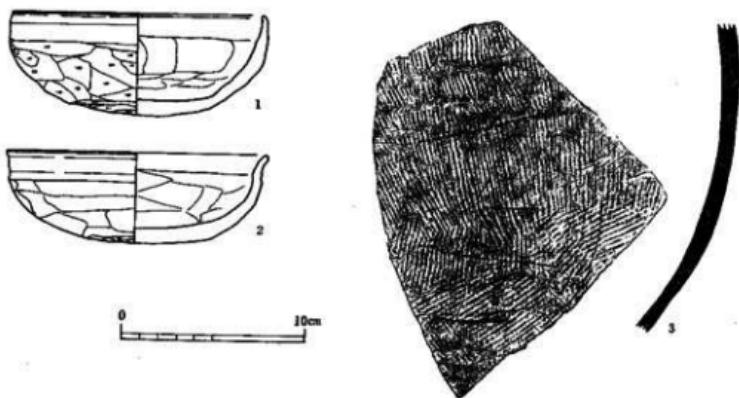
第4図 第1号住居址実測図(36)

## II 遺構と遺物

### (1) 第1号住居址

第I地点東側、D-2グリッドで検出された。一部、D-1グリッドにかかる。住居址南側1/4を擾乱によって掘りとられている。この擾乱の埋土を取り去った段階で断面に黒い落ち込みを確認し、周辺を精査しプランの検出を行ったが、先述したように古墳時代の遺物がほとんど出土しておらず、さらにプランの検出段階でもこの時代の遺物はみあたらなかった。住居址の精査段階でも遺物の出土が少なく、結果的に東側コーナーを中心に出土した遺物以外は小片が數片出土したのみであった。

平面規模は6.3×6.4m、プランは方形を呈する。主軸方向はN-31°-W振れる。確認面からの掘り込みは0.4~0.6mで、ハードロームを掘り込んでおり、これを床としている。所謂、直床である。全体的に平坦でカマドの火床面（第4図、スクリントーン部分）周辺が堅固である。壁の立ち上がりは開きぎみである。主柱穴はp<sub>1</sub>・p<sub>2</sub>・p<sub>3</sub>で擾乱によって1本欠く。カマドの向側、南東壁沿いに小さなp<sub>4</sub>、東側コーナーに方形の貯蔵穴と思われるp<sub>5</sub>がある。各ピットの規模は、p<sub>1</sub>: 80cm×70cm(掘り込み面長径×短径)・-80cm(深さ), p<sub>2</sub>: 90cm×72cm・-85cm, p<sub>3</sub>: 64cm×60cm・-85cm, p<sub>4</sub>: 40cm×40cm・-32cm, p<sub>5</sub>: 90cm×70cm・-58cm, である。周溝は壁に沿って廻っているが北東壁沿いで途切れている。カマドのある北西壁では内側へ掘り込まれている。幅10cm、深さ10cm前後である。カマドは北西壁中央であるが、壁を切り込まず、内側に構築されていた。砂粒・焼土粒が散っていたが、カマド本体は残存しておらず火床面が



第5図 第1号住居址出土遺物実測図(1)

赤くパリパリになって検出されただけである。カマド部分からは遺物も出土していない。

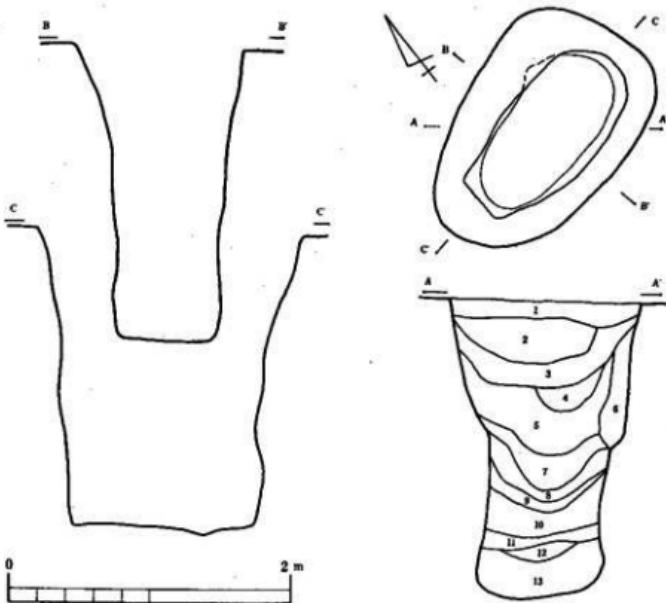
尚、第1表の4の浮子は本住居址の時代のものであるか否か不明なため第16図に掲載した。また同図8の石錐も本住居址の覆土から出土したものである。

第1表 第1号住居址出土遺物観察表

番号	器種	法量	器質	成形・形態	整形・技術		備考
					外	内	
1	环土罐	口径 13.8 器高 5.5	胎土 長石小粒 目立つ。 色調 淡黄褐色 焼成 良好	体部は半球状、底部と の境に不明瞭ながらも 境がある。口縁部はや や内寄り時に直立して 立ち上がる。端部内面 に面を持つ。	口縁ヨコナデ 体部横方向薙削り、 底部横方向薙 削り。	口縁ヨコナデ 体部ナデ	完形
2	环土罐	口径 14.3 器高 5.0	胎土 長石小粒 目立つ。 色調 淡黄褐色 焼成 良好	体部は半球状、底部と の境に不明瞭ながらも 境がある。口縁部は外 反して立ち上がり、機 械に面を持つ。蓋形か	口縁ヨコナデ 体部横方向薙削り 後ナデを加える。 底部削り	口縁部ヨコナデ 体部ナデ	内・外面とも 体部から口縁 にかけて赤彩 口縁から体部 1/4欠
3	甕 須恵		胎土 長石小粒 目立。1cm大の ものも入る。 色調 暗青灰褐色 焼成 良好		斜位のタキ目、 その下は直下がり 斜位のタキ目直 明瞭に残す。	指標によるおさえ の痕跡を少し残 す。	破片。 外側に自然輪 が付く。
4	浮子	輕石	外面に溝あり。				第16図 6

## (2) 第1号土壤

B-3-c・B-4-aグリッドに検出された。第2号溝を切っている。平面規模は確認面(Ⅱ層上面)で1.8m(長軸)×1.2m(短軸)、底面で1.24m×0.6m、確認面からの掘り込みは2.1mである。プランは長方形に近い。長軸方向はN-79°-E振れる。底面は比較的平坦、壁は中程から上がくずれている。埋土は13に分割された。1・2層は締まっていたが3以下の層は締まりが弱く、5~13層は軟弱であった。7以下の層には壁中程から上にかけてくずれと思われるロームブロックが含まれていた。1・2ともに暗褐色土でローム粒を僅少含む。2の方がやや明るい。3. ローム粒を含む暗褐色土。4・5ともにローム粒、1cm大のロームブロックを含む褐色土。5の方が含み方が少ない。6. ロームがベースとなり褐色土を多量に含む。7. 2cm大のロームブロックを多量に含む褐色土。8. ロームブロックがベースとなり褐色土を多く含む。9. 5cm大のロームブロックを少し含む褐色土。10. 8とほとんどかわらない。11. 5cm大のロームブロックを多く含む暗褐色土。12. 大きなロームブロックの層。13. 3cm大のロームブロックを多く含む褐色土。尚、出土遺物は時期不明の繩文土器の小片が数片出土したのみで土壤の時期を決定できる遺物は出土しなかった。



第6図 第1号土壤実測図(No.1)

### (3) 溝

溝は3条検出されたが、いずれも時期不明である。第1号溝は西へ向かってやや深くなり西端の最深部で確認面(Ⅱ層上面)から30cm程掘り込まれている。第2号溝はⅡ層上面から掘り込み10cm程度のものである。第3号溝は先述したように第I地点、東側一帯の残存状況が悪く、重層下面から10cm前後の掘り込みを残すのみである。

第1号・2号溝からは包含層から流れ込んだ縄文土器片が多数出土した。また、第1号溝の確認面(溝覆土最上面)から第20図・2の高坏片が出土したが、溝に伴うものか否か不明であるため遺構外出土遺物として扱った。第1号及び第2号溝からは中・近世と思われるような新しい時代の遺物が検出されていないので、あるいはこの高坏の時期に相当するものかとも思われる。

### (4) 縄文土器

今回の調査では縄文時代の遺構は第Ⅲ地点の土壌・住居址かと思われる部分以外は検出されなかったが、遺物は多く出土している。第I地点ではB-2-c・d, B-3-a・bグリッ

ドを中心とした地点と、B-4-c・d、B-5-a・bグリッドを中心とした地点から中・後期の土器片が多数出土している。また、B-2-bグリッド東コーナー付近で加曾利E IV式の深鉢が一括出土している。

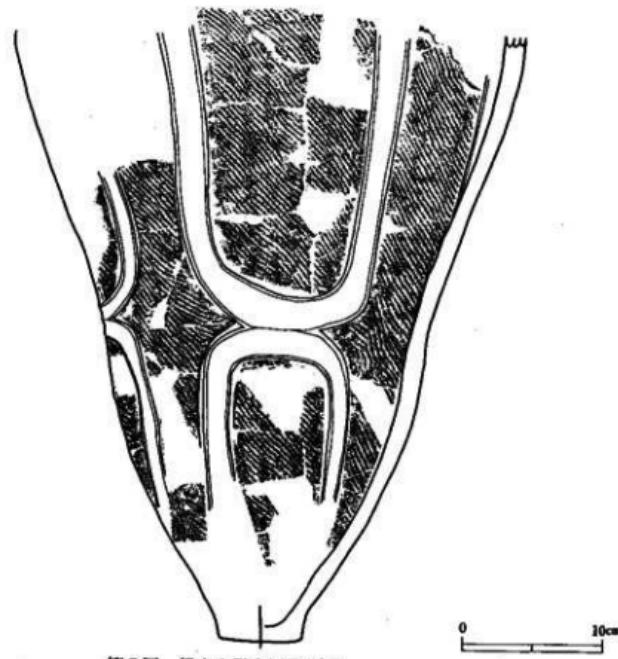
#### B-2-bグリッド一括出土土器（第7図）

口縁部を欠く。単節R Lの地文に、口縁部から「U」字状、底部から「Ω」字状に微隆起によって区画された磨消縄文帯が配されくびれ部でつながる。連結する部分では口縁部からの磨消文様帶と、底部からの磨消文様帶の各々の微隆起が明瞭にではないが残っている。

#### グリッド出土縄文土器

##### 第1群土器（第8図 1~19）

前期後半の土器を一括した。出土量は少なく、第8図に掲載したものがそのほとんどである。尚、掲載してはいないが諸磲b式の浮線文土器の小片が1片出土している。



第7図 縄文土器実測図(3)

1・2・3は同個体である。口唇部には器面に平行に刺突を施す。左から右へ引いていくようみると、口縁には幅6mm程の連続爪形文を2段配し、以下半截竹管状工具により幅3~4mm程の平行沈線を施す。3は平行沈線と、1本を単位とする沈線を斜めに配している。4は口唇部を指頭あるいは棒状工具で器面に対して斜めに押圧しており、口縁部に凸凹がみられる。半截竹管状工具及びヘラ状工具による沈線が施されているが、破片下側と口唇側に2本1組の他よりやや深い沈線が認められる。5・6・7は同個体である。口唇部には斜めに刺突が施される。口縁には幅7mm程の変形爪形文を2段配し、以下半截竹管状工具により幅4mm程の沈線を施す。5の小孔は焼成前のものである。8は波状の口縁である。変形爪形文を2段配し、その間に刻文を加える。爪形文の上には1条の、下には数条の沈線が引かれている。口唇には「ハ」字を横にした形の刺突が施される。これらの施文はすべて深く刻まれている。9・10・11は各々別個体であるが、連続爪形文を施し、その上には半截竹管状工具による幅3mm程の沈線が斜めに施されている。11の長方形の文様も同様の工具で描出されている。12は口縁に幅7mmの変形爪形文を2段配しその間に刻文を加える。以下、半截竹管状工具で幅4mmの沈線を施す。13は口唇及び口縁に縦位の刻目を配し、以下に貝殻腹縁の両端を交互に支点とする波状文を施す。14は口縁部に縦位の刻目を配しその下に凸凹文を施す。以下には貝殻腹縁によるとと思われる斜めの施文が行われている。15は半截竹管状工具による幅3mm程の平行沈線を施し、菱形状の文様を描出する。16は貝殻腹縁を横位にずらして施文している胴部破片である。17・18は同個体である。変形爪形文を施し、その下にR Lの繩文を地文とし、S字状の綾縞文を施す。19は口唇に縦位の刻文を施す。口縁部には幅1.5cm程の連続爪形文を2段配し、その下に半截竹管状工具により幅6~7mmの平行沈線を横位に施す。胴部中段にも連続爪形文を2段配し、以下は中央部を欠いた貝殻腹縁の両端を交互に支点として器面にそって引きながら施文している。1~3は浮島I式・4~15は浮島II式・19は浮島III式に比定されると思われる。

## 第二群土器（第9図～第10図 20~57）

中期の土器を一括した。

a種（20~21） 貼付陳帶により渦巻文を描出している。20・21ともに頸部。21の繩文はL R。

b種（22） 指頭幅程の凹線を用いて施文する。

c種（23） 口縁部を無文とし、繩文の地文の上に平行沈線で入組状の文様を描出する。

d種（24~34） 列点文を配するものを一括した。列点の形は24~30が円形、31~34は縦長である。24は陳帶と沈線で区画された口縁部に列点を配する。25は断面三角形状の口縁に列点を配し、胴部は沈線区画の磨消懸垂文を配する。頸部は磨消で無文とする。26は波頂部に列点文を配する。27・28は列点文で口縁部無文帶を区画する。繩文はともにR L。29は沈線区画内

に列点文を配し、以下条線を施す。30は口縁部と沈線下に2段の列点を配する。32は列点以下に微隆起区画の磨消文、33は沈線区画の磨消文を配する。34は口縁部を区画する列点部分で段状になる。

e種（35～39） 口縁部無文帶を沈線によって区画し、以下繩文を地文とするものを一括した。35の沈線は太く口縁部にも1条に入る。36は胴部上半に沈線区画の磨消文が配される。37の沈線は細く鋭い。39の沈線は太く微隆起状になる。

f種（40・41） 口縁を肥厚させるものを一括した。41は口唇に凹線を施す。

g種（42～46） 微隆起により口縁部無文帶を区画し胴部に繩文を配するもの。45・46の胴部は微隆起区画の幅広の磨消文が施される。

h種（47） 口縁部から沈線区画の磨消文が施されている。

i種（48～49） 楯齒状工具により施文される。48は幅広の浅い沈線により口唇部無文帶とし、49は口縁部文様帶が消滅している。

j種（50・57） 繩文の地文の上に沈線区画の幅の狭い磨消文が施される。繩文はL R。

k種（51） R Lの繩文の地文に微隆起区画の磨消文を施す。

l種（52） 小型有孔土器。微隆起により文様描出される。

m種（53～54） 楯齒状条線を施文する。53は刻目をもつ隆帯を縦位に貼付する。

n種（55～56） 把手。

第II群土器は23を除き中期後半の加曾利E III・IV式期に位置づけられる。

### 第III群土器（第11～12図 58～85）

後期初頭の土器を一括した。

第1類（58） 称名寺II式。沈線区画内に列点を配する。

第2類（59～63） 堀之内式を一括したが、一部加曾利B式を含むとも思われる。

a種（59～63） 無文の地文に櫛齒状工具で文様を描出したものを一括した。59は口縁に太い凹線を巡らし波状の櫛齒状沈線を施す。60～62は櫛齒状沈線を直線に引いて施文する。63は擦痕状の沈線である。

b種（64～65） 無文の地文に沈線を施す。64は枠状の文様を描出する。65は半截竹管状工具により施文する。

c種（74～75） 繩文のみを施す。74はL R。75はR L。75は口唇部内面側に沈線が巡る。

d種（66） 繩文の地文に櫛齒状の沈線を施す。

e種（69） 口縁に3条の沈線を巡らし口縁部を無文とし、以下粗い繩文とする。

f種（67・68） 繩文を地文とし口唇・口縁に沈線を施す。67は口縁部に2条の太い沈線を施す。68は口唇部に太い沈線を施す。ともに口縁がやや肥厚する。

g種(70) 平縁の口縁部で、縦位の縄文と沈線により文様を描出す。

h種(71~73) 波状の口縁部で縄文を地文とし沈線により文様を描出す。72は波頂部に、73は波頂部とその口唇部に円形押圧文を施す。

i種(76~79) 口縁部に細い隆帯を配する。76・77は同個体。隆帯には刻みが加えられ、以下には3本1組の櫛齒状工具で施文される。78は棒状工具で隆帯に押圧を加え、以下は無節の縄文上に横位の磨消縄文を配する。79は隆帯に指頭によると思われる押圧が加えられる。以下は撻糸文となる。

j種(80) 波状の口縁で波頂部に小孔を入れる。小孔の右側には小さな貼付がなされている。口縁は沈線によって無文とし、以下にはLRの縄文が施されている。

k種(84・85) 深鉢の胴部破片を一括した。84は刻目を持つ陰帶で区画し縄文の地文に沈線を加える。85は沈線によって幾何学的な文様を描く。

l種(83) 深鉢の口縁部破片。口唇を欠く。沈線区画された縄文帶により文様を描出す。

m種(81・82) 無文の土器。

第2類 a~k種は堀之内I式、l種は堀之内II式、m種・i種の79は堀之内式~加曾利B式に比定されよう。尚、第II群C種(第9図23)は堀之内式と思われる。

#### 第IV群土器(第12図~第15図 86~133)

後期中葉の土器を一括した。

第1類(86~114) 精製土器。h種は粗製ないし半粗製とすべきと思われる。

a種(86~92) 平縁の鉢形ないしは深鉢形土器と思われる。86・87は同個体。横帶文と磨消弧線文により文様が構成され、87には対弧文が加わっている。88は口縁部を無文とし、その下に幅の広い横帶文を配する。89・90は口縁部が無文でその下に2段の横帶文が配されていると思われる。91は2段の横帶文とその間の波状の磨消縄文で文様が構成され、波状の頂点に円形刺突文を加える。口縁部は無文で、口唇に継長の貼付文がみられる。92は縦位の対弧文を伴う2段の横帶文が上下に配されている。

b種(93~97) 深鉢形土器。93は口縁部を無文帶とし、その下に横帶文を配する。94・95は口縁部が縄文帶となり、沈線を1条加えて以下無文となる。97は細い沈線によって区画された横帶文が施される。口縁部は無文帶となり内面に1条の沈線がめぐる。

c種(98~101) くびれを持つ深鉢形土器の胴部破片を一括した。98はくびれ部を境に上には横位の対になった磨消弧線文、下には3段の横帶文が配されるが、縦位3段の連続した対弧文の左側では一部の横帶文が磨消されておりわずかに沈線の痕跡が認められる。横位の対弧文の間も本来縄文部分になると思われるが右側で磨消されている。99はくびれの下側に2段の横

帶文と磨消弧線文と思われる部分がみられる。2段の横帶文には区切り文がみられる。縦位の対弧文の間に沈線が入っているものと思われる。くびれ部分から上には横位の弧線文を配し、さらに103のような文様を配していると思われる。100はくびれ部分以下2段の横帶文、くびれ部の上部には横位の磨消の弧線文が配される。区切り文は横位の弧線文の連結部分から縦位の対弧文が配される。101はくびれ部上下に2段の横帶文が配される。区切り文は縦位の対弧文が無文帯にも配されている。横帶文は幅が狭く縄文は無節である。

d種(102) 口縁がくの字状になり胸部がそろばん玉状に張り出す深鉢形土器。くびれ部に沈線を巡らし口縁無文とする。くびれ部以下は縄文を配し縦位の沈線が入る。

e種(103) 102のように胸部がそろばん玉状になると思われる。横位の弧線文が上下対となる。縄文部分には沈線により菱形状の文様が描かれ縦位に沈線が入る。

f種(104) 口縁の肥厚する深鉢形土器。横位に沈線が引かれ口縁部を無文帯とする。横位の沈線の下は斜め方向に沈線を施す。105・106に比べ沈線は深く鋭い。

g種(105・106) 台付の鉢形土器の胸部と思われる。水平の刻目の下に斜め方向に沈線が施される。

h種(107~110) 波状口縁の深鉢形土器。107は縄文の地文に沈線で文様を描出して入組状になったもので、横位の磨消弧線状の文様を描出し、はね返した様な沈線がみられるが、全て波頂部の位置で集約されている。波頂部近くに縦位の対弧文も配されている。内面には2条の太い沈線がめぐり、波頂部の位置で入組状になっている。108・109は同個体で縄文の地文に沈線によって文様が描出されている。波頂部の下には2段の縦位の対弧文、内面にも縦位の対弧文が1つ施される。また、波底部の縄文部分にも縦位の対弧文が施されている。110は縄文の地文のみである。内面に1条の沈線が施されるが、波頂部で途切れたりその間に上に尾をわずかに引いた円形文が配される。波頂部下の孔は焼成後のものである。

i種(111~114) 浅鉢形土器。外面の稜部から内面にかけて良く磨かれており、外面稜部以下は粗い削り痕をのこす。113・114は同個体。111・112の口唇部の刻みは円形状である。113・114は斜めの刻みである。113・114の稜部内面は幅の広い凹線状になっており円形文が配される。113のS字を横にしたような貼付の内面側では円形文が2つ配される。

第2類(115~133) 粗製土器を一括した。

a種(115~118・120) 縄文を施し、内面に沈線の巡る深鉢形土器を一括した。115・120は目の粗い縄文を施す。116~118の縄文はLR。

b種(119) 小型の鉢形土器。粗い縄文を施す。口縁に太い沈線を巡らし、内面には凸帯が巡る。

c種(121~125) 縄文を地文とし口縁部に指頭押圧された隆帯が1本巡るものとを一括した。122は内面に1条の沈線が巡る。地文はRLの縄文。深鉢形土器。121は球脛状の鉢形土器。

隆帯以下には粗い縄文が施される。123と124は同個体で、球窓状の鉢形土器。隆帯の上部を無文とし、以下は粗い縄文が施されている。125は波状の口縁部になる。内面に1条の沈線が巡り対になった縦位の弧縊文が配される。縄文はLR。

d種(126～127) 口縁に指頭押圧の隆脊が1本巡り、地文を縄文として沈線を加える深鉢形土器を一括した。126は口縁内面に1条の沈線を巡らす。127は脇部に最大径を有する。

e種(128～130) 縄文を地文とし口縁部に2条の指頭押圧の隆脊が巡る深鉢形土器。

128は2本1組の条線状の沈線が斜位に加えられ、129・130は内面に2条の沈線が巡る。

130は脇部でわずかにくびれる。130の縄文はRL。

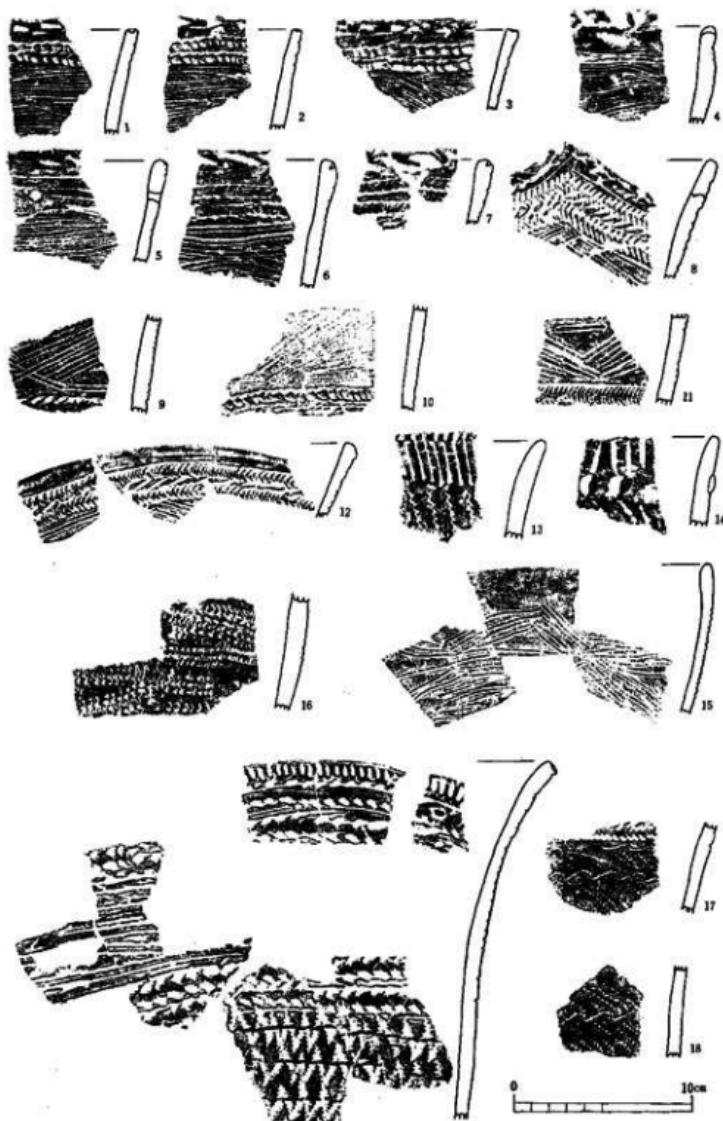
f種(131～133) 粗製深鉢形土器の脇部・底部を一括してあつかう。131はくびれ部に2条の沈線によって磨消部をつくり、以下に縄文の地文上に格子目状の沈線を加える。132は縄文の地文の上に斜位の沈線を施す。133は粗い縊文を施した脇部。

本土器群は加曾利BⅡ式の古手を中心とする時期と思われる。

#### 第V群土器(第16図 1～6)

注口土器を一括した。1はそろばん状の脇部で、縄文LRの地文に沈線で施文する。2は沈線により遮光器文を描出する。縄文はRL。3は口唇部と脇部の2本の沈線で作出された部分とに細かい刻みが加えられる。肩部には縄文が施される。

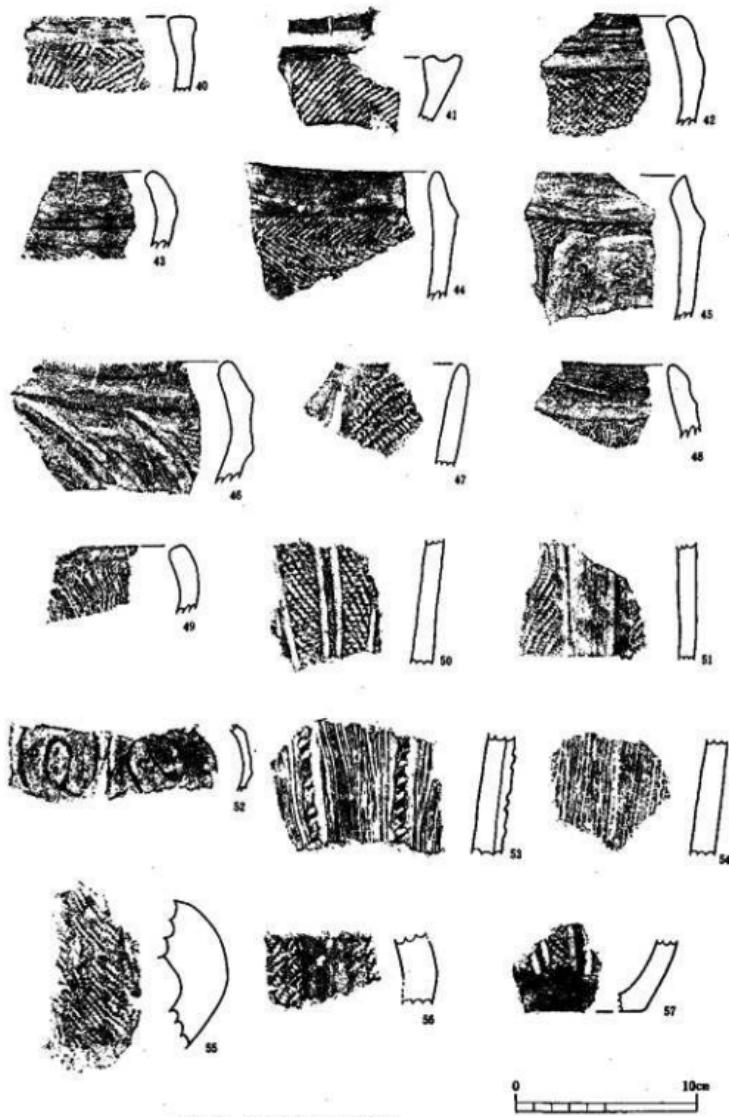
1は堀之内式、2は加曾利BⅢ式、3は堀之内式と思われる。



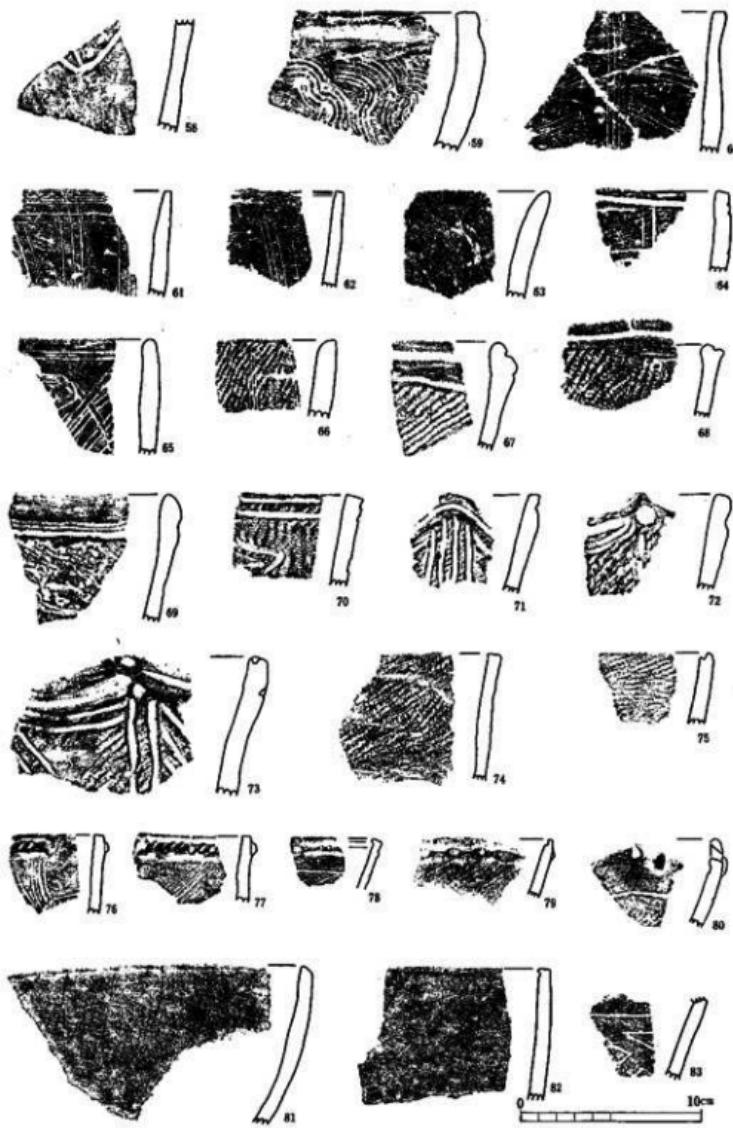
第8図 第I群土器(36)



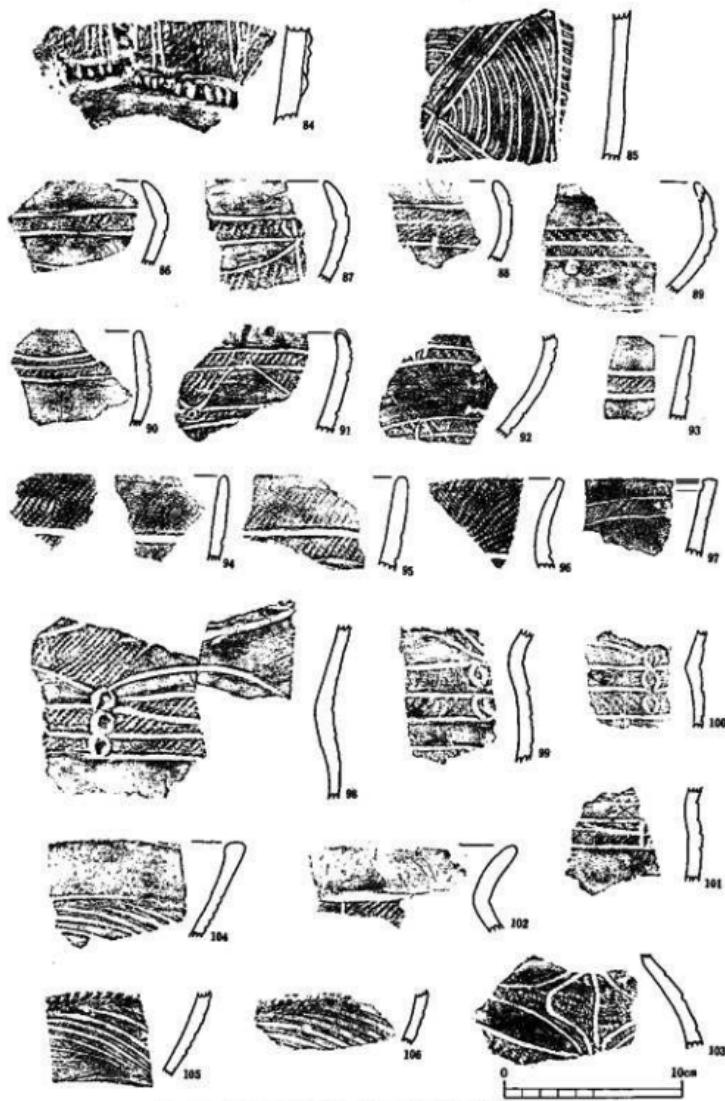
第9図 第三群土器(1)(3)



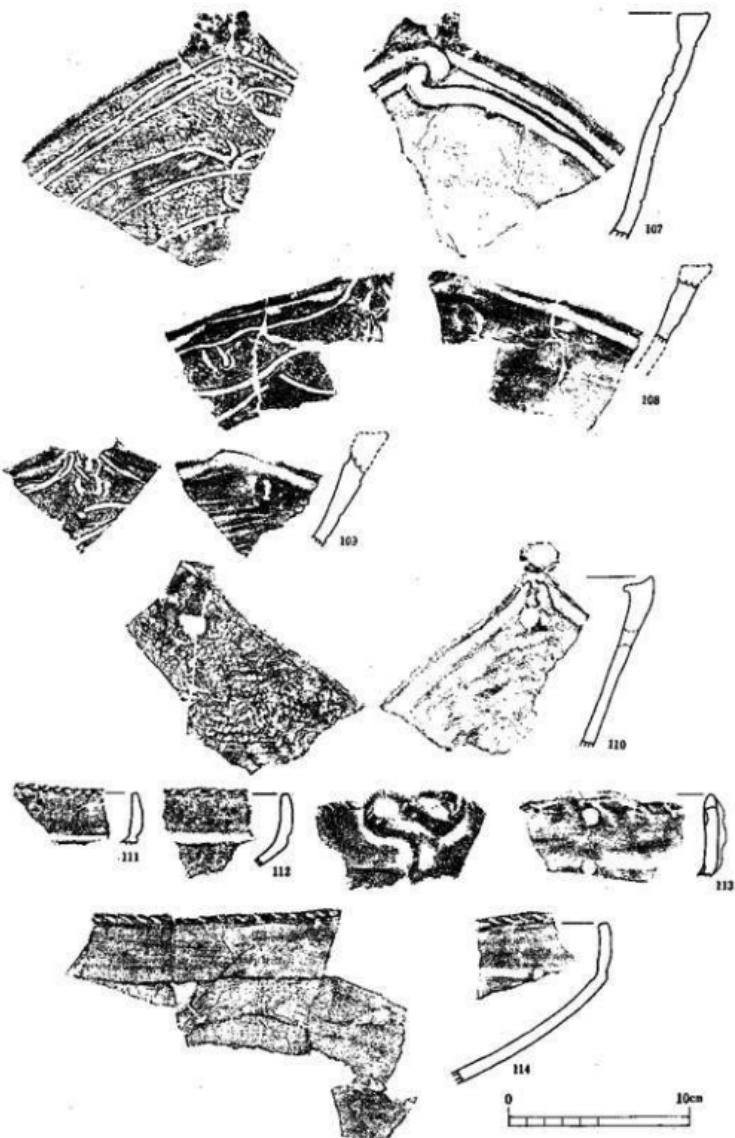
第10図 第II群土器 (2)(3)



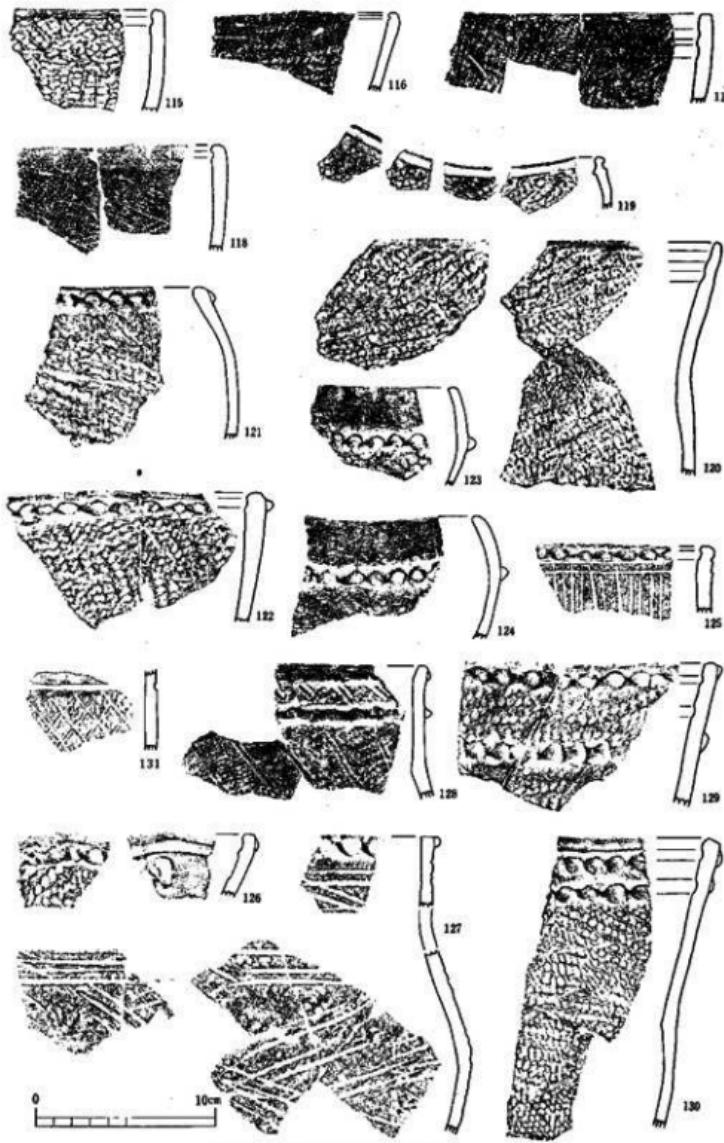
第11図 第二群土器 (1) (3)



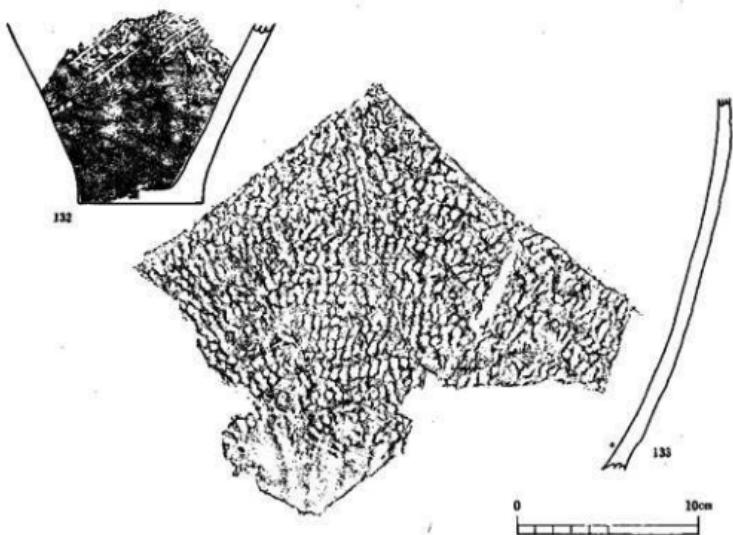
第12図 第二群土器(2)・第一群土器(1)(%)



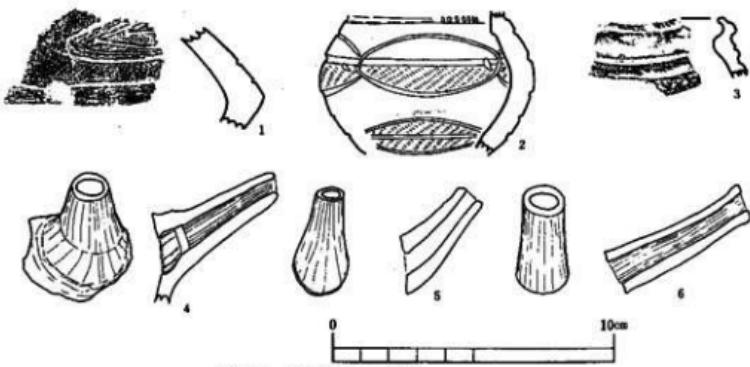
第13図 第IV群土器(2)(少)



第14図 第Ⅳ群土器(3)(3)



第15図 第IV群土器(4)(36)



第16図 第V群土器(36)

第2表 繩文土器出土地点(1)

辨認番号	遺物番号	地點	第Ⅰ 地点		9	40	I	B-2-d	III					
			グラッド 層											
			第Ⅱ 群 土 器											
7	1	I	A-4-d	III		41	I	B-2-d	III					
	2	I	B-4-a	III		42	I	A-3-b	III					
	3	I	B-4-c	III		43	I	B-2-d	III					
	4	I	B-3-b	III		44	I	A-3-b	III					
	5	I	A-3-b	III		45	I	B-3-b	III					
	6	I	B-4-c	III		46	I	B-4-c	III					
	7	I	B-3-	III上面		47	I	第1号溝						
	8	I	B-4-c	III		48	I	A-3-b	III					
	9	I	B-4-	III上面		49	I	B-2	III上面					
	10	I	A-3-b	III		50	I	B-3	III上面					
			A-4-b	III		51	I	B-2-d	III					
	11	I	B-5-a	III		52	I	B-2-d	III					
	12	I	B-4-c	III				B-3-d	III					
	13	I	A-1-d	III		53	I							
	14	I	B-2-b	III		54	I	B-4-d	III					
			A-3-b	III		55	I	C-2-b	III					
	15	I	B-2-d	III		56	I	B-3	III上面					
			B-3-a	III		57	I	D-3	III上面					
	16	I	B-3-a	III		第Ⅲ 群 土 器								
	17	I	A-4-d	III	10	58	II							
	18	I	B-4-c	III		59	I	D-3	III上面					
			A-3-d	III		60	II							
	19	I	B-2-c	III		61	II							
8	20	I	第1号溝			62	II							
	21	I	C-5-a	III		63	II							
	22	I	B-2-d	III		64	II							
	23	II				65	II							
	24	I	B-3	III上面		66	II							
	25	II				67	II							
	26	I	B-2-d	II		68	II							
	27	I	B-3-b	III		69	II							
	28	I	B-3-b	III		70	II							
	29	I	E-3-c	III上面		71	II							
	30	I	B-3-b	II		72	II							
	31	I	B-2-d	II		73	II							
	32	I	B-1-d	II		74	II							
	33	I	C-1-c	II		75	II							
	34	II				76	II							
	35	I	C-2-c	III		77	II							
	36	I	B-2-d	III		78	II							
	37	I	A-3-b	III		79	II							
			B-4-c	III		80	II							
	38	I	B-5-b	III		81	II							
	39	I	B-3-b	III		82	II							
						83	II							
						84	II							
						85	II							

第3表 繩文土器出土地点(2)

埠頭番号	遺物番号	地 点	第 I 地 点		12	113	I	B-2-c	III	
			グリッド	層		114	I	B-3-a	III	
第 N 群 土 器										
11	86	I	A-3-d	III		115	II			
	87	I	A-3-d	III		116	I	B-5-b	III	
	88	II				117	I	B-3	III上層	
	89	I	B-3-a	III		118	I	B-3-d	III	
	90	II				119	I	B-4-b	III	
	91	II				120	I	B-2-c	III	
	92	I	第1号溝			121	I	A-3-b	III	
	93	I	B-2-c	III		122	I	B-3-d	III	
	94	I	A-3-b	III		123	I	B-2	III上層	
	95	I	B-3	III上層		124	I	A-3-d	III	
	96	I	C-2-c	III		125	I			
	97	II				126	I	C-3	III上層	
	98	I	B-3-a	III		127	I	C-3-a	III	
	99	I	B-3-a	III		128	I	C-3-c	III	
	100	I	B-3	III上層		129	I	B-3-b	III	
	101	I	B-3	III上層		130	I	B-3	III上層	
	102	II				131	II			
	103	I	A-3-b	III		132	II			
	104	II				133	II			
	105	I	A-3-b	III		第 V 群 土 器				
	106	I	A-3-b	III		134	II			
12	107	II				135	II			
	108	I	B-3-a	III		136	II			
	109	I	B-3	III上層		137	II			
	110	I	B-3	III上層		138	II			
	111	II				139	I	B-2-c	III	
	112	II								

## (5) 土 製 品 (第17図)

すべて土器片を利用したものである。

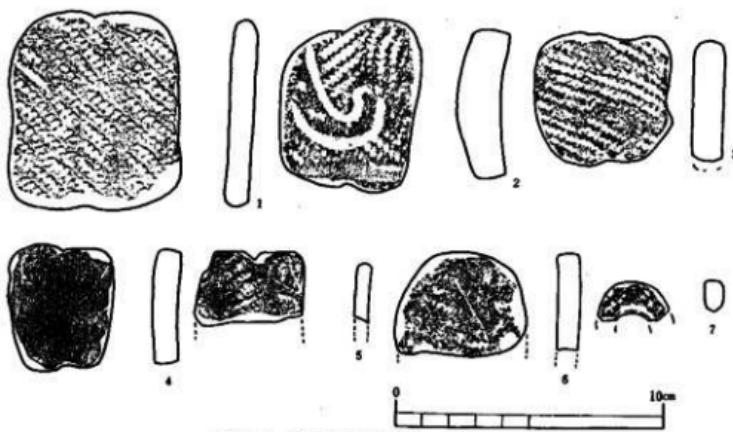
## 土 繩 (1~5)

1は隅丸方形を呈し、刻目間7.1cm・厚さ1cm・重さ67.7gである。2は刻目間5.7cm・厚さ1.5cm・重さ65gである。3は刻目間4.6cm・厚さ1.1cm・重さ36.7gである。4は刻目間4.3cm・厚さ0.9cm・重さ24gである。5は半欠品、厚さ0.4cmと薄い。

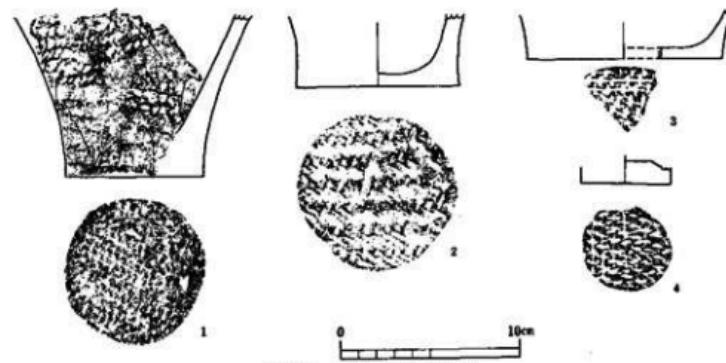
すべて第I地点から出土したものである。1~3はB-2-dグリッドのII層から、4はB-3-aのIII層から出土。5はC-2グリッドII層から出土。

## 土 製 円 盤 (6~7)

6は厚さ0.8cmの半欠品。B-3グリッドII層から出土。7是有孔円盤の半欠品。厚さ0.6cmである。第1号溝から出土。



第17図 土製品実測図(%)

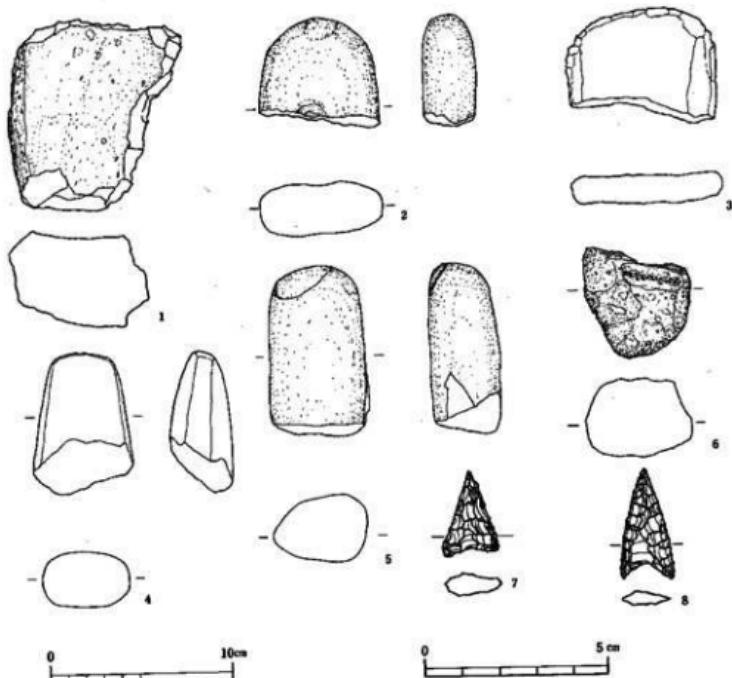


第18図 底部網代拓影(%)

#### 底 部 網 代 (第18図)

1・3は1本越え・1本潜り・1本送り、2は2本越え・3本潜り・1本送り、4は2本越え・2本潜り・1本送りである。

1・2・4は第I地点出土。1はB-2-cのⅡ層、2はB-3-cのⅢ層、4はB-3のⅠ層上面から出土。3は第Ⅱ地点出土。



第19図 石器・軽石実測図(%)

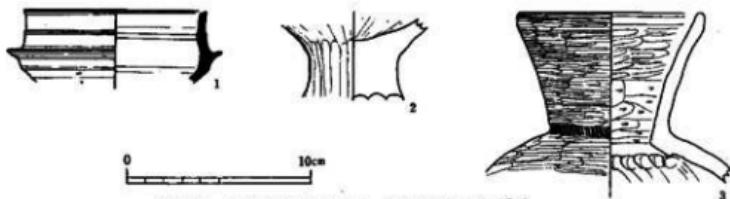
#### (6) 石 器 (第19図)

1. 石皿。安山岩。2. 磨石。中央部くぼむ。安山岩。3. 砥石。4. 磨製石斧。輝緑岩。5. 石斧。安山岩。6. 軽石。7・8. 石鐵。黒曜石。ともに基部に抉りを施すが、7の抉りは浅い。7は抉りから先端まで2.2cm, 基部幅1.6cm, 重さ1.6gである。8は抉りから先端まで2.6cm, 基部から先端まで3.1cm, 基部幅1.5cm, 重さ1.3gである。

すべて第I地点出土。1はB-5-bグリッドⅡ層上面、2はA-3-bのⅢ層、3はB-5のⅢ層上面、4はC-4-aのⅢ層、5はB-3-aのⅢ層、6・8は第1号住居址覆土、7はC-cのⅢ層から出土。

### III まとめ

今回の調査は小規模なものであったが、第II・III地点を含め縄文時代の遺物の分布は地点ごとに時期が異なっていた。前期後半の第I群土器は出土数が少なかったが、すべて第I地点の



第20図 遺構外出土土師器・須恵器実測図(3)

第4表 遺構外出土土師器・須恵器観察表

番号	器種	法量	器質	成形・形態	整形技術		備考
					外	内	
1 环 壺	口縁(9.9)	陶土 長石小粒 わずかに含む 色調 青灰色 焼成 良好	口縁部は突起断面をなす。口縁部にはほぼ垂直に立ち上がり、受部は高くナット出し、先端は削るとい。	口縁部の外側はロクロ使用によるナード。体部外面は削り(ロクロ使用)	ロクロの使用のナード。		1/6残る。 B-3色デッド リップ上部出土。
2 高环 土壺	脚部(4.8)	陶土 石英・長 石粒を含む。 色調 淡黄褐色 焼成 良好	脚部は広がり、柱状部は直立気味に広がる。	脚部及び脚部へミガキを加える。	脚部内面ミガキ。		外部内外脚部 余彩部及び 体部の一部のみ残る。 第1号出土。
3 広口 壺 土壺	口径 10.0 縦径 6.5	陶土 長石小粒 呑立つ。 色調 淡黄褐色 焼成 良好	口縁部はわずかに外傾して立ち上がり、口縁部で墨面に面となる。	口縁部と脚部の境に削毛を施し、口縁部及び脚部は右局 り後方向削り。脚部接合部、結合部は横方向のミガキ。	口縁上部は削り後 ロコナデ、口縁下 部及び脚部は右局 り後方向削り。脚 部接合部、結合 部は横方向のミガ キ。		ロクロ外表面及び 内表面赤彩。 口縁部1/2欠 肩部以下欠。 B-4-dグリッ F

東側部分に分布している。第Ⅰ群土器は浮島Ⅲ式を中心とする時期のものであるが、これに伴う諸式土器は先述したとおり諸式Ⅵ式の浮線文土器の小片1片のみであった。

第Ⅱ群土器もB-2-bグリッドから一括出土した加曾利EⅣ式を含めほとんど第Ⅰ地点から出土したものである。該期の遺構が検出されると思われたが多数の土器片を検出したのみであった。周辺に集落が展開していると思われる。

第Ⅲ群土器は第Ⅱ地点に分布している。第Ⅱ地点は発掘区域が小さため遺構の性格はつかめなかつたが、該期ないしは第Ⅳ群土器の時期の住居址が存在すると思われる。

第Ⅳ群土器は第Ⅰ・Ⅲ地点から出土しているが、第Ⅰ地点では第Ⅱ群土器あるいは第Ⅰ群土器と混在しており層位的に分別できるものではない。第Ⅱ地点においては該期の住居址覆土に第Ⅲ群土器を多く混じていた可能性もあるが不明確である。

検出された遺構の中で時期の判明するものは第1号住居址のみである。鬼高峰期前半と思われる。绳文時代同様、周辺に集落が展開していると思われる。

土器時代の遺物の出土は僅かではあるが、第20図1の須恵器は陶邑編年の第Ⅰ型式第3段階ごろのものと思われる。

# 写 真 図 版



航空写真〔子和清水遺跡(下)・一枚田遺跡(上)〕



第4地点 遺物出土状況



第4地点 古地磁気測定試料採取状況



第6地点 遺物出土状況



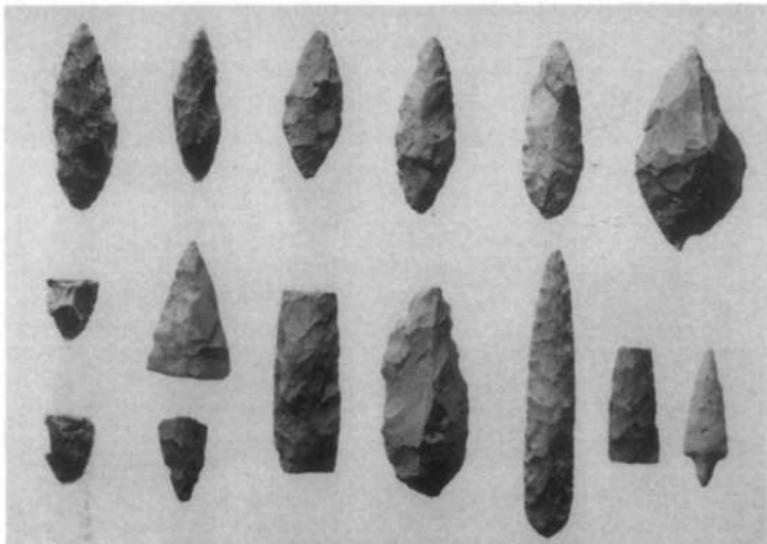
第7地点 遺物出土状況



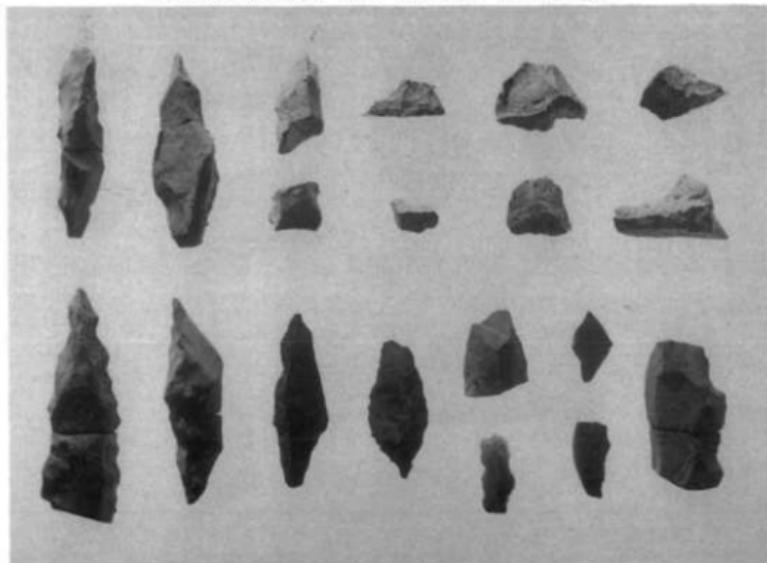
第10地点 遺物出土状況



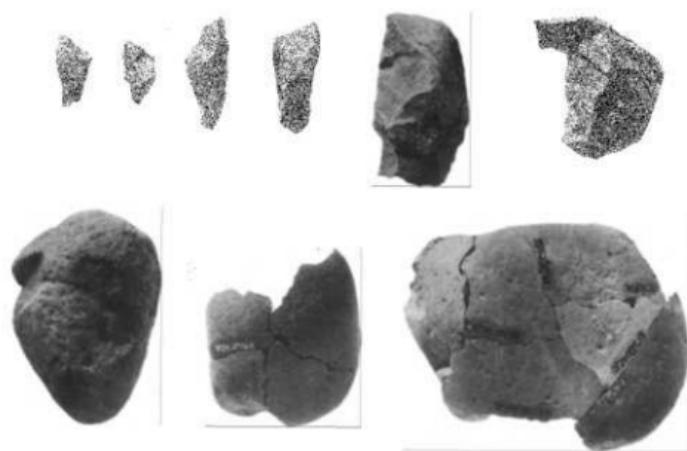
第10地点 炭化物集中部



旧石器時代の遺物 第1・第2地点・表面採集資料



旧石器時代の遺物 第5地点(上段)・第6地点(下段)



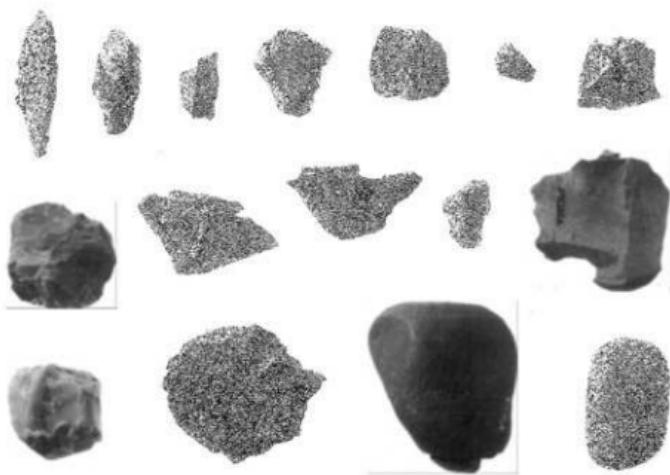
旧石器時代の遺物 第4地点



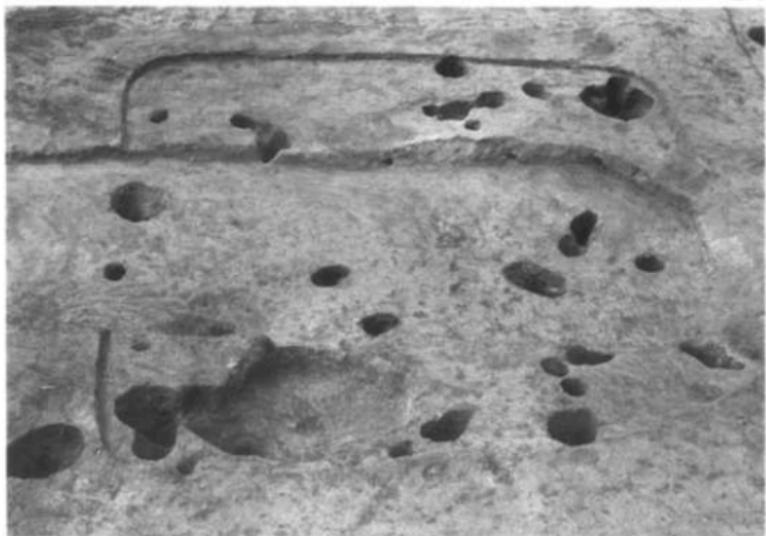
旧石器時代の遺物 第3地点(上段)・第7地点(下段)



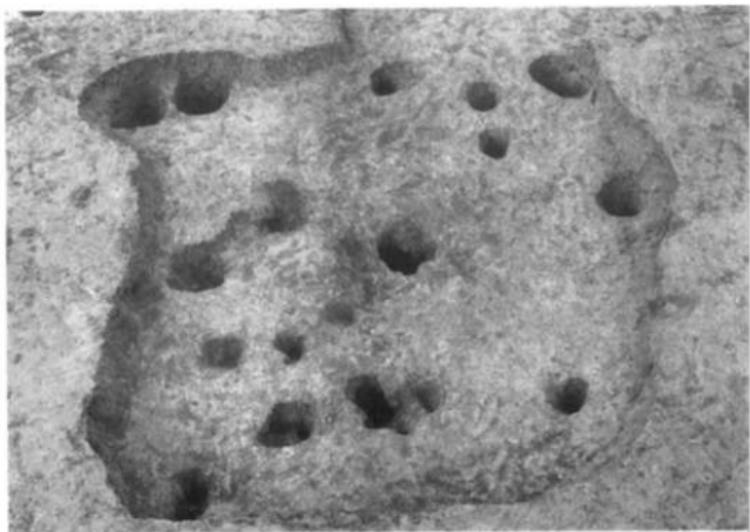
旧石器時代の遺物 第8地点(上段)・第9地点(下段)



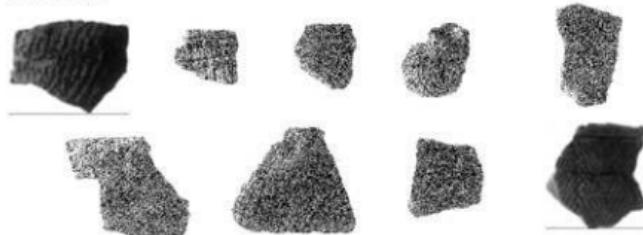
旧石器時代の遺物 第10地点



第 1 号住居址



第 2 号竪穴状遺構



第 1 号住居址出土遺物



第 2 号竪穴状遺構出土遺物



第 3 号竪穴状遺構出土遺物



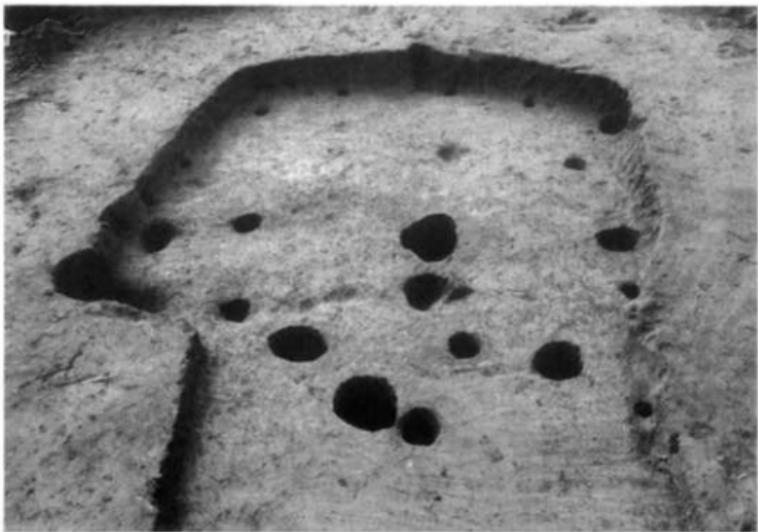
第 4 号住居址出土遺物



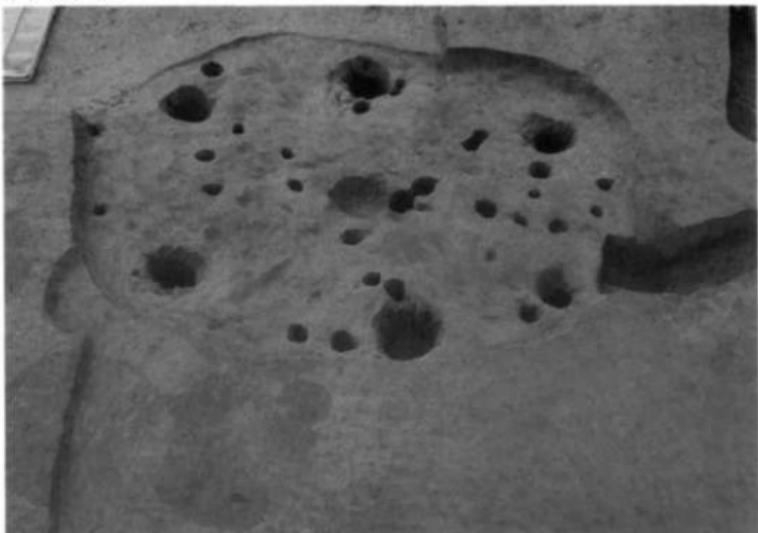
第 6 号竪穴状遺構出土遺物



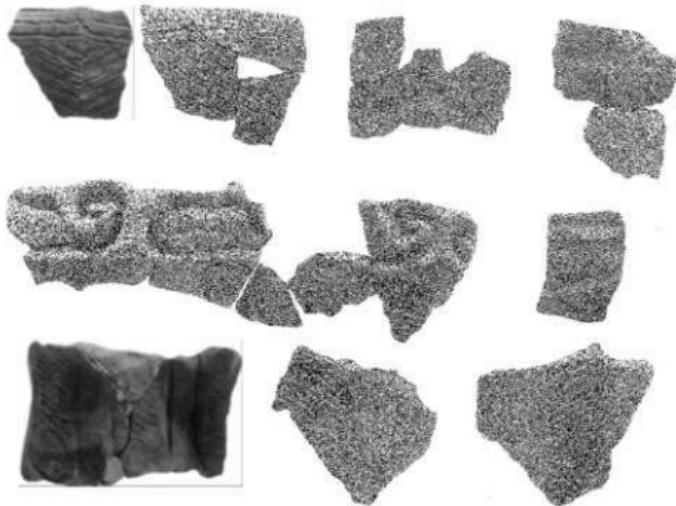
第4号住居址



第7号住居址



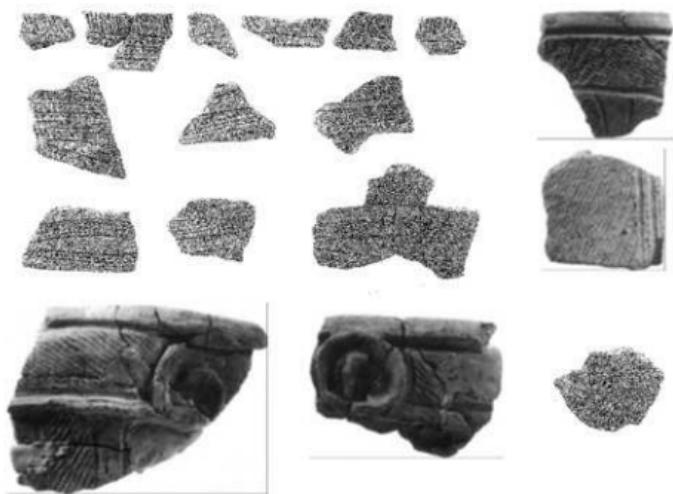
第5号住居址



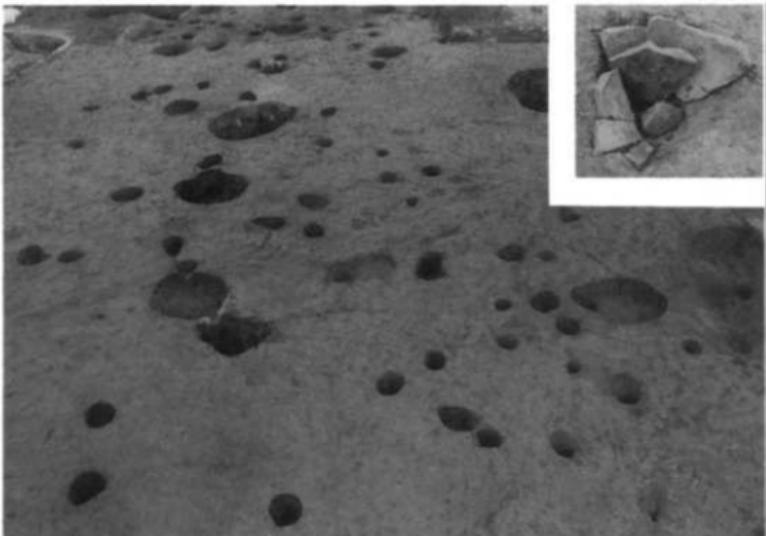
第5号住居址出土遺物



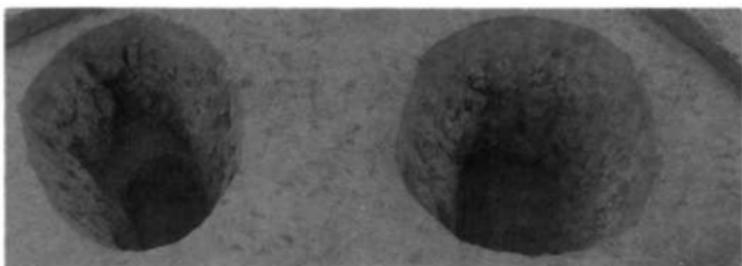
第8号住居址



第8号住居址出土遺物

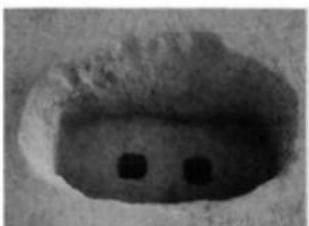


第10号住居址

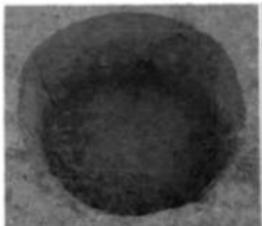


第16号土壤

第17号土壤



第37号土壤



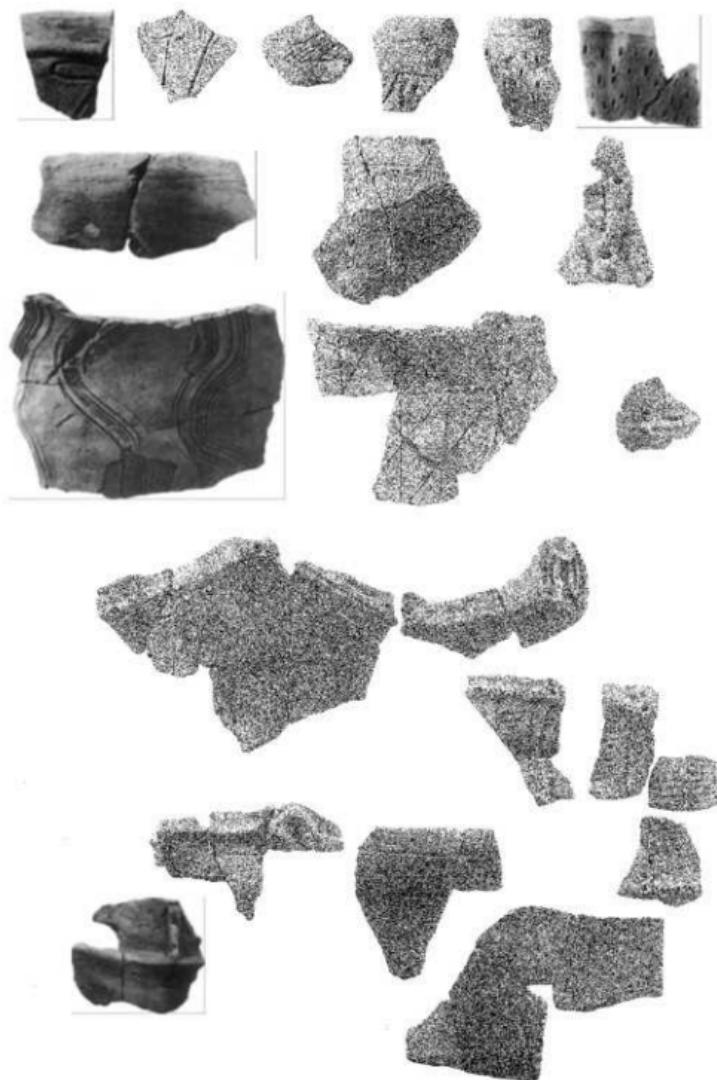
第32号土壤



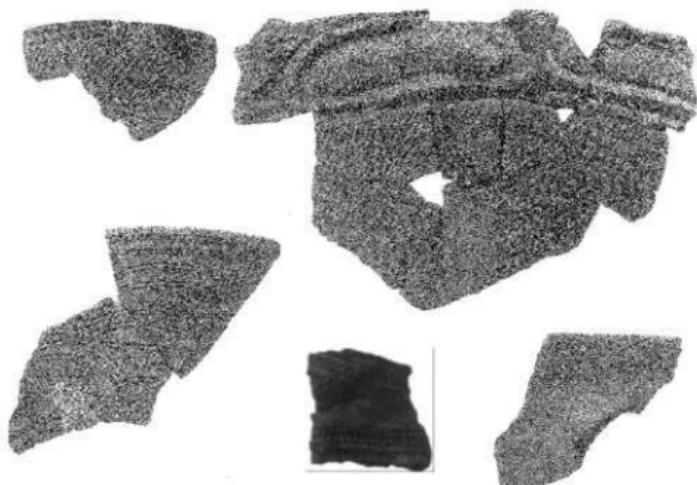
第22号土壤

図版14

子和清水遺跡



第10号住居址出土遺物



土壤內出土遺物



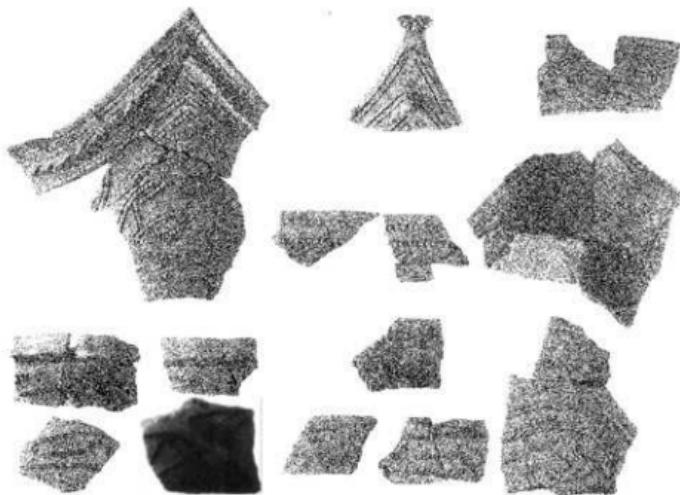
遺構外出土遺物



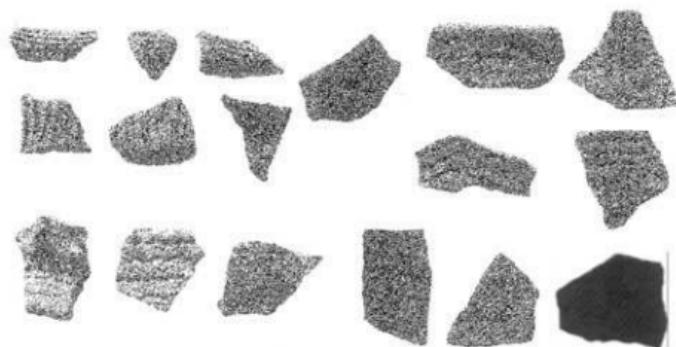
第Ⅰ群土器



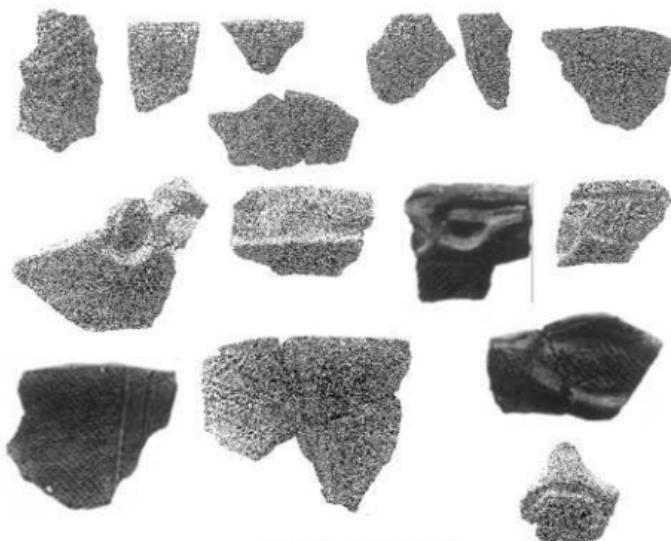
第Ⅱ群土器



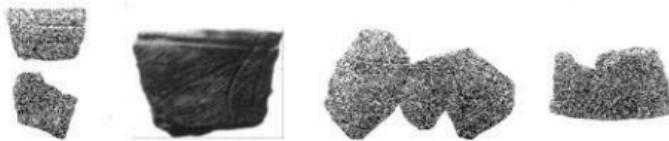
第Ⅲ群土器



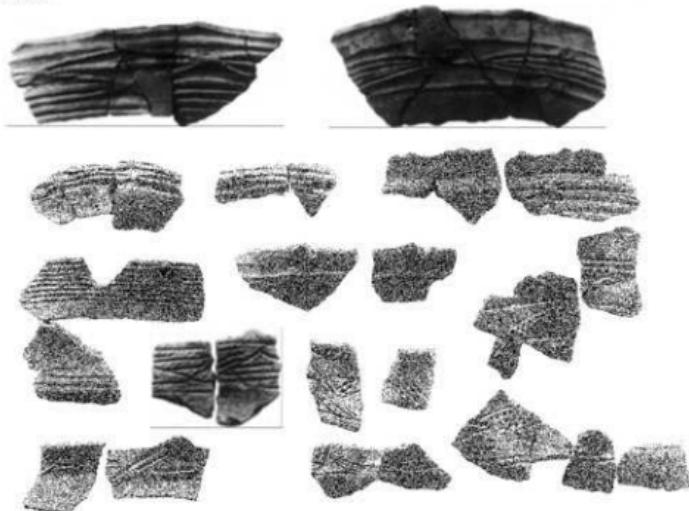
第IV群土器



第V群・第VI群土器



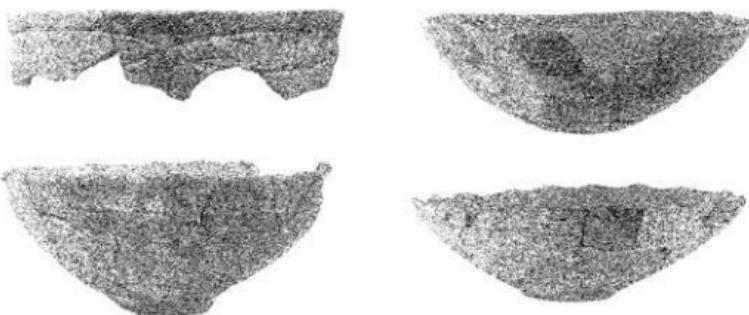
第VII群・第VIII群土器



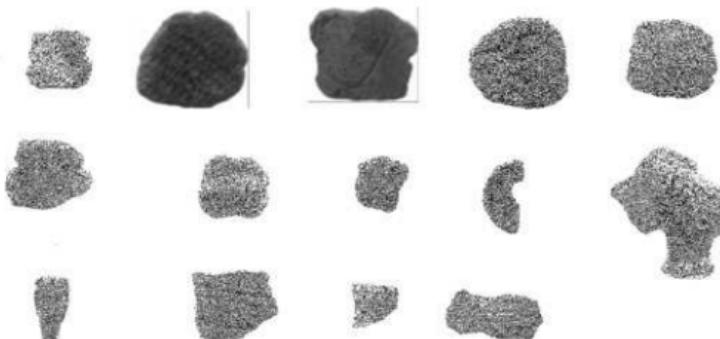
第X群土器(1) (I-24~26グリット)



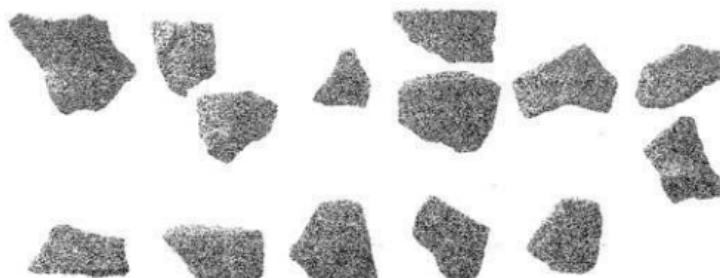
第X群土器(2)



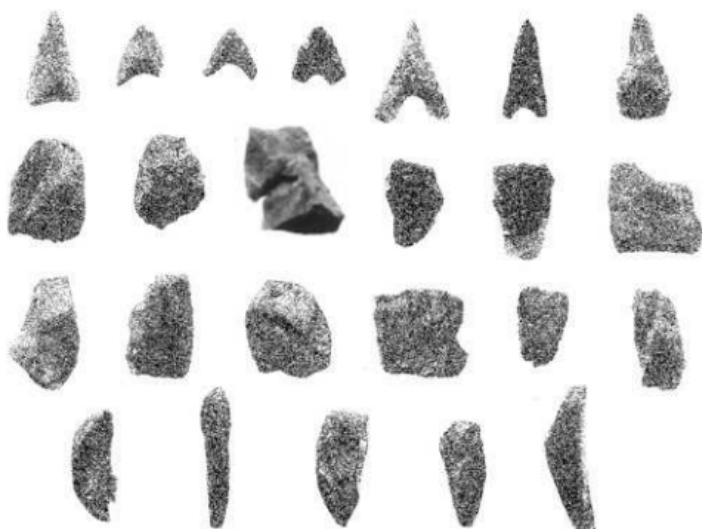
第Ⅴ群・第Ⅹ群土器(3)



土製品・小型土器



弥生式土器



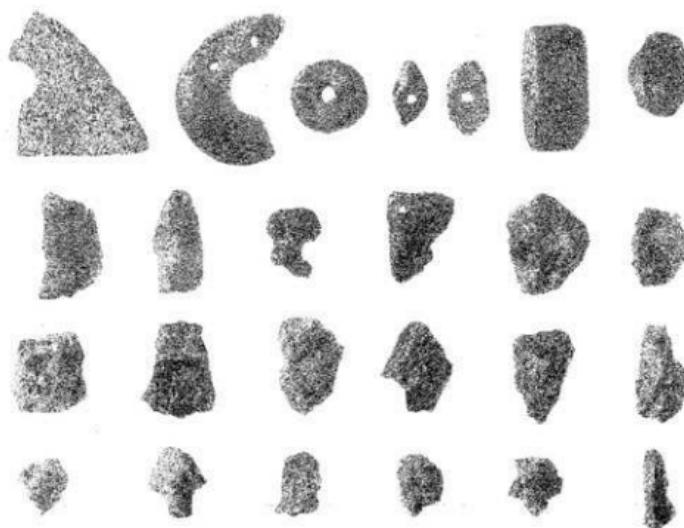
縄文時代の石器 石鋤・石錐・両極石器



縄文時代の石器 石斧・礫器・独鉛石・石棒



縄文時代の石器 磨石・敲石・凹石・石皿



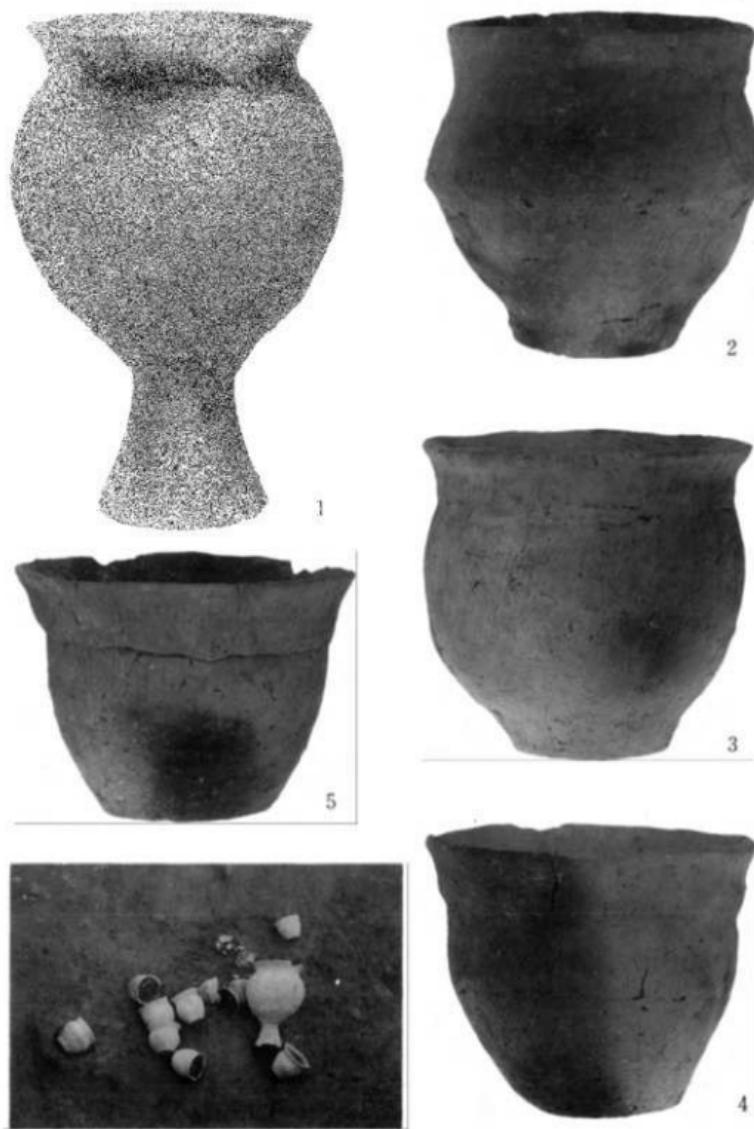
縄文時代の石器 Haniwa類・滑石



第11号住居址



第11号住居址遗物出土状况



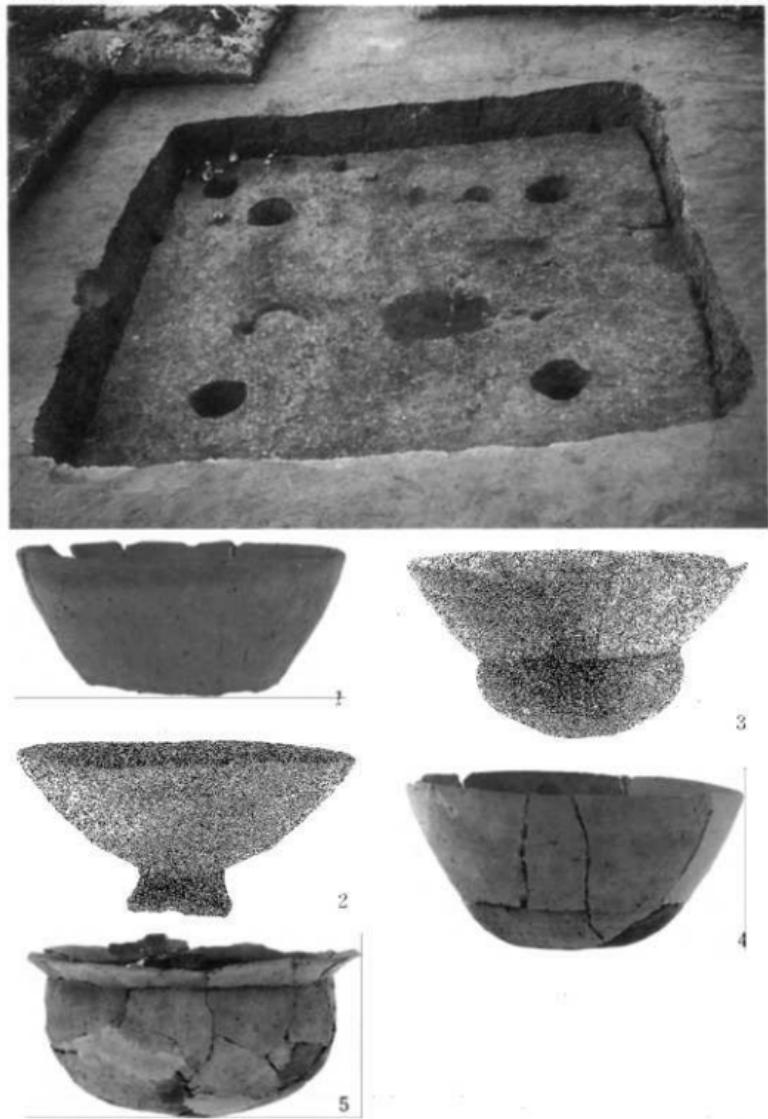
第11号住居址出土遺物(1)

図版24

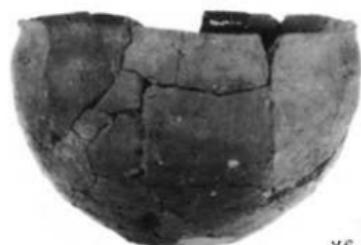
子和清水遺跡



第11号住居址出土遺物(2)



第12号住居址・出土遺物(1)



17



18



7



8



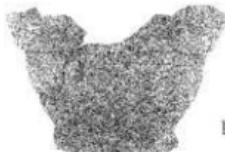
9



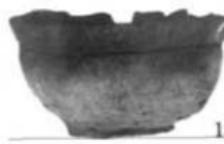
10



11



12



13



14



15



16



17

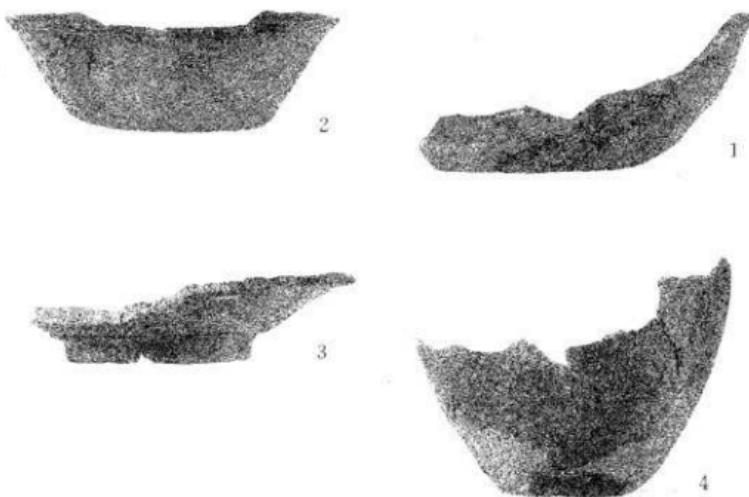


19

第12号住居址出土遗物(2)



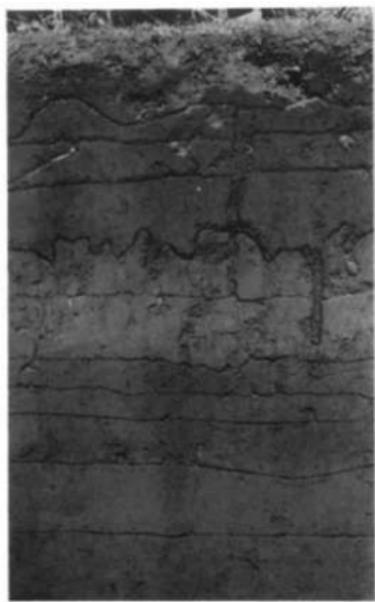
第13号住居址



第13号住居址出土上遺物



遺跡遠景（南側台地上より）



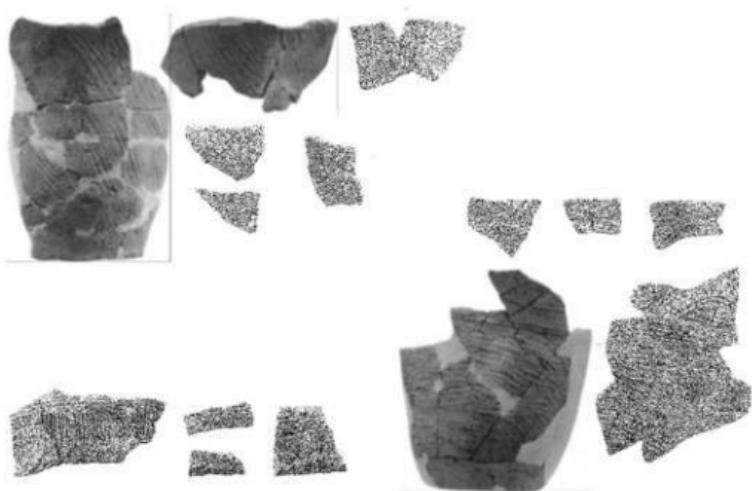
遺跡の層序（I-4-b北壁）



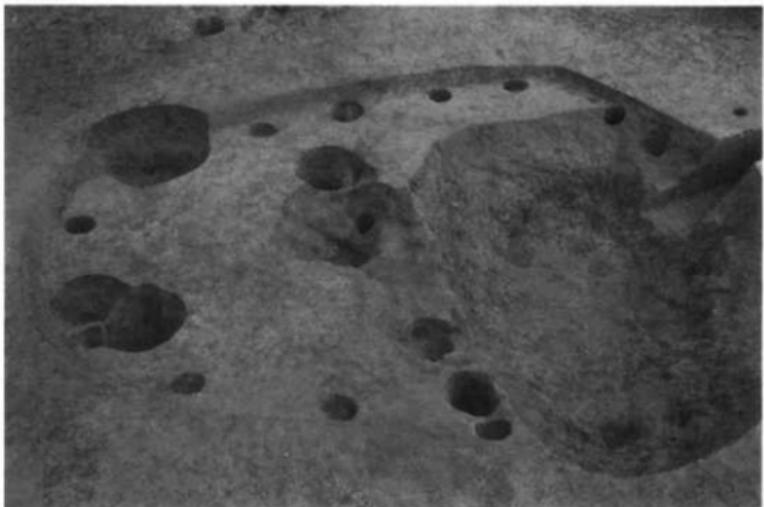
先土器時代の遺物（彫器）



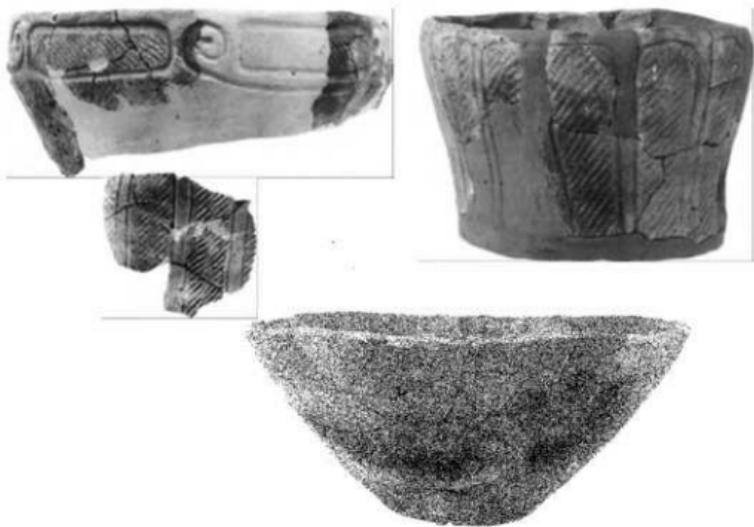
第1号住居址・第3号土壤



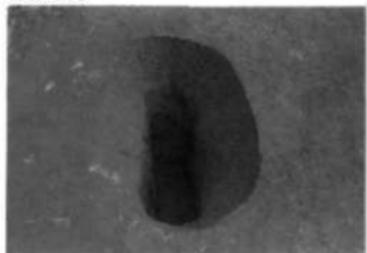
第1号住居址出土遺物



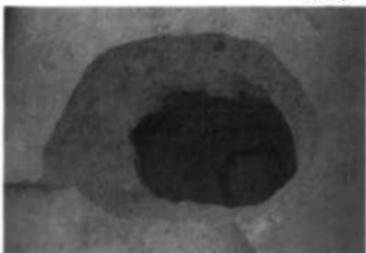
第2号住居址·第6号土壤



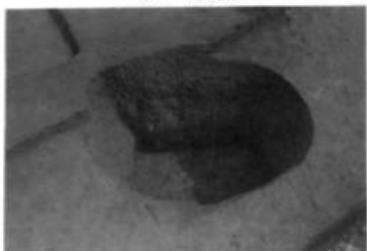
第2号住居址出土遗物



第8号土壤



第7号土壤



第1号土壤



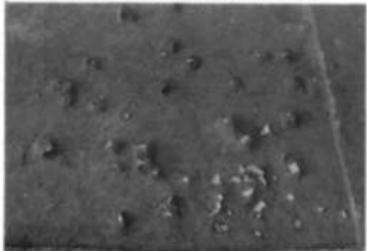
J-8-aグリッド遺物出土状況



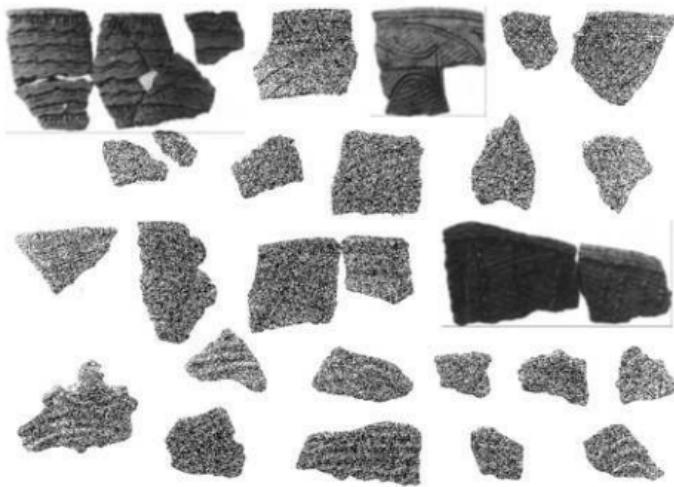
J-8-bグリッド遺物出土状況



G-8-bグリッド遺物出土状況



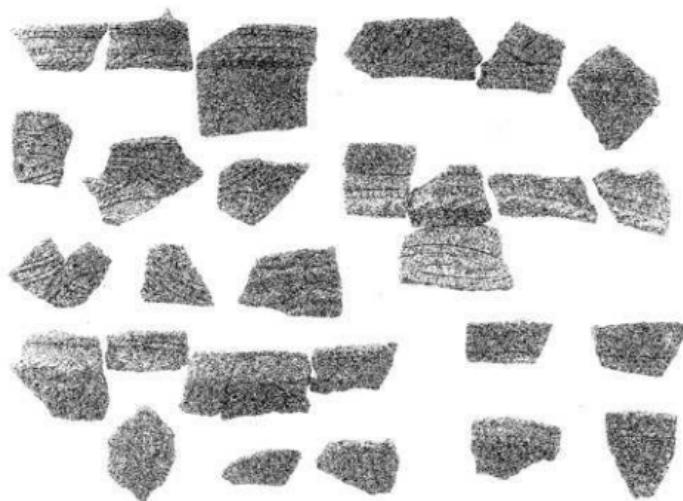
J-8-bグリッド遺物出土状況



第1群土器



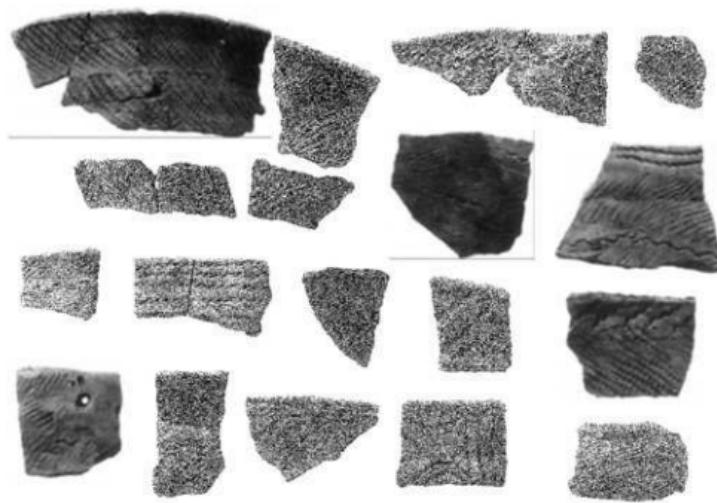
第1群土器



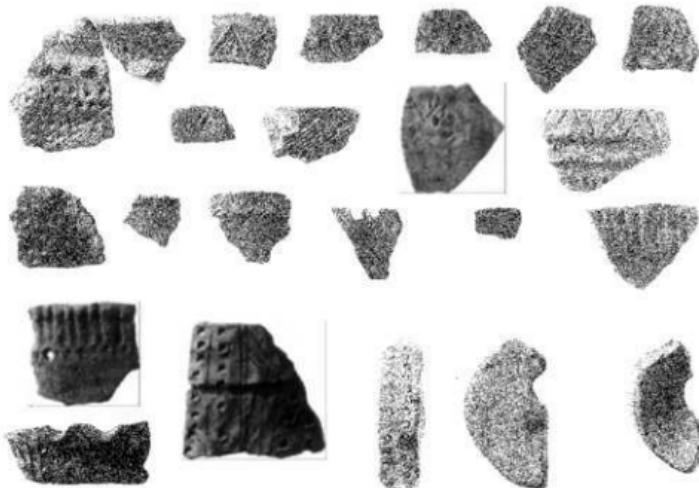
第1群土器



第1群土器

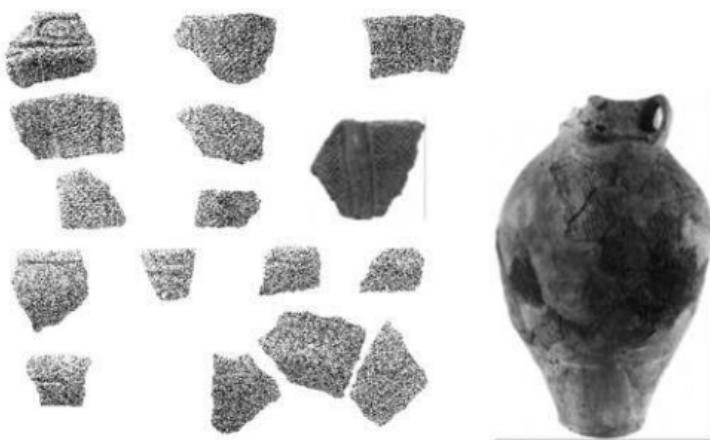


第2群土器

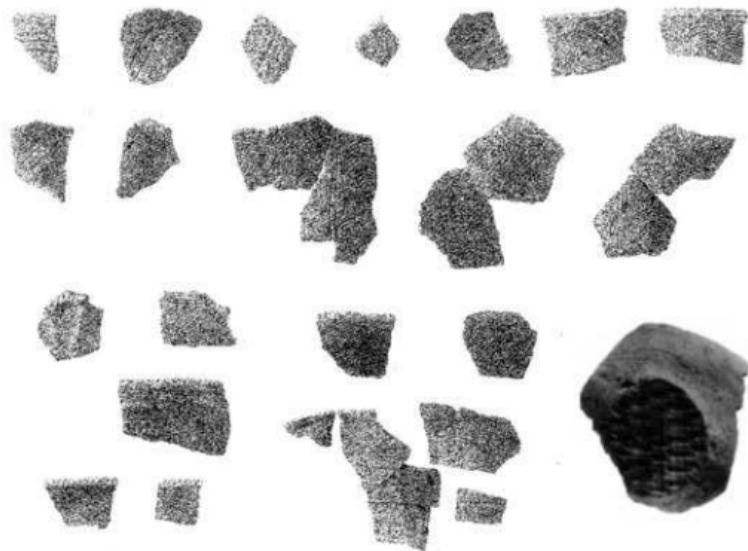


第2群上器

上製块状耳飾



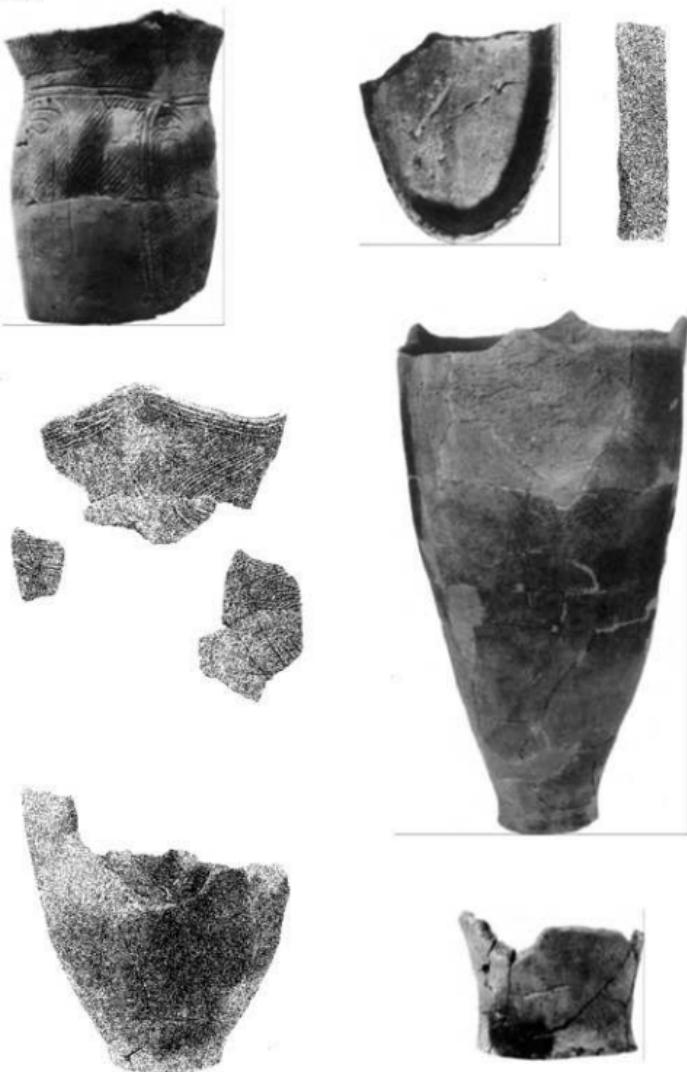
第3群土器



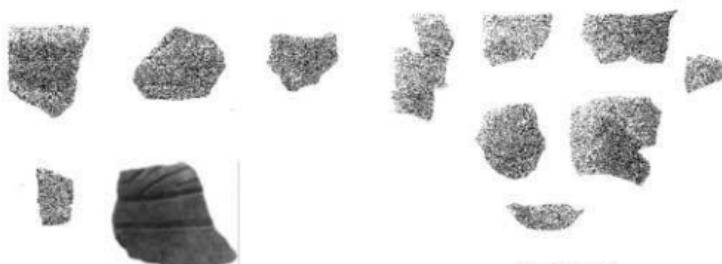
第4群上器

図版36

房地遺跡



第4群土器



第5群土器



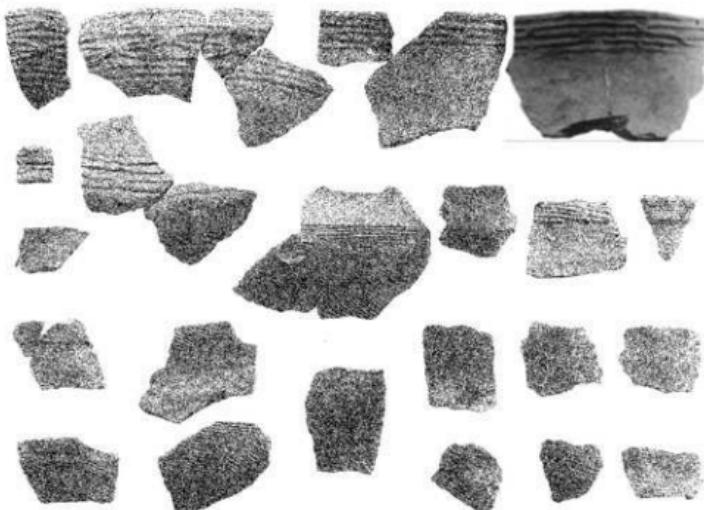
第5群土器



第5群土器



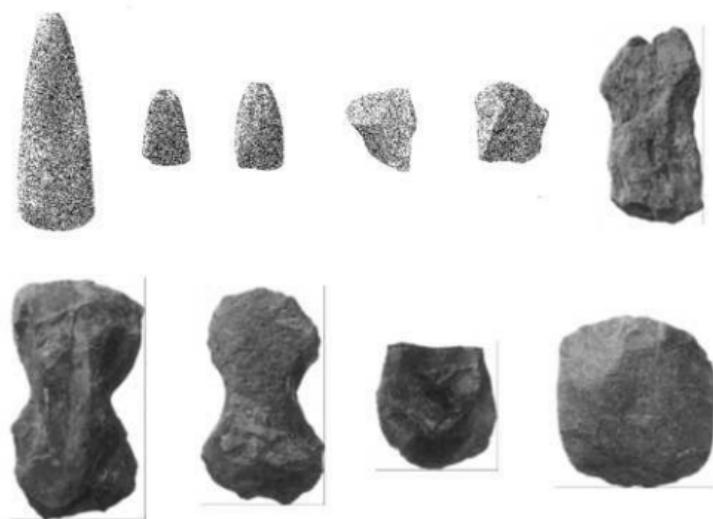
玉



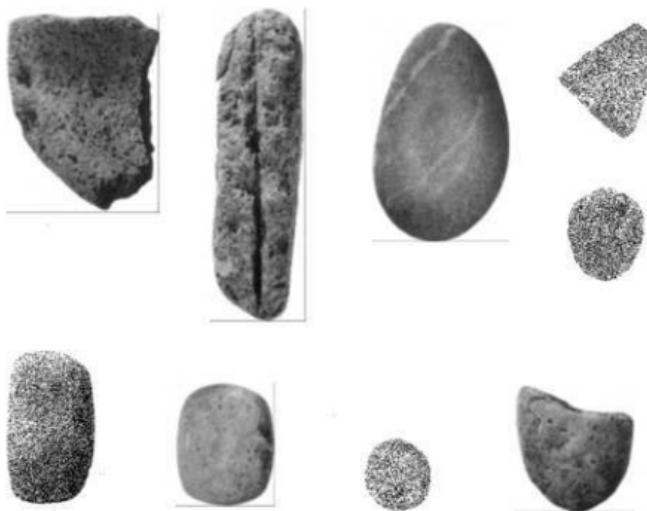
第5群上器



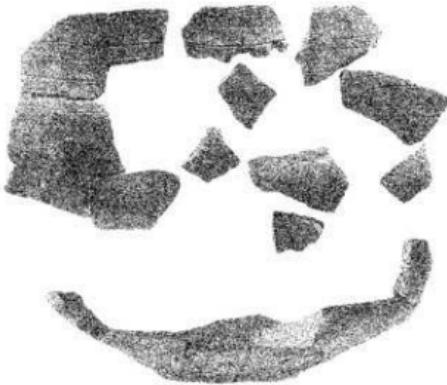
縄文時代の石器



縄文時代の石器



縄文時代の石器



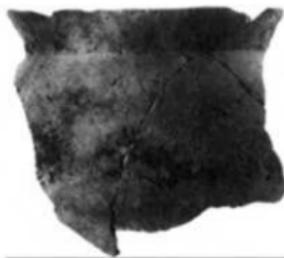
弥生時代の土器



弥生時代の土器



玉類・石製品



砥石

古墳時代前期の土器



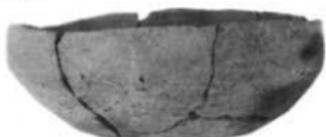
第1号住居址遠景（南西から）



第1号住居址（南東から）

図版42

一枚田遺跡



第1号住居址出土土器

▼



▲ 遺構外出土土師器・須恵器

▲

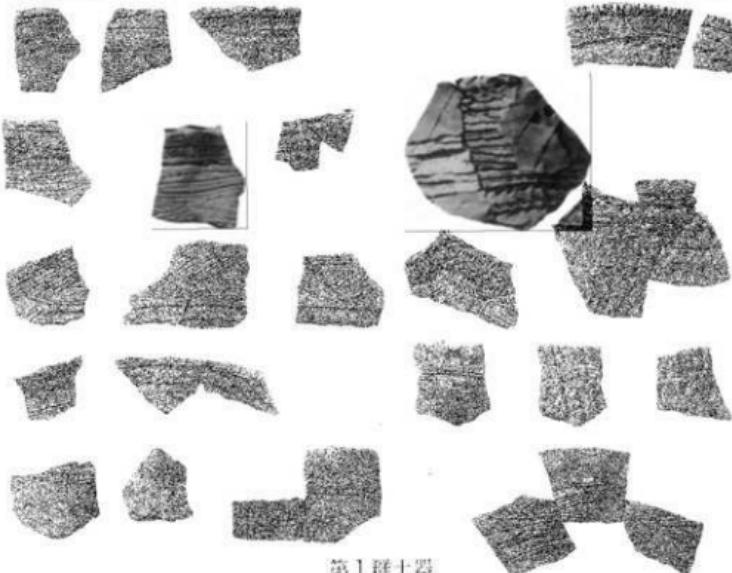


B-2-bグリッド一括出土加曾利EIV式

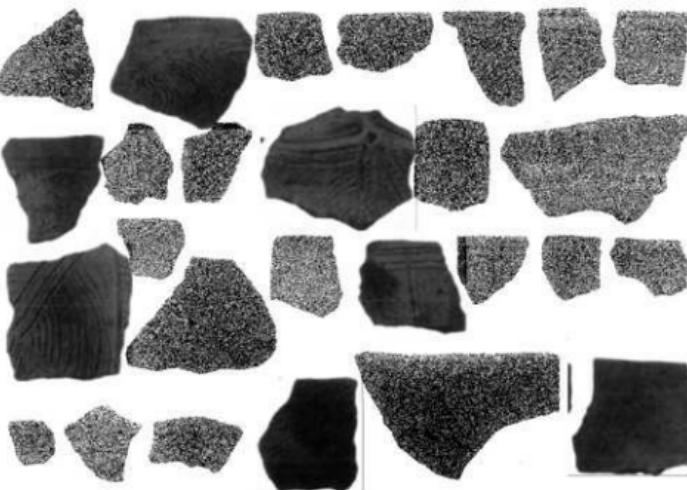
▼

一枚田遺跡

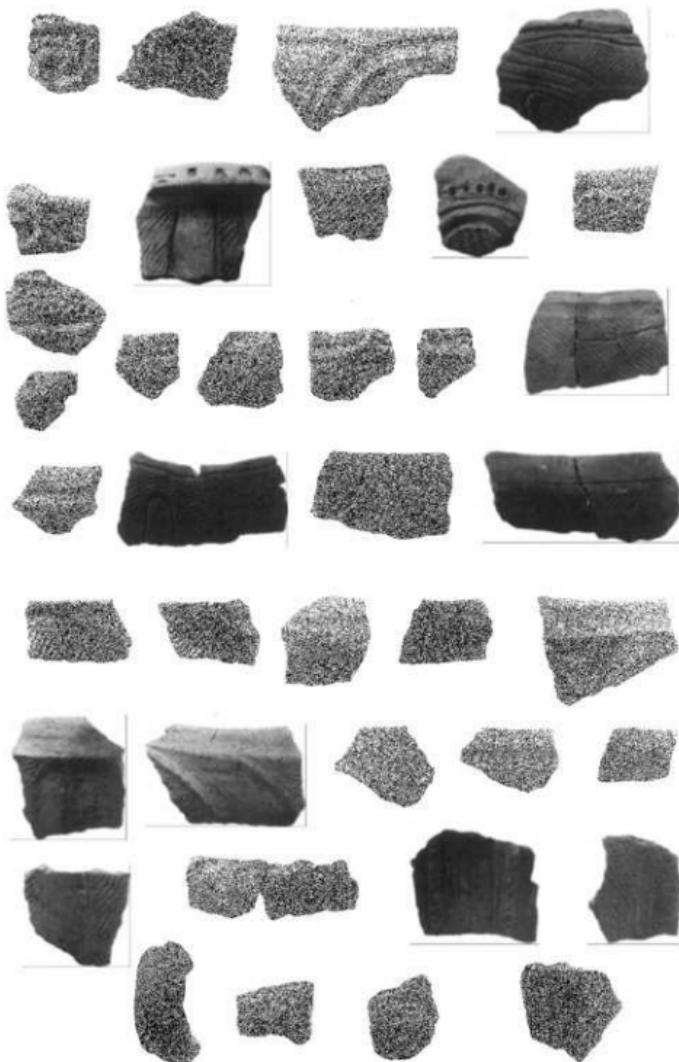
図版43



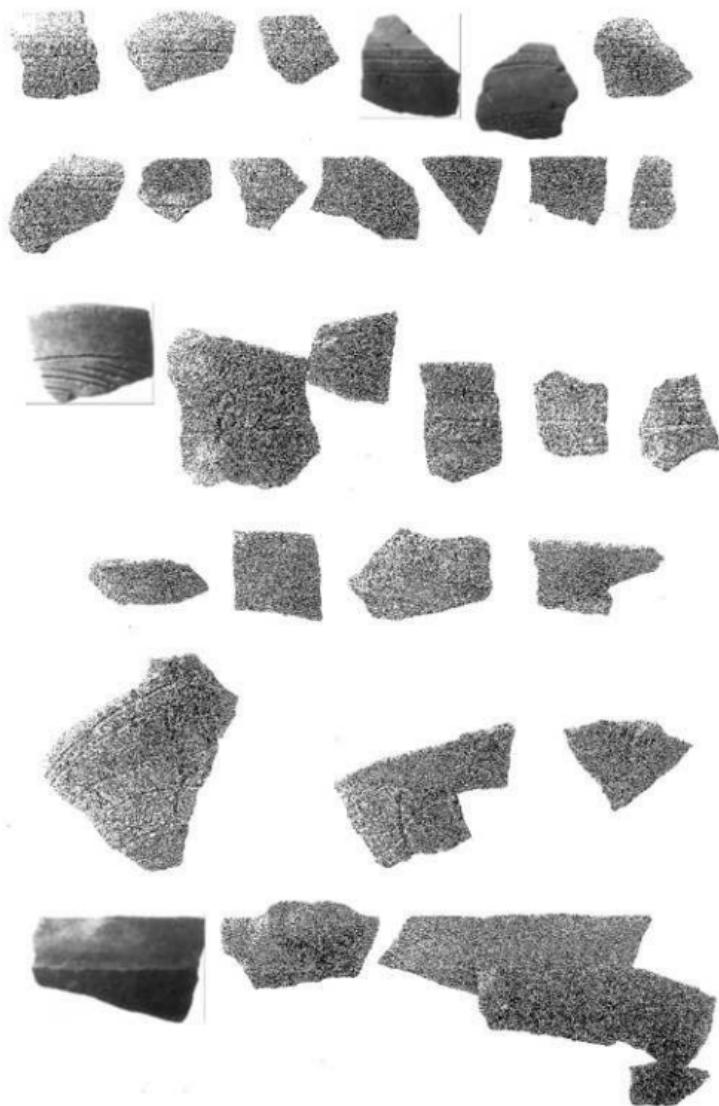
第1群土器



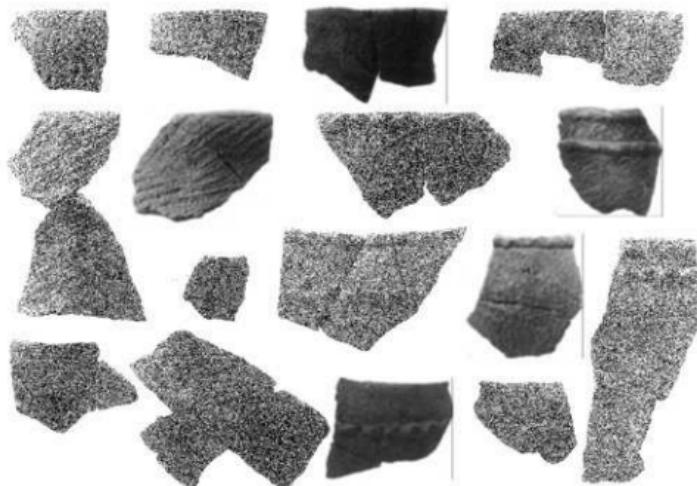
第2群土器



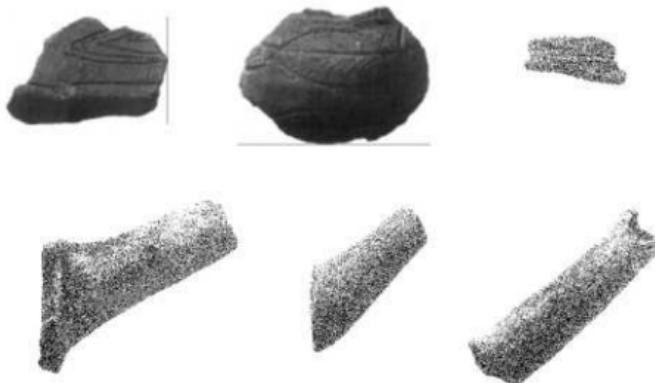
第II群土器



第IV群土器



第IV群土器



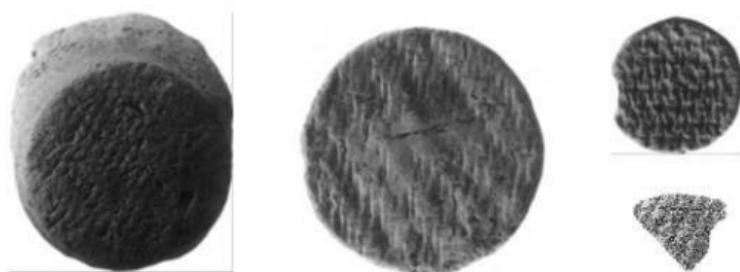
第V群土器（注口土器）

一枚田遺跡

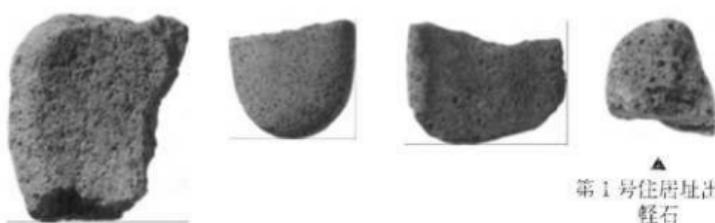
圖版47



土製品



底部網代



▲  
第1号住居址出土  
輕石



石器・輕石

▲  
第1号住居址出土  
石鏃

千葉市  
子和清水遺跡  
房地遺跡  
一枚田遺跡

昭和62年3月31日 発行

発行 千葉市教育委員会

千葉市千葉港2-1

財団法人 千葉市文化財調査協会

千葉市南生実町1210

印刷 ホマレ印刷株式会社